国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 39 号（通巻 72 号）

令和 7 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

———2026———

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 39 号(通巻 72 号)

令和 7 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

———2026———

「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　令和８年３月 16 日」

巻頭言

令和 7 年（2025 年）度の精神保健研究所の業績年報をお届け致します.

本年度は部長の異動はなく，各部の活動が基本的に継続されました．本年度途中・年度末での室長人事は行動医学研究部の 2 名（関口敦氏，井野敬子氏）と精神薬理研究部の 1 名（三輪秀樹氏）が任期満了にて退職された一方，新たに 4 名（知的・発達障害研究部・古家宏樹氏，地域精神保健・法制度医療研究部・松長麻美氏，行動医学研究部・石渡小百合氏，児童・予防精神医学研究部・Andrew Mark Stickley 氏）の加入を得ました．研究活動は活発に続けられ，英文原著論文は昨年度の 144 編を上回る 153 編が発表されました．年度末の所内研究報告会では，行動医学研究部の小川眞太朗室長のエタノールアミンの研究成果が青申賞（最優秀発表賞）を受賞しました（うつ病の新規バイオマーカーや新しい治療法開発の可能性を見出した）.

精研のもう一つの大事なミッションである人材育成と教育研修活動では，全国の精神保健医療水準の向上と均霑化を目指し，自治体職員や医療従事者等を対象に，発達障害，薬物依存，摂食障害，PTSD，災害時心理支援，統合失調症・うつ病の標準治療，入院者訪問支援，精神保健医療福祉データ行政活用研修など地域でのニーズが高い領域について計 26 本の研修を実施し，延べ 2,000 名以上の参加者を得ています．また，精研が中心になって令和 5 年 4 月に開設した「こころの情報サイト」の好評は続き，今年度は 400 万件のアクセス数でした．正しい知識と技術の普及に貢献できていると自負するとともに，社会の高いニーズを感じ，身の引き締まる思いです.

医療政策の分野でも大きな貢献を果たしています．地域精神保健・法制度医療研究部の研究成果が診療報酬改定に貢献していますし，公共精神健康医療研究部の研究成果は「にも包括」の推進支援につながっています．また，薬物依存研究部の研究は市販薬のデキストロメトルファン（メジコン）とジフェンヒドラミン（レスタミン）を改正薬機法の指定濫用防止医薬品に追加する成果をもたらしています．これらはとても地味な調査研究活動ですが，精神医療の土台を支える大事な領域であり，まさに精研が果たすべき役割です.

国際貢献も続けています．今年度は Asian Consortium of National Mental Health Institutes (ACONAMI)を精研が主宰し，令和 7 年 9 月 24 日に NCNP で開催しました．また，ウクライナ支援も継続し，精神科医療従事者の来訪を受け，精研と病院が協力して講義と実習を提供しました．想像に難くありませんが，ウクライナでは PTSD が大変な問題になっています．精研としてできる協力を続けていきたいと思います．さらに，地域精神保健・法制度医療研究部によるフィリピン地域メンタルヘルス支援体制の構築事業は，同国保健大臣により全国に標準化するための省令が発出されるに至る特筆すべき成果を上げています.

ここに書ききれない成果は山ほどあります．お時間あります時にこの年報を開いていただけましたら幸いです．人々のニーズに応える研究を行い，その成果を社会に役立つ形で還元するという先達から受け継がれてきた方針を胸に，精研は医学生物学・心理社会科学の総合的研究機関として歩みを進めます．皆様のご理解とご支援，ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます.

2026 年 3 月

国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所　所長　張　賢徳

目　　次

Ⅰ．精神保健研究所の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1. 創立の趣旨及び沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 内部組織改正の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図・・・・・・・・・・・・・ 13
4. 職員配置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
5. 精神保健研究所構成員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

Ⅱ．研究活動状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
1. 今年度の活動概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
2. 精神保健研究所所長室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
3. 公共精神健康医療研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
4. 薬物依存研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
5. 行動医学研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
6. 児童・予防精神医学研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
7. 精神薬理研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
8. 精神疾患病態研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
9. 睡眠・覚醒障害研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
10. 知的・発達障害研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
11. 地域精神保健・法制度研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
12. ストレス・災害時こころの情報支援センター・・・・・・・・・・・ 162

Ⅲ．研修実績 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167

Ⅳ．ランチョンセミナー開催実績 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201

Ⅴ．精神保健研究所研究報告会プログラム・抄録集 ・・・・・・・・・ 203

Ⅵ．令和６年度委託および受託研究課題 ・・・・・・・・・・・・・・・ 228

Ⅰ. 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

Ⅰ．創立の趣旨

本研究所は，精神衛生に関する諸問題について，精神医学，心理学，社会学，社会福祉学，保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的，包括的な研究を行うとともに，国，地方公共団体，病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識，技術に関する研修を行い，その資質の向上を図ることを目的として，昭和27年1月，アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された．

Ⅱ．精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際，国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された．これを踏まえ，厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され，昭和27年1月，千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された．

研究所の規模について，当初，厚生省は，1課8部60名程度の組織を構想していたが，財政事情等により，総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した．また，附属病院をもつことの重要性は，当時から認識されていたが，病院の新設は困難な情勢であったため，隣接する国立国府台病院と連携，協力することとされた．

その後，知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け，昭和35年10月1日，新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた．この結果，研究所の組織は，総務課，精神衛生部，児童精神衛生部，社会精神衛生部，精神身体病理部，精神薄弱部及び優生部の1課6部となった．

昭和36年には，国立精神衛生研究所組織細則が制定され，部課長のもとに心理研究室，生理研究室，精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた．それとともに，昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり，研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった．

昭和40年には，地域精神医療，社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い，社会復帰部が新設されるとともに，新たに精神発達研究室及び主任研究官（3名）が置かれた．また，昭和46年6月には，社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された．さらに，昭和48年には，人口の高齢化に伴って，痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に，老人精神衛生部が，翌昭和49年には，同部に老化度研究室が新設された．

昭和50年には，精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから，社会復帰部を社会復帰相談部に改組，精神衛生相談室を同部に移管した．また，昭和53年12月には，社会復帰相談庁舎が完成し，精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された．昭和54年には，研修各科の名称が医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに，新たに精神科デイ・ケア課程が新設された．翌昭和55年には，研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた．

Ⅲ．国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は，このような着実な歩みをたどった後，昭和61年10月，国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された．ここに，国立精神・神経センター精神保健研究所は，国立高度専門医療センターの一研究部門として，精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった．その際組織改正により，総務課が庶務課とされ，精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された．その結果，統合前の1課8部8室は，1課9部19室となり，研究・研修機能の強化が図られた．

半年後の昭和62年4月には，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され，二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した．これに伴い，庶務課は廃止され，精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹，研究所事務係）が置かれた．また，同年10月には，心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ，平成元年10月には，社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された．

さらに，平成11年4月には，精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに，薬物依存研究部が組織改正により，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成となった．

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え，創立50周年パーティの開催，記念誌の発行，公開市民シンポジウムを行った．

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され，3室体制で，研究員の増員も認められ，研究所の組織は，11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった．

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した．

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により，自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と，成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた．

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され，また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり，研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった．

Ⅳ．独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し，調査，研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供，技術者の研修等を行う独立行政法人の名称，目的，業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした，「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により，それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された．

我が国立精神・神経センターは「精神疾患，神経疾患，筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり，精神保健研究所も内部の組織が改正された．

自殺予防総合対策センターは，自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室の3室編成.

精神保健計画部は，精神保健計画研究部へ名称変更され，統計解析研究室，システム開発研究室の2室編成.

薬物依存研究部は，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成.

心身医学研究部は，ストレス研究室，心身症研究室の2室編成.

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され，精神発達研究室，児童期精神保健研究室，思春期精神保健研究室の3室編成.

成人精神保健部は，成人精神保健研究部へ名称変更され，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，犯罪被害者等支援研究室，災害等支援研究室の5室編成.

老人精神保健部は，精神薬理研究部へ名称変更され，精神薬理研究室，気分障害研究室の2室編成.

社会精神保健部は，社会精神保健研究部へ名称変更され，社会福祉研究室，社会文化研究室，家族・地域研究室の3室編成.

精神生理部は，精神生理研究部へ名称変更され，精神生理機能研究室，臨床病態生理研究室の2室編成.

知的障害部は，知的障害研究部へ名称変更され，診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室の3室編成.

社会復帰相談部は，社会復帰研究部へ名称変更され，精神保健相談研究室，援助技術研究室の2室編成.

司法精神医学研究部は，制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の3室編成.

以上，自殺予防総合対策センター及び11部，計33室となった.

また，研究所の事務部門は，主幹が研究所事務室長となり，研究所事務係とともに，研究所の所属となった.

平成23年4月，事務部門の組織変更が行われ，研究所事務室は総務部の所属となった.

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により，情報支援研究室の1室が認められた.

以上，自殺予防総合対策センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計34室となった.

平成24年1月，千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから，創立60周年を迎え，記念祝賀会を開催し，創立60周年記念誌を発行した.

平成27年4月1日，独立行政法人から国立研究開発法人へ改組.

Ⅴ．国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日，自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設，自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室の4室編成.

以上，自殺総合対策推進センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計35室となった.

平成29年10月1日，社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し，その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室），併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設.

平成30年4月1日，精神保健研究所の組織改編を行った.

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合，臨床援助技術研究室，精神保健サービス評価研究室，司法精神保健研究室，制度運用研究室の3室編成.

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，災害等支援研究室，ストレス研究室，心身症研究室の6室編成.

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名，情報支援研究室，犯罪被害者等支援研究室の2室編成.

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名，保健福祉連携研究室，政策評価研究室，精神医療体制研究室，NDB集計企画担当室の4室編成.

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名，児童・青年期保健研究室，精神疾患早期支援・予防研究室の2室編成.

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名，分子精神薬理研究室，向精神薬研究開発室の2室編成.

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名，発達機能研究室，知的障害研究室の2室編成.

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名.

以上，自殺総合対策推進センター，ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部，計33室となった.

令和2年4月1日，自殺総合対策推進センターを廃止，厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承.

令和2年11月1日，精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室（NDB集計企画担当室）を廃止）に名称変更.

以上，ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部，計28室となった.

沿　　革

事項 年次	所　　長	組　　織　　等　　経　　過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢　良臣 （国立国府台病院長兼任）	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として，千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村　祐之	
37年4月	尾村　偉久 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
38年7月	若松　栄一 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
39年4月	村松　常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松　　章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤　正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居　健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣　武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島薗　安雄 （総長が所長事務取扱）	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄　　昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚　俊男	
9年4月	吉川　武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺　　宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋　清久 （総長が所長事務取扱）	
14年8月	今田　寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤　一郎 （総長が所長事務取扱）	
16年7月	上田　　茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井　暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我　牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部，児童・思春期精神保健研究部，成人精神保健研究部，精神薬理研究部，社会精神保健研究部，精神生理研究部，知的障害研究部，社会復帰研究部）し，知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設，11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田　　広	
25年7月	福田　祐典	

27年4月		国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所となる
27年9月	冨澤　一郎	
27年12月	中込　和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室），精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また７研究部の名称を変更（地域・司法精神医学研究部，行動医学研究部，ストレス・災害時こころの情報支援センター，精神医療政策研究部，児童・予防精神医学研究部，知的・発達障害研究部，睡眠・覚醒障害研究部）及び室名変更等再編し，結果，2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金　　吉晴	
令和2年4月		自殺総合対策推進センター（4室）を廃止，厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承
2年11月		精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室を廃止）に名称変更し，現在の1センター9部28室となる
4年4月		地域・司法精神医療研究部を地域精神保健・法制度研究部に名称変更
6年4月	張　　賢徳	

2. 内部組織改正の経緯

国立精神衛生研究所										
組織	創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月
	総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)							総務課 精神衛生研修室
	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室		精神衛生部 心理研究室
						老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室		老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室
	児童精神衛生部	→	→	児童精神衛生部 精神発達研究室						児童精神衛生部 精神発達研究室
	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室					社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室
	生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)							精神身体病理部 生理研究室 (4月)
	優生学部	優生学部								優生部
		精神薄弱部								精神薄弱部
				社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室

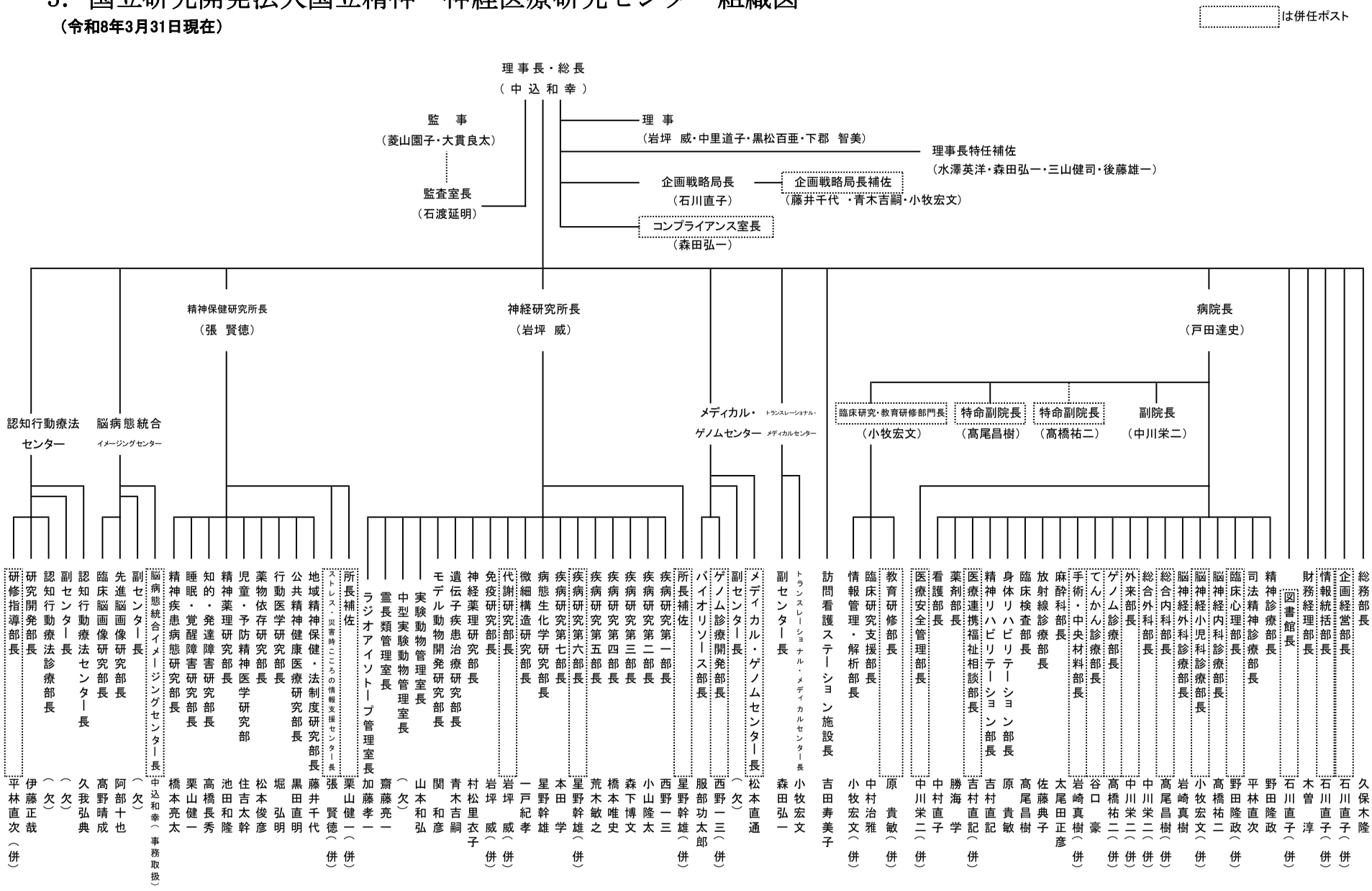
国立精神・神経センター精神保健研究所	国立精神・神経センター精神保健研究所									
	61年10月	62年4月	62年10月	平成元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月
組織	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係	
								自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		
	精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室		
	薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		
			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		
	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		
	老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室		
	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		
	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		
	精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室
	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室		
	社会復帰相談部 精神保健相談研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		
							司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
22年4月	23年12月	27年4月	28年4月	29年10月	30年4月
研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室
	災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室	災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室
薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	
精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			
精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室
司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室
				精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
組織	令和2年4月	2年11月	4年4月
	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室
	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域精神保健・法制度研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室
	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図

（令和8年3月31日現在）



４．職員配置（令和8年3月31日現在）

- 所　長（張　賢徳）
  - 所長補佐（栗山　健一（併））
  - ストレス・災害時こころの情報支援センター長（張　賢徳）（併）
    - 情報支援研究室長（欠）
    - 犯罪被害者等支援研究室長（欠）
  - 公共精神健康医療研究部長（黒田　直明）
    - 保健福祉連携研究室長（堀口　寿広）
    - 政策評価研究室長（臼田　謙太郎）
    - 精神医療体制研究室長（欠）
  - 薬物依存研究部長（松本　俊彦）
    - 心理社会研究室長（嶋根　卓也）
    - 依存性薬物研究室長（富山　健一）
    - 診断治療開発研究室長（高野　歩）
  - 行動医学研究部長（堀　弘明）
    - 精神機能研究室長（成田　瑞）
    - 診断技術研究室長（小川　眞太朗）
    - 認知機能研究室長（松島　小百合）
    - 災害等支援研究室長（大沼　麻実）
    - ストレス研究室長（井野　敬子）
    - 心身症研究室長（欠）
  - 児童・予防精神医学研究部長（住吉　太幹）
    - 児童・青年期精神保健研究室長（山田　理沙）
    - 精神疾患早期支援・予防研究室長（Andrew Mark Stickley）
  - 精神薬理研究部長（池田　和隆）
    - 分子精神薬理研究室長（三輪　秀樹）
    - 向精神薬研究開発室長（西澤　大輔）
  - 精神疾患病態研究部（橋本　亮太）
    - 基盤整備研究室（松本　純弥）
    - 病態解析研究室長（欠）
  - 睡眠・覚醒障害研究部長（栗山　健一）
    - 精神生理機能研究室長（吉池　卓也）
    - 臨床病態生理研究室長（北村　真吾）
  - 知的・発達障害研究部長（髙橋　長秀）
    - 発達機能研究室長（古家　秀樹）
    - 知的障害研究室長（江頭　優佳）
  - 地域精神保健・法制度研究部長（藤井　千代）
    - 臨床援助技術研究室長（佐藤　さやか）
    - 精神保健サービス評価研究室長（山口　創生）
    - 司法精神保健研究室長（小池　純子）
    - 制度運用研究室長（松長　麻美）

5．精神保健研究所構成員（令和7年度）

所長	秘書室	
張　賢徳	奥村　和香子	客員研究員：金　吉晴、林　明明 科研費研究員：川島　友子

部名	部長	室長	研究員	◎特任研究員 リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生
ストレス・災害時 こころの情報支援センター	張　賢徳(併任)								小川　眞太朗 大沼　麻実 成田　瑞	金　吉晴 秋山　剛 前田　正治 富田 博秋 高橋　晶 宮本　有紀 堤　敦朗 種市　康太郎		
公共精神健康医療研究部	黒田　直明	堀口　寿広 臼田　謙太郎	三宅　美智 (7.11.1～)	三宅　美智 (～7.10.31) 片岡　真由美 ○北村　真紀子	古野　考志 中下　綾子 神川　ちあき ○櫻庭　亜希子 ○鈴木　和香子 ○島田　知恵 ○辻田　あづさ ○岩垂　由真 (7.5.1～)					安西　信雄　後藤　基之 竹島　正　岡崎　絵美 中村　江里　羽澄　恵 杉山　雄大　飯田(栗原)真子 今井　健二郎　(7.4.21～) 西　大輔　柴埼　聡子 澤田　宇多子　(7.5.1～) 本屋敷　美奈　浜田　将太 岡田　隆志　(7.7.22～) 深澤　舞子		手塚　一秀 (8.1.5～)
薬物依存研究部	松本　俊彦	嶋根　卓也 富山　健一 高野　歩		水野　聡美	猪浦　智史 加藤　隆 瓜生　美智子 新田　慎一郎 喜多村　真紀 堤　史織 片山　宗紀 近藤　あゆみ 山田　里奈 青木　彩香 金澤　由佳 梅村　二葉 山本　俊明 磯島　學 羽布津　碧 外山　愛 (7.7.1～) 西村　晃萌 (7.12.1～) ○庄司　淑子 ○福田　百合子 ○三輪　奈都子 ○清水　悦子 ○亀井　翠 ○大木　舞 ○大橋　早紀子	○阿部　正幸	○中野　真紀		今村　扶美 川地　拓 山田　美紗子 沖田　恭治 石井　香織 西村　晃萌 (～7.11.30) 樋口　早子 大谷　暢子 瀬崎　浩平 小砂　哲太郎 (7.7.1～)	森田　展彰 谷渕　由布子 平田　豊明 大嶋　栄子 成瀬　暢也 三島　健一 池田　朋広 引土　絵未 藤城　聡 村瀬　華子 新海　浩之 舩田　正彦 引地　和歌子 山田　千佳 Tooru Nemoto 大宮　宗一郎 佐久間　寛之 林　神奈 境　泉洋 川口　貴子 高田　雅弘		古市　亘 熊倉　陽介 山本　泰輔 宇佐美　貴士 村上　真紀 大淵　拓真 水野　有紀 荒木　李香 鈴木　祐人 飯田(栗原)真子 (7.5.1～)
行動医学研究部	堀　弘明	関口　敦 (～7.9.30) 小川　眞太朗 井野　敬子 成田　瑞 大沼　麻実 石渡　小百合 (7.12.1～)		伊藤(丹羽)　まどか 井上　智子 勝沼　るり ○島津　友梨 ○遠藤　香	高村　恒人 (～7.9.30) 小原　千郷 (～7.9.30) 中野　稚子 ○吉田　冬子 (～7.6.30) ○中村　美幸 □蔵下　智子	○大村　靖子 ○石塚　鮎子 (7.5.1～2.28) ○水野　恵子 (7.5.1～7.31) ○今井　美喜 (7.10.1～2.28) ○大薗　学 (7.8.1～10.31/ 8.2.1～) 杉浦　裕子 (7.12.1～) ○角田　吉隆 (～7.12.31) ○安藤　力也 (8.3.9～)	○兼山　桃子 (～7.9.30)	神保　智子 (～7.6.30) 今井　美喜 (～7.9.30/3.1～) 石塚　鮎子 (～7.4.30/3.1～) 後藤　真理子 杉浦　裕子 (～7.11.30) 水野　恵子 (～7.4.30/8.1～) 大薗　学 (7.11.1～1.31)	松尾　淳子 (～7.9.30)	功刀　浩　金　吉晴 篠山　大明　須賀　楓介 伊藤　真利子　関口　敦 利重　裕子　(7.10.1～) 袴田　優子　小原　千郷 堀　有伸　(7.10.1～) 大友　理恵子 田中　英三郎 坂口　昌徳 安藤　哲也 筧　亮子 船場　美佐子 中山　未知 富田　吉敏 鈴木　仁美 中島　聡美 白川　美也子 平野　好幸 森野　百合子 守口　善也 寺澤　悠里 (～7.9.30)		Laura Elisabeth Tuturea 須田　晶子 石田　一希 藤内　温美 関場　遙 井上　朋子 石渡　小百合 (～7.11.30) 菅原　まゆみ 河西　ひとみ 道川　由佳子 松尾　侑佳 Siti Nurul Zhahara 土嶺　章子 吉田　冬子 (7.7.1～) 高村　恒人 (7.10.1～)

部名	部長	室長	研究員	◎特任研究員 リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生
児童・予防精神医学研究部	住吉　太幹	山田　理沙 (7.9.1～) Andrew Mark Stickley (8.1.1～)	山田　理沙 (～7.8.31)	末吉　一貴 Andrew Mark Stickley (～7.12.31) 和田　歩 石原　奈保子 (8.2.1～)	長谷川　由美 (～7.5.31) 住吉　佐和子 □石原　奈保子 (～8.1.31) □宋　恵恩 △本田　ゆかり	○山野　真由子 ○福本　美好子		佐藤　綾	山田　悠至 稲川　拓磨	神尾　陽子 敷井　裕光 住吉　チカ 川崎　康弘 高橋　秀俊 小坂　浩隆 菊知　充 池澤　聰 上原　隆 信川　創 西田　圭一郎 藤井　猛 石井　良平 森尾　保徳 白間　綾 長谷川　由美 (7.6.1～) 小居　秀紀 (7.8.1～)		海老島　健 岡　琢哉 齊藤　彩 星野　大 原口　英之 荻野　和雄 三治　聖平 (7.7.1～)
精神薬理研究部	池田　和隆	三輪　秀樹 西澤　大輔		上條　諭志 (～7.9.30) 森屋　由紀 (～7.12.31) 名古　由佳 (7.10.1～) NAMAREQ SALAH MOHAMED WIDATALLA (8.1.1～)	○中山　京子 (～7.12.31) ○名古　由佳 (7.8.1～9.30)	○田巻　舞 (～7.12.31)	○中山　京子 (8.1.1～)	田巻　舞 (8.1.1～)	村松　浩美 浪久　悠 (7.6.1～) 小砂　哲太郎 (7.6.1～)	上條　諭志 (7.10.1～)		梅村　二葉 (7.8.1～) 石　中玉 (7.10.1～)
精神疾患病態研究部	橋本　亮太	松本　純弥		長谷川　尚美 伊藤　颯姫	山縣　眞美子 宮川　希 北川　航 (7.11.1～) 五十嵐　香琳 (7.11.1～) 小池　春菜 (7.11.1～) 嘉村　衣莉 (7.11.1～) 井ノ上　博司 (8.2.1～) ○北川　航 (～7.10.31) ○五十嵐　香琳 (～7.10.31) ○河上　優稀 ○齋藤　森 (7.6.9～) ○林　朋花 (7.8.22～) ○宮岡　麻友 (7.10.1～) ○佐藤　一始 (7.12.1～) □新谷　茉莉果 (～7.7.31) □小池　春菜 (～7.10.31)	芦原　操 (8.1.1～)			佐藤　英樹 竹田　康二 柏木　宏子 髙野　晴成 石川　夏絵 林　大祐 一戸　紀孝 渡邊　惠 樋口　早子 五十嵐　俊	尾崎　紀夫 鬼塚　俊明 中村　元昭 新田　淳美 新井　誠 橋本　均 中澤　敬信 大井　一高 福永　雅喜 根本　清貴 藤野　陽生 牧之段　学 中島　振一郎 高橋　努 宮田　淳 疋田　貴俊 山森　英長 安田　由華 沼田　周助 吉村　玲児 松本　直通 松尾　幸治 渡邊　衛一郎 伊賀　淳一 菊地　正隆 岡田　研一 三浦　健一郎 藤本　美智子 岡田　直大 橋本　直樹 池田　学 中川　伸 市橋　香代 堀　輝 山田　恒 稲田　健 飯田　仁志 酒井　佳永 石丸　径一郎 小高　文聰 住吉　チカ 豊巻　敦人 栗岩　信夫 山形　弘隆 中川　敦夫 竹内　啓善 椎野　智子 近江　翼 阿竹　聖和 福本　健太郎 馬場　元 香月　あすか 坪井　貴嗣 村岡　寛之 越智　紳一郎 小池　進介 岡田　剛 肥田　道彦 杉原　玄一 山田　浩樹 小笠原　一能 古郡　規雄 森田　健太郎 渡邊　嘉之 富田　博秋 菱本　明豊 山室　和彦 緑川　晶 中村　敏範 (7.9.16～) 荒井　勇輔 (7.9.16～) 川俣　安史 (7.9.16～) 堀之内　徹 (7.11.1～)	高橋　亘 青木　陽平 飯田　英貴 磯村　洋生 伊井　理紗子	清水　善仁 杉崎　友美 篠原　咲希音 藤兼　大輔 石丸　直樹 齋藤　森 井手　健太 森　啓輔 佐原　寛隆 (7.12.15～)

部名	部長	室長	研究員	◎特任研究員 リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生
睡眠・覚醒障害研究部	栗山　健一	北村　真吾 吉池　卓也		内海　智博 長尾　賢太朗	河村　葵 岡邨　しのぶ (～7.6.30) 矢鳶 智貴 (7.9.1～) ○源馬　未来 ○柳原　朱 ○串馬　絵奈 □伊藤　ちやか (7.7.1～)	川口　夏怜 (7.5.12～)	○大嶋　美奈子		都留　あゆみ 松井　健太郎 不破　真衣 松島　舜 髙橋　恵理矢 石本　良祐 山下　祐一 (7.12.1～) 山口　博行 (7.12.1～)	兼板　佳孝　竹島　正浩 井上　雄一　角谷　寛 本多　真　佐伯　圭吾 上田　泰己　井谷　修 山寺　亘　西村　勝治 福水　道郎　小曽根　基裕 榎本　みのり　志村　哲祥 有竹　清夏　橋本　英樹 三島　和夫　羽澄　恵 岡 島　義　熊野　宏昭 高橋　英彦　(7.8.4～) 肥田 昌子　深澤　佑介 玉置　應子　(7.9.1～) 鈴木　正泰　市毛　弘一 綾部　直子　(8.2.20～) 駒田　陽子 田中　克俊 金子　宜之 尾崎　章子 大橋　由基		柴崎　佳奈 伊豆原　宗人 伏見　もも 高嶋　澪 船山 欣弘 南學　正仁 船山 美香 矢鳶 智貴 (～7.8.31) 岸上　泰己 (7.8.4～) 佐々　星時 (7.8.4～) 坂田　敦 (7.8.4～) 佐々木　茉子 (7.11.17～) 杉浦　雛姫 (7.11.17～)
知的・発達障害研究部	髙橋　長秀	江頭　優佳 古家　秀樹 (7.8.1～)		池田　悠稀 畠山　太一 (7.8.1～)	髙田　美希 (～7.7.31) ○益田　来実 ○日下部　公美			秋月　由紀子 髙橋　知子 笹栗　有紀 (8.1.1～)	八重樫　輝	石井　礼花　久保田　智香 會田　千重　(7.4.21～) 稲垣　真澄 魚野　翔太 加我　牧子 金生　由紀子 軍司　敦子 竹市　博臣 辻井　農亜 波多野（後藤）文 安村　明 崎原　ことえ 林（岡田）小百合 岡田　俊 請園　正敏 加賀　佳美 宇佐美　政英		三好　智浩 高田　美希 (7.8.1～)
地域精神保健・法制度研究部	藤井　千代	佐藤　さやか 山口　創生 小池　純子 松長　麻美 (7.9.1～)	小塩　靖崇 (～7.6.30) 川口　敬之	◎名雪　和美 臼井　香 河野　稔明 奈良　麻結 (科研費ﾃｸﾆｶﾙﾌｪﾛｰ) ○久永　文恵 ○菅原　梓	岡野　茉莉子 五十嵐　百花 羽田　彩子 高嶋　里枝 小峰　結 (7.9.1～) 永田　みさ子 (8.2.9～) ○檜垣　早苗 ○田中　純子 ○細谷　章子 ○山口　芙実子		三輪　靖子		平林　直次 柏木　宏子 竹田　康二	馬場　俊明　関　英一 伊藤順一郎　田中　裕記 杉山　直也　杉浦　寛奈 柑本　美和 稲垣　中 北村　俊則 野口　正行 菊池　安希子 松長　麻美 (～7.8.31) 瀬戸屋雄太郎 吉田　光爾 安間　尚徳 下平　美智代 佐竹　直子 吉浜　文洋		上嶋　大樹 山田　裕貴 小川　亮 塩澤　拓亮 小林　慧 岩永　麻衣 一木　崇弘
地域精神保健・法制度研究部 所沢アウトリーチ事業			(看護師) 中西　清晃 榎本　美智子 (医療社会事業専門員) 西内　絵里沙 (作業療法士) 柴田　興	(科研費ﾃｸﾆｶﾙﾌｪﾛｰ) 山崎　さおり	糸繰　朝美 (～7.4.30) 桐井　博子 (7.11.1～12.31)							

Ⅱ．研究活動状況

1．今年度の活動概要

Ⅰ．概要

1) 人事

令和 7 年度は 4 月 1 日から張 賢徳が所長を務めた（ストレス・災害時こころの情報支援センター長を併任）.

本年度の常勤研究員人事(再任を除く)は，下記のとおりである.

8 月 1 日，知的・発達障害研究部 発達機能研究室長に古家宏樹が採用された．9 月 1 日，児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室長に山田理沙，地域精神保健・法制度研究部 制度運用研究室長に松長麻美が採用された．11 月 1 日，公共精神健康医療研究部 研究員に三宅美智が採用された．12 月 1 日，行動医学研究部 認知機能研究室長に石渡小百合が採用された．1 月 1 日，児童・予防精神医学研究部 精神疾患早期支援・予防研究室長に Andrew Mark Stickley が採用された.

令和 7 年度退職者は，地域精神保健・法制度研究部 研究員 小塩靖崇（6 月 30 日付），行動医学研究部 心身症研究室長 関口 敦（9 月 30 日付），行動医学研究部 ストレス研究室長 井野敬子（3 月 31 日付），精神薬理研究部 分子精神薬理研究室長 三輪秀樹（同日付）であった.

2) 概況

精神保健研究所は，患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で，研究発表分野でも精力的な活動を行っている．令和 7 年度には英文原著 153 編，和文原著 8 編，英文総説 7 編，和文総説 107 編，英文著書 4 編，和文著書 44 編を報告した（分担執筆含む）．また，学会発表としては国際学会で 75 件，国内学会で 326 件の発表を果たした．主要学会等では，若手研究者を中心に優秀賞や奨励賞等の学会賞を計 21 件受賞した．詳細は各研究部の活動状況を参照されたい.

第 37 回精神保健研究所研究報告会を令和 7 年 3 月 16 日に開催し，優秀発表賞（青申賞）に小川眞太朗（行動医学研究部），水野聡美（薬物依存研究部）が選ばれた．詳細はプログラム・抄録集を参照されたい.

精神保健研究所は，専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉，薬物依存，摂食障害，発達障害，災害時心理対応，入院者訪問支援，統合失調症・うつ病の標準治療研修，精神科救急医療体制整備，PTSD 対策等）を行っている．令和 7 年度は対面研修 4 回，オンライン研修 21 回，対面とオンラインを組み合わせた研修 1 回の合計 26 回を実施し，合計 2,319 名が受講した．詳細は後述した.

Ⅱ．精神保健研究所プレスリリース一覧

日付	件名	担当 （所属・肩書は当時のもの）
2025 年 4 月 17 日	ADHD の子どもにおけるトゥレット症の発症に炎症が関与する可能性 ～トゥレット症のリスクを予測する新たな生体指標の手がかり～	発達障害研究部 部長　高橋長秀
2025 年 5 月 14 日	社会適応の簡便な測定法：動物名の想起順序のテキストマイニング解析による統合失調症患者の評価	児童・予防精神医学研究部 部長　住吉太幹
2025 年 5 月 15 日	地域精神保健の研究に求められるアウトカムとは？ −当事者・家族・専門職など多様な立場と 24 の重要領域を特定−	地域精神保健・法制度研究部 室長　山口創生
2025 年 5 月 29 日	摂食障害に関する啓発動画シリーズを「摂食障害情報ポータルサイト」に公開 ～“やせ礼賛”の社会的風潮を見つめなおす「正確で共感できる」情報を動画で発信～	行動医学研究部 室長　関口 敦
2025 年 6 月 17 日	神経性やせ症患者の「島皮質」における脳機能異常を解明 ―食事制限をやめられない背景に味覚処理異常の可能性―	行動医学研究部 室長　関口 敦
2025 年 7 月 23 日	複雑性 PTSD に対する心理療法（STAIR Narrative Therapy）の成果 ＜第 2 報＞ ～認知機能の改善への期待～	行動医学研究部 リサーチフェロー 丹羽まどか
2025 年 8 月 8 日	思春期にオンラインゲームを不適切に利用すると 抑うつ・不安・精神症・幸福度低下につながることを確認	行動医学研究部 室長　成田 瑞
2025 年 08 月 25 日	神経性過食症女性に治療者誘導型オンライン認知行動療法を提供して過食と代償行動エピソードを減らすことに成功 ～アセスメント盲検・多施設ランダム化比較試験～	行動医学研究部 室長　関口 敦

2025年08月27日	周産期のストレスが、胎児の亜鉛低下による炎症を介しADHDの発症に関与する可能性を解明 ― ADHD症状のはじまりが出生前の栄養と炎症にあることを示す新たな知見 ―	知的・発達障害研究部 部長　髙橋長秀
2025年09月29日	―「見えるエネルギー」で生体機能と病気の予兆を捉える― 新開発のAVIDマウスが切り拓く未来の医療 ～医療・健康・食品・スポーツなどあらゆる分野で応用期待～	精神薬理研究部 室長　三輪秀樹
2025年9月30日	思春期女子のメンタルヘルス悪化と拡大する性差	行動医学研究部 室長　成田 瑞
2025年12月15日	健診で糖尿病を指摘された後の「早期受診」で10年間の心血管疾患リスクが27%低下 ～大規模レセプトデータを用いた標的試験エミュレーション～	行動医学研究部 室長　成田 瑞
2025年12月24日	悪いことばかりを思い出してしまう脳の癖を和らげる新しい記憶介入プログラムがストレスを軽減させることを世界で初めて実証 ―ストレスに関連した精神障害の予防・治療に役立つ可能性―	行動医学研究部 部長　堀 弘明
2026年1月22日	思春期に孤独感が持続すると精神症・抑うつ・不安・幸福度低下につながることを確認 ―孤独感が改善すれば影響が軽減される可能性―	行動医学研究部 室長　成田 瑞
2026年3月4日	いじめを受けた経験が、思春期の心の不調につながるメカニズムの一端を解明 ―「終末糖化産物（AGEs)」が関与している可能性 ―	行動医学研究部 室長　成田 瑞
2026年3月13日	重症精神障害をもつ人の不安感を改善 訪問支援型チームによる認知行動療法がコストを増やさずに効果があることを実証 ― 地域での心理療法が実装可能と示した初のクラスターRCT 研究 ―	地域精神保健・法制度研究部 室長　佐藤さやか

2. 精神保健研究所　所長室

Ⅰ．研究部の概要

令和７年度の当室の人員構成は以下の通りである．所長：張 賢徳，科研費研究員：川島友子，奥村和香子，客員研究員：金 吉晴，林 明明．

Ⅱ．研究活動

1） Quality Indicator を用いた精神科医療の質向上プログラムの開発と効果研究
（精神・神経疾患研究開発費）

本研究は，精神科医療の質の向上に資することを目的とし，医師が日常診療の中で実施可能な実装型 QI（quality indicator）の開発と社会実装を目指している．本年度は，3 年度計画の 2 年度目にあたる．前年度に実施した精神科医師および患者向けアンケート調査の結果を踏まえ，日常臨床の現場で実用可能な QI 項目の選定を目指した．フォーカスグループインタビューを実施し，専門家ならびに患者・家族間で意見交換を行った結果，精神科診療に求められる基本的態度や診療プロセスを幅広く包含する項目が抽出された．これらを実装型 QI 項目として位置づけ，その意義および内容理解の促進を目的とした解説集を作成した．さらに，スーパーバイザーおよび精神科医から意見を収集し，フィージビリティの検討を行った．その結果，本実装型 QI 項目は診療内容の振り返りを促す自己点検ツールとして活用可能であり，臨床現場への導入に際する障壁は低いことが示唆された．（張，川島，金）

2） 性嗜好障害等の治療等に係る基礎資料の作成及び環境整備のための研究
（厚生労働科学研究費補助金　障害者政策総合研究事業）

本研究では，①性嗜好障害等の治療等に係る統計データを含めた基礎資料の作成，②性嗜好障害等の治療等の有効性，安全性のエビデンスを示す資料の作成，③性嗜好障害等の治療に関する周知資材の作成を目的としている．精神保健研究所の他，千葉大学，NCNP 認知行動療法センターとの共同研究である．①に対し，精神保健福祉センターにおける「性犯罪の再犯防止に向けた地域ガイドライン」の活用状況を調査，国内外の先駆的な取組を行う機関への聞き取り調査，医療観察法対象者の特徴の調査が行われた．また、②③に対し，性嗜好障害当事者へのアンケート調査の検討や，被害者視点のアンケート調査が行われた．（張，林，金）

3） CBT-powered LLM の開発・動作確認及びうつ病治療における有効性の検討

本研究は，質の高い CBT へのアクセシビリティーとユーザビリティを向上し，うつ病患者の健康に貢献することを目指している．CBT センターや企業との共同研究を行い，①認知行動療法の理論および実践的手法を学習した，高い安全性と倫理性を備えた大規模言語モデル（CBT-powered LLM：CPL）の開発，②本 CPL の知識や知識・対話能力を念頭に動作確認の実施，③うつ病患者を対象として本 CPL のユーザビリティ試験の実施の 3 つの目標に取り組む.今年度は，研究計画の立案に参画し，倫理審査を経て研究実施の承認を得た．（張）

4） 自殺未遂者の実態解明と自殺未遂者登録システム構築のための研究

本研究は,「救急患者精神科継続支援料」を算定する医療施設との協働により，算定対象となった全自殺未遂者の心理社会的実態を明らかにするとともに，これらの情報を統合することにより，全国自殺未遂患者登録システムを構築し，日本の精神保健施策に供することを目的として実施するものである．2025 年度は，救急患者精神科継続支援料算定の自殺未遂患者データが収集された．また，これらの患者の基本属性，自殺企図行動の詳細，精神疾患種別，救急患者精神科継続支援のプロセスや導入率，そして自殺再企図の有無に関するデータの集計，解析が

行われた.（張）

5） 自殺予防支援者が備えるネガティブ・ケイパビリティ（NC）とその関連要因

本研究では，自殺予防支援者が支援現場で発揮している NC の特性を明らかにすることを目的とし，NC を醸成する研修プログラムの開発や，支援者のメンタルヘルス維持および支援の継続に資することを目指している．本年度は，日本いのちの電話連盟に加入する全国の加盟センター相談員を対象に，Web アンケートによる横断調査を実施した．その結果，いのちの電話相談員における NC 関連次元としての「曖昧さの享受」は，心理的苦痛や経験年数よりも，自己効力感（ゲートキーパーの自信）と関連していた．NC の養成には，技能に加え，自己効力感を支える振り返り・SV 等の支援者支援を組み込むことが 重要であると示唆された.（張）

6） 新型コロナ感染症パンデミック後の自殺関連事象の動機に関する調査～パンデミック下との比較を通して～

アフターコロナでの自殺行動の動機について精神保健医療従事者を対象に WEB アンケート調査を実施し，COVID-19 パンデミック後のストレス因が自殺関連事象に及ぼす影響，両者の関連性，および相談や治療支援における課題について検証する．多機関共同研究の企画・立案に参画し，倫理審査を経て研究実施の承認を得た.（張）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・ 市民向け公開講座やワークショップ　講師（Ⅳ．研究業績 C．講演，E．研修 参照）
・ 『こころの情報サイト』の運営・管理

一般市民向けに，こころの健康づくりに関する医学的情報，医療・福祉・労働・年金等の社会資源に関する情報，国の施策に関する情報を提供した．令和 7 年度の年間のアクセス数は 3,989,785 であった.

・ 川崎いのちの電話　理事長（張）

(2) 専門教育面における貢献

・ 専門職向け，行政職員向け研修会　講師（Ⅳ．研究業績 C．講演，E．研修 参照）
・ 帝京大学　客員教授（張）
・ 日本精神科看護協会 精神科認定看護師認定審査会委員（張）
・ 学習院大学大学院　非常勤講師（金）
・ 日本精神神経学会専門医試験　面接委員（金）

(3) 精研の研修の主催と協力

・ 各研修会　開会式挨拶（張）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・ 東京都自殺対策事業アドバイザリーボード委員（張）
・ 東京医科歯科大学 難治疾患研究学際領域展開ハブ形成プログラム運営委員会委員（張）
・ 全国精神保健福祉センター長会定期総　来賓挨拶．2025.7.3.（張）
・ 国立がん研究センターがん対策研究所サバイバーシップ研究部 がん医療における自殺対策の手引き 外部評価（張）
・ 東京都精神保健指定医業務（張）
・ 第 60 回全国精神保健福祉センター研究協議会　来賓挨拶．2025.10.28.（張）

・ 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）事前評価委員会 委員長（金）

(5) センター内における臨床的活動

・ 自殺予防対策チーム会議　指導・助言（張）
・ 自殺予防の基礎知識 応用編　講義 2025.12.17.（張）

(6) その他

・ タイ保健省・保健システム研究所訪問対応．2025.6.30.（張）
・ JICA 平和構築室主催研修会 来賓．2025.8.7.（張）
・ タイ国政府代表医療視察団　司会．2025.8.9.（張）
・ 韓国・慶熙大学病院視察受入れ対応．2025.8.28.（張）
・ Asian Consortium of National Mental Health Institutes（ACONAMI）9th Annual Meeting 主催．Tokyo，2025.9.24.（張）

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Ishibashi R, Yonemoto N, Cho Y, Sugiyama N, Kishi Y, Fujita K, Morikawa M, Tateno M, Kawahara Y, Otsuka K, Sano T, Komata K, Kawanishi C： A multicenter, single-arm clinical trial of an assertive case management intervention for preventing suicide reattempts at psychiatric hospitals in Japan: ACTION-JP study．BMC Psychiatry 25(1)：1135，2025.
2) Hong JS, Kim Y, Sim M, Han DH: Brain volume and functional connectivity in firefighters with posttraumatic stress disorder．Psychol Trauma advance online publication，2026.
3) Maruyama-Sakurai K, Tachimori H, Honjo K, Kunugi H, Saito I, Kato T, Arima K, Tomita Y, Tanno K, Yamagishi K, Iso H, Yasuda N, Narita Z, Kim Y, Yamaji T, Iwasaki M, Inoue M, Tsugane S, Sawada N: Associations between work-family conflict and depressive symptoms and effect modification by social support and income among Japanese workers: A community-based cross-sectional study．Psychiatry Clin Neurosci Rep，2025.
4) Ueda N, Lin M, Itoh M, Hori H, Narita Z, Niwa M, Kim Y: Decreased non-emotional working memory capacity in women with PTSD: association with symptomatology．Eur J Psychotraumatol 16(1)，2025.
5) Narita ZC, Ledsam JR, Niwa M, Kawada N, Galatzer-Levy IR, Kim Y: Can generative AI assess PTSD? A clinical validation study of transcribed and direct audio input modalities. BMJ Digit Health AI 1：e000042，2025.
6) Niwa M, Kato T, Suga Y, Otomo R, Sugawara M, Matsui M, Kamo T, Hori H, Kim Y: Neurocognitive functioning over the course of STAIR Narrative Therapy for ICD-11 complex PTSD．Eur J Psychotraumatol 16(1)：2523079，2025.
7) Sekiba H, Hirohata S, Hori A, Suga Y, Toshishige Y, Vergara P, Masaki M, Tominaga M, Yanagisawa M, Kim Y, Sakaguchi M: REM sleep rhythm impairment in people with PTSD. medRxiv：2025.07.02.25330609，2025.

(2) 総説

1) 張 賢徳：自殺予防の論拠―なぜ自殺を防がないといけないのか？．精神療法 51(2)：144-149，2025.4.5.
2) 張 賢徳：緩和ケアにおける対応・スピリチュアルケア．精神療法 52(1)：19-22，2026.2.5.

3) 金 吉晴, 堀 弘明 : PTSD の持続エクスポージャー療法. 日本精神科病院協会雑誌 44(8) : 811-816, 2025.

(3) 著書

1) 張 賢徳 : 3. 適応反応症. 岩田仲生, 岡田 俊, 加藤忠史, 加藤正樹, 橋本 衛, 中込和幸 編 : 精神科 Resident 6(4). 先端医学社, 東京, pp11-12, 2025.
2) 張 賢徳 : 退職代行サービスに見る現代の若者心理. 日本精神衛生会 編 : こころと社会 56 巻 3 号. 日本精神衛生会, 東京, pp99-103, 2025.
3) 太刀川弘和, 張 賢徳 : 自殺既遂事例の検討会. 自殺予防と危機介入 45(2) : 49-50, 2025.
4) 張 賢徳 : 齋藤友紀雄先生の自殺観と自死遺族への眼差し, 斎藤友紀雄先生追悼シンポジウム. 自殺予防と危機介入 45(2) : 51-52, 2025.
5) 張 賢徳 : Q94.「うつ病治療において自殺を防ぐために臨床医が備えておきたい知識を教えてください」. 精神科治療学 編 : 精神科治療学第 40 巻増刊号. 星和書店, 東京, pp256-257, 2025.
6) 張 賢徳 : 第 2 章 1 日本の自殺問題. 大塚耕太郎, 河西千秋, 張 賢徳 編 : 病院内の自殺予防とメンタルヘルス対策. メディカ出版, 東京, pp18-25, 2025.
7) 張 賢徳 : 第 2 章 5［コラム］心理学的剖検. 大塚耕太郎, 河西千秋, 張 賢徳 編 : 病院内の自殺予防とメンタルヘルス対策. メディカ出版, 東京, pp45-46, 2025.
8) 張 賢徳 : 第 2 章 9 自殺に傾く人の心理. 大塚耕太郎, 河西千秋, 張 賢徳 編 : 病院内の自殺予防とメンタルヘルス対策. メディカ出版, 東京, pp61-64, 2025.
9) 張 賢徳 : 自殺の予防. 福井次矢, 高木 誠, 小室一成 編 : 今日の治療指針. 医学書院, 東京, pp1137-1139, 2026.
10) 張 賢徳 : (協力評価者) 発刊によせて「わが国の自殺総合対策におけるがん患者への自殺対策」. 厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業「がん患者の自殺予防プログラム開発とその実装に向けた教育研修に関する研究」 編 : がん医療における自殺対策の手引き. 東京, pp3-5, 2026.

(4) 研究報告書

1) 張 賢徳 : Quality Indicator を用いた医療の質向上プログラムの開発と効果研究. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費研究事業 令和 7 年度統括研究報告書, 2025.
2) 張 賢徳 : 性嗜好障害等の治療等に係る基礎資料の作成及び環境整備のための研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）令和 7 年度総括研究報告書, 2025.
3) 林 明明, 金 吉晴, 張 賢徳 : 性加害者向けの再犯防止・適切な社会復帰等のための心理プログラムの開発・実施に対する意見聴取のための web アンケート調査. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業 性嗜好障害等の治療等に係る基礎資料の作成及び環境整備のための研究（研究代表者 : 張 賢徳)）令和 7 年度分担研究報告書, 2025.
4) 金 吉晴 : PTSD の恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療. 令和 6 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究(A) 実績報告書, 2025.
5) 金 吉晴 : PTSD の恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療. 2022 年度～2024 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究(A) 研究成果報告書, 2025.

(5) 翻訳

(6) その他

1) Fung DSS, Cho Y, Kwak YS : ACONAMI: A Case for Asian Mental Health Transformation. Asia Pac Psychiatry 18(1) : e70016, 2026.

2) 張 賢徳：記念講演「メンタルヘルスにとって一番大事なもの」：第 72 回精神保健福祉全国大会 記録集．第 72 回精神保健福祉全国大会運営事務局（株式会社エムアンドエムドットコー内），2026.
3) 山下陽三，張 賢徳，原田 豊，高知東生，武藤岳夫：シンポジウム「リカバリーできる社会の実現に向けて」：第 72 回精神保健福祉全国大会 記録集．第 72 回精神保健福祉全国大会運営事務局（株式会社エムアンドエムドットコー内），2026.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Cho Y：Concept of death and culture: Consideration of the Japanese view of life and death in the wake of the surge in suicides．PRCP & WACP 2025 Joint Congress, Tokyo, 2025.9.25.
2) 張 賢徳：10 代の自殺―いじめ，不登校，発達障害．第 5 回日本成人期発達障害臨床医学会・総会学術集会，東京，2025.5.11.
3) 張 賢徳：私と死生学―生きることの意味を求めて―．シンポジウム 3「私と死生学―死生学ってなに？」，北海道，2025.6.1.
4) 張 賢徳，太刀川弘和：ワークショップ 2（自殺予防に関する委員会）複雑事例を通して学ぶ自殺予防のエッセンシャルズ．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
5) 河西千秋，石橋竜太朗，大塚耕太郎，杉山直也，張 賢徳：シンポジウム 95 精神科病院における自殺企図者の自殺再企図防止方略開発のための多施設共同臨床試験 ACTION-JP 研究の背景．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
6) 石橋竜太朗，米本直裕，張 賢徳，杉山直也，館農 勝，藤田 潔，森川将行，来住由樹，川原一洋，河西千秋：シンポジウム 95 ACTION-JP 研究の概要．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
7) 太刀川弘和，河西千秋，大塚耕太郎，小山達也，張 賢徳：ワークショップ 1 職場の危機対応としての自殺対策―予防と事後対応（ポストヴェンション）―．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.11.
8) 橋本 治，丸田敏雅，影山隆之，張 賢徳：齋藤友紀雄先生追悼シンポジウム．第 49 回日本自殺予防学会総会，島根，2025.9.6.
9) 三木和平，寺田浩，阿瀬川孝治，張 賢徳：シンポジウム 2 これからの外来精神医療について．第 2 回日本外来精神医学会学術総会，神戸，2025.9.13.
10) 張 賢徳：ランチョンセミナー3 自殺予防の視点から見た外来精神医療の役割と広がり．第 2 回日本外来精神医学会学術総会，神戸，2025.9.13.
11) 張 賢徳：教育講演 適応障害と自殺予防．日本自律訓練学会第 48 回大会・第 41 回日本ストレス学会学術総会合同大会，東京，2025.9.14.
12) 張 賢徳：産業医研修 2 『適応障害』から考える職場のメンタルヘルス．第 25 回日本外来精神医療学会，鹿児島，2025.11.23.
13) 張 賢徳，河西千秋，宇屋 貴：自殺の基礎知識と文化的背景．第 136 回日本心身医学会関東甲信越地方会 関東甲信越支部講習会，東京，2026.1.31.
14) 金 吉晴：この 10 年間の PTSD 治療の発展．第 121 回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム 8，神戸，2025.6.19-21.
15) 金 吉晴：PTSD 概念はなぜ ICD-11 と DSM-5 では異なるのか？．第 121 回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム 101，神戸，2025.6.19-21.
16) 坂口昌徳，関場 遥，廣幡小百合，堀 有伸，須賀楓介，利重裕子，正木みのり，Vergara P，富永杜絵，柳沢正史，金 吉晴：シンポジウム 13 PTSD 患者の睡眠特性と睡眠時音刺激治療の実現可能性．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
17) 金 吉晴：PTSD の診断的位置付け．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会 ラ

ンチョンセミナー1，東京，2025.8.2.

18) 金 吉晴：（指定討論）音 VR による PTSD 治療の新展開．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会 シンポジウム D4，東京，2025.8.3.

(2) 一般演題

(3) 研究報告会

(4) その他

1) 金 吉晴：Mental health and psychosocial support (MHPSS) for better emergency and disaster preparedness, response, and recovery．WHO 神戸会議，神戸，2025.10.27.

C．講演

1) 張 賢徳：うつ病と自殺予防．第 30 回山口県脳とこころの研究会（ヴィアトリス製薬主催），山口，2025.4.19.
2) 張 賢徳：メンタルヘルスと自殺予防．21 世紀の健康と福祉における新たな挑戦（大阪・関西万博ハンガリーパビリオン），大阪，2025.6.24.
3) 張 賢徳：うつ病治療と自殺予防．第 4 回信州の自殺予防を考える講演会（ヴィアトリス製薬主催），オンライン，2025.7.8.
4) 張 賢徳：自殺予防について．長崎県地域医療介護総合確保基金事業県民公開講座，長崎，2025.11.2.
5) 張 賢徳：記念講演 メンタルヘルスにとって一番大事なもの．第 72 回精神保健福祉全国大会 ，鳥取，2025.12.7.
6) 張 賢徳：シンポジウム リカバリーできる社会の現実に向けて．第 72 回精神保健福祉全国大会，鳥取，2025.12.7.
7) 張 賢徳，原田 豊，高知東生，武藤岳夫：リカバリーできる社会の実現に向けて．第 72 回精神保健福祉全国大会シンポジウム， 鳥取，2025.12.7.
8) 張 賢徳：自殺予防の基礎知識．第 7 回あおきクリニック勉強会，東京，2025.12.12.
9) 張 賢徳：死生学―死を語ろう，より良く生きるために―．きずな音楽祭 2025 with 令和 7 年度豊島区がん対策推進特別講演会（認定 NPO がんサポートコミュニティー），東京，2025.12.21.
10) 張 賢徳：若年女性のメンタルヘルスと自殺予防．Viatris Webinar（ヴィアトリス製薬会社合同会社），オンライン，2026.1.8.
11) 張 賢徳：自殺予防はみんなの仕事―地域での取り組みを考える―．2025 心の健康フォーラム in 倉吉（鳥取医師会），鳥取，2026.1.16.
12) 張 賢徳：自殺予防はみんなの仕事―地域での取り組みを考える―．2025 心の健康フォーラム in 鳥取（鳥取医師会），鳥取，2026.1.17.
13) 張 賢徳：大切な人を自殺から守るために．川崎いのちの電話公開講座，神奈川，2026.2.4.
14) 張 賢徳：心の不調を感じたら誰かに相談できますか？―大切な人を自殺から守るために―．自殺予防公開講座，秋田，2026.3.1.
15) 張 賢徳：こどもの自殺が起きたときの調査のあり方．自由民主党本部 政務調査会 孤立・孤独対策特命委員会 こども・若者の自殺対策プロジェクトチーム，東京，2026.3.10.
16) 張 賢徳：みんなで考えようメンタルヘルス―自殺予防の視点から考えてきたこと―．都医学研セミナー，東京，2026.3.25.
17) 金 吉晴：PTSD の理解と治療．第 14 回先進医療 JOINT カンファレンス（第一三共主宰），大阪，2026.3.14.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) Kim Y：21st PacificRim College of Psychiatrists & 7th World Association of Cultural Psychiatry Program Committee Chair
2) Kim Y：World Psychiatric Association, Ethics & Review Committee, Co-opted member
3) Kim Y：World Psychiatric Association, Advisory Committee on Response to Emergencies Committee (ACRE), Member
4) 張 賢徳：日本自殺予防学会 理事長
5) 張 賢徳：日本臨床死生学会 常任理事
6) 張 賢徳：日本うつ病学会　理事
7) 張 賢徳：日本うつ病学会 自殺対策委員会 委員長
8) 張 賢徳：日本うつ病学会　学会奨励賞選考委員会 委員
9) 張 賢徳：日本精神神経学会 自殺予防に関する委員会 委員長
10) 張 賢徳：第 31 回日本臨床死生学会総会 大会長
11) 張 賢徳：第 49 回日本自殺予防学会総会 プログラム委員
12) 張 賢徳：第 23 回日本うつ病学会・第 50 回日本自殺予防学会総会合同総会 プログラム委員
13) 張 賢徳：第 122 回日本精神神経学会学術総会 プログラム委員
14) 金 吉晴：日本自殺予防学会 理事
15) 金 吉晴：日本精神神経学会 ICD-11 委員会 委員
16) 金 吉晴：日本精神神経学会 専門医試験委員会 委員

(3) 座長

1) Cho Y：Symposium 30 Culturally grounded suicide prevention measures. PRCP & WACP 2025 Joint Congress, Tokyo, 2025.9.26.
2) Cho Y, Liao SC：Symposium 42 Suicide prevention-2. PRCP & WACP 2025 Joint Congress, Tokyo, 2025.9.26.
3) Kim Y, Fung DSS：Symposium 48 Dialogue in PTSD: clinical support and basic science. PRCP & WACP 2025 Joint Congress, Tokyo, 2025.9.26.
4) 張 賢徳：一般演題① 文学・教育．第 30 回日本臨床死生学会総会，北海道，2025.5.31.
5) 張 賢徳, 杉山直也：シンポジウム 95 精神科病院を受療した自殺企図者の自殺再企図防止方略開発のための多施設共同臨床試験（ACTION-JP 研究）. 第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.20.
6) 張 賢徳，大塚耕太郎：シンポジウム 106 精神保健医療の従事者教育のメソッドを考える．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.21.
7) 太刀川弘和，張 賢徳：シンポジウム 122 自殺未遂者の様々な支援手法の発展：ACTION-J を超えて．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.21.
8) 張 賢徳，河西千秋：シンポジウム 126 病院内の入院患者の自殺事故予防の取り組み．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.21.
9) 藤吉晴美，張 賢徳：委員会シンポジウム 6 多職種連携による自殺予防．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.11.
10) 張 賢徳：大会長講演 自殺予防の二つの視点：絶望にある人への支援と，絶望に至らせないための支援．第 49 回日本自殺予防学会総会，島根，2025.9.6.
11) 張 賢徳：教育講演 2 分子精神医学と地域精神医療の架け橋―フェロトーシス研究からひらかれる新たな可能性―．第 25 回日本外来精神医療学会，鹿児島，2025.11.23.

12) 張 賢徳：産業医研修 1 最近の産業保健トピックス―両立支援マニュアルをめぐって―．第 25 回日本外来精神医療学会，鹿児島，2025.11.23.

(4) 学会誌編集委員等

1) Kim Y：Psychiatry and Clinical Neuroscience 誌 編集委員
2) Kim Y：European Journal of Psychotraumatology 誌 編集委員
3) 張 賢徳：日本精神衛生会「心と社会」編集委員長

E．研修

(1) 研修企画

1) 張 賢徳：第 2 回自殺予防に関する委員会主催研修会．オンライン，2025.7.27.

(2) 研修会講師

1) 張 賢徳：院内自殺の予防と事後対応のための研修会．日本自殺予防学会，東京，2025.8.1.
2) 張 賢徳：成人期におけるこころの健康問題支援．精神科認定看護師教育課程認定科目 I「ライフサイクルとメンタルヘルス 3」（日本精神科看護協会），オンデマンド，2025.
3) 張 賢徳：ゲートキーパー養成指導者研修会．日本自殺予防学会，島根，2025.9.5.
4) 張 賢徳：講義 1「自殺行動の精神医学的理解と対応」．令和 7 年度自殺未遂者ケア研修「精神科救急版」．いのち支える自殺対策推進センター，オンライン（事前 e ラーニング講義動画），2025.11.5-12.10.
5) 張 賢徳：メンタルヘルスって何？．世界メンタルヘルスデー2025 市民公開ワークショップ，オンライン，2025.10.10.
6) 張 賢徳：自殺予防・未遂者ケアに関する基礎講義．ACTION-JP 研究 第 1 回ケースマネジメント研修会．第 33 回日本精神科救急学会学術総会，群馬，2025.10.16.
7) 張 賢徳：自殺未遂者支援のための基礎知識―再企図を防ぐためにできること―．令和 7 年度第 1 回東京都自殺未遂者支援研修，オンライン，2025.11.11.
8) 張 賢徳：希死念慮のある患者への対応．認定 NPO 法人がんサポートコミュニティー 2025 年度ファシリテーター研修，東京，2025.11.16.
9) 張 賢徳：自殺予防の基礎知識．自殺未遂者支援のための地域実務者研修会，東京，2025.12.12.
10) 張 賢徳：自殺リスクが高い方への実践的対応―心構え，アセスメント，実際の対応―．仙台市精神保健福祉総合センター（はあとポート仙台）主催令和 7 年自殺対策専門職研修，オンライン，2026.2.25.
11) 張 賢徳：院内自殺の予防と事後対応のための研修会．2025 年度第 2 回研修会（日本自殺予防学会），東京，2026.3.6.
12) 金 吉晴：持続エクスポージャー療法．韓国国立精神医学研究所研修会，韓国，2025.4.14-15.
13) 金 吉晴：災害時のメンタルヘルス対応．健康危機管理研修（国立保健医療科学院），東京，2025.5.29.

F．その他

1) 張 賢徳：子どもの自殺と不適切指導を考える．院内集会（安全な生徒指導を考える会），2025.5.21.
2) 張 賢徳：世界摂食障害アディクションデイ 2025 フラッシュトーク（動画）．2025.6.1.
3) 張 賢徳：書評「［新装版］自殺の対人関係理論―予防・治療の実践マニュアル」（Thomas E. Joiner Jr., Kimberly A. Van Orden, Tracy K. Witte, M. David Rudd 著，北村俊則監訳，奥野大地，鹿沼 愛，弘世純三，小笠原貴史訳）．精神療法 51(3)：117-118，2025.6.5.
4) 張 賢徳：世界摂食障害アディクションデイ 2025 応援メッセージ．摂食障害全国支援センター

一般社団法人日本摂食障害協会 ニュースレター，2025.7.

5) 張 賢徳 : YouTube 動画監修・作成．世界メンタルヘルスデー「10 代の皆さんへ『あなたにとって、みんなにとって大切な命』」，YouTube，2025.9.30.

6) 張 賢徳 : YouTube 動画監修．ねえねえもこたん「自殺願望 消えてなくなりたくなったときに…」国立健康危機管理機構，2025.10.6.

7) 張 賢徳 : 書評「傷の声―絡まった糸をほどこうとした人の物語―」．心と社会 No.200, 2025.

8) 張 賢徳 : 書評「[新装版]自殺の対人関係理論 予防・治療の実践マニュアル」．精神療法 Vol.51 No.3, 2025.

9) 張 賢徳 : 書評「子どもの自殺はなぜ増え続けているのか」．心と社会 No.202，2025.

10) 張 賢徳 : 試験問題作成．精神科認定看護師教育課程（日本精神科看護協会），2025.

11) 張 賢徳 : 特集「悩む門にも福来たる」．川崎いのちの電話広報誌 Vol.116，2026.3.1.

３．公共精神健康医療研究部

Ⅰ．研究部の概要

当研究部では，国民全体の精神健康を増進し，精神疾患の予防や精神疾患からの回復を促進する支援体制を構築することを目標に，種々の疫学研究から精神医療福祉サービスの実態の把握・政策への実装の支援までを対象とした「公衆の精神保健（Public Mental Heath）」に関する研究を行っている．令和 7 年度は，医療計画における精神医療分野のモニタリング（観察等）のための研究，障害福祉計画の精神障害分野の政策目標に関する研究，政策研究に応用可能な精神医療サービスの評価指標やアウトカム（結果）に関する研究を行った．これらの活動は，他の研究部や全国の医療機関，行政機関等との協働によって実施している．

研究部の構成

部長：黒田直明，室長：堀口寿広，臼田謙太郎，研究員：三宅美智（11/1～），リサーチフェロー：片岡真由美，三宅美智（～10/31），テクニカルフェロー：北村真紀子，科研費研究員：神川ちあき，中下綾子，古野考志，研究補助員：櫻庭亜希子，島田知恵，鈴木和香子，辻田あづさ，岩垂由真（5/1～），客員研究員：安西信雄，飯田真子，今井健二郎，岡﨑絵美，岡田隆志，後藤基行，澤田宇多子，杉山雄大，竹島 正，中村江里，西 大輔，羽澄 恵，深澤舞子，本屋敷美奈，柴崎聡子（5/1～），浜田将太（7/22～），研究生：手塚一秀（1/5～）

Ⅱ．研究活動

1） 効率的かつ効果的な精神保健医療福祉システムの構築とそのモニタリングのための研究

本研究の目的は，令和 6 年度より開始された第 8 次医療計画の中間見直しに向けて，最適な指標案および基準病床数の算定式の値を更新することを中心として，現状を鑑みたより効率的で効果的な精神保健医療福祉のモニタリングを行うことである．

精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（以下，「にも包括」と表記）の推進や第 7 次医療計画以降の多様な精神疾患に対応した医療体制の構築により，入院中心から地域生活中心を目指す施策の推進が行われ，入院期間の短縮，急性期医療の充実，病床数の削減に取り組む医療機関が出現するなどの変化が見られている．

本研究は A～D の 4 つの分担研究によって構成した．

A 班は，第 8 次医療計画の中間見直しに向けた指標案と基準病床数の値の更新を研究班内で議論し，関係者間での情報共有とその整理を行う過程を経て，研究班として追加する指標の例と基準病床数算定式のデータの更新等を進めた．B 班は，例年通りの調査を実施し，例年通りの回収率で調査を終了できた．加えて，精神保健福祉資料（630 調査）のみで収集可能なデータと他の調査で代替可能な項目を整理し比較検討することを進め，精神病床を有しない医療機関と訪問看護ステーションを対象とした調査をオンラインへ移行することの実施可能性を検討する調査を計画した．C 班は，例年の第 8 次医療計画指標の数値を算出し公開の準備を進めた．加えて，中間見直しにおいて追加または見直しの必要がある指標のデータについても検討を行った．D 班は，例年の最新データを更新することに加えて，自治体ごとの各保健医療福祉資源の増減について数値データを色の濃淡を利用して可視化したヒートマップの作成，各社会資源の情報を掲載する手続きの自動生成，630 調査で収集した転帰に関する情報をより詳細に表示できる機能を実装する作業を進めた．（黒田，臼田，古野，北村）

2） 第 8 期障害福祉計画の「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（「にも包括」）」構築にかかる成果目標の見直しに資する研究

次期障害福祉計画の精神障害分野における新たな成果目標や活動指標を検討するための情報収

集・論点整理・評価方法の探索を行った．3 年度計画の最終年度である令和 7 年度は，これまでの調査成果から精神疾患に対するスティグマ（差別や偏見など）を軽減するための普及啓発，地域の実情に対応した協議の場の運営に関する指標に注目し，第 8 期の当該分野の成果目標・活動指標について厚生労働省の担当課と協議を行った．ロジックモデル（施策が目標とする成果を達成するに至るまでの論理的な関係を体系的に図式化したもの）における協議の場の中間的なアウトカムとして，協議の場を運営することでどのような地域環境やサービスの提供体制を生み出すべきかを自治体が認識しづらい状況が共有され，協議の場の質を向上させるための運営過程に関するチェックリストの開発を研究班から提案した．また，2 年度目に行ったロジックモデルの開発で得た知見を基に，自治体職員がロジックモデルを「にも包括」の構築や協議会の運営に役立てるための入門的な解説資材を作成した．社会保障審議会 障害者部会で成果目標の候補となった心のサポーター養成者数と対応した住民アウトカムを測定する道具として，Discrimination and Stigma Scale Ultra Short（精神疾患に対するスティグマ体験の自記式尺度）を翻訳し，障害者手帳をもつ人を対象としたオンライン調査を実施した．（黒田，臼田，神川，三宅，片岡，羽澄）

3） 精神保健医療福祉を取り巻く環境の中長期的な変化等を見据えた精神保健医療福祉を提供する体制の構築を推進するための研究

2040 年にむけた新たな地域医療構想に精神医療を位置づけるための政策議論に資する統計データの作成や，地域における構想調整会議のあり方に関する調査研究を行っている．3 年度計画の 1 年度目である令和 7 年度には，新たな地域医療構想を含む改正医療法が年末まで成立せず精神医療分野の構想に関する具体的な政策議論が行われなかったため，文献研究，既存データの解析，有識者との議論を行い，精神医療分野を地域医療構想に含めることとした場合の論点の抽出，630 調査と病床機能報告の項目比較などの予備的作業を実施した．（黒田，臼田，三宅）

4） エビデンスを活かした「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（にも包括）」構築のためのデータ利用の探索

精神医療サービスの提供体制は，医療計画，地域医療構想，障害福祉計画などの行政計画の中で都道府県，市町村が主体となって整備していくこととなっている．これらの立案・評価のために NDB（レセプト情報・特定健診等情報データベース）をもとに作成された評価指標がすでに活用されているが，指標の疫学的・政策的な意義や指標同士の関連性についての研究は不足している．また，精神保健医療福祉分野の政策評価に重要な患者から報告されるアウトカムはほとんど組み入れられていない．このような隔たりを埋めるため，解析自由度の高い JMDC 保険者データベース（健康保険組合に所属する加入者の台帳，加入者が医療機関を受診した際に発行される全てのレセプト，健康診断の結果）を用いた精神医療サービスを評価する研究，患者から報告されるアウトカムを地域行政に組み入れるための予備的な研究などを行っている．令和 7 年度は，精神科外来および精神病床入院患者の分布に関する JMDC データベースと NDB データの比較，精神疾患がある人の特定健診におけるメタボリックシンドロームの有症割合の検討，精神疾患に対するスティグマ体験の自記式尺度の信頼性と妥当性の検証を行った．（黒田，北村，片岡，深澤，臼田，三宅，羽澄）

5） 6NC 連携の NDB 研究基盤による重点疾患の疫学・政策研究の推進

国立高度専門医療研究センター6 施設（6NC）（当センターを含む 5 つの国立高度専門医療研究センター（NC）と国立健康危機管理研究機構（JIHS））の研究者の協力により，NDB を用いて NC が担う重要疾患等に関するエビデンス（根拠）を創出し，臨床・疫学・政策上の課題を早期に抽出できるようにすることに加えて，NC 内外での研究の促進と政策提言のためのエビデンスの構築につながることが期待される．また，ときには政府等からの要請により迅速に解析結果を出すことも求められることから，人材育成も含めた NDB 研究推進体制の構築を進めている．令和 7 年度は，神経・筋疾患データ（代謝性ミオパチー，筋ジストロフィー等の計 54 疾患）の患者数を算出し，さ

らに，各疾患について呼吸と栄養に関連した診療行為の出現数や，心臓血管系の傷病名の患者数を算出した．実際にデータを取り扱う中でデータの取り扱い方法を検討し，NDB データの管理体制の構築にも引き続き努めた．（黒田，臼田，古野）

6） 6NC 疾患横断的コホート研究

健康寿命を延伸する決定要因の解明を目的とし，6NC が実施する大規模なコホート（一定期間追跡される人々の集団）研究を通じたエビデンスを構築するプロジェクトに参画している．

当研究部では全国 11 保健所管轄下の約 10 万人を約 20 年間追跡した縦断データと約 11 万人を 5 年間追跡した縦断データに基づいて，生活習慣，その後の精神疾患，自殺を含む死亡との関連を分析し，それらを予防する要因のエビデンスの創出を行っている．

令和 7 年度は，身体活動や食事習慣とその後のうつ症状の関連を分析した．今後は，その結果の論文での発表や，うつ症状・死亡の関連要因を引き続き分析することに加えて，各 NC のコホートデータやレセプトデータを統合することにより構築される大規模統合データベースを活用し，メンタルヘルスの観点から健康寿命を延伸する要因の解明に向けて多角的な解析を行っていく．（黒田，片岡）

7） 医療的ケア児のインクルーシブ保育

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」とその家族の社会参加を促進する目的で，東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された地域協議会に参画して，訪問看護師が付き添い保育所で他の児童たちとともに保育を受ける「インクルーシブ（包摂的な）保育」の実施に協力した．令和 7 年度は，事業開始から 10 年を経過したことを踏まえ他地域での実践に資することをめざし保育記録の作成方法の指針の作成を検討した．（堀口）

8） 新型コロナウイルス罹患後の精神症状に関する疫学的検討

新型コロナウイルス感染者を対象としたオンラインでの縦断調査データの解析を継続し，睡眠休養感，小児期逆境体験，職場の心理的安全性と罹患後症状との関連，罹患後抑うつ症状の軌跡などについて，論文発表および学会発表を行った．（黒田，片岡，羽澄，臼田，三宅，中下）

9） 精神科医療の質を評価する指標の作成に関する研究

精神科医療の質を多面的に測定できる指標を新たに構築することを目標とし，電子カルテ，行動制限の実施データ，インシデントレポート（事故報告書）のデータを抽出・連結し，患者安全を中心とした質の指標を定義・検証する研究を開始した．（黒田，堀口）．

10） 精神医学歴史資料の活用研究

当センターのアーカイブス委員会委員としてセンター病院の前身となる傷痍軍人武蔵療養所，国立武蔵療養所時代の精神医学史的な資料の整理を行うとともに，しょうけい館（戦傷病者史料館）における企画展示「心の傷を負った兵士」および常設展示「心の傷による労苦」の企画に協力した．（黒田，堀口）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

(2) 専門教育面における貢献

- 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 非常勤講師（黒田）
- 武蔵野大学 非常勤講師（臼田）
- 国際医療福祉大学 公開講座（地域医療ビッグデータ入門 精神医療分野のロジックモデルと指

標データ 担当講師）（臼田）

(3) 精研の研修の主催と協力

・ 第 3 回 精神保健医療福祉データ行政活用研修（黒田，臼田）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・ 全国精神保健福祉センター長会 倫理審査委員会 委員（黒田）
・ つくば市 地域ケア会議委員（黒田）
・ つくば市 在宅医療介護連携推進協議会 評価部会委員（黒田）
・ つくば市 保健部顧問（黒田）
・ 心のサポーター養成に係る普及啓発・運営業務等一式に係る事業評価委員会（黒田）
・ N-EQUITY の科学諮問委員会 研究審査会 外部評価委員（黒田）
・ 全国精神保健福祉センター長会 データ分析・地域分析検討委員会 オブザーバー（黒田）
・ 児童・生徒を対象とした心のサポーター養成プログラムの開発に関する調査研究検討委員（黒田，臼田）
・ 児童・生徒を対象とした心のサポーター養成プログラムの開発に関する調査研究ワーキング委員（臼田）
・ 令和 7 年度 静岡県行動制限最小化研修会オブザーバー（三宅）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

・ 日本精神科看護協会査読委員（三宅）
・ 日本精神保健看護学会査読委員（三宅）
・ PwC コンサルティング合同会社公共事業部倫理審査委員会委員（三宅）

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Sakamoto A, Inokuchi, R, Iwagami M, Kuroda N, Inoue Y, Tamiya N: Liberation and discharge status of older patients after invasive mechanical ventilation: a retrospective cohort study. BMC Geriatr, 25(1), 311, 2025.

2) Hamasaki Y, Iwagami M, Kume K, Goto T, Komiyama J, Ito Y, Taniguchi Y, Inokuchi R, Watanabe T, Kuroda N, Suzuki A, Yoshie S, Ishizaki T, Iijima K, Tamiya N: Development and implementation of a web tool suggesting subtypes of older adults starting long-term care in Japan. J Am Med Dir Assoc, 26(11), 105836. 2025.

3) Nakano H, Iwagami M, Komiyama J, Sun Y, Hamasaki Y, Taniguchi Y, Kuroda N, Suzuki A, Tamiya N: Exploring fall-related fracture risk by possible fall-risk increasing drugs in Japanese older adults using municipal linked medical and long-term care claim data: a nested case-control and case-crossover study. Geriatr Gerontol Int, 25(12), 1799-1811, 2025.

4) Igarashi M, Kuroda N, Okada T, Moriyama Y, Abe M, Nara M, Yamaguchi S, Usuda K, Koike J, Yamamoto K, Kumagai N, Noguchi M, Fujii C: Analysis of local authorities providing mental health consultation: towards establishing a community-based integrated mental health care system. Int J Health Plann Manage, 41(1), 17-26, 2026.

5) Sasaki N, Takae A, Asaoka H, Kuroda N, Yatsuya H, Nishio N, Tabuchi T, Nishi D: Psychological distress and mental health service use trends in Japan (2013-2022): focusing

on the change before and after the COVID-19 pandemic. J Affect Disord, 393(Pt A), 120398, 2026.

6) Nara M, Yamaguchi S, Moriyama Y, Okada T, Usuda K, Hada A, Usui K, Iwanaga M, Kawaguchi T, Sato S, Kuroda N, Fujii C: Validity and reliability of the Japanese Adult Social Care Outcomes Toolkit four-level Self Completion Tool (ASCOT SCT4) in community mental health service users in Japan. Health Qual Life Outcomes, 24(1), 2026.

7) Hazumi M, Kataoka M, Narita Z, Usuda K, Okazaki E, Nishi D: Psychological distress after COVID-19 recovery and subsequent prolonged post-acute COVID-19 syndrome: a longitudinal study with one-year follow-up in Japan. J Psychosom Res, 196, 112323, 2025.

8) Hazumi M, Kataoka M, Usuda K, Miyake M, Nakashita A, Kitamura K, Okazaki E, Yoshiike T, Matsui K, Kuriyama K, Nishi D, Kuroda N: The relationship between nonrestorative sleep and persistent post-acute sequelae of COVID-19: a longitudinal study of recovery trajectories. Sleep Biol Rhythms, Epub ahead of print, 2026.

9) Hazumi M, Matsui K, Tabuchi T, Okubo R, Yoshiike T, Kitamura S, Kawamura A, Nagao K, Utsumi T, Izuhara M, Kizuki J, Fushimi M, Nishi D, Kuriyama K: Nonrestorative sleep mediates the influence of adverse childhood experiences on psychological distress, physical health, mental health, and activity limitation: a longitudinal study for the general population in Japan. Sleep Med, 133, 106658, 2025.

10) 井花庸子，木村晶子，杉山雄大，山本行子，山岡巧弥，今井健二郎，黒田直明，大杉 満，植木浩二郎，田宮菜奈子，山内敏正．糖尿病の体験に関する質問票調査と医療レセプトデータ連結解析：つくば市国保加入者における断面研究，糖尿病 69(3)：75-86，2026.

(2) 総説

(3) 著書

1) Kuroda N. Health services research in mental health. Tamiya N, Iwagami M, Sugiyama T, eds. Health services research for physicians. Springer Singapore, Singapore, pp31-35, 2025.

2) 三宅美智：コア・ストラテジーの考えかたに学ぶ隔離・身体的拘束の最小化の手法．高木俊介，下里誠二，竹瑞 寛 編著：必携 精神医療保健福祉キーワード事典，合同出版，東京，pp195-204，2026.

(4) 研究報告書

1) 黒田直明：良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究．令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（研究代表者：黒田直明）」令和 6 年度総括研究報告書．pp1-28，2025.

2) 黒田直明：良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指した指標に関する研究．令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（研究代表者：黒田直明）」令和 6 年度分担研究報告書．pp29-39，2025.

3) 黒田直明：第 8 期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究．令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「第 8 期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究（研究代表者：黒田直明）」令和 6 年度総括研究報告書．pp1-6，2025.

4) 臼田謙太郎：感染時期による罹患後精神症状の比較検討．令和 6 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：黒田直明）」令和

6 年度 分担研究報告書．2025.

5) 立森久照，臼田謙太郎，瀬戸屋 希，河野稔明，竹島 正，萱間真美，黒田直明，古野考志，北村真紀子：精神保健医療福祉の提供のモニタリングに関する研究．令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（研究代表者：黒田直明）」令和 6 年度分担研究報告書．pp40-50，2025.

6) 三宅美智：行動制限最小化に資する教育資材の作成．令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究（研究代表者：杉山直也）」．分担研究報告書．pp63-67，2025.

7) 三宅美智：行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発．令和 6 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））研究成果報告書，2025.

8) 羽澄 恵：睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明．令和 6 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））研究成果報告書，2025.

9) 羽澄 恵：COVID-19 感染後の予後に関連する要因の検討．令和 6 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：黒田直明）」令和 6 年度 分担研究報告書．2025.

10) 髙瀬顕功，奥村泰之，竹島 正，臼田謙太郎，黒田直明，西 大輔：精神医療の提供体制および実態把握に関する研究，NDB に関する報告．令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（研究代表者：黒田直明）」令和 6 年度分担研究報告書．pp51-73，2025.

(5) 翻訳

(6) その他

1) Shimizu-Motohashi Y, Furuno T, Usuda K, Kuroda N, Imai K, Sugiyama T, Iso H, Komaki H: The number of individuals with genetic neuromuscular disorders in Japan: a study using the National Database. 脳と発達 57(Suppl.)：S395，2025.

2) 杉山直也，大岡由佳，三宅美智，奈良麻結，石井美緒：トラウマインフォームドケア実践　ケーススタディ集　精神科医療における TIC　行動制限最小化の観点から．臨床心理学 25(4)：439-443，2025.

3) 三宅美智，深澤舞子，吉川隆博．精神障害当事者とともに考える行動制限最小化研修の作成と有効性の検討．日本精神保健看護学会学術集会・総会プログラム・抄録集 35：141，2025.

4) 三宅美智．身体拘束解除の取り組みと TIC　行動制限最小化プラットフォームの紹介．日本精神科救急学会学術総会プログラム・抄録集 33：66，2025.

5) 三宅美智，奈良麻結，吉川隆博，杉山直也：行動制限最小化活動―行動制限最小化プラットフォームの活用― 厚生労働科学研究より．精神科看護 52(12)：66-69，2025.

6) 片岡真由美，羽澄 恵，中下綾子，臼田謙太郎，岡崎絵美，三宅美智，神川ちあき，黒田直明．職場の心理的安全性と新型コロナウイルス感染症罹患後症状の関連．日本公衆衛生学会総会抄録集 84 回：748，2025.

7) 羽澄 恵，三宅美智，岡田隆志，森山葉子，神川ちあき，臼田謙太郎，片岡真由美，奈良麻結，中下綾子，山口創生，黒田直明．障がい当事者のスティグマ体験の測定尺度の翻訳と開発．日本公衆衛生学会総会抄録集 84 回：749，2025.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 黒田直明：2050 年の精神科医療体制　医療政策的観点から、精神科医療の将来設計：25 年後の精神科医療はどうなる！第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025. 6.19-21.
2) 黒田直明：市町村における「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築」にロジックモデルを活かす．ロジックモデルと指標を活用した医療福祉計画評価―取組例から見る定着への道筋―．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.
3) 小池純子，中西清晃，竹澤 翔，西 宏隆，遠田大輔，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，稲垣中，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，瀬戸秀文：公的医療機関による多職種アウトリーチの役割と機能 グループインタビュー調査の結果から．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
4) 竹澤 翔，小池純子，中西清晃，西 宏隆，遠田大輔，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，稲垣 中，瀬戸秀文：多職種アウトリーチを実践する公立精神病院の特徴登録理由のクラスタリング分析．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
5) 三宅美智，奈良麻結，吉川隆博：行動制限最小化プラットフォームを活用しませんか．第 50 回日本精神科看護協会学術集会，兵庫，2025.6.6-7.
6) 三宅美智：行動制限最小化プラットフォームの紹介，身体拘束解除の取り組みと TIC．第 33 回日本精神科救急学会学術集会，群馬，2025.10.16-17.
7) 小池純子，三宅美智：虐待防止―虐待通報の課題．第 33 回精神科看護管理研究会，福岡，2026.2.27.

(2) 一般演題

1) Hamasaki Y, Iwagami M, Taniguchi Y, Komiyama J, Ito Y, Watanabe T, Kuroda N, Suzuki A, TamiyaN: The effect of regular physician home visits on the prevention of hospitalization among older adults starting long-term care in Japan, Society for Epidemiological Research SER Conference 2025, Boston, 2025.6.10-13.
2) Itoh S, Komiyama J, Suzuki A, Kuroda N, Wu XV, Tamiya N: Association with deterioration of care-need levels among community-dwelling older adults: an interpretable machine learning approach. Intrinsic Capacity, Frailty and Sarcopenia Research Conference for Healthy Longevity, Washington D.C., 2026.3.10-12.
3) Shimizu-Motohashi Y, Furuno T, Usuda K, Kuroda N, Imai K, Sugiyama T, Iso H, Komaki H: The number of individuals with genetic neuromuscular disorders in Japan: a study using the National Database. 第 67 回日本小児神経学会，鳥取，2025.6.4-7.
4) Shimizu-Motohashi Y, Furuno T, Usuda K, Kuroda N, Imai K, Sugiyama T, Iso H, Komaki H, Epidemiological landscape of genetic neuromuscular disorders in Japan: a population-based study using the National Database, 23rd Asian and Oceanian Myology Centre Meeting, Online, 2025.11.5-7.
5) Kataoka M, Hazumi M, Nakashita A, Kitamura M, Usuda K, Okazaki E, Miyake M, Kamikawa C, Kuroda N: Trajectories of depressive symptoms among COVID-19 patients: a latent class analysis. The 36th Annual Scientific Meeting of the Japan Epidemiological Association & the 3rd Joint Scientific Meeting with the IEA Western Pacific Region, Nagasaki, 2026.1.28-30.
6) 中野寛也，岩上将夫，谷口雄大，小宮山 潤，黒田直明，鈴木 愛，田宮菜奈子：本邦高齢者における薬剤と非椎体骨折の関連：自己対照研究（ケースクロスオーバー法）．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.
7) 河村千登星，山岸良匡，岩上将夫，鈴木 愛，黒田直明，杉山雄大，田宮菜奈子：高血圧、脂質異常症、糖尿病治療の有無と乳がん検診未受診との関連．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，

2025.10.29-31.

8) 高橋秀人，森山葉子，小宮山 潤，松田智行，黒田直明，宇田和晃，浜崎曜子，鈴木 愛，田宮菜奈子：要介護認定審査のプロセス等を補助するシステム開発―認定審査委員からの指摘事項―．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.

9) 中野寛也，岩上将夫，谷口雄大，小宮山 潤，黒田直明，鈴木 愛，田宮 菜奈子：本邦高齢者における薬剤と非椎体骨折の関連：自己対照研究（ケースクロスオーバー法）．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.

10) 谷口雄大，鈴木 愛，河村千登星，黒田直明，田宮菜奈子：在留外国人と日本人のがん検診受診率の比較：茨城県つくば市における分析．第 40 回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2025.11.1-2.

11) 中西清晃，西 宏隆，竹澤 翔，遠田大輔，小池純子，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，稲垣 中，瀬戸秀文：公的精神科病院における多職種アウトリーチの利用者特性に基づくサブタイプと機能　グループインタビュー調査と機関特性調査結果の分析．第 33 回日本精神科救急学会学術集会，群馬，2025.10.16-17.

12) 臼田謙太郎，黒田直明：医療計画（精神疾患分野）指標例のストラクチャ・プロセス指標とアウトカム指標の検討．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.

13) 片岡真由美，羽澄 恵，中下綾子，臼田謙太郎，岡崎絵美，三宅美智，神川ちあき，黒田直明：職場の心理的安全性と新型コロナウイルス感染症罹患後症状の関連. 第 84 回日本公衆衛生学会総会，静岡，2025.10.29-31.

14) 片岡真由美，羽澄 恵，中下綾子，臼田謙太郎，岡崎絵美，三宅美智，神川ちあき，黒田直明：子ども期逆境体験のある新型コロナウイルス感染者における感染初期のソーシャルサポートと精神症状の関連．日本子ども虐待防止学会第 31 回学術集会，北海道，2025.11.15-16.

15) 三宅美智，深澤舞子，吉川隆博：精神障害当事者とともに考える行動制限最小化研修の作成と有効性の検討，第 35 回日本精神保健看護学会学術集会，石川，2025.5.31-6.1.

16) 神川ちあき，片岡真由美，臼田謙太郎，羽澄 恵，奈良麻結，山口創生，岡田隆志，森山葉子，黒田直明：障害福祉計画「にも包括」分野における障害福祉サービス利用者へのインタビュー調査．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.

17) 羽澄 恵，三宅美智，山口創生，岡田隆志，森山葉子，神川ちあき，臼田謙太郎，片岡真由美，奈良麻結，中下綾子，黒田直明：障がいを抱える者のスティグマ体験を測定する尺度の翻訳と開発．第 84 回日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29-31.

18) 竹島 正，立森久照，黒田直明，臼田謙太郎，河野稔明，後藤基行：630（ロクサン）調査の誕生とその後．第 28 回日本精神医学史学会，東京，2025.11.8-9.

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 黒田直明：日本公衆衛生学会代議員
- 黒田直明：日本公衆衛生学会 若手の活動に関する委員会 委員
- 羽澄 恵：日本睡眠学会評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

・ 黒田直明：日本公衆衛生学雑誌 査読委員

E．研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

8) 黒田直明：研究班からのご報告．精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業，都道府県等担当者・アドバイザー等合同会議．厚生労働省（オンライン），2026.2.2.

9) 三宅美智，奈良麻結：組織やチームで取り組む行動制限最小化．日本精神科看護協会，東京，2025.9.5.

10) 三宅美智：安全を守る技術 3．精神科病院における処遇と行動制限／行動制限を最小化するための方略．日本精神科看護協会，オンライン，2025.9.28.

11) 三宅美智：行動制限最小化研修．日本精神科看護協会宮城県支部，宮城，2025.10.4.

12) 三宅美智：組織やチームで取り組む行動制限最小化．埼玉，2026.2.3.

13) 三宅美智：静岡県行動制限最小化研修会．静岡，2026.2.16,18.

14) 三宅美智：行動制限最小化研修．東京，2026.2.20.

15) 三宅美智，小池純子，名雪和美：令和 7 年度精神科病院における虐待防止に関する研修会．新潟（オンライン），2026.3.18.

16) 三宅美智：対象理解とニーズの把握につなげる観察と記録．日本精神科看護協会，オンデマンド

17) 三宅美智：基礎から学ぶ看護過程．日本精神科看護協会，オンデマンド.

1) 西 大輔，宮本有紀，三宅美智：トラウマインフォームドケアの基本と実践．日本精神科看護協会，東京，2025.7.21.

F．その他

1) 黒田直明.（取材対応）療養所開所当時の医療カルテについて．NHK 佐賀，2025.11.12.

4. 薬物依存研究部

Ⅰ．研究部の概要

薬物依存研究部は下記のように 3 研究室体制となっている．

心理社会研究室

（1）薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること．

（2）薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること．

（3）薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること．

依存性薬物研究室

（1）薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること．

（2）依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること．

（3）中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること．

診断治療開発研究室

（1）薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること．

（2）薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること．

（3）薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること．

人員構成は，次のとおりである．

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：富山健一，診断治療開発研究室長：高野 歩，リサーチフェロー：水野聡美，客員研究員：成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学大学院人間総合科学学術院），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部），境 泉洋（徳島大学大学院），池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部），平田豊明（千葉県精神科医療センター），大嶋栄子（NPO 法人リカバリー），引土絵未（日本女子大学人間社会学部），村瀬華子（北里大学医療衛生学部），新海浩之（神奈川大学），川口貴子（福岡市精神保健福祉センター），引地和歌子（東京都監察医務院），舩田正彦（湘南医療大学薬学部），山田千佳（京都大学東南アジア地域研究研究所），Tooru Nemoto（Public Health Institute），大宮宗一郎（上越教育大学教育学部），佐久間寛之（さいがた医療センター），林 神奈（Simon Fraser University），藤城 聡（愛知県精神保健福祉センター），高田雅弘（摂南大学）科研費研究員：近藤あゆみ，喜多村真紀，新田慎一郎，加藤 隆，瓜生美智子，堤 史織，猪浦智史，片山宗紀，青木彩香，山田里奈，金澤由佳，梅村二葉，山本俊明，羽布津碧，礒島 学，外山 愛（7 月～），西村晃萌（12 月～） 併任研究員：今村扶美，川地拓，山田美紗子（以上，病院臨床心理室），沖田恭治（病院第二精神科），樋口早子（司法精神診療部），石井香織，瀬﨑浩平（以上，薬剤部），小砂哲太郎（精神リハビリテーション部）研究生：山本泰輔，宇佐美貴士，水野有紀，村上真紀，古市 亘，大淵拓真，熊倉陽介，飯田真子，荒木李香，鈴木祐人．

Ⅱ．研究活動

A．疫学的研究

1） 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

本研究は，保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら，保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する，「Voice Bridges Project 」である．平成 29 年 3 月から令和 7 年 12 月末までに 31 の精神保健福祉センターから総計 998 名の保護観察対象者が調査に参加した．1 年後追跡完了者は 487 名，2 年後の追跡完了者は 324 名，3 年後の追跡完了者は 218 名であった．追跡中の各調査期間における違法薬物再使用率は，3 か月～6 か月では 4.6%，9 か月～1 年では 4.9%，1 年 6 か月～2 年では 3.1%，2 年 6 か月～3 年では 6.0%であった．カプランマイヤー解析による 1 年経過時点の累積断薬継続率は約 91%，2 年経過時点の累積断薬継続率は約 84%で

あり，3 年経過時点の累積断薬継続率は約 78%であった．（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業 松本俊彦）

2） 薬物使用に関する全国住民調査（2025 年）

1995 年から隔年で続く全国住民調査の第 16 回として，2025 年に 15～64 歳の一般住民 5,000 人を対象に調査を実施し，3,156 人の有効回答を得た．違法薬物では，大麻の生涯経験率が 1.6%で最多と推定され，全国では約 141 万人に相当した．コカインは 2007 年以降で最も高い値となり，増加の可能性が示された一方，有機溶剤は有意に減少していた．覚醒剤，MDMA，ヘロイン，LSD はおおむね横ばいだった．医薬品では，精神安定薬，睡眠薬，市販薬の乱用経験も一定数認められたが，大きな有意変化はみられなかった．大麻の施用罪適用には強い賛成が多い一方，大麻由来医薬品には判断を保留する回答も目立った．（厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．嶋根卓也， 水野聡美， 猪浦智史， 松本俊彦）

3） 全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究

依存症専門医療機関を受診した市販薬使用障害患者 294 例を分析し，青少年（16～18 歳）と成人を比較した．その結果，青少年では女性，無職，有害な使用（F1x．1）が多く，F4・F8 の併存も目立った．乱用開始の背景には友人関係や学校でのトラブルが多く，期待する効果としては現実逃避や希死念慮への対処が挙げられた．青少年の特性を踏まえた支援プログラムの開発が求められる．（厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．嶋根卓也，宇佐美貴士， 松本俊彦）

4） ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究

ダルク利用者で併存障害を有する者は，女性が多く，受刑歴が多く，治療歴を有する者が多かった．1 年後には，就労状況や断薬の維持という点で不良な転帰を示しており，依存症の回復支援プログラムでは，こうした背景を持つ人々に特化した支援が必要であることが示唆された．また，ダルク利用者の 5 年生存率を算出したところ，生存率は 95.4%であり，死亡は 14 例認められた．死亡率は 60 歳以上の対象者で最も高かった．年齢および感染症の履歴は，死亡リスクの上昇と有意に関連していたが，一方で，断薬の維持は死亡リスクの低下と関連していた．（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業．嶋根卓也，水野聡美， 猪浦智史， 喜多村真紀， 松本俊彦）

5） 薬物使用と生活に関する全国高校生調査および飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査

2024 年に実施した全国の中高生を対象とする調査（8 万 8356 人）を統合し，再分析した結果，日本の中高生の違法薬物使用率は全体として低い一方，学年が上がるにつれて増加し，とくに中学 3 年から高校 1 年への移行期で大きく上昇していることが明らかとなった．予防教育はこの時期を重点対象とし，飲酒・喫煙，薬物への寛容的態度，入手しやすさの認識，断る力への働きかけが重要と示唆された．（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業．嶋根卓也，水野聡美， 猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦）（厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．嶋根卓也，水野聡美， 猪浦智史， 松本俊彦）

6） 大麻に関する海外の規制状況と社会問題：米国及び加国の現状

本研究では，米国各州における医療用大麻制度，成人向け大麻制度および産業用大麻規制の現状を整理・比較するとともに，嗜好用大麻合法化後の社会的影響について検討した．米国の医療用大麻制度 40 州および D．C．で運用されていた．各州における規制内容には大きな差異が認められ，適応症の範囲，所持量，摂取方法などは統一されていなかった．米国の成人向け大麻制度は，24 州および D．C．で運用され，年齢制限（21 歳以上）や使用場所の制限といった基本的枠組みに加え，一部の州においては，大麻含有食品の摂取に関連する健康被害の報告増加が指摘されていた．カナダでは 2018 年の施行以降，成人（18 歳以上）に対する一定制限下での大麻の所持・使用が認められており，本年度調査において大きな制度変更は確認されなかった．（厚労科研，富山健一，大谷暢子，舩田正彦）

B．臨床研究

1） 処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究

本研究は，医薬品使用症患者に対する依存症集団療法の効果を明らかにする目的から，2024 年 5 月～2025 年 4 月までの 1 年間に，国立精神・神経医療研究センター病院，埼玉県立精神医療センター，昭和大学烏山病院に初診した覚醒剤，大麻，処方薬，市販薬のいずれかの物質の使用症患者のうち，依存症集団療法に参加し者を対象として 24 週間の追跡を行い，その生活機能と治療継続状況，ならびに，薬物使用日数および危険な使用の有無に関する情報収集を行い，その結果を「医薬品群」と「違法薬物群」の 2 群で比較した．その結果，違法薬物群では，24 週後における薬物使用および危険な薬物使用が有意に減少し，一方，医薬品群では，24 週後における薬物使用日数と危険な薬物使用が有意に減少するというものであった．以上により，依存症集団療法は医薬品使用症患者に対しても効果的である可能性が示唆された．厚生労働科学研究費補助金：障害者政策総合研究事業， 松本俊彦，高野歩， 水野聡美，喜多村真紀）

2） 大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究

薬局薬剤師を対象としたオンライン型ゲートキーパートレーニングの効果を RCT で検証した．全モジュール受講群は，一部受講群に比べ，知識と自己効力感が大きく向上し，薬物使用に対するスティグマも有意に低下した．これらの効果は 6 か月後まで維持され，一部受講群でも一定の改善がみられた．低コストで標準化しやすいオンライン研修は，薬剤師を市販薬オーバードーズ予防に組み込む有望な方法と考えられた．（厚生労働科学研究費補助金：障害者政策総合研究事業， 嶋根卓也，片山宗紀，松本俊彦）

3） 日本におけるハームリダクションの導入・普及に関する研究

低リスクギャンブル研究におけるガイドライン（Lower Risk Gambling Guideline）や限度の定義と関連アウトカムをマッピングし，今後の一次予防施策やガイドライン開発，研究課題の精緻化に資する基盤を提示することを目的としたスコーピングレビューを行った．Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses extension for Scoping Reviews（PRISMA-ScR）に準拠してレビューを実施した．検索条件でヒットした 3,371 件から最終的に 18 件がレビューに組み入れられ，低リスクギャンブルにおける研究の実態，限度の検討，および関連アウトカムについてマッピングし，傾向を明らかにした．低リスクギャンブルの限度に関する研究は主にカナダ，オーストラリア，フィンランドに集中していた．頻度・支出・所得比・種目数などのギャンブル指標に基づく限度設定と，限度超過に伴う害の増加が概ね一貫して示された．（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業．高野 歩）

4） 飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発

セルフモニタリングとウェアラブル活動量計（Fitbit）によって日常生活における飲酒・薬物使用状況等のデータをリアルタイムに収集するプログラムを開発し，対象者の薬物使用を予測するモデルを構築することを目的に，研究対象者のリクルートを実施した．対象者は，過去 3 ヶ月以内に覚醒剤・大麻使用があり，かつ，健康被害リスクを伴う覚醒剤・大麻使用がある人とし，4 週間 Fitbit を装着してもらい，1 日 3 回セルフモニタリングアプリに薬物使用状況等を入力してもらった．主要な結果を英語論文として国際誌に投稿し，掲載された．（文部科学省：2023 年度 基盤研究(B)．高野 歩）

5） 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

精神科病院薬物依存症外来においてワークブックを用いた物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラム（SeRA）を実施し，効果評価のための研究を実施中であり，国立精神・神経医療研究センター病院および大阪精神医療センターにおいて，女性患者 21 名のリクルートを得た．また，薬物問題をもつ女性の治療と支援に携わる医療従事者研修と通年 3 回のオンラインの勉強会を実施し，それぞれ実人数 63 名と延べ人数 87 名の参加があった．2026 年 2 月現在，全国で 12 箇所の医療機関が SeRA のワークブックを活用した治療グループの運営を開始しており，4 箇所がグループの開始に向けた準備を行っていることを確認している．（厚生労働省依存症に関する調査研究事業．近藤あゆみ，大嶋栄子）

C．基礎研究

1） 濫用等のおそれのある医薬品の追加候補となる薬剤に関する文献的調査

本研究では，デキストロメトルファン，アリルイソプロピルアセチル尿素及びジフェンヒドラミンについて，主成分の薬理作用について培養細胞を用いて解析し，乱用実態については文献調査を実施し，最新の情報をまとめた．デキストロメトルファンは（代謝物も含め）モノアミン再取り込み阻害作用が示唆され，CYP2D6 多型や併用薬で症状の個人差が生じ得る．ジフェンヒドラミンは H1/ムスカリン拮抗（＋副次的 D2 拮抗）を通じ鎮静・意識変容に関与し，海外では若年層（特に思春期女性）の自殺関連事例増加が課題となっていた．アリルイソプロピルアセチル尿素については，GABA 受容体への直接作用は認められず機序未解明である．（厚労科研，富山健一，石井香織，羽布津碧）

2） 危険ドラッグの中枢作用と薬物依存性の解析

本年度は，1 種類の大麻成分，5 種類の新規合成オピオイド，1 種類の合成カンナビノイド，1 種類の麻酔薬の文献調査，薬理学的特性，運動活性および薬物依存性の解析を行った．大麻成分と合成カンナビノイドは，カンナビノイド CB1 受容体を介して薬理作用を発現し，新規合成オピオイドは，オピオイド μ 受容体を介して中枢興奮作用を示した．麻酔薬については我が国での濫用実態と文献調査の結果，指定薬物相当と評価された．（厚生労働省：危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業．研究代表者，富山健一）

3） ヒト iPS 細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価

ヒト由来ドパミン神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用評価系の構築を目的として，神経細胞毒性およびモノアミン神経系機能を指標とした in vitro 評価法の検討を行った．その結果，ヒト iPS 細胞由来ドパミン神経において，覚醒剤 METH および合成カチノンは濃度依存的な神経細胞毒性を示すことが確認された．これら薬物は DAT 取込み阻害作用を示し，METH ではドパミン遊離の増加が認められた．一方，合成カチノンではドパミン遊離は認められず，薬物作用様式の違いが確認された．ラット由来 raphe 領域培養を用いた評価により，セロトニン神経を含有する培養系が構築され，SERT 阻害薬によるセロトニン応答が確認された．（厚労科研，富山健一）

4） 活性未知危険ドラッグ成分の薬理学的解析

新規合成オピオイドである nitazene 系化合物 Isotonitazene の代謝生成物について薬理作用を評価した．N-脱エチル体は強力な薬理活性を保持しており，水酸化体である 4'-hydroxy nitazene および ニトロ基還元体である 5-aminoisotonitazene についても，活性は低下するものの，いずれも μ オピオイド受容体アゴニスト活性を有していることが確認された．これらの結果から，nitazene 系化合物は活性代謝物を生成することが明らかとなった．一方で，N-脱アルキル化および O-脱アルキル化の両反応を経た代謝物では，μ オピオイド受容体活性ならびにマウス行動に対する作用が著しく低下することが確認された．（厚労科研，富山健一，辻厳一郎）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・市民向け講演会：（Ⅳ．研究業績 C．講演 参照）　・報道：（Ⅳ．研究業績 F．その他 参照）

(2) 専門教育面における貢献

・研修会・研究会

第 38 回薬物依存臨床医師研修，第 26 回薬物依存臨床看護等研修，第 17 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，2025 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修，依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））令和 7 年度（第 3 回）薬物問題をもつ女性の治療と支援に携わる医療従事者研修，令和 7 年度市販薬の過量服薬や自傷を繰り返す若者たちの支援研修

・大学

国立大学法人東京科学大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人東京大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（嶋根卓也），東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也），昭和大学医学部薬理学兼任講師（嶋根卓也），東京大学大学院医学系研究科客員研究員（高野 歩），国立大学法人浜松医科大学外部講師（高野 歩）

・その他

日本アルコール・薬物医学会雑誌編集委員会（高野 歩，嶋根卓也）

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命科学研究所量子生命構造グループ構造生物学チーム協力研究員（富山健一）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦），厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦），文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦），厚生労働省精神・障害保健課 「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦），文部科学省初等中等教育局「児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議」（松本俊彦），厚生労働省「依存症対策全国センター」事務局長（嶋根卓也），厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副会長（嶋根卓也），厚生労働省「依存症の理解を深めるための普及啓発事業」企画委員（嶋根卓也），厚生労働省薬事審議会「医薬品等安全対策部会」（嶋根卓也）厚生労働省「依存性薬物検討会」参考人（富山健一），法務省矯正研修所「効果検証業務に係わる助言指導）」（近藤あゆみ）

・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦），独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦），福岡県「少年用大麻再乱用防止プログラムに係わる監査及び補正業務」（嶋根卓也），国立研究開発法人国立がん研究センター「各種医療従事者向け研修事業支援業務」技術評価委員会（嶋根卓也），国立研究開発法人国立がん研究センター「各種医療従事者向け研修事業支援業務」技術評価委員会（嶋根卓也），埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会（富山健一）

・研究成果の行政貢献

厚生科学審議会（医薬品医療機器制度部会)の資料として市販薬乱用に関する研究成果が活用された．（嶋根卓也）

(5) センター内における臨床的活動

毎週月・木・金曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに，デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している．（松本俊彦，嶋根卓也，高野 歩）

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Matsumoto T : Characteristics linked to mortality risk among individuals with drug use disorders enrolled in drug rehabilitation facilities in Japan. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2025;4:e70112. https://doi.org/10.1002/pcn5.70112

2) Masataka Y, Akahoshi Y, Katayama M, Umemura F, Miki N, Nakazawa R, Shibata K, Yoshida C, Mikami A, Matsumoto T, Akino K, Takumi I (2025) How has Japan's Cannabis Control Act been amended?, Cannabis and Cannabinoid Research 00:0, 000–000,

DOI:10.1089/can.2025.0006.

3) Masataka Y, Katayama M, Umemura F, Sugiyama T, Miki N, Akahoshi Y, Oka C, Asahi T, Matsumori T, Takumi I , Murata H, Matsumoto T : Revisiting the Gateway Drug Hypothesis for Cannabis: A Secondary Analysis of a Nationwide Survey Among Community Users in Japan .Neuropsychopharmacology Reports, https://doi.org/10.1002/npr2.70033

4) Ofuchi1 T, Shimane T, Matsumoto T: Spirituality and Continued Abstinence Among Methamphetamine Users in a 12-Step Program in Japan: Data From a Cohort Study of Residential Substance Use Treatment. Neuropsychopharmacology Reports, https://doi.org/10.1002/npr2.70032

5) Hirohashi D, Masataka Y, Miki N, Akahoshi Y , Takumi I Matsumoto T : Drug Science, Policy and Law, 11: 1–9.

6) Matsumoto T, Usami T, Nishimura A, Higuchi S, Okita K, Shimane T : Clinical Characteristics of Patients With Cannabis-Related Mental Disorders and an Examination of Factors Influencing Their Access to Medical and Nonmedical Resources: Comparison of Methamphetamine-Related Mental Disorders. Neuropsychopharmacology Reports, 2025; 45:e70051 https://doi.org/10.1002/npr2.70051

7) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Matsumoto T. Co-occurring mental and substance use disorders among residents of Drug Addiction Rehabilitation Centers (DARCs) in Japan: characterizing dual-diagnosis profiles. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2025;4:e70196. https://doi.org/10.1002/pcn5.70196

8) Matsumoto T, Usami T, Nishimura A, Higuchi S, Okita K, Shimane T. Deliberate self-harm in adolescents with OTC-related psychiatric disorders: a study of prevalence and associated factors. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2025;4:e70271. https://doi.org/10.1002/pcn5.70271

9) Usami T, Matsumoto T, Okita K, Nakao T, Shimane T. Clinical characteristics and treatment resource utilization among patients with substance use disorders: a comparative study of individuals who misuse pharmaceuticals and use illegal drugs. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2025;0:e70277. https://doi.org/10.1002/pcn5.70277

10) Ide S, Nishitani Y, Sumitani M, Minami M, Isa T, Iseki M, Ohkura M, Okamoto H, Kikuchi T, Sekino Y, Takahashi H, Takeuchi K, Nitta A, Honjo T, Matsumoto H, Miyakawa T, Murai T, Matsumoto T, Nakagome K, Ikeda K : Addiction-related problems in Japan: A regional perspective. Addiction. 2025. https://doi.org/10.1111/add.70307

11) Masataka Y, Matsumoto T : In Response to “Concerns Regarding Masataka et al.'s‘Revisiting the Gateway Drug Hypothesis for Cannabis”. Neuropsychopharmacology Reports, 2026; 46:e70093 https://doi.org/10.1002/npr2.70093

12) Tanibuchi Y, Omiya S, Usami T, Shimane T, Matsumoto T : Clinical Characteristics of Over-The-Counter Drug Misusers in Psychiatric Practice in Japan: Comparison Between Codeine Misusers and Dextromethorphan Misusers. Neuropsychopharmacology Reports, 2026; 46:e70100 https://doi.org/10.1002/npr2.70100

13) Takano A, Okuda K, Sese J, Ono K, Matsumoto T : Individual Variability in Physiological Responses and Psychological Conditions Associated With Methamphetamine Use: Pilot Ecological Momentary Assessment Study Using a Wearable Device and Self-Monitoring Mobile App. JMIR Form Res 2026;10:e73790 URL: https://formative.jmir.org/2026/1/e73790 doi: 10.2196/73790

14) https://doi.org/10.1002/npr2.70101Katayama M, Shimane T, Shirakawa N, Sugiura K, Inada K, Konishi J, Sakurai Y, Kobara K, Fujishiro S, Matsumoto T : Psychometric Properties of the Drug Stigma Scale Among Community Pharmacists Concerning Individuals Who Use

Over-The-Counter Drugs. Neuropsychopharmacology Reports, 2026; 46:e70101

15) Omiya S, Tanibuchi Y, Usami T, Shimane T, Matsumoto T：Clinical Characteristics of Over-The-Counter Drug Misusers in Psychiatric Practice in Japan: Comparison by Type of Drug Misused for the First Time.Neuropsychopharmacology Reports, 2026; 46:e70108 1 of 9 https://doi.org/10.1002/npr2.70108

16) Omiya S, Shimane T, Takagishi Y, Kondo A, Kobayashi M, Takahashi M, Otomo M, Nakazawa A, Matsumoto T. Gender Differences in the Effects of Trust on Substance Abuse Severity Among Incarcerated Stimulant Offenders in Japan. Neuropsychopharmacology Reports. 45(1): e12517, 2025.doi:10.1002/npr2.12517

17) Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Kitagaki K, Tominaga K, Matsumoto T. Prevalence of Over-the-Counter Drug Abuse and Associated Psychosocial Factors Among High School Students: A Nationwide Cross-Sectional Survey in Japan. Neuropsychopharmacology Reports. 45(2): e70030, 2025. doi:10.1002/npr2.70030

18) Kohara S, Kamijo Y, Takai M, Kyan R, Hasegawa E, Shimane T. Use of Extracorporeal Therapies to Treat Severe Caffeine Poisoning. Hemodial Int. 30(1): 73-79, 2026. doi: 10.1111/hdi.70002.

19) Mizuno S, Inoura S, Matsumoto T, Kitagaki K, Koide A, Takehara K, Shimane T. Trends in lifetime controlled drug use and associated risk factors among Japanese Junior High School Students: Findings from Nationwide Surveys, 2016-2024. PCN reports 4(4): e70241, 2025. doi: 10.1002/pcn5.70241. eCollection

20) Tsutsumi S: Philosophical Diversity in 12-Step and Alternative Mutual Help Groups for Alcohol Use Disorder: Understanding Recovery Through the Reflexive Self in Late Modernity. Alcoholism Treatment Quarterly, 2025, 43.4: 630-641.

21) 池田朋広，福島ショーンパトリック，平山晶一，白根佐知子，江島智子，高木のり子，松本俊彦：薬物依存症回復支援施設におけるリカバリー志向の支援に関する考察－複数の支援プログラムを活用した治療共同体モデルによる地域支援実践－．精神科治療学 41(2) ： 207-216，2026.

(2) 総説

1) 松本俊彦：現代カルチャーと依存症臨床の現在．精神医学 67(4) ： 449-456，2025.

2) 松本俊彦：市販薬オーバードーズ問題は大人たちに何を訴えているのか？－自傷行為と自殺との関係－．子ども学 13 ： 139-159，2025.

3) 松本俊彦：依存症臨床における「ベンゾ掃除」のやり方－ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用症の治療－．精神科治療学 40(5) ： 527-532，2025.

4) 松本俊彦：今あらためて問う，「アディクションとは何か？」．精神療法 増刊第 12 号 アディクション支援のフロントライン：7-12，2025.

5) 松本俊彦：わが国の大麻政策の課題と大麻使用症治療の実際．精神療法 増刊第 12 号 アディクション支援のフロントライン：189-195，2025.

6) 宇佐美貴士，松本俊彦：ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用症の治療．精神療法 増刊第 12 号 アディクション支援のフロントライン：198-205，2025.

7) 松本俊彦：精神科臨床現場における市販薬使用症の実態．治療 総合診療を語り明かす 107(8) 72-76，2025.

8) 松本俊彦：薬物規制法と地域精神保健福祉的支援－司法と地域を結ぶ架け橋「Voice Bridge Project」の試み．医学のあゆみ 294（3） ： 268-272，2025.

9) 松本俊彦：子どもの市販薬乱用の現状と対策．小児内科 57(7) ： 960-963，2025.

10) 松本俊彦：市販薬オーバードーズについて．プライマリケア 10(4) ： 58-60，2025.

11) 松本俊彦：医師の薬物依存症. Anet 29(3) ： 7-10，2025.

12) 松本俊彦：物質依存とはーその概念と疫学ー．診断と治療 113(12) ： 1364-1368，2025.
13) 松本俊彦：子どもの自殺総論ー最近の動向と注目すべきトピックー．子どもの虐待とネグレクト 27(3) ： 291-298，2025.
14) 松本俊彦，今村扶美：第 2 章 主な疾患における精神療法 9. 依存症 アディクション．精神療法・心理療法マニュアル，134-139，2025.
15) 松本俊彦：特集＊眠い 身近な薬物と眠気．ユリイカ 58(3) ： 122-131，2026.
16) 松本俊彦：薬物規制法と地域精神保健福祉的支援ー司法と地域を結ぶ架け橋「Voice Bridge Project」の試み．別冊 医学のあゆみ ： 64-68，2026.
17) 松本俊彦：オーバードーズ：薬剤師が子どもたちに接するときの考え方．月間薬事 68(4) ： 88-91，2026.
18) 嶋根卓也：市販薬の不適切使用に対して薬局薬剤師にできること．治療 107(8)：88-92, 南山堂, 2025.
19) 猪浦智史，嶋根卓也：タイ王国における薬物乱用防止教育の特徴:アジア諸国で初めて大麻を合法化した国から学べること，日本アルコール・薬物医学会雑誌 60(2)：100-110,2025.
20) 嶋根卓也，喜多村真紀：市販薬のオーバードーズに隠されたメッセージ. 月刊薬事 68(4)：92-96, 2026.
21) 高野 歩：刑事司法と地域精神保健をつなぐ地域支援システム. 精神療法 増刊第 12 号 (12) 183-188. 2025.
22) 近藤あゆみ：【トラウマインフォームドケア】トラウマインフォームドケア実践　ケーススタディ集　女性のためのリカバリー・プログラム SeRA(Seeking to Recover from Addiction)　アディクションとトラウマとの深い関係を紐解く．臨床心理学 25 巻 4 号，449-453，2025.
23) 近藤あゆみ：【アディクション支援のフロントライン】アディクションに対する心理的社会支援総論　さまざまな心理療法　女性のためのリカバリー・プログラム SeRA(Seeking to Recover from Addiction)．精神療法増刊 12 ，59-64，2025.
24) 尾無 徹，畠山陽介，川原恭一，澤田彩華，猪浦 智史：内発的動機づけ尺度（Intrinsic Motivation Inventory）の日本語版作成と新任期保健師への適用可能性の検討．日本公衆衛生看護学会誌，14(2)：45-53,2025.

(3) 著書

1) 松本俊彦：オーバードーズする子どもたち～なぜ「助けて」が言えないのか～．合同出版，東京，pp1-133，2025.
2) 松本俊彦：第 2 章-1 何事も修行だと受け入れる力 ”バカよ 医学部へ来い”. 医良戦略 2040 PART Ⅱ 熱意を理性でドライブせよ，ロギカ書房，東京，pp182-213，2025.
3) 松本俊彦：人生を生き延びるために．生きるためのブックガイド，岩波書店，東京，pp2-8，2025.
4) 松本俊彦：第 2 章各論 9 アディクションと診断エラー．失敗から学ぶ 小児神経診断エラー学，東京，pp110-116，2025.
5) 松本俊彦：自助グループはハームリダクションされた宗教!?．自閉症スペクトラム症の私は、いかにこの世界を生きているか，金剛出版，東京，pp139-153，2025.
6) 松本俊彦：各論 21 物質使用症又は嗜癖行動症群 2 精神作用物質．日本精神神経学会 精神科専門医テキスト，東京，pp550-564，2025.
7) カール・L・ハート著，松本俊彦監修，片山宗紀訳：薬物戦争の終焉. みすず書房，pp1-315，2025.
8) 編集幹事 松本俊彦：第 2 特集 市販薬のオーバードーズ 治療 総合診療を語り明かす．南山堂，東京，pp72-100，2025.
9) 松本俊彦【監修】 山本彩，熊村彩有里【編】 ：CRAFT がわかる！使える！．金剛出版，東京，pp1-182，2025.
10) 松本俊彦【監修】：身近な危険 オーバードーズと依存症 1 市販薬・エナジードリンクのリスク．汐文社，東京，pp1-39，2025.

11) 松本俊彦【監修】: 身近な危険 オーバードーズと依存症 2 オーバードーズ ハマるのはなぜ？. 汐文社，東京，pp1-39，2026.
12) 松本俊彦【監修】: 10 代の健康ガイド まんがで学ぶ 依存. 保育社，大阪，pp1-143，2026.
13) 松本俊彦【監修】: 身近な危険 オーバードーズと依存症 3 スマホ依存・ダイエット・違法薬物. 汐文社，東京，pp1-39，2026.
14) 松本俊彦 : 第 6 章 回復を支える 目標設定と治療目標 物資依存症の支援. 必携 精神医療保健福祉キーワード辞典，合同出版，東京，pp127-134，2026.
15) 高野 歩 : CRAFT がわかる！使える！物質使用症・ひきこもり・発達障がいのある人の家族支援 (担当:分担執筆，範囲:CRAFT の有効性 物質依存･行動嗜癖に関する研究). 金剛出版, 東京, 2025.

(4) 研究報告書

1) 松本俊彦，成瀬暢也，常岡俊昭，沖田恭治，西村晃萌，宇佐美貴士，谷渕由布子，大宮宗一郎，高野 歩，水野聡美，嶋根卓也 : 処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究. 令和 7 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究（研究代表者 松本俊彦）総括・分担研究報告書 : pp7-24，2026.
2) 松本俊彦，宇佐美貴士，熊倉陽介，高野 歩，金澤由佳，堤 史織，羽布津碧 : 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 厚生労働省依存症に関する調査研究事業費補助金 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究（研究責任者 松本俊彦）研究報告書 : pp1-52，2026.
3) 嶋根卓也，水野聡美，猪浦智史 : 薬物使用に関する全国住民調査（2025 年）. 令和 7 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究（研究代表者 : 嶋根卓也)」総括・分担研究報告書. 2026.
4) 嶋根卓也，宇佐美貴士，松本俊彦 : 全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究. 令和 7 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究（研究代表者 : 嶋根卓也)」総括・分担研究報告書. 2026.
5) 嶋根卓也，片山宗紀，榊原幹夫 : 大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究. 令和 7 年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究（研究代表者 : 松本俊彦)」総括・分担研究報告書. 2026.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 松本俊彦 : 本を読む「子どもの自殺はなぜ増え続けているのか」渋井哲也著 : 青春と読書 60(6) : 44，2025.
2) 松本俊彦 : 書評「幻覚剤と精神医学の最前線」デヴィット・ナット著 鈴木ファストアーベント理恵訳. 心と社会 56(2) : 126-128，2025.
3) 松本俊彦 : 書評「臨床中毒学 第 2 版 上條吉人著」精神医学 67(2) : 247，2025.
4) 松本俊彦 : 人はどうして依存症になるのか？. 精神科 Resident 6(2) : 19-20，2025.
5) 松本俊彦 : 書評「歌舞伎町に沼る若者たちー搾取と依存の構造ー」佐々木チワワ著. 心と社会 56(3) : 110，2025.
6) 松本俊彦 :「猛犬」に怯むことなく声をかけてくれた森さんへ. 森美千代走る 追悼文集 : 152-155，2025.
7) 松本俊彦 : 解説「地下鉄駅という象徴的空間」. 地下鉄駅 : 431-441，2025.
8) 松本俊彦 : 若者の自傷行為と市販薬乱用. こころの健康 40(2) : 7-33，2025.

9) 松本俊彦：【特別寄稿】死と再生の場としてのクワイエットルーム．クワイエットルームにようこそ The Musical ： 52，2026.
10) 嶋根卓也：若者のオーバードーズ　何が起きているのか．日経ドラッグインフォメーション，日経 BP5 月号 25-28，2025.05.
11) 嶋根卓也：中学生の市販薬乱用，５５人に１人が経験．精神・神経医療研究センター嶋根氏らが推計．PHARMACY NEWSBREAK 2861 号: 5-6，株式会社じほう，2025.6.9.
12) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援～「助けて」が言えない子どもたち～．富士五湖ダルク報 No.39:1-2，一般社団法人富士五湖ダルク，2025.6.2.
13) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援～「ダメ」と言わない予防教育のススメ～．おおさかがくやく 39 号，大阪府薬剤師会学校薬剤師会発行，2025.
14) 北垣邦彦，嶋根卓也，松本達朗，鈴木貴晃，中村慎也：保護者向け薬物乱用防止パンフレット「薬物乱用 悪影響を学ぶ　子どもを守る　相談先を知る」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会，2026.2.
15) 嶋根卓也：市販薬オーバードーズの実態と対応のポイント．武田薬品工業株式会社 医療関係者向け情報サイト 小児医療定期情報誌 そんりーさ Vol.37:02-04，2026.3.
16) 堤 史織：【論考】「ベックのリスク社会論からみた薬物問題 —再帰的近代化を求めて—」『余白』vol.3（東京科学大学中島岳志研究室）, pp.47-53，2025.9.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 松本俊彦：【教育講演 5】オーバードーズの現状と対応．第 128 回日本小児科学会学術集会，愛知，2025.4.18.
2) 松本俊彦：【ワークショップ】自傷・オーバードーズ、薬物依存の理解と対応．日本学生相談学会第 43 回大会，愛知，2025.5.10.
3) 松本俊彦：【特別企画 2】刑務所出所者に対してどう情報提供を行うか？～保護観察から地域精神保健福祉への橋渡しの試みから～．第 61 回日本肝臓学会，東京，2025.6.6.
4) 松本俊彦：【ワークショップ 6（広報委員会）】精神科医によるソーシャルメディア配信のトリセツー誤解を解き、正しい知識を届けるためにー．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.20.
5) 松本俊彦：【シンポジウム 14】子どものアディクション～自傷とオーバードーズを中心に～．第 47 回日本アルコール関連問題学会 熊本大会，熊本，2025.9.5.
6) 松本俊彦：【特別講演 2】若年女性の自殺予防～市販薬のオーバードーズ．第 49 回日本自殺予防学会総会，島根，2025.9.7.
7) 松本俊彦：【特別講演】自分を傷つけずにはいられない！～自傷とオーバードーズの理解と対応．第 43 回日本小児心身医学会学術集会，東京，2025.9.19.
8) 松本俊彦：【シンポジウム 1】社会に発信する精神科診断はどうあるべきか．第 44 回日本精神科診断学会，大阪，2025.10.4.
9) 松本俊彦：【教育講演 3】ハームリダクションの理解と臨床への応用～依存症グレーゾーンの支援実績にどう生かすか？．第 44 回日本精神科診断学会，大阪，2025.10.4.
10) 松本俊彦：【スポンサードシンポジウム 1】刑務所出所者に対してどう情報提供を行うか？～保護観察から地域精神保健福祉への橋渡しの試みから～．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.
11) 宇佐美貴士，松本俊彦，嶋根卓也：全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究．【シンポジウム 9】「みんなで考えようオーバードーズ対策：基礎・臨床・予防・販売それぞれの観点から」．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東

京，2025.10.24.

12) 嶋根卓也，片山宗紀，榊原幹夫，松本俊彦：市販薬の販売に従事する薬剤師向けゲートキーパー研修プログラムの開発について．シンポジウム 9「みんなで考えようオーバードーズ対策：基礎・臨床・予防・販売それぞれの観点から」．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

13) 松本俊彦：【特別講演 4】市販薬オーバードーズの実態と対策の課題～薬剤師にできることは何か？～．第 58 回日本薬剤師会学術大会，京都，2025.10.13.

14) 松本俊彦：【日本専門医機構認定共通講習　必修 A　医療倫理】人はなぜ依存症になるのか～コネクションの対義語としてアディクション．日本蘇生学会第 44 回大会，栃木，2025.11.22.

15) 松本俊彦：【特別講演Ⅱ】若者における市販薬使用症の現在～その実態と対応の課題．第 77 回九州精神神経学会 第 70 回九州精神医療学会，佐賀，2025.11.28.

16) 松本俊彦：【教育講演】市販薬のオーバードーズの理解と援助．第 46 回日本臨床薬理学会学術総会，東京，2025.12.5.

17) 松本俊彦：【教育講演 4】雑談が人を救うことがある～アディクション臨床から考えたこと～．日本こころの安全とケア学会，長野，2025.12.21.

18) 松本俊彦：【教育講演 3】依存症と人類～精神作用物質の栄枯盛衰. 第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.6.

19) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに関する理解と予防教育：古典的おどし教育からの脱却．シンポジウム 2 第 33 回日本健康教育学会学術大会，東京，2025.7.6.

20) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに関わる情報提供のあり方-ダメと言わない支援のススメ-．パネルディスカッション 1 医薬品中毒と情報，第 47 回日本中毒学会総会，東京，2025.7.26.

21) 喜多村 真紀，高田 雅弘，江藤 不二子，首藤 誠，嶋根卓也：ソーシャル・ネットワーキング・サービスを情報源とするテキストマイニングおよび 予防啓発に関する研究, シンポジウム 9「みんなで考えようオーバードーズ対策：基礎・臨床・予防・販売それぞれの観点から」．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

22) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と対応．江戸川医学会，東京，2025.11.16.

23) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに関する理解と予防教育．古典的おどし教育からの脱却．令和 7 年度全国学校保健・安全研究大会，神奈川，2025.11.21.

24) 宇佐美 貴士，松本 俊彦，嶋根卓也：市販薬使用症を理解する 臨床像と不適切使用される市販薬の特徴とは？第 37 回九州アルコール関連問題学会 北九州大会，福岡，2026.3.13-14.

25) 高野 歩: スマホアプリとウェアラブルデバイスを用いた Ecological Momentary Assessment. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.23

26) 増満 誠, 松枝美智子, 光永憲香, 脇崎裕子, 植田 愛, 倉持裕子, 高野 歩, 中本 亮, 池田 智, 児玉ゆう子, 安保寛明：患者や家族の尊厳が守れない状況における看護師の Moral Injury への備え．第 45 回日本看護科学学会学術集会，新潟，2025.12.6.

(2) 一般演題

1) Takano A, Mizuno S, Katayama M, Tsutsumi S, Shinden S, Ono K, Yasuma N, Shiozawa T, Shimane T, Matsumoto T. Identifying High-Priority Elements of Harm Reduction Practices in Japan: A Delphi Study, The Australasian Professional Society on Alcohol and other Drugs (APSAD2025)，Shimane, 2025.10.5

2) Ochi M, Ishitsuka K, Matsubara K, Hoshino E, Shimane T, Mizuno S, Takehara K: Alcohol, Tobacco, and Menstrual Health Trends in Japan's Adolescents: 2024 Nationwide School Survey. The 36th Annual Scientific Meeting of the Japan Epidemiological Association & The 3rd Joint Scientific Meeting with the IEA Western Pacific Region, Nagasaki, 2026.1.29.

3) Takano A, Mizuno S, Katayama M, Tsutsumi S, Shinden S, Ono K, Yasuma N, Shiozawa T,

Shimane T, Matsumoto T： Identifying High-Priority Elements of Harm Reduction Practices in Japan: A Delphi Study. Australasian Professional Society on Alcohol and Other Drugs Conference 2025, Sydney, Australia, 2025.11.10

4) Takano A, Kaneko K, Hamamura T, Ono K, Tokushige M, Hiratani N, Ito M: Validity and Reliability of the Japanese Version of the Parental Internet Gaming Disorder Scale (PIGDS). 10th International Conference on Behavioral Addictions Nantes, France, 2025.7.7

5) Ono K, Umemura F, Okuda K, Sese J, Matsumoto T, Takano A: Changes in drinking patterns by different medications for alcohol dependence: a cohort study using a database of medical claims and health checkups. 48th Annual RSA Scientific Meeting/ISBRA Congress 2025 New Orleans, USA, 2025.6.24

6) Takano A, Ono S, Yamana H, Matsui H, Yasunaga H: Changes in drinking patterns by different medications for alcohol dependence: a cohort study using a database of medical claims and health checkups. 48th Annual RSA Scientific Meeting/ISBRA Congress 2025, New Orleans, USA, 2025.6.24

7) Takano A, Mizuno S, Katayama M, Tsutsumi S, Shinden S, Ono K, Yasuma N, Shiozawa T, Shimane T, Matsumoto T：Key Elements of Harm Reduction Practices: Findings from Focus Group Interviews and Literature Review. The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 87th Annual Scientific Meeting New Orleans, USA, 2025.6.16

8) 宇佐美貴士，松本俊彦，嶋根卓也：デキストロメトルファンにおける市販薬関連精神障害の特徴：依存症専門医療機関に対する市販薬調査より．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

9) 高野 歩，水野聡美，片山宗紀，堤 史織，新田慎一郎，大野昴紀，安間尚徳，塩澤拓亮，嶋根卓也，松本俊彦：ハームリダクション実践における重要な要素：フォーカスグループインタビューと文献レビューによる質的研究．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

10) 高野 歩，水野聡美，片山宗紀，堤 史織，新田慎一郎，大野昴紀，安間尚徳，塩澤拓亮，嶋根卓也，松本俊彦：ハームリダクション実践における重要な要素：デルファイ調査．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

11) 正高佑志，片山宗紀，太組一朗，松本俊彦：大麻はゲートウェイドラッグなのか？：市中大麻使用者を対象とした大規模オンライン調査二次解析．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

12) 水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦：日本の薬物依存症回復施設利用者における 5 年間の死亡率と死亡原因の分析：DARC 追っかけ調査の結果から．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

13) 堤 史織，高野 歩，宇佐美貴士，熊倉陽介，金澤由佳，武林 亨，杉山大典，松本俊彦：薬物関連の服役経験をもつ人々の出所後における困りごとと主観的な生活評価の関連：時期・性別による特徴．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

14) 嶋根卓也，宇佐美貴士，松本俊彦：市販薬の乱用にはブランド嗜好性がある：依存症専門医療機関を受診する患者を対象とする全国調査より．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

15) 嶋根卓也，片山宗紀，榊原幹夫，松本俊彦：市販薬の販売時における乱用リスクの認知について：薬剤師向けゲートキーパー研修の効果に関する研究より．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

16) 宇佐美貴士，西村晃萌，沖田恭治，山本泰輔，谷渕由布子，大宮宗一郎，松本俊彦：違法薬物と医薬品関連精神障害の比較から精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査から．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.25.

17) 宇佐美貴士，西村晃萌，沖田恭治，山本泰輔，谷渕由布子，大宮宗一郎，松本俊彦：「故意の自傷や自殺企図」と薬物関連精神疾患に関連する要因の検討．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.25.

18) 石井香織，沖田恭治，齋藤友美，吉澤一巳，松本俊彦：（ポスター）処方薬および市販薬使用障害患者における心理的特徴の比較検討. 第 60 回日本アルコール･アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.23-25.

19) 大野昴紀，奥田華代，瀬々 潤，松本俊彦，高野 歩：（ポスター）ウェアラブル活動量計を用いたハイリスク飲酒がある人の睡眠質推定アルゴリズムの開発．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.23-25.

20) 白鳥浩丈，江島智子，池田朋広，高木のり子，高橋 仁，平山晶一，福島ショーン・パトリック，松本俊彦，上原徹：依存症回復支援施設における依存症（重複障害）への支援－リカバリー思考のワークブックによる介入の意義に関する質的考察－．第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.5.

21) 金澤由佳，堤 史織，宇佐美貴士，熊倉陽介，高野 歩，松本俊彦：更生保護施設における薬物再使用防止プログラムの模索へ.第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.5.

22) 嶋根卓也，水野聡美，猪浦智史，邱 冬梅，北垣邦彦，小出彰宏，富永孝治，竹原健二：中学生における市販薬乱用の経験率の推計：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査 2024 より．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.24.

23) 猪浦智史，嶋根卓也：タイ王国における薬物乱用防止教育の特徴： 教育カリキュラムや保健の教科書から学べること．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.25.

24) 喜多村真紀，高田雅弘，江藤不二子，首藤 誠，嶋根卓也：X 投稿文の対応分析が示す市販薬過量服薬に関する情報の継時的変化と 2023 年の構造的特異性．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.25.

25) 喜多村真紀，高田雅弘，江藤 不二子，首藤 誠，嶋根卓也：X 投稿文の共起分析による市販薬過量服薬の実態： 濫用等のおそれのある医薬品と未指定医薬品の比較より．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.25.

26) 中島美鈴，平井祥一，森 治美，嶋根卓也：身近な人とのコミュニケーションスキルに焦点づけた少年の大麻再使用防止のための プログラム．第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京， 2025.10.25.

27) 松浦佳代，高野 歩：医療観察法病棟看護師の看護実践の特徴と課題の検討. 第 45 回日本看護科学学会学術集会，東京，2025.12.7.

28) 徳重 誠，大野昴紀，藤城 聡，高野 歩： 精神保健福祉センターにおけるゲーム関連問題に関する相談･支援の実態と課題. 第 60 回日本アルコール･アディクション医学会学術総会､2025.10.24.

29) 金澤由佳：精神障害分野における人権モデルの考察 ―配慮と強制の狭間で―．第 41 回日本社会病理学会，宮城，2025.9.27.

(3) 研究報告会

1) 松本俊彦：処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2026.3.13.

2) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者に対する回復支援に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2026.3.13.

3) 嶋根卓也：薬物使用に関する全国住民調査（2025 年）．令和 7 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部合同研究成果報告会，オンライン，2026.3.13.

4) 嶋根卓也：全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究.

令和7年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部合同研究成果報告会，オンライン，2026.3.13.

5) 嶋根卓也：大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究．令和7年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部合同研究成果報告会，オンライン，2026.3.13.

6) 水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦：日本の中高生の薬物乱用経験が増え始める時期と介入のヒント．第37回国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2026.3.16.

C．講演

1) 松本俊彦：大人も子どもも「助けて」が言えない．社会福祉法人長野いのちの電話主催 開局30周年記念自殺予防講演会，長野，2025.4.13.

2) 松本俊彦：SOSの出し方に関する教育を含めた自殺予防教育．埼玉県教育委員会主催 令和7年度第1回埼玉県市町村教育委員会教育長研究協議会，埼玉，2025.4.15.

3) 松本俊彦：人はなぜ薬物依存症になるのか？～「ダメ。ゼッタイ。」を乗り越えて．横浜市立大学主催 YCUリベラルアーツ入門，オンデマンド動画，2025.4.28.

4) 松本俊彦：不登校の子どもを理解していくために．登校拒否・不登校を考える東京の会主催 講演会，東京，2025.5.11.

5) 松本俊彦：オーバードーズについて．令和7年度宮崎県小児科医会総会・春季学術講演会，宮崎，2025.5.18.

6) 松本俊彦：睡眠薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること．エーザイ株式会社・株式会社スズケン共催 不眠症診療Webセミナー，オンライン，2025.5.20.

7) 松本俊彦：今必要な薬物対策とは？．全国薬物依存症者家族会連合会主催 やっかれん2025 磐梯ダルク25周年共催フォーラム，福島，2025.6.1.

8) 松本俊彦：依存症当事者家族に向けて．一般社団法人AREA 藤岡ダルク主催 オンライン家族会，オンライン，2025.6.8.

9) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの理解と援助．株式会社メディア21主催 令和7年度人権セミナー，愛知，2025.6.27.

10) 松本俊彦：自傷行為とその対応について.文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会，北海道，2025.7.9.

11) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門．福岡県精神保健福祉協会主催 特別講演会，オンライン，2025.7.11.

12) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の実態と対策の課題．武田薬品工業株式会社 ルンドベックジャパン株式会社共催 ADICT Episode-6．オンライン，2025.7.15.

13) 松本俊彦：「生きづらさ」への寄り添い、若者の薬物問題について．八王子市社会を明るくする運動 八王子市実施委員会主催 第75回社会を明るくする運動「みんなに届け！私たちのメッセージ」．東京，2025.7.21.

14) 松本俊彦：オーバードーズについて．千葉県市川保健所主催 令和7年度市川保健所管内思春期保険事業後援会，動画，2025.7.22.

15) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向．大塚製薬株式会社主催 アディクションからの回復を考える会，京都，2025.7.26.

16) 松本俊彦：依存症について．茨城ダルク 今日1日ハウス主催 茨城ダルク33周年フォーラム，茨城，2025.7.27.

17) 松本俊彦：家族を孤立させない支援とは？．東京ソテリア主催 講演会，オンライン，2025.7.29.

18) 松本俊彦：健康リスクを高める量を飲酒することによるリスクについて．株式会社荏原製作所主催 依存症対策講演会（アルコール），オンライン，2025.7.30.
19) 松本俊彦：子どもたちのこころの危機に向き合おう～「助けて」が言えない子どもたちにどうかかわるか～．山形県鶴岡市健康課主催 令和 7 年度鶴岡市こころ元気アップセミナー，山形，2025.8.3.
20) 松本俊彦：思春期の悩みと自傷～助けてが言えないこどもに向き合う～．所沢市健康推進部保健センター主催 令和 7 年度第 1 回こころの健康講座，埼玉，2025.8.13.
21) 松本俊彦：市販薬クライシスの実態とわが国の薬物対策の課題．NPO 法人横浜ひまわり家族会主催 第 9 回薬物依存症者と家族フォーラム，神奈川，2025.8.23.
22) 松本俊彦：社会から離脱していく子どもたち．公益社団法人日本精神神経科診療所協会主催 子どものこころの健康を考えるシンポジウム，東京，2025.8.24.
23) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもへの理解と援助．東京都立八王子拓真高等学校主催 Poco a Poco 夏のつどい，東京，2025.8.27.
24) 松本俊彦：睡眠薬の乱用・依存を防ぐために臨床医にできること．エーザイ株式会社 エーザイ・ジャパン主催 不眠症診療 Web セミナー ～精神科の薬物療法を考える～，オンライン，2025.8.29.
25) 松本俊彦：薬物依存症をもつ人を地域で支える．東京大学医学部附属病院精神神経科主催 東京大学履修証明プログラム「職域・地域課架橋型価値に基づく支援者育成」C コース，東京，2025.8.31.
26) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向．大塚製薬株式会社 山口県病院薬剤師会共催 Pharmaceutical Online Seminar in Yamaguchi，オンライン，2025.9.1.
27) 松本俊彦：先生も悩んでる！死にたいと言う子どもへの対応．大塚製薬株式会社主催 第 4 回多摩地域リエゾン会議，東京，2025.9.2.
28) 松本俊彦：自傷行為の実態と援助．兵庫県立丹波医療センター主催 オープンセミナー，オンライン，2025.9.11.
29) 松本俊彦：オーバードーズはなぜ広がるのか？～若者のクスリ依存の背景と支援～．千代田区男女共同参画センターMIW 千代田保健所共催講座，東京，2025.9.12.
30) 松本俊彦：私たちのしていることは「ダメ」ですか？～若年者のオーバードーズと自傷行為について～．釧路精神保健協会 北海道釧路保健所共催 第 67 回精神保健北海道大会，北海道，2025.9.13.
31) 松本俊彦：「生きづらさに寄り添う」～”助けて”が言えない若者に、私たちはどう応えるか～．札幌市精神保健福祉センター主催 令和 7 年度札幌市依存症啓発セミナー，北海道，2025.9.14.
32) 松本俊彦：アルコール依存症患者の対応～うつ病との併存を踏まえて～．ルンドベックジャパン株式会社主催 Lundbeck Psychiatric Treatment Seminar，オンライン，2025.9.16.
33) 松本俊彦：依存症と自殺の関係．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 ギャンブル依存症対策日英国際カンファレンス，東京，2025.9.21.
34) 松本俊彦：開業医が知っておくべき市販薬乱用・依存の現在．東京保険医協会主催 薬物依存症研究会，東京，2025.9.30.
35) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬局監視指導・麻薬対策課主催 再乱用防止対策講習会，富山，2025.10.14.
36) 松本俊彦：薬物依存症からの回復を考える.. 東京大学大学院経済学研究科松井研究室主催 講演会，東京，2025.10.11.
37) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち．なら思春期・不登校支援研究所主催 2025 年度スクールカウンセラーのための勉強会，オンライン，2025.10.12.

38) 松本俊彦：依存症．ティーペック株式会社主催 ティーペックアカデミー，オンライン，2025.10.14.
39) 松本俊彦：思春期と自殺．一般社団法人日本家族計画協会主催 第65回思春期保健セミナー コースⅡ，オンデマンド，2025.10.15.
40) 松本俊彦：睡眠薬乱用・依存症を防ぐために臨床医にできること．エーザイ株式会社 エーザイ・ジャパン主催 小平市医師会学術講演会，東京，2025.10.16.
41) 松本俊彦：リストカットとオーバードーズの理解と対応の原則．公益社団法人明治安田こころの健康財団主催 子ども・専門講座7 自分を傷つけずにはいられない子どもたちの支援，東京，2025.10.19.
42) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷とオーバードーズの理解と援助～．東京医科大学精神医学分野主催 大学院特別講義，東京，2025.10.20.
43) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの現状と対応．慶應義塾大学医学部小児科学教室主催 小児科勉強会，東京，2025.10.21.
44) 松本俊彦：自傷行為とその対応について.文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会，沖縄，2025.10.28.
45) 松本俊彦：自傷と自殺～アディクション臨床から考えたこと．東洋英和女学院大学死生学研究所主催 2025年度第5回公開連続講座，オンライン，2025.11.8.
46) 松本俊彦：わが国の薬物問題の現在～市販薬乱用禍の背景にあるもの．ヴィアトリス製薬合同会社主催 VIATRIS CNS Forum 2025，大阪，2025.11.9.
47) 松本俊彦：思春期のメンタルヘルス～リストカットとオーバードーズの理解と援助．福岡県保健医療介護部健康増進課主催 こころの健康づくり大会，福岡，2025.11.11.
48) 松本俊彦：アルコールと安全と健康．日本航空株式会社ウェルネス推進部主催 適飲に向けたアルコールイベント，オンライン，2025.11.17.
49) 松本俊彦：薬物・医薬品依存およびアルコール依存の実態と最新の治療について．Felimedix株式会社主催 BeMEC名医インタビューシリーズ，東京，2025.11.18.
50) 松本俊彦：いま知りたい、市販薬・処方薬依存のこと～若者をとりまく現状と対応について～．広島市精神保健福祉センター主催 令和7年度依存症講演会（市販薬・処方薬依存），広島，2025.11.24.
51) 松本俊彦：依存症の背景と対策について．OUTBACKプロジェクト主催 OUTBACKアクターズスクール第5回横浜公演，神奈川，2025.12.7.
52) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの理解と援助～私たち大人ができること～．静岡県精神保健福祉協会主催 心の健康フェア2025講演会，静岡，2025.12.10.
53) 松本俊彦：なぜ若者はオーバードーズするのか？～市販薬乱用の理解と援助～．学校法人武蔵野大学後援会主催 第94回教養講座，東京，2025.12.13.
54) 松本俊彦：オーバードーズについて．公益社団法人東京都薬剤師会主催 令和7年度東京都薬剤師会学校薬剤師担当者連絡会議，東京，2025.12.13.
55) 松本俊彦：昨今の処方薬・市販薬依存の現状と課題と必要な対策．一般社団法人ARTS主催 依存症シンポジウムin大阪，大阪，2025.12.14.
56) 松本俊彦：学生の身近なリスク「依存症」とその対策．独立行政法人日本学生支援機構主催 令和7年度学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー，オンライン，2025.12.16.
57) 松本俊彦：いま、大人にできることから市販薬による若者の依存症～．一般社団法人医療リテラシー研究所主催 医療トークイベント「やさしく、出会う。もっと知りたい！医師への聞き方・伝え方」，神奈川，2026.1.12.
58) 松本俊彦：児童青年期の自傷と過量服薬について．神奈川県中央児童相談所主催 令和7年度第5回児童心理司部会，神奈川，2026.1.14.

59) 松本俊彦：思春期の薬物乱用～市販薬使用症の現状と課題～．MeijiSeika ファルマ株式会社 ABC 研究会共催 第 27 回 ABC 研究会，東京，2026.1.17.
60) 松本俊彦：心の傷とアディクション．NPO 法人東京自由大学主催 連続講座「こころをめぐる冒険」第 3 回：心の傷とアディクション，東京，2026.1.18.
61) 松本俊彦：身近な薬物のはなし～ストロング系から市販薬オーバードーズまで．第一三共株式会社主催 薬物適正使用の為の Web セミナー，オンライン，2026.1.19.
62) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の現在．仙台市立病院主催 CPT 講演会，宮城，2026.1.25.
63) 松本俊彦：睡眠薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること．エーザイ株式会社 株式会社スズケン 共催 不眠症診療 Web セミナー，オンライン，2026.2.6.
64) 松本俊彦：市販薬オーバードーズ問題は大人たちに何を訴えているのか？．白梅学園大学・短期大学子ども学研究所主催 第 17 回白梅子ども学講座「子どものこころとからだ」，東京，2026.2.8.
65) 松本俊彦：若者の自傷行為の理解と家族の関わり方について．東京都立精神保健福祉センター主催 令和 7 年度第 7 回思春期・青年期家族講座，東京，2026.2.10.
66) 松本俊彦：オーバードーズから考える若者支援～「やめさせる」から「支える」へ～．日本大学薬学部薬剤師教育センター主催 オンラインシンポジウム，オンライン，2026.2.11.
67) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．放送大学奈良学習センター 奈良国立大学機構奈良カレッジ連携推進センター 共催 オンライン連続セミナー「教育臨床の最前線」第 6 回「自傷行為の理解と援助」，オンライン，2026.2.15.
68) 松本俊彦：若者の生きづらさに心を寄せて～依存症支援の現場から伝えたいこと～．茅ヶ崎市保健所保健予防課主催 令和 7 年度精神保健福祉普及啓発講演会，オンデマンド，2026.2.16～2026.3.31.
69) 松本俊彦：薬物依存症地域支援の現在～SMARPP から Voice Bridge Project へ．神奈川県精神神経科診療所協会主催 医療問題検討会，神奈川，2026.2.20.
70) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの理解と対応～薬剤師にできること～．一般社団法人京都府薬剤師会 エーザイ株式会社共催 薬剤師のための精神科セミナー，京都，2026.2.23.
71) 松本俊彦：薬物依存のある保護観察対象者を地域につなげていくための工夫や課題について．東京保護観察所主催 令和 7 年度東京都薬物再乱用防止対策支援連絡協議会，東京，2026.2.27.
72) 松本俊彦：オーバードーズ 家族にできること．北海道立精神保健福祉センター主催 令和 7 年度薬物問題を持つ人の家族のための交流会～市販薬や処方薬の問題でお困りのご家族へ～，オンライン，2026.3.1.
73) 松本俊彦：自傷行為と過量服薬の理解と援助．神奈川県学校保健連合会養護教諭部会主催 総会・講演会，神奈川，2026.3.3.
74) 松本俊彦：依存性物質とうまく付き合うコツ．武田薬品工業株式会社主催 医療関係者向けコンテンツ，動画，2026.3.3.
75) 松本俊彦：子どもの命を守るために～私たちにできること～．駒場東邦中学校高等学校主催 教職員対象講演会，東京，2026.3.11.
76) 松本俊彦：オーバードーズやリストカットを行う若者たちへの理解と支援について．東京都保健医療局主催 令和 7 年度「こころといのちの講演会」，オンライン，2026.3.14.
77) 松本俊彦：オーバードーズする子どもたち～市販薬乱用・依存の実態と対策の課題．京都小児科医会主催 第 45 回子どものこころと身体懇話会，京都，2026.3.14.
78) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～自殺念慮への対応．公益社団法人日本精神神経科診療所協会主催 第 15 回みんなでかたろう！女性のメンタルヘルス，東京，2026.3.15.
79) 松本俊彦：飲む人も飲まない人も！みんなのための適飲ガイド.日本航空株式会社ウェルネス推進部 日本航空健康保険組合共催 アルコールセミナー，東京，2026.3.18.

80) 松本俊彦：市販薬乱用の現在～その実態と対策の課題～．武田薬品工業株式会社主催 Yokohama Psychiatry Export Seminar，神奈川，2026.3.19.
81) 松本俊彦：アドレッシング受刑者と刑務所収容者の間のギャップ．Fast-Track Health 主催 ファストトラックシティ HCV 撲滅ワークショップ，東京，2026.3.28.
82) 嶋根卓也：市販薬乱用に対する学校薬剤師への期待-脅し教育からスキル教育へ-．三重県薬剤師会，三重，2025.4.13.
83) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援　-製薬会社に期待すること-．日本 OTC 医薬品協会，東京，2025.5.8.
84) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と対応-ダメと言わない支援のススメ-．長野県立病院機構本部研究センター，オンライン，2025.5.31.
85) 嶋根卓也：若者における市販薬のオーバードーズに対する理解と対応　-ダメと言わない指導のススメ-．東京都保健医薬局，東京，2025.6.11.
86) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．横須賀市立衣笠中学校，オンライン，2025.6.19.
87) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．横須賀市立大津中学校，オンライン，2025.6.19.
88) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．横須賀市立不入斗中学校，オンライン，2025.6.20.
89) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．東京都立世田谷泉高等学校，東京，2025.7.2.
90) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-古典的おどし教育からの脱却-．宮城県教育庁，宮城，2025.7.11.
91) 嶋根卓也：薬物非行防止指導．愛光女子学園，東京，2025.7.30.
92) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援　-古典的おどし教育からの脱却-．千葉県教育庁，動画提供（配信期間 2025.8.18.～9.12.），2025.8.1.
93) 嶋根卓也：若者に広がるオーバードーズ．麻薬・覚醒剤・大麻乱用防止運動九州・沖縄地区大会，沖縄，2025.8.7.
94) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援-ダメと言わない支援のススメ-．アルコール関連問題予防研究会，オンライン，2025.8.21.
95) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズとゲートキーパーについて　-薬剤師によるさりげないおせっかい-．兵庫県薬剤師会，オンライン，2025.8.24.
96) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-こどもたちは SNS を通じて何を見ているのか-．第 26 回 JSPP 教育セミナー，大阪，2025.8.31.
97) 嶋根卓也：若者と依存症の理解と対応-ダメと言わない支援のススメ-．東京家政学院大学，オンライン，2025.9.11.
98) 嶋根卓也：オーバードーズの理解と支援　-ダメと言わない薬物乱用防止教室-．白梅学園大学，東京，2025.9.19.
99) 嶋根卓也：オーバードーズの理解と支援-ダメと言わない支援のススメ-．JA 静岡厚生連 静岡厚生病院，オンライン，2025.9.20.
100) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と対応　－ダメと言わない支援のススメー．エーザイ株式会社，オンライン，2025.9.26.
101) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．日本教育財団首都医校，東京，2025.10.17.
102) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-古典的おどし教育からの脱却-．公益財団法人　明治安田こころの健康財団，東京，2025.10.19.

103) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-古典的おどし教育からの脱却-．長野県教育委員会，オンライン，2025.10.21.
104) 嶋根卓也：ダルクにゆかりのある支援者の方々のマイクリレー．ダルク 40 周年フォーラム，神奈川，2025.10.27.
105) 嶋根卓也：薬物乱用防止、子どもたちの市販薬乱用の現状と対応．府中市薬剤師会，東京，2025.10.30.
106) 嶋根卓也：指定濫用防止医薬品の指定について．厚生労働省医薬局医薬安全対策課　令和 7 年度第８回薬事審議会医薬品等安全対策部安全対策調査会，東京，2025.11.11.
107) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と対応：ダメと言わない支援のススメ．第 42 回江戸川医学会学術講演会，東京，2025.11.16.
108) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と対応：ダメと言わない支援のススメ．学校法人誠心学園　浜松開誠館中学校高等学校，静岡，2025.11.18.
109) 嶋根卓也：喫煙、飲酒、薬物、乱用防止教育．令和７年度全国学校保健・安全研究大会，2025.11.21.
110) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援～古典おどし教育からの脱却～．大阪府学校薬剤師会，大阪，2025.12.7.
111) 嶋根卓也：青少年における市販薬のオーバードーズに対する理解と対応-ダメと言わない支援のススメ-．秋田県教育カウンセラー協会，秋田，2025.12.14.
112) 嶋根卓也：「依存症からの回復」．津田塾大学，東京，2025.12.22.
113) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と対応－ダメと言わない支援のススメ－．回復支援の会 木津川ダルク，京都，2026.1.24.
114) 嶋根卓也：効果的な薬物乱用防止教育：大麻とオーバードーズを中心に．鳥取県薬剤師会，鳥取，2026.3.17
115) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援．回生病院，オンライン，2026.3.19.
116) 嶋根卓也：若者のオーバードーズ．一般社団法人日本薬学生連盟，東京，2026.3.22.
117) 嶋根卓也：「みんなで考えようオーバードーズ対策」．雑誌Ｖｉｔａ座談会，東京，2026.3.31
118) 高野 歩：Reflections on the “Japanese” Harm Reduction Movement.Legal Geographies & Lived Legalities. Tokyo, 2026.3.7.
119) 高野 歩：アルコール・薬物依存の政策をめぐる歴史・治療に関する京都会議 Kyoto Meeting on Alcohol and Other Drugs Policy, History and Treatment，京都， 2025.12.15.
120) 喜多村真紀：薬物乱用防止教育－なぜ医薬品をオーバードーズするのか？，令和 7 年度所沢市立南陵中学校，埼玉県，2025.5.21
121) 喜多村真紀：薬物乱用防止教育－なぜ医薬品をオーバードーズするのか？，令和 7 年度所沢市立山口中学校，埼玉県，2025.7.15
122) 喜多村真紀：依存症と女性，大妻女子大学『女性と自立支援』の外部講師としての講演，東京都，2025.8.9
123) 喜多村真紀：薬物乱用防止教育－なぜ医薬品をオーバードーズするのか？，令和 7 年度所沢市立美原中学校，埼玉県，2025.12.22
124) 堤 史織：自助グループのさまざまな形 ～世界の動向を踏まえて～．岡山県立精神科医療センター主催　依存症・アディクションのリアル ーさまざまな体験談からー，岡山, 2025.7.13.

Ｄ．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) 松本俊彦：日本アルコール・アディクション医学会 理事
2) 松本俊彦：日本臨床カンナビノイド学会 理事
3) 松本俊彦：日本社会精神医学会 監事

4) 松本俊彦：日本精神科救急学会　評議員
5) 嶋根卓也：日本アルコール･アディクション医学会 学術評議委員
6) 嶋根卓也：日本エイズ学会 代議員
7) 富山健一：日本アルコール・アディクション医学会　学術評議員
8) 高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会 理事，学術評議員
9) 高野 歩：International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA), Membership Committee
10) 高野 歩：The College on Problems of Drug Dependence　Membership Committee

(3) 座長

1) 松本俊彦，井上悠里：【司会】シンポジウム 39 解離性同一性症をどう理解するか、どう治療するかーDID 実践治療アプローチの展開．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19.
2) 松本俊彦，成瀬暢也：【司会】シンポジウム 98 改正大麻取締法・麻薬及び向精神薬取締法の意義と課題､ならびに薬物依存症臨床への影響. 第 121 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2025.6.20.
3) 宮岡 等，松本俊彦：【座長】シンポジウム 1 社会に発信する精神科診断はどうあるべきか．第 44 回日本精神科診断学会，大阪，2025.10.4.
4) 松本俊彦：【座長】ポスター2 精神科．第 60 回日本アルコール･アディクション医学会学術総会，東京，2025.10.23-25.
5) 嶋根卓也：シンポジウム 9「みんなで考えようオーバードーズ対策：基礎・臨床・予防・販売それぞれの観点から」第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，2025.10.24.
6) 高野 歩：【座長】シンポジウム 1「ハームリダクションの実践に向けて：それぞれの役割と協働」，2025 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2025.10.23
7) 高野 歩：【座長】シンポジウム 3「デジタルデバイスを利用した医療的・心理的支援に関する研究：研究の成果と裏話」，2025 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2025.10.23
8) 高野 歩：【座長】一般演題 9「心理・看護 3」，2025 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2025.10.25

(4) 学会誌編集委員等

1) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会　編集委員
2) 嶋根卓也：日本アルコール･アディクション医学会　編集委員会査読委員
3) 高野 歩：日本看護科学学会　和文誌専任査読委員
4) 高野 歩：日本精神保健看護学会　査読委員
5) 高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会　編集委員長

E．研修

(1) 研修企画

1) 松本俊彦：令和 7 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2025.7.15-16.
2) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 38 回薬物依存臨床医師研修際および第 26 回薬物依存臨床看護等研修会，オンライン，2025.9.3-5.
3) 松本俊彦：国立精神・神経医療研究センター主催 第 17 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2025.11.3-5.
4) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和 7 年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2026.1.20-21.
5) 松本俊彦 :2025 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修, 東京, 2026.2.17-18.
6) 嶋根卓也：第 13 回ダルク意見交換会（厚生労働省依存症に関する調査研究事業），東京､2026.2.10.

7) 大嶋栄子，近藤あゆみ：第 3 回（令和 7 年度）薬物問題をもつ女性の治療と支援に携わる医療従事者研修，東京，2025.7.11.
8) 近藤あゆみ，大嶋栄子：令和 7 年度 SeRA ファシリテーターの集い，東京，2025.10.10.
9) 近藤あゆみ：令和 7 年度市販薬の過量服薬や自傷を繰り返す若者たちの支援研修，オンライン，2026.1.12.

(2) 研修会講師

1) 松本俊彦：いのちの教育フォーラム．宮崎県教育庁人権同和・生徒指導課主催 人権教育推進研修会，オンデマンド配信，2025.5.13.
2) 松本俊彦：リストカットや市販薬の過剰摂取などを繰り返す児童生徒の理解と対応．愛知県スクールカウンセラー会主催 令和 7 年度第 2 回定例研修会，愛知，2025.5.25.
3) 松本俊彦：未成年に広がる市販薬及び違法薬物濫用の理解とその支援について．板橋区子ども家庭総合支援センター主催 令和 7 年度板橋区子ども家庭総合支援センター保護課職員研修，東京，2025.6.3.
4) 松本俊彦：思春期の子どもに死にたいと言われたら～思春期の子どもの自殺と自傷～．三鷹市子ども家庭支援センターりぼん主催 令和 7 年度三鷹市子ども家庭支援ネットワーク研修，東京，2025.6.10.
5) 松本俊彦：現場で役立つ実践的アプローチを学ぶ！ハーム・リダクション実践講座．トキノ株式会社主催 精神科医療・ケアに関する研修，オンライン，2025.6.12.
6) 松本俊彦：自傷行為と市販薬オーバードーズの理解と援助～私たちにできること～．亀山市民生委員児童委員協議会連合会主催 鈴亀ブロック合同研修会，オンライン，2025.6.24.
7) 松本俊彦：市販薬乱用の理解と援助～若年者の自殺予防のために～．社会福祉法人福島いのちの電話主催 令和 7 年度第 1 回相談員全体研修会，福島，2025.6.29.
8) 松本俊彦：自傷行為の現状、自傷行為の理解と対応のポイント．一般社団法人東京公認心理師協会主催 相談技能向上のための研修会，東京，2025.7.6.
9) 松本俊彦：「生き辛さ」からの回復．静岡市こころの健康センター主催 令和 7 年度静岡市依存症関連問題研修会，静岡，2025.7.8.
10) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害．令和 7 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2025.7.15.
11) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律．令和 7 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2025.7.15.
12) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～．大分市教育委員会主催 大分市養護教諭前期研修，大分，2025.7.23.
13) 松本俊彦：過量服薬と自傷行為を繰り返すこども・わかものの理解と対応．さいたま市保健衛生局保健部こころの健康センター主催 令和 7 年度自殺対策推進事業地域支援研修，埼玉，2025.7.29.
14) 松本俊彦：リストカットと市販薬オーバードーズの理解と対応．北九州市学校保健会八幡支部主催 令和 7 年度研修会，福岡，2025.8.5.
15) 松本俊彦：声に出せない SOS－自傷行為をする子どもの理解とその支援－．やまぐち総合教育支援センター主催 令和 7 年度生徒指導におけるリスクマネジメント研修講座，山口，2025.8.6.
16) 松本俊彦：自傷行為・薬物依存の理解と援助～見える傷の背後には見えない傷がある～．大和市教育委員会教育研究所主催 青少年相談室夏季研修講座兼課題解決力向上研修講座【子ども支援】，神奈川，2025.8.26.
17) 松本俊彦：薬物依存症臨床総論．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 38 回薬物依存臨床医師研修際および第 26 回薬物依存臨床看護等研修会，オンライン，2025.9.3.
18) 松本俊彦：薬物依存症患者への対応の基礎、SMARPP の実態・グループワーク演習．法務省矯正局成人矯正課主催 令和 7 年度薬物依存対策研修，東京，2025.9.9.

19) 松本俊彦：青年期のメンタルヘルスについて．福祉保健研修交流センターウィリング横浜主催 横浜市民生委員児童委員研修「主任児童委員研修」，神奈川，2025.9.16.
20) 松本俊彦：アルコールと自殺・自傷．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 令和7年度アルコール依存症臨床医等研修，動画，2025.9.16～2025.10.29.
21) 松本俊彦：身近な依存症の理解と対応～かかりつけ医にできること．公益社団法人東京都医師会主催 令和7年度精神科医療地域連携事業一般診療科向け研修（第2回），東京，2025.10.15.
22) 松本俊彦：市販薬使用症と自傷・自殺．日本医科大学付属病院主催 令和7年度自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業講演会（専門職向け基礎研修），東京，2025.10.17.
23) 松本俊彦：自傷と市販薬 OD の理解と援助．世田谷区教育委員会主催 世田谷区立教育総合センター不登校支援窓口内部研修会，東京，2025.10.22.
24) 松本俊彦：子どもの自傷行為と市販薬オーバードーズについて．横浜市こども青少年局主催 児童相談所スキルアップ研修，神奈川，2025.10.22.
25) 松本俊彦：「良い子」の裏にある「しんどさ」にどう向き合えるか～介入方法と支援者としての在り方．青森県立精神保健福祉センター主催 令和7年度精神保健福祉総合研修，青森，2025.10.29.
26) 松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応．国立精神・神経医療研究センター主催 第17回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2025.11.3.
27) 松本俊彦：SMARPP の理念と意義．国立精神・神経医療研究センター主催 第17回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2025.11.3.
28) 松本俊彦：市販薬 OD の理解と援助～子ども若者の自殺予防のために～．京都市こころの健康増進センター主催 令和7年度自殺ハイリスク者等支援研修会，オンライン，2025.11.7.
29) 松本俊彦：自殺リスクの評価と対応．法務省保護局主催 令和7年度処遇困難事例・自殺対策研修，東京，2025.11.12.
30) 松本俊彦：自傷行為とオーバードーズの理解と援助.仙台市精神保健福祉総合センター主催 令和7年度思春期問題研修講座，宮城，2025.11.19.
31) 松本俊彦：薬物依存症の理解と援助．法務省矯正研修所主催 令和7年度専門研修課程矯正教育科第8回特定生活指導（薬物非行防止指導）担当者フォローアップ研修，東京，2025.11.26.
32) 松本俊彦：生きづらさを抱える若者の理解と支援．川崎市健康福祉局総合リハビリテーション推進センター主催 令和7年度治療指導専門職員現任集合研修，神奈川，2025.12.3.
33) 松本俊彦：薬物依存臨床における司法的問題への対応．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 令和7年度依存症に対する集団療法に係る研修，オンライン，2025.12.9.
34) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの実態と課題．立憲民主党主催 立憲民主党女性議員ネットワーク研修会，オンライン，2025.12.12.
35) 松本俊彦：生徒の自殺予防．明治大学付属中野中学・高等学校主催 令和7年度第2回教職員研修会，東京，2025.12.17.
36) 松本俊彦：児童生徒を薬物依存症にしないための対応について．一般財団法人東京都学校保健会主催 令和7年度学校保健研修会，オンライン動画，2026.1.19.
37) 松本俊彦：覚醒剤依存症と医療．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第57回研修，東京，2026.1.6.
38) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第57回研修，東京，2026.1.6.
39) 松本俊彦：生きづらさを抱えるこども・若者と向き合う．浜松市こども家庭部・こども若者政策課 青少年育成センター主催 浜松市こども・若者支援地域協議会研修会，静岡，2026.1.7.
40) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの実態と対策の課題～薬剤師にできることは何か？～．公益社団法人小田原薬剤師会主催 薬物乱用防止研修会，神奈川，2026.1.14.
41) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律．令和7年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2026.1.20.

42) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害．令和 7 年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2026.1.21.
43) 松本俊彦：アディクション SW 総論「②依存症の医学的理解」．公益社団法人日本精神保健福祉士協会主催 令和 7 年度厚生労働省・依存症対策全国センター「依存症の治療・相談等に係る指導者養成事業」依存症（アルコール・薬物・ギャンブル等・ゲーム）回復支援研修オンデマンド視聴研修，オンデマンド，2026.1.17～2026.2.28.
44) 松本俊彦：薬物依存症の治療および支援．法務総合研究所主催 第 60 回保護局関係職員高等科研修，オンライン，2026.1.28.
45) 松本俊彦：小中学生の OD やリストカットに関する教員の対応．公益財団法人明治安田こころの健康財団 三郷市教育研究会共催 三郷市教育研究会生徒指導主任会研修会，埼玉，2026.1.28.
46) 松本俊彦：電話相談における危機介入と自殺予防の実践．株式会社法研主催 メンタル相談員研修会，東京，2026.1.30.
47) 松本俊彦：社会は本当に若者を応援しているのか～市販薬乱用の臨床から考えたこと．大阪府こころの健康総合センター主催 令和 7 年度依存症相談対応・実践研修（A-2）「若者をとりまく依存症の現状～わたしたちにできること～，大阪，2026.2.3.
48) 松本俊彦：大学生における自傷行為と薬物依存の理解と対応．早稲田大学アクセシビリティ支援センター主催 スタッフ研修会，東京，2026.2.4.
49) 松本俊彦：自傷・自殺のリスク評価と対応．令和 7 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修，東京，2026.2.17.
50) 松本俊彦：生きづらさを抱えた人の支援．徳島県南部総合県民局保健福祉環境部主催 令和 7 年度南部圏域自殺対策関係職員スキルアップ研修会，オンライン，2026.2.24.
51) 松本俊彦：“沈黙”をこえて、語りはひらかれる—当事者とともに歩むこれから ー．特定非営利活動法人 東京ソテリア主催 第 2 回ヤングケアラー支援研修（普及研修），オンライン，2026.2.24.
52) 松本俊彦：自殺・自傷の理解と対応．法務省矯正研修所主催 令和 7 年度専門研修課程調査鑑別科（特別課程）研修，オンライン，2026.2.25.
53) 松本俊彦：子どもの自傷とオーバードーズの理解と援助～子どもの自殺予防のために～．奈良県精神保健福祉センター主催 令和 7 年度自殺未遂者支援研修会（子ども・若者編），奈良，2026.3.4.
54) 松本俊彦：身近な依存について．大阪少年鑑別所主催 令和 7 年度拡大研修会，オンライン，2026.3.10.
55) 松本俊彦：死にたいと口にする子どもや自傷する子どもを目の前にして「施設の職員が知っておくべきこと、やるべきこと、とるべき姿勢について．二葉むさしが丘学園主催 園内研修，東京，2026.3.17.
56) 嶋根卓也：オーバードーズの理解と支援　回復や断薬を強調しない支援のススメ．一般社団法人 公認心理師の会 2025 年度年次総会・研修会，東京，2025.5.24.
57) 嶋根卓也：オーバードーズの理解と支援：市販薬を中心に．日本犯罪心理学会第 7 回全国研修会，オンライン，2025.6.28.
58) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）．令和 7 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2025.7.15-16.
59) 嶋根卓也：青少年におけるオーバードーズの理解と予防・支援-ダメと言わない予防教育のススメ-．法務省矯正局矯正研修所　令和 7 年度専門研修課程矯正教育科第 4 回特定生活指導（薬物非行防止指導）担当者研修，東京，2025.8.6.
60) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援-ゲートキーパーとしての養護教諭-．佐賀県教育委員会，佐賀，2025.8.26.
61) 嶋根卓也：①薬物乱用．依存の疫学②民間回復支援施設の活動と課題．令和 7 年度精神保健に関する技術研修　第 38 回薬物依存臨床医師研修　第 26 回薬物依存臨床看護等研修，オンライン，2025.9.3-5.

62) 嶋根卓也：依存症研究の最前線．慶応義塾大学学生実習，オンライン，2025.9.17.
63) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と対応　ーダメと言わない支援のススメー．越谷市薬剤師会，埼玉，2025.10.5.
64) 嶋根卓也：薬物問題を抱える若年層の状況に係る最新情報の提供．福岡県 F-CAN 研修会　福岡県保健医療介護部薬務課，福岡，2025.10.31.
65) 嶋根卓也：薬物乱用．依存の疫学．令和 7 年度認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修（SMARPP），東京，2025.11.3-5.
66) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援 - ダメと言わない支援のススメ - ．第 63 回地域精神病院薬剤師研究会，オンライン，2025.12.4.
67) 嶋根卓也：大麻乱用の現状と問題点について．近畿矯正管区少年矯正部，大阪，2025.12.9.
68) 嶋根卓也：薬物乱用の現状と課題ー大麻と市販薬のオーバードーズー．東京少年鑑別所，東京，2025.12.17.
69) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援ー声かけから始めるメンタルヘルス支援ー．宮城県保健福祉部薬務課，オンライン，2025.12.18.
70) 総合精神保健福祉センター（パレアモア）自殺未遂者支援担当者研修会，オンライン，2026.1.7.
71) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）．令和 7 年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2026.1.20.
72) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-ダメ、ゼッタイからの脱却-．長崎大学医学部，長崎，2026.1.28.
73) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援ーゲートキーパーとしての薬剤師に期待することー．高知県薬剤師会自殺予防対策ゲートキーパー研修会，高知，2026.2.1.
74) 嶋根卓也：薬物依存症と性的マイノリティ・HIV・感染症．令和 7 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業　薬物依存症回復施設職員研修，2026.2.16-17.
75) 近藤あゆみ：依存症の家族支援．令和 7 年度　薬物依存症治療指導者/依存症相談対応指導者/地域生活支援指導者養成研修，東京，2025.7.15.
76) 近藤あゆみ：薬物問題をもつ人の家族に対する支援．第 81 回保護観察官中等科研修，オンライン，2025.7.18.
77) 近藤あゆみ：若者の問題行動を読み解き自立と成長を見守る．令和 7 年度 東京都立多摩総合精神保健福祉センター 思春期・青年期相談　第 3 回公開講座，東京，2025.8.25.
78) 近藤あゆみ：質疑応答と意見交換のファシリテーター，令和 7 年度 SeRA ファシリテーターの集い，東京，2025.10.10.
79) 近藤あゆみ：家庭内暴力、貧困、子どもの養育困難…背後に隠れているアディクション問題を見逃していませんか？令和 7 年度西多摩保健所精神保健福祉講演会，東京，2025.10.14.
80) 近藤あゆみ：依存症からの回復を支える「安全」のつくり方．多摩総合精神保健福祉センター主催令和 7 年度家族教室公開講座，東京，2025.10.21.
81) 近藤あゆみ：依存症をもつ人の家族に対する相談支援．鹿児島県精神保健福祉センター主催令和 7 年度依存症支援者研修会，オンライン，2025.10.29.
82) 近藤あゆみ：依存症をもつ人の家族に対する相談支援．東京都立精神保健福祉センター主催令和 7 年度依存症関連機関地域連携会議，2025.10.31.
83) 近藤あゆみ：依存症の家族支援．令和 7 年度東京都依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修，東京，2026.1.20.
84) 近藤あゆみ：アディクション問題を持つ傷つき体験のある女性への支援．令和 7 年年度東京都女性相談支援業務研修，東京，2026.1.28.
85) 近藤あゆみ：依存症回復施設がおこなう地域連携の実際　グループワーク，令和 7 年度薬物依存症回復施設職員研修，東京，2026.2.18.

86) 喜多村真紀：「医薬品を不適正使用するこどもへの支援～心理臨床の視座から～，第 20 回小児医療をみんなで学ぶ会，オンライン，2025.7.3
87) 喜多村真紀：学生相談にできること：オーバードーズと闘う大学生の「物語」を支える，佛教大学学生相談センタースタッフ研修会，オンライン，2025.7.12
88) 喜多村真紀：医薬品を不適正使用する子どもへの支援-心理臨床の視座からー，高崎健康福祉大学学生研修，東京，2025.7.18
89) 喜多村真紀：医薬品不適正使用の実態と支援について，桜美林大学学生相談室カウンセラー研修会，東京，2025.8.6
90) 喜多村真紀：思春期の子どもたちにおける市販薬のオーバードーズの現状，にいがた思春期研究会，新潟，2025.8.24
91) 喜多村真紀：若年の医薬品不適正使用について・医療と学生相談との協働の視点から，文教大学保健センター相談室研究会，埼玉，2025.8.25
92) 喜多村真紀：品川区立教育総合支援センター品川学校支援チーム HEARTS，東京，2025.10.9
93) 喜多村真紀：千代田区保護司会，東京，2025.12.22
94) 喜多村真紀：専修大学職員向け研修，専修大学学生厚生部，東京，2025.12.24
95) 喜多村真紀：専修大学カウンセラー向け研修，専修大学学生相談室，東京，2026.2.4
96) 喜多村真紀：令和 7 年度朝霞保健所支援者向け依存症関連研修会　教育機関と地域における依存の理解と対応～つながりで守る若者の未来～，朝霞保健所，埼玉，2026.2.25
97) 喜多村真紀：武蔵野大学心理臨床センター教育講演会　若者の薬物依存の背景とその支援，武蔵野大学，東京，2026.3.7
98) 喜多村真紀：ゲートキーパーステップアップ講座　こども達のこころの SOS に寄り添う～市販薬の過量服薬の理解と支援～、豊島区健康部保健予防課精神保健グループ，東京，2026.3.24

Ｆ．その他

1) 松本俊彦：「身近な薬物のはなし」について．TBS ラジオ「萩上チキ・Session」，2025.4.23.
2) 松本俊彦：生きるのがつらい．NHK ラジオ「尾崎世界観のとりあえず明日を生きるラジオ」，2025.5.31
3) 松本俊彦：酒・コーヒー・タバコは立派な薬物 薬物依存に詳しい松本俊彦精神科医／内臓や脳に悪影響及ぼすアルコール／カフェインのとりすぎで動悸や心停止も／依存性が他より高いニコチン．TBS×Bloomberg メディア「TBS CROSS DIG」，2025.6.1.
4) 松本俊彦：大麻使用、どこまで認めるべき？．ABEMA 「ABEMA Prime」，2025.7.7.
5) 松本俊彦：サントリーHD の新浪会長が辞任『CBD サプリ』をとりまく現状と課題．TBS ラジオ「荻上チキ・Session」，2025.9.5.
6) 松本俊彦：市販薬依存と「ダメ絶対は、ダメ」．TBS テレビ「CROSS DIG with Bloomberg」，2025.9.26.
7) 松本俊彦：依存症．NHK ハートネット TV 「フクチッチ」，2025.12.13.
8) 松本俊彦：医薬品の過剰摂取について．NHK 総合「あさイチ」，2026.1.14.
9) 松本俊彦：「ダメ！」では止められない薬物依存 害の提言（ハームリダクション）に転換を．社会新報，2025.4.17.
10) 松本俊彦：「中学卒業まではエナジードリンクは飲まないで」薬物依存専門医が警笛。子供がカフェインを常用することの深刻な弊害．FNN プライムオンライン，2025.4.20.
11) 松本俊彦：よい薬物と悪い薬物の区別とは？「身近な薬物のはなし タバコ・カフェイン・酒・くすり」．週間文春，2025.4.24.
12) 松本俊彦：市販薬による乱用・依存患者が増加傾向．国際医薬品情報，2025.4.28.
13) 松本俊彦：著者は語る 身近な薬物のはなし．文藝春秋，2025.5.1

14) 松本俊彦，宇田川元一：精神医学と経営学が交わるとき．Vioce 570：120-130，2025.5.6.
15) 松本俊彦：身近な薬物の話しータバコ・カフェイン・酒・くすりー．TOP POINT，35-38，2025.
16) 松本俊彦：【インタビュー】雑談が人を救うこともある．世界 995：154-161，2025.7.1.
17) 松本俊彦：「仲間と一体感」飲み過ぎはこわい．朝日小学生新聞，2，2025.7.4.
18) 松本俊彦：若者の OD は「人災」、市販薬規制だけでは解決しない．医薬経済 1736 ： 66-67，2025.7.1
19) 松本俊彦：市販薬依存と生きづらさ．女性のひろば 559 ： 81-85，2025.9.1.
20) 松本俊彦：若者の「OD」、製薬企業は現実に向き合うべきだ．医薬経済 1737：58-59，2025.8.1.
21) 松本俊彦：10 代薬物濫用・依存・急増．読売新聞，20，2025.9.4.
22) 松本俊彦：人間と薬物。そのつきあい方．THE BIG ISSUE 512 ： 9-15，2025.10.1.
23) 松本俊彦：特集 依存症 アルコールからゲームまで依存症とその裏にある要因．BAN 313 ：15-23，2025.10.20.
24) 松本俊彦：薬物依存 回復支援 40 年都内「ダルク」がフォーラム．愛媛新聞，2025.10.28.
25) 松本俊彦：「ダルク」40 年フォーラムで決意 「依存症回復支える」．山梨日日新聞，2025.10.28.
26) 松本俊彦：ダルク 40 周年 決意新たに 薬物依存の回復支援 東京で記念催し．京都新聞，2025.10.31.
27) 松本俊彦：「ダルク」決意新たに 記念フォーラム．東京新聞，2025.10.30.
28) 松本俊彦：時代に合わせ寄り添う 薬物依存者支援 ダルクが 40 周年．中日新聞，2025.10.30.
29) 松本俊彦：ダルク 40 周年 決意新た 薬物依存症の回復支援施設．河北新報，2025.10.29.
30) 松本俊彦：なぜ若者はオーバードーズをするのか？．しんぶん赤旗，2026.1.14.
31) 松本俊彦：依存とは「意思の弱さ」ではない．Voice 579 ： 216-223，2026.2.6.
32) 松本俊彦：子どもの悩みの背景に気を配り、”否定”をしない環境をつくる．ウェルおおさか 160：4，2026.2.1.
33) 松本俊彦：オーバードーズ広がる「トー横」．読売新聞夕刊，2026.3.28.
34) 松本俊彦：休肝日は「連続で」2 日取って！脳や筋肉にダメージを与えるダメなお酒の飲み方と、楽しみが「依存」になる時．FNN「プライムオンライン」，2026.3.30
35) 松本俊彦：お酒を「ほどほど」でやめるには“レコーディング”がおすすめ。家族や友人が飲みすぎる場合は「手助けしすぎないで」．FNN「プライムオンライン」，2026.3.30
36) 嶋根卓也：薬物依存者サポートする「ダルク」創設 40 年「弱さ」認め回復へ 段階的ステップで支援 - 産経ニュース，産経新聞，2025.5.10.
37) 嶋根卓也：薬物すがる弱さ認め 40 年_支援施設ダルク．産経新聞（朝刊）, 2025.5.11.
38) 嶋根卓也：若者のオーバードーズ問題の現状と必要な支援． TBS ラジオ，東京、2025.8.1.
39) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用 初推定，背景に孤立や生きづらさ．共同通信，2025.8.13.
40) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用 55 人に 1 人背景に孤独感．東京新聞（夕刊），2025.8.13.
41) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用 「オーバードーズ」厚労省初算出．京都新聞（夕刊），2025.8.13.
42) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用 55 人に 1 人，初の推定 背景に孤立，生きづらさ／厚生労働省調査．デーリー東北，東北新聞，2025.8.13.
43) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用 初推定，背景に孤立や生きづらさ．河北新報 ONLINE，2025.8.13.
44) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用 初推定，背景に孤立や生きづらさ．新潟日報デジ

タルプラス，2025.8.13.

45) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．岩手日報 ONLINE，2025.8.13.

46) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．北日本新聞 webun+，2025.8.13.

47) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．南日本新聞デジタル，2025.8.13.

48) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．山梨日日新聞デジタル，2025.8.13.

49) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．高知新聞 PLUS DIGITAL，2025.8.13.

50) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．山陰中央新報デジタル，2025.8.13.

51) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．東奥日報デジタル，2025.8.13.

52) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．神戸新聞 NEXT，2025.8.13.

53) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．西日本新聞 me デジタル，2025.8.13.

54) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．埼玉新聞，2025.8.13.

55) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．山陽新聞，2025.8.13.

56) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．南日本新聞デジタル，2025.8.13.

57) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．下野新聞 DIGITAL，2025.8.13.

58) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．佐賀新聞，2025.8.13.

59) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．奈良新聞 DIGITAL，2025.8.13.

60) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．福井新聞 ONLINE，2025.8.13.

61) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．山口新聞電子版，2025.8.13.

62) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．千葉日報オンライン，2025.8.13.

63) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　初推定，背景に孤立や生きづらさ．沖縄タイムスプラス，2025.8.13.

64) 嶋根卓也：中学生 55 人に 1 人が市販薬乱用　「オーバードーズ」　厚労省研究班が初調査．北國新聞 DIGITAL，2025.8.13.

65) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用，厚労省研究班調査 55 人に 1 人．室蘭民報オンライン，2025.8.13.

66) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用／55 人に 1 人，初の推定．紀伊民報 AGARA，2025.8.13.

67) 嶋根卓也：中学生の 1.8%市販薬乱用　55 人に 1 人　背景に孤立や生きづらさ．静岡新聞，

2025.8.14.
68) 嶋根卓也：市販薬乱用　中学生の 1.8%　孤立傾向，悩みも多く　厚労省 24 年度推定．下野新聞，2025.8.14.
69) 嶋根卓也：中学生 1.8%市販薬乱用／55 人に 1 人，厚労省初の推定　背景に孤立，生きづらさ．四国新聞 WEB 朝刊，2025.8.14.
70) 嶋根卓也：中学生 1.8%が市販薬乱用　初の推定，背景に「生きづらさ」．北日本新聞 webun+，2025.8.14.
71) 嶋根卓也：中学生 1.8%，市販薬乱用　厚労省が初算出　背景に生きづらさ．福井新聞 D 刊
72) 嶋根卓也：中学生 1.8%が乱用　市販薬，厚労省が推定　昨年度調査．毎日新聞，2025.8.15.
73) 嶋根卓也：（VTR 出演）分析　市販薬乱用のリスクが低いのは 「助けて」のメッセージ　背景に目を向けて．FBS 福岡放送　めんたいワイド，2025.8.19.（放送日）
74) 嶋根卓也：（情報提供）【特集】中学生の 55 人に 1 人が「1 年以内に経験」若者に広がる「オーバードーズ」なぜ 販売の現場では．FBS 福岡放送ニュース，2025.8.23.
75) 嶋根卓也：（監修・資料提供）情報チャージ！チルシル「なぜ広がる　市販薬の乱用」．NHK 総合，2025.9.27.
76) 嶋根卓也：県内 332 人救急搬送 24 年度 オーバードーズ疑い 市販薬「違法じゃない」．上毛新聞，2025.10.4
77) 嶋根卓也：（出演・情報提供）子どもたちに広がる薬の乱用・オーバードーズについて．NHK ニュース たっぷり静岡，2025.10.7.
78) 嶋根卓也：市販薬　販売規制の拡大を検討．朝日新聞，2025.10.23.
79) 嶋根卓也：オーバードーズ対策、市販薬の販売規制の拡大検討　乱用、若者が大半．朝日新聞デジタル，2025.10.23.
80) 嶋根卓也：（ホームページ掲載）「薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2024」報告書より資料提供．市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）について，川越市保健医療部 発行，2025.11.
81) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）オーバードーズ問題で厚労省が新たに 2 成分を販売規制対象へ　8 成分の市販薬が「指定乱用防止医薬品」に　2026 年 5 月から．FNN プライムオンライン，2025.11.11.
82) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）「乱用防止医薬品」8 成分を検討　法改正、市販薬の規制強化　若者オーバードーズ対策・厚労省．時事通信社，2025.11.11.
83) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）オーバードーズ対策で市販薬規制強化　8 成分指定検討　厚労省調査会．毎日新聞，2025.11.11.
84) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）せき止め薬など 2 成分の販売規制へ　厚労省調査会が了承、乱用防ぐ．日本経済新聞，2025.11.11.
85) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）市販薬 2 成分、販売規制へ、過剰摂取対策、厚労省．琉球新報デジタル，2025.11.11.
86) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）オーバードーズ対策で規制強化…新たに 2 成分追加し 8 成分の市販薬対象に　18 歳未満には小容量のみ販売など想定　厚労省．ライブドアニュース，2025.11.12.
87) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）デキストロメトルファンなど指定乱用防止薬へ　厚労省調査会、現行 6 成分から 8 成分に．日経薬業，2025.11.12.
88) 嶋根卓也：（厚労省医薬品等安全対策調査会参考人）「指定乱用薬」含むかぜ薬、7 日以内の包装に　厚労省方針、小容量で．Pharmacy Newsbreak，2025.11.13.
89) 嶋根卓也：（監修）家族が信頼できる支援につながること— オーバードーズで悩んでいる本人、家族、友人のための相談窓口のご案内 —．エスエス製薬コーポレートサイト，2025.12.
90) 嶋根卓也：市販薬の過剰摂取　背景に孤立や生きづらさ．十勝毎日新聞，2025.12.11.

91) 嶋根卓也：若者に広がる市販薬の過剰摂取　背景に孤立や生きづらさ．四國新聞 2025.12.12.
92) 嶋根卓也：市販薬乱用、週に数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．毎日新聞デジタル，2025.12.13.
93) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 厚労省研究班が高校生調査．産経ニュース，2025.12.13.
94) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生に聞く．東京新聞 TOKYO Web，2025.12.13.
95) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．中日新聞 Web，2025.12.13.
96) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．信濃毎日新聞デジタル，2025.12.13.
97) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 高校生経験者、頻度を初算出．静岡新聞デジタル，2025.12.13.
98) 嶋根卓也：市販薬乱用、週に数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．琉球新報デジタル，2025.12.13.
99) 嶋根卓也：市販薬乱用、週に数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．秋田魁新報電子版，2025.12.13.
100) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 高校生経験者に聞く．東奥日報デジタル，2025.12.13.
101) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．福島民友新聞，2025.12.13.
102) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．茨城新聞クロスアイ，2025.12.13.
103) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．千葉日報オンライン，2025.12.13.
104) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．神奈川新聞デジタル，2025.12.13.
105) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．埼玉新聞，2025.12.13.
106) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．山梨日日新聞電子版，2025.12.13.
107) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．伊勢新聞，2025.12.13.
108) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．北日本新聞 Webun，2025.12.13.
109) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．北國新聞デジタル，2025.12.13.
110) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．福井新聞 ONLINE，2025.12.13.
111) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．日本海新聞デジタル，2025.12.13.
112) 嶋根卓也：市販薬乱用、高校生の経験者「週に数回以上」が１割 - 厚労省研究班、初算出．山陰中央新報デジタル，2025.12.13.
113) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．四国新聞デジタル，2025.12.13.

114) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．愛媛新聞 ONLINE，2025.12.13.
115) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．高知新聞 Plus，2025.12.13.
116) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．大分合同新聞デジタル，2025.12.13.
117) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．宮崎日日新聞デジタル，2025.12.13.
118) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．長崎新聞，2025.12.13.
119) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．佐賀新聞 LIVE，2025.12.13.
120) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．北海道新聞デジタル，2025.12.13.
121) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．河北新報オンライン，2025.12.13.
122) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．山形新聞，2025.12.13.
123) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．東愛知新聞，2025.12.13.
124) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．神戸新聞 NEXT，2025.12.13.
125) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．京都新聞，2025.12.13.
126) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．奈良新聞デジタル，2025.12.13.
127) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．山陽新聞デジタル，2025.12.13.
128) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．中国新聞デジタル，2025.12.13.
129) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．徳島新聞デジタル，2025.12.13.
130) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．西日本新聞，2025.12.13.
131) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．熊本日日新聞，2025.12.13.
132) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 経験者の高校生、頻度を初算出．南日本新聞，2025.12.13.
133) 嶋根卓也：【独自】市販薬乱用、週数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．日刊スポーツ，2025.12.13.
134) 嶋根卓也：【独自】市販薬乱用、週数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．スポニチ Sponichi Annex，2025.12.13.
135) 嶋根卓也：市販薬乱用、週数回以上１割 - 高校生の経験者回答、頻度初算出．MEDIFAX web，2025.12.13.
136) 嶋根卓也：子ども　市販薬の過剰摂取　背景に孤立や生きづらさ．八重山毎日新聞，

2025.12.21.

137) 嶋根卓也：（情報提供）なぜひろがる？市販薬の過剰摂取．５分でわかる時事ニュース～チルシル mini～，NHK，2025.12.24.

138) 嶋根卓也：（情報提供）市販薬の過剰摂取＝オーバードーズの背景は？当事者や医師などに聞く．ゆう６かがわ，NHK 高松放送局，2026.3.12

5. 行動医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題，特にトラウマ性疾患やうつ病についての病態解明，治療研究に取り組むとともに，自然災害，犯罪被害，虐待等におけるストレスを緩和し，効果的な治療と支援の研究を進め，代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している．各種震災，事故等に際しての，効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる．

また，心身症や摂食障害を対象に，Bio-Psycho-Social モデルに基づき，心身相関の観点から病因や発症のメカニズム，病態を臨床的，基礎的に研究し，効果的な治療法や予防法の開発を進めるとともに，摂食障害全国支援センターが当研究部内に設置されている．

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院精神科外来で診療・研究に携わっている．

令和 7 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：堀 弘明．心身症研究室長：関口 敦．診断技術研究室長：小川眞太朗．ストレス研究室長：井野敬子．精神機能研究室長：成田 瑞．災害等支援研究室長：大沼麻実．認知機能研究室長：石渡小百合．リサーチフェローは伊藤（丹羽）まどか，井上智子，勝沼るり．テクニカルフェローは島津友梨，遠藤 香．科研費研究員は髙村恒人，小原千郷，中野稚子．科研費心理療法士は蔵下智子．科研費研究補助員は吉田冬子，中村美幸．研究生は菅原まゆみ，井上朋子，藤内温美，土嶺章子，Siti Nurul Zhahara，松尾侑佳，河西ひとみ，道川由佳子，関場 遙，須田晶子，Laura Elisabeth Tuturea，石田一希．客員研究員として守口善也，寺澤悠理，森野百合子，中島聡美，田中英三郎，筧 亮子，堀 有伸，須賀楓介，袴田優子，中山未知，伊藤真利子，船場美佐子，安藤哲也，大友理恵子，横田悠季，平野好幸，白川美也子，坂口昌徳，利重裕子，富田吉敏，金 吉晴，鈴木仁美，功刀 浩，篠山大明の各氏を迎えている．（順不同）

II. 研究活動

1） 複雑性 PTSD に関する治療法と診断評価尺度の検証

複雑性PTSDに対する認知行動療法である，STAIR Narrative Therapyの無作為化比較試験を計画し，倫理委員会での承認を経て，リクルートを開始した．加えて，本年度は当該治療のオープン試験から，治療前後での認知機能の改善に関する論文をEuropean Journal of Psychotraumatology誌に発表した．また日本語版の国際トラウマ面接（ITI）および国際トラウマ質問票（ITQ）の妥当性研究を進め，2025年3月までに106名に面接を行い，データ収集を完了した．（金，丹羽，中野，島津，蔵下，遠藤，堀）

2） PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた，遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者（PTSD 群，非発症群）と健常者を対象とし，遺伝子解析・発現解析，内分泌・免疫系マーカー測定，自律神経機能解析，脳 MRI 計測，認知機能測定，心理・臨床評価を行い，PTSD の病因病態解明，客観的治療効果予測法の開発を目指す．現在までに 381 名のデータを収集し継続中．本年度は PTSD におけるワーキングメモリ障害の特徴に関する論文を European Journal of Psychotraumatology 誌に発表した．また，炎症・代謝に関する視点での総説作成や検体解析（インスリンなど）を行なった．（堀，丹羽，金，井野，吉田，島津，遠藤，蔵下，小川，中村，伊藤）

3） PTSD に対するメマンチンの有効性に関する臨床試験

PTSD 患者において，抗認知症薬メマンチンの有効性を検討する．初めにオープン臨床試験を行い，すでに目標症例数である計 20 名を組み入れ，データ収集を完了した．顕著な症状改善効果が得られ，忍容性も良好であった．この結果を受けて現在，PTSD に対するメマンチンの有効性と安全性を検証する RCT を実施しており，また，RCT を完了した被験者を対象としたメマンチン長期

オープン試験を実施している．並行して，メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定，脳 MRI 計測を行い，治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指す．（堀，小川，井野，成田，丹羽，藤内，島津，遠藤，蔵下，金）

4） PTSD に対するメマンチンの有効性及び安全性を評価する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験

PTSD に対するメマンチンの有効性を実証するため，中等症以上の PTSD 患者 40 例を目標として無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験を実施している（特定臨床研究：CR21-005）．服用開始から 13 週後の PTSD 症状に対する改善効果を主要評価項目とし，副次評価項目も併せてプラセボに対する実薬の優越性を検討する．R7 年度は 20 例の同意を得，11 例の患者を組入れた．現在，対象者リクルートを継続中である．（堀，小川，井野，成田，藤内，丹羽，島津，蔵下，遠藤，金）

5） 血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し，タンパク・mRNA・代謝物などを定量し，統合失調症や気分障害の診断法や分類，経過判定指標に役立つ分子の同定を目的とする．神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施し，すでに約 3,000 名の被験者のサンプルが集積されている．これらの血液サンプルを用いて上記の測定を行い，精神疾患のバイオマーカー候補を探索している．（堀，小川，石渡，吉田，中村，功刀）

6） ヒト毛髪を用いた精神疾患バイオマーカーの探索

気分障害，精神病性障害，PTSD 等の精神疾患を対象として，毛髪中のステロイドホルモンなどの濃度を測定し，バイオマーカーの同定を目的とする．神経研究所疾病研究第三部，センター病院，MGC バイオリソース部との共同研究として実施している．（堀，吉田，蔵下，石渡，土嶺，功刀）

7） 情報処理バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として，記憶領域にも働きかける新しいCBM の有効性およびその神経作用機序について，北里大学，労働安全総合研究所等と共同で，fMRI や遺伝子，内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証している．本年度は Psychological Medicine 誌に論文を発表した．（袴田，堀）

8） 摂食障害支援拠点病院における相談・支援事例の調査

摂食障害支援拠点病院での相談・支援事例を収集，集積し，内容を解析し，摂食症の支援体制モデルの確立に資するための研究を実施した．令和 7 年度報告書においては，平成 30 年度から令和 6 年度における 4-8 カ所の支援拠点病院と相談「ほっとライン」の経年的な相談集計を報告書にまとめた．（井上，井野，関口）

9） 摂食障害支援拠点病院における摂食障害入院データの調査・解析

摂食障害支援拠点病院での入院事例を収集，集積し，内容を解析し，摂食症の診療連携モデルの確立に資するための研究を開始した．R6 年度 8 拠点病院にてデータ収集を開始し，R7 年度時点で 10 拠点病院からデータを収集している．（井上，井野，関口）

10）神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食症の認知行動療法「改良版」（enhanced cognitive behavior therapy：CBT-E）の効果検証のため，東京大学，東北大学，九州大学，国立国際医療研究センター国府台病院，および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験を実施している．NCNP においてはすでに登録は終了し，協力施設においてもデータ収集が完了した．現在，データ解析を進めながら論文作成の準備中である．（小川，小原，船場，富田，安藤）

11）摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法（CBT）前後の縦断的観察研究を実施し，CBT 前後の脳 MRI，臨床データ，遺伝子発現データを収集し，CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す．本年度の成果として，Scientific Reports 誌，Biological Psychiatry: Global Open Science 誌に論文が出版されている．（関口，井野，安藤，堀，勝沼，髙村，船場，小原，守口，富田）

12）病院 気分障害センターおよびバイオバンクとの共同研究

NCNP 病院・気分障害センターおよび NCNP バイオバンクと連携した共同研究課題を実施して

いる．うつ病など多くの精神疾患の発症リスクは幼少期トラウマ（小児期逆境体験）の経験率に伴い上昇することが報告されているが，本課題ではこれまで気分障害センター外来を受診し，バイオバンクでの研究参加登録を頂いた方々の試料と情報を対象として，小児期逆境体験とうつ病など精神症状の発現とに関連する生物学的マーカーの探索を目的として解析を進めている.（小川, 堀, 金, 功刀）

13）病院 脳神経内科診療部との共同研究

NCNP 病院 脳神経内科診療部における「中枢神経系炎症性脱髄疾患の患者」を対象に，精神症状・高次機能障害を評価し，その特徴とリスク因子の関連性について「小児期逆境体験」や QOL に着目しながら広く解析することで，脳神経内科および精神科領域において将来的な医療・研究につなげるための検討を行なう．データはすでに収集を完了し，R7 年度は論文化のための最終的な作業を進めた．（小川，堀，金）

14）機能性精神疾患における心理的機能に関する研究

統合失調症患者，気分障害患者，健常対照者を対象に合計 2,700 名から取得した認知機能障害やパーソナリティ特性等の既存データを解析し，これらの患者における心理的特徴およびそれに寄与する要因を明らかにする. 神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している.（堀, 小川, 功刀）

15）北茨城の被災地住民を対象とする精神医学的コホート研究

東日本大震災後に北茨城市の被災地住民に対するメンタルケアおよび調査・検体解析研究を実施した．その際に取得された既存資料・試料を新たに解析することで，うつ病や PTSD の発症リスクに関わる環境要因や遺伝要因を明らかにし, バイオマーカーの探索を行う． 筑波大学等との共同研究として実施している．（堀，小川，吉田，功刀）

16）心的外傷後ストレス障害に対するオンライン持続エクスポージャー療法の有効性検証:多施設ランダム化比較試験

ウェブ会議システムを利用してオンラインの持続エクスポージャー療法を行う介入群とかかりつけ医の通常治療を継続する対照群の 2 群の RCT である．遠隔地にトラウマ専門治療を提供し医療格差を是正し実装を進めることが本研究の構想である．9 例のリクルートを終了した.（井野，藤内，中野，須賀，利重，田中，丹羽，小川，井上）

17）心的外傷後ストレス障害に対する睡眠中音エクスポージャーの実施可能性確認研究 (PTSD 睡眠中音刺激研究)

トラウマを想起させるテーラーメイドの音刺激を作成し，それを徐波睡眠中に聞かせる研究の実施可能性を検証する研究である．目標症例数の 6 名に介入を終了し，重大な有害事象は認められなかった．論文を投稿準備中である.（井野，金，中野，藤内，坂口，関場）

18）難民・移民のこころのケアを広める研究 —支援者のメンタルヘルス実態調査とトラウマインフォームドケア研修－

難民支援職を対象として支援環境とメンタルヘルスの状態の関連を調査し，また質的なインタビューによって支援体験がメンタルヘルスに与える影響を検討する．本研究ではトラウマインフォームドケアの研修を実施し，支援者支援も合わせて行なっていく.（井野，堀，須田，中野，田中）

19）エタノールアミンを軸としたうつ病の新規バイオマーカー開発および新たな治療標的としての可能性の検討

エタノールアミンというアミノ酸関連分子に着目し，ヒトでの脳脊髄液サンプルにおける症状や治療との関連，疾患特異性や新規サンプルでの再現性，動物（ラット）でのバイオマーカーとしての検討や治療効果の検討など，オミックスやバイオインフォマティクスといった手法も用いながら，多面的かつ多層的な解析を実施した．その結果，エタノールアミンがトランスレータブルマーカーとしてうつ病・うつ症状に特異的なマーカーとして用いうることや治療効果を有する可能性が示唆された．R7 年は国内での特許出願を行ない，また，投稿した論文が Molecular Psychiatry 誌にアクセプトとなった.（小川，堀，金，功刀）

20）東京都医学総合研究所との共同研究：ペントシジンの媒介効果

Tokyo Teen Cohort を対象とした共同研究を行った．いじめ被害から精神症と抑うつに到る経路における，ペントシジンの媒介効果を評価した．この研究結果は Molecular Psychiatry 誌に発表した．（成田）

21）東京都医学総合研究所との共同研究：不適切なオンラインゲーム使用の媒介効果

Tokyo Teen Cohort を対象とした共同研究を行った．不適切なオンラインゲーム使用が，注意欠如・多動からメンタルヘルスへの経路を媒介することを評価した．この研究結果は Communications in Psychology 誌に発表した．（成田）

22）東京都医学総合研究所との共同研究：時間依存性曝露の研究

Tokyo Teen Cohort を対象とした共同研究を行った．持続する孤独感とメンタルヘルスの関連を解析した．この研究結果は Journal of Child Psychology & Psychiatry 誌に発表した．（成田）

23）国立がん研究センターとの共同研究：精神疾患・がん・心血管疾患の媒介効果

JPHC-NEXT コホート，および電子化医療情報を対象とした共同研究を行った．社会的因子とウェルビーイングの関連における，精神疾患・がん・心血管疾患の媒介効果を解析した．これらの結果は SSM Mental Health 誌に発表した．（堀，成田）

24）LLM の診断能力の研究

当センターの PTSD データを用いて，LLM の診断，予測能力を測定した．これらの結果は BMJ Digital Health 誌に発表した．（成田，丹羽）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 摂食障害情報ポータルサイト（一般向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_general/，専門職向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_pro/）を運営し，市民および専門職への摂食症の普及・啓発を行った令和 7 年度（令和 7 年 4 月 1 日～令和 8 年 3 月 31 日）のページビュー数（閲覧された回数）は，一般向け 444,349，専門向け 90,793，総ユーザー数は，一般向け 199,357，専門向け 40,180 であった．摂食障害全国支援センターの HP ページビュー数は，59,277，総ユーザー数は 21,535 であった．（井野，関口，井上，小原，大沼）

(2) 専門教育面における貢献

- 客員教授：早稲田大学人間科学学術院（堀），東北大学大学院医学系研究科（関口）
- 非常勤講師：愛知学院大学心身科学部（井野）
- 客員講師：名古屋市立大学（井野）

(3) 精研の研修の主催と協力

- 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．災害時 PFA と心理対応研修（前半対面，後半オンライン）．第 15 回 2025.10.8, 2025.10.16.（堀，大沼）
- 令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 1（オンライン）．2025.10.24.（堀）
- 令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 2（オンライン）．2025.11.20.（堀）
- 令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 1（オンライン）．2025.12.10-11.（堀）
- 令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 2（対面）．2026.1.20-21.（堀）
- 令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　C.犯罪・性犯罪被害者コース（オンライン）．2026.2.9-10.（堀）
- 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．摂食障害外来治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～（オンライン）．第 10 回 2025.5.24，第 11 回 2025.11.9.（井野，井上，大沼）
- 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～（オンライン）．第 5 回 2025.7.12，第 6 回 2025.12.14.（井野，井上，大沼）
- 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．摂食障害小児治療研修（オンライン）．第 2 回 2025.8.24，第 3 回 2026.1.31.（井野，井上，大沼）
- 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．第 22 回摂食障害専門治療研修（オンライン）．2025.9.3-5.（井野，井上，大沼）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

① 摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成 26～令和元年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され，令和 3 年度より摂食障害全国支援センター（全国支援センター）に改称され，事務局実施責任者（センター長）を井野が，実施担当者を関口，井上が担当した．令和 7 年 7 月に富山県（富山大学），同年 8 月に長野県（信州大学）に摂食障害支援拠点病院設置され，4 年連続で新規指定された．令和 8 年 3 月時点において全国で 10 拠点となっている．6 月 1 日には摂食症協会と共催し啓発イベント「世界摂食症アクションデイ」をオンライン開催した．全国支援センターの運営を行い，全国摂食障害対策連絡協議会及び摂食障害支援拠点病院連携ミーティングを開催し，摂食障害支援拠点病院を統括，ポータルサイトを運営および記事の更新をした．また，国立国府台医療センターに委託をして，全国の患者・家族・医療関係者を対象とした摂食障害の電話相談窓口『摂食障害「相談ほっとライン」』を継続している．（精神保健等国庫補助金：井野，関口，井上，大沼）

(5) センター内における臨床的活動

・ センター病院に併任し，外来診療を行っている．（堀，井野）
・ 摂食症患者の認知行動療法を実施している．（井野，井上）

(6) その他

・ 国際緊急援助隊（JDR）医療チーム登録者（井野）

Ⅳ. 研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Narita Z, Inoue K, Kanehara R, Hori H, Ihira H, Yasuda N, Saito I, Kato T, Arima K, Nakashima H, Tanno K, Takanashi N, Yamagishi K, Muraki I, Yamaji, Iwasaki M, Inoue M, Goto A, Tsugane S, Sawada N: Mental disorders, cancers, and cardiovascular diseases mediate the associations of psychosocial factors with well-being and ikigai: a population-based cohort study. SSM Mental Health 8:100527, 2025.

2) Niwa M, Kato T, Suga Y, Otomo R, Sugawara M, Matsui M, Kamo T, Hori H, Kim Y: Neurocognitive functioning over the course of STAIR Narrative Therapy for ICD-11 complex PTSD. Eur J Psychotraumatol 16(1)： 2523079, 2025.

3) Ueda N, Lin M, Itoh M, Hori H, Narita Z, Niwa M, Ino K, Narita M, Nakano W, Imai R, Matsui M, Kamo T, Kim Y: Decreased non-emotional working memory capacity in women with PTSD: association with symptomatology. Eur J Psychotraumatol 16(1):2543079, 2025.

4) Hakamata Y, Mizukami S, Izawa S, Matsui M, Moriguchi Y, Hanakawa T, Hori H, Inoue Y, Tagaya H. The effectiveness and neurobiological actions of memory bias modification: a randomized controlled trial. Psychol Med. 55: e386, 2025.

5) Sudo Y, Kamashita R, Takamura T, Hamatani S, Numata N, Matsumoto K, Sato Y, Hamamoto Y, Shoji T, Muratsubaki T, Sugiura M, Fukudo S, Kawabata M, Sunada M, Noda T, Tose K, Isobe M, Kodama N, Kakeda S, Takahashi M, Adachi H, Takakura S, Gondo M, Yoshihara K, Moriguchi Y, Shimizu E, Sekiguchi A, Hirano Y: A multicenter cross-sectional study to elucidate altered resting-state functional connectivity of the insular cortex in anorexia nervosa, segmented by functional localization. Scientific reports 15(1): 19118, 2025.

6) Hamatani S, Matsumoto K, Andersson G, Sato Y, Fukudo S, Sudo Y, Hirano Y, Ino K, Ishibashi T, Tomioka Y, Umehara H, Numata S, Nakamura M, Otani R, Sakuta R, Sekiguchi A, Kosaka H, Mizuno Y, HOPE Project Consortium: Guided internet-based cognitive behavior therapy for women with bulimia nervosa: a randomized clinical trial.

JAMA Network Open (8)8: e2525165, 2025.

7) Narita Z, DeVylder J, Knowles G, Ando S, Yamasaki S, Miyashita M, Stanyon D, Yamaguchi S, Furukawa TA, Kasai K, Nishida A: Problematic online gaming mediates the association between attention-deficit/hyperactivity and subsequent mental health issues in adolescents. Commun Psychol 3(1): 117, 2025.

8) Narita Z, Ledsam JR, Niwa M, Kawada N, Galatzer-Levy IR, Kim Y: Can Generative AI Assess PTSD? A Clinical Validation Study of Transcribed and Direct Audio Input Modalities. BMJ Digital Health & AI 1(1): e000042, 2025.

9) Narita Z, DeVylder J, Knowles G, Yamasaki S, Miyashita M, Stanyon D, Yamaguchi S, Shinozaki T, Sasaki R, Zhou R, Ando S, Morgan C, Dazzan P, Furukawa TA, Kasai K, Kelleher I, Nishida A: Loneliness patterns across time and subsequent risk of psychotic experiences, depression, anxiety, and diminished well-being in adolescents. J Child Psychol Psychiatry doi: 10.1111/jcpp.70114, 2026.

10) Miyashita M, Narita Z, Devylder J, Yamasaki S, Ando S, Toriumi K, Yamaguchi S, Nakanishi M, Hosozawa M, Koike S, Suzuki K, Baba K, Niimura J, Nakajima N, Anglin D, Knowles G, Morgan C, Richards M, Hiraiwa-Hasegawa M, Furukawa TA, Kasai K, Nishida A, Arai M: Examining Glycation as a Mediator Linking Bullying to Psychotic Experience and Depressive Symptom in Adolescents. Mol Psychiatry doi: 10.1038/s41380-026-03521-7, 2026. Co-first author.

11) Miyashita M, Narita Z, Devylder J, Yamasaki S, Ando S, Toriumi K, Yamaguchi S, Nakanishi M, Hosozawa M, Koike S, Suzuki K, Baba K, Niimura J, Nakajima N, Anglin D, Knowles G, Morgan C, Richards M, Hiraiwa-Hasegawa M, Furukawa TA, Kasai K, Nishida A, Arai M: Examining Glycation as a Mediator Linking Bullying to Psychotic Experience and Depressive Symptom in Adolescents. Mol Psychiatry doi: 10.1038/s41380-026-03521-7, 2026. (Co-first author.)

12) Tuturea LE, Narita Z, Shimomura K, Nakano W, Newnham EA, Kim Y: Long-term mental health trajectories after the Great East Japan Earthquake: A systematic review. Eur J Psychotraumatol 16(1): 2592408, 2025.

13) Maruyama-Sakurai K, Tachimori H, Honjo K, Kunugi H, Saito I, Kato T, Arima K, Tomita Y, Tanno K, Yamagishi K, Iso H, Yasuda N, Narita Z, Kim Y, Yamaji T, Iwasaki M, Inoue M, Tsugane S, Sawada N: Associations between work-family conflict and depressive symptoms and effect modification by social support and income among Japanese workers: A community-based cross-sectional study. PCN Rep 4(4): e70252, 2025.

14) Hazumi M, Kataoka M, Narita Z, Usuda K, Okazaki E, Nishi D: Psychological distress after COVID-19 recovery and subsequent prolonged post-acute COVID-19 syndrome: A longitudinal study with one-year follow-up in Japan. J Psychosom Res 196: 112323, 2025.

15) Tanaka S, Ihira H, Tajima T, Kanehara R, Inoue Y, Doi T, Kobayashi N, Kato Y, Nishita Y, Konishi M, Nakao YM, Kabe I, Morioka C, Dohi S, Khairan P, Arafa A, Narita Z, Morisaki N, Lu Y, Otsuka R, Yamaji T, Shimada H, Mizoue T, Sawada N, Tsugane S, Iwasaki M, Inoue M: Birth cohort-specific smoking patterns in Japan (1906-2004): a population-based study from the NC-CCAPH consortium. Lancet Reg Health West Pac 58: 101562, 2025.

16) Fukaguchi K, Shinozaki T, Narita Z, Goto A: Effect of early healthcare visits on cardiovascular disease risk in people with newly screened diabetes: emulating a target trial using a large insurance database. Diabetes Res Clin Pract doi: 10.1016/j.diabres.2025.113020, 2026.

17) Sekiba H, Hirohata S, Hori A, Suga Y, Toshishige Y, Vergara P, Masaki M, Tominaga M, Yanagisawa M, Kim Y, Sakaguchi M: REM sleep rhythm impairment in people with

PTSD. medRxiv 2025.07.02.25330609, 2025.
18) Hong J. S, Kim Y, Sim M, HanD. H: Brain volume and functional connectivity in firefighters with posttraumatic stress disorder. Psychological Trauma doi: 10.1037/tra0002131, 2026.

(2) 総説

1) Hakamata Y, Hori H. Neurobiological effects of childhood maltreatment: Health consequences, recovery pathways and clinical implications for holistic care. Adv Clin Exp Med. 34(11): 1803-1806, 2025.
2) Narita Z, Shinozaki T, Furukawa TA, Nishida A: Can We Finally Identify the Psychological Effect of Body Size? A Century from Kretschmer to Mendelian Randomization. J Epidemiol doi: 10.2188/jea.JE20250679. 2026.
3) Narita Z, Knowles G, Yamasaki S, Kasai K, Nishida A: The silent crisis in girls' mental health. Nat Hum Behav 9(12): 2409-2410, 2025.
4) Narita Z, Krishna RN, Wright M, Dantas JAR, Newnham EA: U.S. funding cuts and the future of disaster mental health in the Asia Pacific. Asian J Psychiatr 112:104702, 2025.
5) Narita Z, Miyashita M, Furukawa TA, Nishida A: Key Considerations in Mediation Analysis for Psychiatric Research. JAMA Psychiatry 82(7): 634-636, 2025.
6) Narita Z. Bias against psychotic experiences in peer review. Psychiatry Res 350: 116549, 2025.
7) 堀 弘明：ライフサイクルをまたぐ ACEs の連鎖-生物学的観点からの検討．精神医学 68(3)：298-303，2026.
8) 堀 弘明：心的外傷後ストレス症（PTSD）と身体症状．精神医学 68(2)： 208-213，2026.
9) 堀 弘明：PTSD の治療的介入に対するゲノム情報活用の可能性．臨床精神薬理 28(12)：1293-1298，2025.
10) 堀 弘明：救急で出遭う"こころの病気" PTSD,複雑性 PTSD．救急医学 49(12)：1469-1476，2025.
11) 堀 弘明：認知と炎症に着目した PTSD の遺伝学的検討．ファルマシア 61(9)：822-826，2025.
12) 金 吉晴，堀 弘明：PTSD の持続エクスポージャー療法．日本精神科病院協会雑誌 44(8)：811-816，2025.
13) 堀 弘明：PTSD の概略・診断・薬物療法．ストレス科学研究 38：3-8，2025.
14) 堀 弘明：PTSD への薬物療法 メマンチンを中心に．心と社会 56(2)：98-103，2025.
15) 堀 弘明：PTSD における生物学的基盤を考慮した薬物療法．臨床精神薬理 28(5)：499-505，2025.
16) 小川眞太朗，堀 弘明：PTSD における代謝と炎症―栄養精神医学の視座から―．臨床精神医学 55 (1)： 43-50，2026.
17) 丹羽まどか：心的外傷後ストレス症（PTSD）に対する心理療法．ストレス科学研究 38：9-13，2025.
18) 丹羽まどか:複雑性 PTSD 総論／STAIR Narrative Therapy．日本精神科病院協会雑誌 44(8)：56-60，2025.
19) 丹羽まどか:複雑性 PTSD の治療．精神科 Resident 6(4)：23-25，2025.
20) 丹羽まどか:複雑性 PTSD．臨床精神医学 54（増刊号）：168-174，2025.
21) 船場美佐子：過敏性腸症候群に対する認知行動療法．日本心療内科学会誌 29(3)： 102-105，2025.

(3) 著書

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

1) Narita Z: Antipsychotic therapy and suicide risk in patients with treatment-resistant depression: target trial emulation framework study: Commentary, Narita. Br J Psychiatry 228(1): 78, 2026.
2) Narita Z: Bias against psychotic experiences in peer review. Psychiatry Res 350:116549, 2025.
3) Narita Z: Concerns Regarding Masataka et al.'s "Revisiting the Gateway Drug Hypothesis for Cannabis: A Secondary Analysis of a Nationwide Survey Among Community Users in Japan". Neuropsychopharmacol Rep 45(3): e70057, 2025.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

1) Ino K, Gisella Vetere; Clinical Application of Auditory VR for PTSD Treatment. The 48th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society (Neuroscience 2025), Toki Messe, Niigata, Japan, 2025.7.27.
2) Narita Z: Causal inference for mental health. King's College London, UK, 2025.5.1.
3) Narita Z: What innovations in healthcare have helped Japan better support older adults, and what barriers remain to improving outcomes further? International Longevity Centre UK Research Symposium: What can England's upcoming 10-year health plan learn from Japan about responding to an ageing society?, UK, 2025.7.10.
4) Narita Z: Psychological Impacts of Disasters and MHPSS in the Asia Pacific. The World Health Organization MHPSS Expert Consultation Meeting, Kobe, 2025.10.27.
5) Narita Z: What causal mediation analysis adds to biological psychiatry. 2nd International Conference on Immunity and Cognition: integration of multidisciplinary approaches in Neuroscience, Endocrinology, Metabolic biology and Osteoimmunology, Niigata, 2026.3.3-6.
6) 堀 弘明：PTSD と炎症．シンポジウム 31「炎症と免疫から考え直す精神疾患」BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会年会・第 35 回日本臨床精神神経薬理学会年会・第 55 回日本神経精神薬理学会年会），京都，2025.11.15.
7) 堀 弘明：逆境的小児期体験と神経生物学．シンポジウム 3「周産期メンタルヘルスと小児期逆境体験」，第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.
8) 井野敬子，井上智子，関口 敦：シンポジウム 7「当事者が求める情報とは？どう伝えるのか？」相談データから紐解く−当事者が求める情報とは−．第 28 回日本摂食障害学会学術集会（テーマ：摂食障害治療の進化と展望），東京，2025.10.18-19.
9) 井野敬子：シンポジウム 4「摂食障害治療支援拠点病院の役割〜福井県、石川県、栃木県、東京都など新しく拠点病院となった都道府県の実態と今後の展開について〜」摂食障害支援拠点病院設置運営事業 - 事業開始から 10 年のいま，この 5 年の新たな設置を振り返る - ．第 28 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2025.10.18-19.
10) 井野敬子：シンポジウム D4 「音 VR による PTSD 治療の新展開(スマホ・イヤホン持参推奨)」視覚に依存しないエクスポージャー療法の可能性．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会，東京，2025.8.3.

11) 井野敬子：シンポジウム 13「新規治療はどのように生まれるか―基礎・臨床・テクノロジーの融合と発展」．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19–21.
12) 成田 瑞：因果媒介分析の注意点．国立がん研究センター，東京，2025.5.15.
13) 成田 瑞：教育講演．精神医学研究における解析の新展開：交絡調整から媒介分析まで．第 38 回日本総合病院精神医学会総会，栃木，2025.11.21-22.
14) 丹羽まどか：トラウマはコンパッションをどのように蝕むのか？DSO 症状から傷跡を紐解く．シンポジウム SS34（指定討論），日本心理学会第 89 回大会，宮城，2025.9.6.
15) 坂口昌徳，関場 遥，廣幡小百合，堀 有伸，須賀楓介，利重裕子，正木みのり，Pablo V，富永杜絵，柳沢正史，金 吉晴：シンポジウム 13 PTSD 患者の睡眠特性と睡眠時音刺激治療の実現可能性．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025.6.19-21.
16) 金 吉晴：ランチョンセミナー1「PTSD の診断的位置付け」．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会，東京，2025.8.2.
17) 金 吉晴：（指定討論）シンポジウム D4 「音 VR による PTSD 治療の新展開(スマホ・イヤホン持参推奨)」視覚に依存しないエクスポージャー療法の可能性．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会，東京，2025.8.3.

(2) 一般演題

1) Sekiguchi A, Katsunuma R, Takamura T, Hamamoto Y, Sato Y, Sudo Y, Hirano Y, Nohara N, Yoshiuchi K, Tose K, Isobe M, Kodama N, Gondo M, Takakura S, Yoshihara K, Moriguchi Y: Regional reduction of gray matter volume in anorexia nervosa: Comparison with constitutionally underweight healthy women in Japan. NEURO 2025, Niigata, 2025.7.24-27.
2) Sekiguchi A, Takamura T, Katsunuma R, Yamada M: Proof of Mechanism for Transcutaneous Auricular Vagus Nerve Stimulation: Interoceptive Enhancement and Brain Network Modulation Immediately After Stimulation. Society for Biopsychosocial Science and Medicine, Chicago, 2026.3.11-14.
4) Ino K, Zempo K, Hori A, Yamauchi Y, Sakaguchi M: Therapeutic potential of auditory virtual reality exposure therapy for PTSD. 18th Biennial Conference of the European Society for Traumatic Stress Studies (ESTSS 2025), Tbilisi, Georgia, 2025.6.12-15.
5) Zempo K, Ino K, et al.： Auditional Virtual Reality for PTSD Treatment: Automated Synthesis with Generative AI and Game Engines. 189th Meeting of the Acoustical Society of America / Sixth Joint Meeting ASA & ASJ, Honolulu, Hawaii, 2025.12.1-5.
6) Tuturea LE, Narita Z, Shimomura K, Newnham EA, Kim Y: Long-term mental health trajectories after the Great East Japan Earthquake: A systematic review. World Association for Disaster and Emergency Medicine 23rd Congress, Tokyo, 2025.5.2-6.
7) Nakano W, Tuturea LE, Endo K, Shimazu Y, Hori H, Yoshiike T, Utsumi T, Oba M, Kuriyama K, Narita Z: Effects of Sedentary Behavior Reduction Interventions on Occupational Mental Health: A Systematic Review of Randomized Controlled Trials. AIHA Connect 2025, Kansas City, USA, 2025.5.19-21.
8) Katsunuma R, Takamura T, Sudo Y, Kamashita R, Shimizu E, Matsumoto K, Ino K, Fukudo S, Sato Y, Nohara N, Yoshiuchi K, Isobe M, Kodama N, Takahashi M, Ide S, Okada K, Yoshihara K, Takakura S, Gondo M, Moriguchi Y, Hirano Y, Sekiguchi A: Volumetric Markers in Bulimia Nervosa: A Multi-site Longitudinal Study using ComBat Harmonization. The Organization for Human Brain Mapping 2025 Annual Meeting, Brisbane, Australia. 2025.6.24-28.
9) 小川眞太朗，藤野武彦，馬渡志郎，若菜智香子，小倉 淳，森﨑智美，漢人真由美，譜久里紀子，堀 弘明，服部功太郎，金 吉晴，功刀 浩：プラズマローゲン摂取によるヒトの精神症状および

動物行動への効果の検討．第 47 回日本生物学的精神医学会年会・第 35 回日本臨床精神神経薬理学会年会・第 55 回日本神経精神薬理学会年会 合同年会（BPCNPNP2025），京都，2025.11.13-15.

10）小川眞太朗，堀 弘明，服部功太郎，譜久里紀子，漢人真由美，金 吉晴，功刀 浩：逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発―リン脂質を軸に―．第 47 回日本生物学的精神医学会年会・第 35 回日本臨床精神神経薬理学会年会・第 55 回日本神経精神薬理学会年会 合同年会（BPCNPNP2025），京都，2025.11.13-15.

11）井野敬子，藤内温美，利重裕子，中野稚子，須賀楓介，田中英三郎，丹羽まどか，小川眞太朗：PTSD に対するオンライン持続エクスポージャー療法の多施設ランダム化比較試験-研究プロトコール-．第 24 回日本トラウマティック・ストレス学会学術総会，東京，2025.8.2-3.

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

1） 堀 弘明：PTSD の診断と治療．第 81 回関東心療内科連絡会，東京，2025.9.27.

2） 堀 弘明：知っておきたい，トラウマと PTSD のお話．2025 年度気分障害センター オンライン市民公開講座，東京，2025.12.6.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1） 堀 弘明：日本生物学的精神医学会　評議員

2） 堀 弘明：日本精神神経学会 専門医試験症例報告審査班 班員

3） 関口 敦：日本心身医学会　代議員，幹事、戦略・評価委員

4） 関口 敦：日本摂食障害学会　評議員，学術交流委員会，ガイドライン作成委員，利益相反・倫理委員，国際交流委員

5） 関口 敦：日本心療内科学会　評議員、施設共同リサーチプロジェクト委員

6） 井野敬子：トラウマティック・ストレス学会　理事　広報委員長

7） 井野敬子：日本精神神経学会　災害対策委員

8） 成田 瑞：日本精神神経学会　ICD-11 委員

9） 成田 瑞：American Psychiatric Association, International Fellow

10）成田 瑞：日本疫学会 学術委員会 疫学教育推進ワーキンググループ 委員

11）成田 瑞：日本統合失調症学会 大会委員

(3) 座長

1） Kim Y, Fung D.S.S: Symposium 48 Dialogue in PTSD: clinical support and basic science. PRCP & WACP 2025 Joint Congress, Tokyo, 2025.09.26.

(4) 学会誌編集委員等

1） Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, editorial board member

E. 研修

(1) 研修企画

1） 堀 弘明，大沼麻実：令和 7 年度精神保健に関する技術研修．第 15 回災害時 PFA と心理対応

研修．東京，2025.7.2，オンライン，2025.7.9.

2) 堀 弘明：令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1．オンライン，2025.10.24.
3) 堀 弘明：令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2．オンライン，2025.11.20.
4) 堀 弘明：令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1．オンライン，2025.12.10-11.
5) 堀 弘明：令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2．東京，2026.1.20-21.
6) 堀 弘明:令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース. オンライン, 2026.2.9-10
7) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害外来治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第 10 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2025.5.24.
8) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第 5 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2025.7.12.
9) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害小児治療研修 第 2 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2025.8.24.
10) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：第 22 回摂食障害治療研修．オンライン，2025.9.3-5.
11) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害外来治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第 11 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2025.11.9.
12) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第 6 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2025.12.14.
13) 井野敬子，井上智子，大沼麻実：摂食障害小児治療研修 第 3 回．令和 7 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2026.1.31.

(2) 研修会講師

1) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2025.12.10-11.
2) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，東京，2026.1.20-21.
3) 井野敬子：PTSD の心理療法各論 2．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2025.12.10-11.
4) 井野敬子：PTSD の心理療法各論 2．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，東京，2026.1.20-21.
5) 丹羽まどか：学生相談に生かす複雑性 PTSD の基礎知識と心理療法． 明治学院大学総合支援室学生相談センター勉強会，オンライン，2025.7.28.
6) 丹羽まどか：感情と感情調整について学ぼう． 地域生活支援センターMOTA ピア相談員向け研修会，東京，2025.11.7.
7) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2025.12.10-11.
8) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，東京，2026.1.20-21.
9) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1，オンライン，2025.10.24.
10) 金 吉晴：PTSD 治療．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1，オンライン，2025.10.24.
11) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断．令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2，オンライン，2025.11.20.

F．その他

1) 小川眞太郎：現代栄養学とヘルスケアレシピ．記事監修 ストレス＆ヘルスケア，公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンター，2025.4.15, 9.8, 2026.1.14.

2） 成田 瑞：SNS に依存的な子、メンタル悪化リスク　国内外の研究，成田瑞さんに聞く．朝日新聞，2025.6.1.
3） 成田 瑞：思春期の不適切なネットゲーム，抑うつリスク大　ADHD 傾向は特に．朝日新聞，2025.8.18.
4） 成田 瑞：思春期女子の心の健康悪化「深刻」　若者の自殺，女子が男子を上回る．朝日新聞，2025.9.30.
5） 成田 瑞：悪化する若者の心の健康　女子で顕著，学業の重圧や SNS 影響か．日本経済新聞，2025.12.1.
6） 成田 瑞：オンラインゲームの不適切利用はメンタル不調リスク高める．NHK ニュース，2026.1.17.
7） 成田 瑞：思春期の孤独感の継続で メンタルヘルスの不調につながる．教育新聞，2026.1.22.
8） 成田 瑞：孤独感続くと心に不調　思春期の 3000 人調査　改善で影響軽減も．毎日新聞，2026.2.27.

6. 児童・予防精神医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

児童・予防精神医学研究部は，精神疾患の早期介入および予防，児童・青年期のメンタルヘルス，ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている．早期介入・予防に向けた活動としては，精神病発症ハイリスク者のサイトカインや睡眠指標と機能的予後との関連の検討，国際標準として用いられている認知機能の評価法を本邦で用いるための整備，低侵襲脳刺激法を用いた患者のリカバリーを促進する治療法の開発研究などの活動を展開している．さらに，メンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査や，神経生理学的指標を用いた精神疾患の治療反応性の予測法の開発等も手掛けている．

人員構成は以下のとおりである．部長：住吉太幹，精神疾患早期支援・予防研究室室長：Andrew M. Stickley (1 月～)，児童・青年期精神保健研究室室長：山田理沙(9 月～)，常勤研究員：山田理沙(～8 月)，リサーチフェロー：Andrew M. Stickley (～12 月)，末吉一貴，和田歩，石原奈保子(2 月～)，科研費研究員：長谷川由美(～5 月)，住吉佐和子，客員研究員：神尾陽子，數井 裕光，石井良平，住吉チカ，川崎康弘，高橋秀俊，小坂浩隆，菊知 充，池澤 聡，上原 隆，信川 創，西田圭一郎，藤井猛，白間綾，森尾保徳，長谷川由美(6 月～)，小居秀紀(8 月～)，研究生：荻野和雄，海老島健，岡琢哉，齊藤彩，原口英之，星野大，併任：山田悠至，稲川拓磨，科研費心理療法士，科研費社会事業専門員，科研費研究補助員，科研費事務助手，センター事務助手．

Ⅱ. 研究活動

A) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究（住吉，山田，末吉，長谷川，和田，住吉，本田）経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた精神疾患の認知機能障害の治療研究を展開している．現在，統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験(FEDICS)（特定臨床研究）である．松岡病院(小矢部市）が共同研究機関に加わる多施設共同研究で，2025 年度に目標症例数 50 例に達した．以上は研究生の山田悠至医師（司法精神診療部），稲川拓磨医師（精神診療部）らと共に行っている．当グループの tDCS に関する研究成果は，2025 年度に開催された World Federations of Biological Psychiatry (ベルリン)2025 年会における招聘シンポジウム，および第 55 回日本臨床神経生理学会学術大会における教育講演で発信した．

B) 精神病超ハイリスク(UHR)者のサイトカイン濃度，活動量，睡眠指標を対象としたコホート研究（住吉）：統合失調症（精神病）の前駆状態と親和性が高い UHR 者を対象とした，全国 10 の医療研究機関が協働する UHR 者を 2 年間追跡するコホート研究である．令和 7 年度は，本研究のデータに基づく抗炎症性サイトカインの血中濃度と UHR 者の機能的転帰の相関を示す原著論文が，アジア神経精神薬理学会の機関誌に掲載された．

C) 国際双極症学会(ISBD) Cognition Task Force における活動(住吉)：病院・気分障害センターと協働し，双極症の認知機能障害に関する研究促進のためのデータベース構築を目的とした国際的コンソーシアム（ICONIC-BD）に参加している．2025 年度は，双極症を対象とした介入研究で用いる感情・社会認知のアウトカム指標に関する論文を ISBD の機関誌に投稿・受理された．

D）うつ症状評価のバリアンス軽減を目的とした遠隔評価法の研究開発（住吉、末吉、石原、山田、和田、住吉、宋）：うつ病患者を対象とした，汎用の ICT 機器を用いた遠隔評価法と，従来の施設評価法とで測定される MADRS 評価の一致度を縦断的に調べる研究で，AMED から研究費を得て行っている．日本脳科学関連学会連合・産学連携諮問委員会内に設置され，住吉が担当している分散型臨床試験タスクフォースの活動とリンクしている．

E）生活習慣病リスク飲酒者に対する短期介入（ブリーフインターベンション）反応性の客観的評価：神経心理学的指標・事象関連電位を用いた研究（山田・Stickley・住吉）

将来アルコール依存症を発症する可能性が高いと考えられる生活習慣病リスクに相当する量の飲

酒者を対象として，飲酒量低減を目的とした簡易介入（ブリーフインターベンション）の反応性を客観的に評価する研究を実施した．本研究では，介入前に事象関連電位および神経心理学的指標を測定したうえで節酒支援面接を実施し，これらの神経生理学的・心理学的指標が介入後の飲酒量および飲酒関連問題の変化を予測するかを検討した．その結果，アルコール関連画像に対する P300 振幅を解析したところ，飲酒失敗群では P3 および Fz で有意に高い振幅が認められた．これらの結果から，P300 振幅は問題飲酒の減少を目的とした短期介入の効果を予測する電気生理学的マーカーとなる可能性が示唆された．

F）統合失調症に対する光生物調節療法（photobiomodulation: PBM）の安全性および実行可能性の検討と反応性予測バイオマーカーの探索（山田・末吉・和田・宋・Stickley・住吉・住吉）

PBM は，赤色から近赤外線領域の光を用いて細胞内シグナル伝達を促進する低侵襲の神経調節法であり，近年，認知症領域を中心に研究が進められている．本研究では，PBM を統合失調症患者に適用する際の安全性および実行可能性（feasibility）を評価することを主目的とした探索的研究を実施している．PBM は頭部および鼻腔に装着するデバイスにより非侵襲的に施行可能であり，従来の電磁刺激とは異なる物理的作用を有する新しい神経調節技術である．本研究では，治療前後において有害事象の発生状況や継続可能性などを評価し，安全性および実施可能性を検討するとともに，神経心理学的検査による認知機能評価および前頭葉機能を反映する神経生理学的指標（脳波，光トポグラフィー）を測定している．これにより，PBM の臨床応用に向けた基礎的知見を蓄積するとともに，治療反応性を予測する生体指標の探索を行い，将来的な臨床研究の基盤構築を目指している．

G）気分障害の認知機能障害評価バッテリーに関する研究（末吉，長谷川，Stickley, 住吉）

気分障害における認知機能障害を評価する簡便なテストバッテリー，Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP)と Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A)の信頼性・妥当性を検証する多施設共同研究をおこなった．SCIP は国際双極性障害学会が推奨する簡便な測定法であり，精神疾患患者の認知機能を短時間で評価できる．BAC-A は従来の認知機能領域に加え，情動刺激が認知機能へ与える影響を評価できる．今年度は本解析結果の発信に取り組んだ．

H）気分障害外来患者を対象とした縦断研究（石原、末吉，山田、宋、住吉、住吉）

うつ病，双極症患者に採血，心電図，MRI，光トポグラフィー，症状評価，認知機能検査，質問紙を三か月後，一年後に実施する追跡調査である．今年度はうつ病患者 57 名，双極症患者 75 名について，初診および一年後フォローアップ時の，うつ症状，認知機能，主観的 QOL の変化を解析した．以上を，病院気分障害センター、MGC バイオバンク部など NCNP 内の他部署と連携し実施している．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・2025 年度気分障害センター市民公開講座（2025．12．6）を企画・開催(住吉).

(2) 専門教育面における貢献

・研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターおよび気分障害センターと共催(2025，10)（住吉）

・National Institute of Mental Health（チェコ共和国）から Tereza Nekovarova 博士を招聘し，学術交流を目的としたカンファレンス「Electroencephalography mechanisms of time perception」を開催（2025，10)（住吉）

(3) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・ クロザリル適正使用委員会委員（住吉）

(4) センター内における臨床的活動

・ センター病院 統合失調症専門外来・初診：毎週月曜日（住吉）

・センター病院 気分障害センター外来・初診：毎週月曜日（住吉）
・センター病院 一般再来：毎週金曜日（住吉）
・センター病院 こころのリスク診療枠：隔週月曜日（住吉）

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Yamada Y, Mishima K, Ohnishi T, Suzuki M, Nemoto T, Mizuno M, Kishimoto N, Tomita H, Ozone M, Kitamura S, Hashimoto K, Nakagome K, Sumiyoshi T: Identification of factors to predict transition to schizophrenia in subjects with ultra-high risk for psychosis: A protocol for a multicenter, longitudinal study of sleep parameters and cytokine levels; Clinical Psychopharmacology and Neuroscience 2025 May; 23(2):266-277
2) Stickley A, Shirama A, Kondo N, Kino S, Sumiyoshi T: Ikigai and suicidal ideation in Japan during the COVID-19 pandemic; Journal of Psychiatric Research 2025 Jun; 186:289-96.
3) Wada A, Sumiyoshi C, Yoshimura N, Hashimoto R, Matsumoto J, Stickley A, Yamada Y, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Yamada R, Sumiyoshi T; Semantic memory organization linked to social functioning in patients with schizophrenia; Schizophrenia 2025 Apr; 15;11(1):61
4) Stickley A, Shirama A, Wada A, Sumiyoshi T: Ikigai and probable anxiety among adults in Japan; Journal of Affective Disorders 2025 Sep 15:385:119391
5) Sumiyoshi C, Ito S, Matsumoto J, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting models for work outcomes in patients with schizophrenia and its clinical application; Scientific Reports 2025 May 1;15(1):15308.
6) Sumiyoshi T, Ikezawa S, Inaba K, Marumoto T, Kusumi I, Nakagome K: Awareness and management of cognitive impairment associated with schizophrenia in psychiatrists and patients: Results from a cross-sectional survey; Schizophrenia Research Cognition 2025 Jun 27;42:100375.
7) Sasabayashi D, Itoh H, Higuchi Y, Nemoto K, Higuchi Y, Akasaki Y, Wickham A, Cho K, Pastemak O, Mohandass D, Zurrin R, Billah T, Karayumak S, Kobayashi H, Sakamoto K, Takayanagi Y, Tsuji N, Koike S, Hirano Y, Noguchi K, Sumiyoshi T, Suzuki M, Takahashi T, Kubicki M: Saturated fatty acids and white matter microstructure in individuals with at-risk mental state; Schizophrenia Bulletin, 2026 Mar 7;52(2)
8) Watanabe K, Sumiyoshi T, Kato M, Kikuchi T, Moriguchi Y, Oudin Åström D, Cronquist Christensen M: Long-term effectiveness of vortioxetine on achievement of personal goals and work productivity in patients with major depressive disorder; The VGOAL-J study. Journal of Affective Disorder Reports, Volume 21, 2025 Jul, 100955
9) Stickley A, Koposov R, Isaksson J, Sumiyoshi T, Ponomarev OA , Ruchkin V: Attitudes and ethical beliefs of Russian psychiatrists towards the use of coercive treatment practices; International Journal of Law and Psychiatry. Jan-Feb; 104:102142.
10) Yamada R, Stickley A, Shigeta M, Miyata H: Clinical significance of psychiatric comorbidities among outpatients with gambling disorder in Japan: A 12-month follow-up study; Neuropsychopharmacol Rep. 2025 Jun ;45(2):e70016.
11) Ruchkin V, Stickley A, Koposov R, Sukhodolsky DG, Isaksson J: Relational aggression in Russian adolescents: gender, age, and behavior and emotional correlates; Journal of Interpersonal Violence 2026 Jan 20.
12) Stickley A, Shirama A, Ruchkin V, Isaksson J, Koposov R, Sumiyoshi T: Attention-

deficit/hyperactivity disorder symptoms and expectations of longevity among adults in Japan; International Journal of Social Psychiatry 2025 Nov 23

13) Stickley A, Shirama A, Yamada R, Wada A, Sumiyoshi T: Loneliness, laughter, and mental health in the Japanese general population: findings from a cross-sectional study; Psychology, Health & Medicine 2025 Oct 28:1-16.

14) Hajek A, Stickley A, Zwar L, Peltzer K, Pengpid S, Gyasi R M, Yon DK, König HH: Association of hugs with depression, anxiety, and suicidal ideation: findings based on data from the general adult population in Germany; Journal of Public Health 2025 Oct:25

15) Stickley A, Isaksson J, Koposov R, Sumiyoshi T, Ruchkin V: Psychotic-like experiences, suicidal thoughts and behaviours, and non-suicidal self-injury in young offenders; Schizophrenia Research 2026 Feb ;288:59-65.

16) Yamada Y, Kishimoto N, Tagata H, Morimoto T, Tomimoto K, Sato Y, Higuchi Y, Hiejima H, Ohshima H, Kato T, Oba MS, Izumi S, Tomo Y, Kitamura S, Stickley A, Kishimoto T, Nemoto T, Mizuno M, Tomita H, Suzuki M, Ozone M, Hashimoto K, Mishima K, Ohnishi T, Nakagome K, Sumiyoshi T; Transforming Growth Factor-β Serum Levels Associated with Social Function in Subjects at Ultra-high Risk for Psychosis: A Multicenter Study. Clinical Psychopharmacology and Clinical Neuroscience 2025 Aug 31;23(3):379-390.

17) Keefe RSE, Harvey PD,Correll CU, Falkai, Hashimoto N, Klein H, Krystal JH, Marder S, Medalia A, Sumiyoshi T, Wang G, Zhang H, Blahova Z, Bichard-Sall I, English BA, Fu E, Gruenenfelder F, Groeschl M, Kimura K, Tang W, von der Goltz C, Fowler C: Efficacy and safety of iclepertin for cognitive impairment associated with schizophrenia (CONNEX programme): results from three phase 3 randomised controlled trials; Lancet Psychiatry. 2025 Dec;12(12):906-920.

18) Yamada Y, Watanabe N, Tomo Y, Tachimori H, Horinouchi T, Uchino T, Kubota R, Okano H, Ishikawa S, Sawagashira R, Takanobu K, Hasegawa Y, Sasaki Y, Nishiuchi M, Sumiyoshi T, Hashimoto N, Ikezawa S, Nemoto T, Okubo R: Pharmacological interventions for social cognitive impairments in schizophrenia: A systematic review and network meta-analysis of randomized controlled trials; Eur Psychiatry 2026 Feb 13;69(1)

19) Matsumoto J, Ito S, Sumiyoshi C, Yasuda Y, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Cognitive profile of psychiatric patients with coexisting enlarged ventricles and cognitive impairment: A rare cross-diagnostic phenotype predominantly observed in schizophrenia. Psychiatry and Clinical Neuroscieneces 2026 Mar;80(3):233-234.

20) Hajek A, Stickley A, Peltzer K, Pengpid S, König HH. Gaming disorder: prevalence and association with psychosocial outcomes in the German general adult population; Addictive Behaviors Reports 2026 Feb 21:23:100682

21) Ruchkin V, Stickley A, Schwab-Stone M, Isaksson J: Posttraumatic stress, perceived hostile intention and reactions to peer provocation: a longitudinal study in US inner-city youth; JCPP Advances 2025 Dec; e70077.

22) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T: Smoking status and the onset of suicidal ideation among adults in Japan during the COVID-19 pandemic; Annals of General Psychiatry 2025 Nov 21;24(1):70.

23) Stickley A, Kondo N, Sumiyoshi T, Leinsalu M, Ruchkin V, Koposov R, Inoue Y, McKee M: Food insecurity and loneliness in the former Soviet countries; International Journal of Public Health 2025 Oct 17:70:1608397.

24) Ishitobi M, Koyama H, Tonooka S, Uchiyama T, Stickley A, Kamio Y: Clinical utility of the

Japanese version of the Baby and Infant Screen for Children with Autism Traits (BISCUIT) Part 1; Journal of Developmental Disabilities Research 2025 Dec;3:1-12.

25) Stickley A, Shirama A, Yamada R, Sumiyoshi T: Problematic gambling and alcohol misuse among adults in Japan; Drug and Alcohol Dependence 2025 Sep 11:276:112882.

26) Stickley A, Shirama A, Wada A, Yamada R, Sumiyoshi T: Psychotic-like experiences, sleep problems, and loneliness: a population-based study; Psychiatry Research 2025 Oct: 352: 116705.

27) Koposov RA, Stickley A, Isaksson J, Ruchkin V: Psychotic-like experiences in young offenders: prevalence, psychiatric comorbidity and personality traits; Psychiatry Research 2025 Oct:352:116686.

28) Yamada Y, Kishimoto N, Tagata H, Morimoto T, Tomimoto K, Sato Y, Higuchi Y, Hiejima H, Ohshima H, Kato T, Oba MS, Izumi S, Tomo Y, Kitamura S, Stickley A, Kishimoto T, Nemoto T, Mizuno M, Tomita H, Suzuki M, Ozone M, Hashimoto K, Mishima K, Ohnishi T, Nakagome K, Sumiyoshi T: Transforming growth factor-β serum levels associated with social function in subjects at ultra-high risk for psychosis: a multicenter study; Clinical Psychopharmacology and Neuroscience 2025 Aug 31;23(3):379-390.

29) Yamada R, Wada A, Stickley A, Newman-Tancredi A, Sumiyoshi T: Augmentation therapy with serotonin 5-HT_{1A} receptor partial agonists on cognitive function in depressive disorders: a systematic review of randomized controlled studies; Neuropsychopharmacology Reports 2025 Jun;45(2):e70023.

30) Isaksson J, Isaksson M, Stickley A, Vermeiren R, Koposov R, Schwab-Stone M, Ruchkin V: Community violence exposure and eating disorder symptoms among Belgian, Russian and US adolescents: cross-country and gender perspectives; Child Psychiatry and Human Development 2025 Jun;56(3):595-604.

(2) 総説

1) Van Rheenen TE, Lewandowski KE, Pinkham A, Vaco C, Caruana G, Gruber J, Zarp J, Young AH, Yatham LN, Vieta E, Torres IJ., Tsapekos D, Sumiyoshi T, Stokes PRA, Schaffer A, Kessing LV, Kjærstad HL, Hasler G, Gallagher P, Douglas K, Dols A, Carvalho AF, Burdick KE, Bowie C.R, Bonnin CM, Balanzå-Martinez, Miskowiak KW: Consensus on Subdomains and Measures of Relevance to Affective and Social Cognition Research on Bipolar Disorder (CAS-BD); Outcomes and Recommendations From an International Society for Bipolar Disorders Targeting Cognition Taskforce Study. Bipolar Disorder 2026 Mar;28(2):e70083.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Sumiyoshi T. Wada A. Yamada R. Sumiyoshi C: Semantic memory organization linked to social functioning in patients with schizophrenia. In Symposium “Decoding and Bridging Neurocognition and Social Cognition”, 2025 Congress of World Federation of Societies of Biological Psychiatry, 2025.9.10, Berlin

2) Sumiyoshi T. Sueyoshi K. Wada A. Yamada R. Yamada Y: Transcranial direct current stimulation and functional improvement in schizophrenia. In Symposium “Neurophysiology Tools in Psychiatry”, 2025 Congress of World Federation of Societies of Biological Psychiatry,2025.9.12, Berlin

3) Sumiyoshi T. Wada A. Sumiyoshi C. Yoshimura N. Yamada R. Nakagome K: Cognitive

impairment in schizophrenia; How can we facilitate its awareness and management in clinical practice? In symposium “Recent Advancements in Schizophrenia Research; Asian Perspectives”. PRCP & WACP Joint Congress, 2025.9.25, Tokyo

4) 横山太範、住吉太幹、末吉一貴、宋恵恩、長谷川由美：ワークショップ 4:うつ病リワークと認知機能障害：臨床的意義と評価法. 第 8 回日本うつ病リワーク協会年次大会, 松本、2025.4.27

5) 住吉太幹、吉村玲児：気分障害における認知機能障害をターゲットとする介入研究の動向. BPCNPNP2025 合同年会、京都、2025.11.13

6) 山田理沙、住吉太幹：アルコール依存症ハイリスク者に対する心理社会的介入の効果を予測する客観的指標の開発：事象関連電位に基づく検討. BPCNPNP2025 合同年会、京都、2025.11.15

7) 山田悠至、中込和幸、住吉太幹：精神病発症超ハイリスク基準群における形質転換増殖因子 β と社会的機能との関連：多施設共同研究. 第 20 回日本統合失調症学会、オンライン開催、2026.3.22(3.21-3.22)

(2) 一般演題

1) Keefe R, Harvey P, Correll C, Klein P, Klein H, Krystal J, Marder S, Medalia A, Sumiyoshi T, Blahova Z, Sall I, Brett A. Fu E, Gruenenfelder F, Groeschl M, Kimura K, Tang W, Goltz C, Fowler C: Efficacy and Safety of Iclepertin for Cognitive Impairment Associated with Schizophrenia in 1835 Patients: Results from Three Phase III Randomized Controlled Trials (CONNEX Program). 2025 Congress of the Schizophrenia International Research Society, 2025, Chicago, April 29.

2) Matsumoto J, Ito S, Sumiyoshi C, Yasuda Y, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Pattern of Cognitive Dysfunction in Patients With Psychiatric Disorders With Lateral Ventricle Enlargement and Cognitive Impairment, 2025 Congress of the Schizophrenia International Research Society, 2025, Chicago, April 29.

3) Sumiyoshi C, Ito S, Yasuda Y, Matsumoto J, Fujimoto M, Yamamori H, Hasegawa N, Takano H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting Work Outcome Based on Daily-living acts: Transdiagnostic comparison. 2025 Congress of the Schizophrenia International Research Society, 2025, Chicago, April 29.

4) Wada A, Yamada R, Yamada Y, Sumiyoshi C, Hashimoto R, Matsumoto J, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Stickley A, Yoshimura N, Sumiyoshi T: Autistic Trait Severity in Early Schizophrenia: Role in Subjective Quality of Life and Social Functioning, 2025 Congress of the Schizophrenia International Research Society, 2025, Chicago, April 29.

5) Wada A, Sumiyoshi C, Yoshimura N, Hashimoto R, Matsumoto J, Stickley A, Yamada Y, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Yamada R, Sumiyoshi T: Semantic Memory Network Linked to Social Functioning in Patients with Schizophrenia,025 Congress of the Schizophrenia International Research Society, 2025, Chicago, April 29.

6) Yamada R, Narita Z, Inagawa T, Maruo K, Wada A, Yamada Y, Sumiyoshi S, Song H, Sueyoshi K, Sumiyoshi T: Effect of transcranial direct current stimulation on functional capacity in schizophrenia: A study protocol for a randomized controlled trial, WPA2025Regional Congress, Alexandria, Egypt, 2025 April 13.

7) Sumiyoshi T, Keefe RSE, Harvey PD, Correll CU, Falkai P, Klein H, Krystal JH, Marder S, Medalia A, Blahova Z, Bichard-Sall I, English BA, Fu E, Gruenenfelder F, Groeschl M, Kimura K, Tang W, von der Goltz C, Reuteman-Fowler C：Efficacy and safety of iclepertin for cognitive impairment associated with schizophrenia; Phase III, randomized-controlled

trial results. Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会・2025 年会、小平市、2025.05.17

8) Sueyoshi K, Hasegawa Y, Tsutsumi Y, Sumiyoshi T, Matsuo K: Validity and Reliability of the Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A) Japanese Version. the 27th Annual Conference of the International Society for Bipolar Disorders. 2025.9.27 Chiba

9) Hasegawa Y, Sueyoshi K, Tsutsumi Y, Matsuo K, Sumiyoshi T. Reliability and Validity of the Japanese Version of the Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP-J). the 27th Annual Conference of the International Society for Bipolar Disorders. 2025.9.26 Chiba

10) Yamada, R. Sumiyoshi, T. P300 predicts the effect of feasible psycho-social interventions on alcohol consumption in habitual drinkers. World Federation of Societies of Biological Psychiatry, 17th World Congress, Berlin, Germany, 9-12 September 2025.

11) Yamada R, Sumiyoshi T, Inagawa T, Stickley A, Hattori K, Ishihara N, Kurashimo T, Song H, Sumiyoshi S, Yoshida S, Kunugi H. Autistic-like traits are associated with mood symptoms, cognitive function, and quality of life in patients with bipolar disorder. 38th ECNP Congress, Amsterdam, Netherlands, 11–14 October 2025.

12) 和田 歩、山田理沙、山田悠至、住吉チカ、橋本亮太、松本純弥、菊池安希子、久保田涼太郎、松井眞琴、中地可南、藤巻知夏、安達伶音奈、スティックリーアンドリュー、吉村直記、住吉太幹：Autistic trait severity in early schizophrenia：Role in subjective quality of life and social functioning：（ポスター）．第 19 回日本統合失調症学会、大阪、2025.4.26(4.26-4.27)

13) 和田 歩、住吉チカ、吉村直記、橋本亮太、松本純弥、スティックリーアンドリュー、山田悠至、菊池安希子、久保田涼太郎、松井眞琴、中地可南、藤巻知夏、安達伶音奈、山田理沙、住吉太幹：Semantic network linked to social functioning in patients with schizophrenia：（ポスター）．第 19 回日本統合失調症学会、大阪、2025.4.26(4.26-4.27)

14) 松本純弥、伊藤颯姫、住吉チカ、安田由華、長谷川尚美、藤本美智子、山森英長、住吉太幹、橋本亮太：側脳室拡大と認知機能障害がある精神疾患患者の認知機能の特徴：（ポスター）．第 19 回日本統合失調症学会、大阪、2025.4.26(4.26-4.27)

15) 伊藤颯姫、住吉チカ、安田由華、松本純弥、藤本美智子、山森英長、長谷川尚美、高野晴成、住吉太幹、橋本亮太：統合失調症と自閉スペクトラム症における労働に関連する要因の検討：（ポスター）．第 19 回日本統合失調症学会、大阪、2025.4.26(4.26-4.27)

16) 山田悠至、岸本直子、田形弘実、盛本翼、冨本和歩、佐藤祐太郎、樋口悠子、比江嶋啓至、水木慧、和泉翔喜、大庭真梨、北村真吾、岸本年史、根本隆洋、水野雅文、富田博秋、鈴木道雄、小曽根基裕、橋本謙二、三島和夫、大西隆、中込和幸、住吉太幹：精神病発症超ハイリスク基準群における形質転換増殖因子βと社会的機能との関連：多施設行動研究（ポスター）．第 19 回日本統合失調症学会、大阪、2025.4.26(4.26-4.27)

17) 岸本祐典、星野竜也 、徳田史恵 、住吉太幹：うつ病における認知機能評価尺度に関する国内調査： 認知機能評価尺度の使用者からみた尺度の特徴 -速報-.Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会・2025 年会、小平市、2025.05.17

18) 和田歩、住吉チカ、吉村直記、橋本亮太、松本純弥、Andrew Stickley、 山田悠至、菊池安希子、久保田涼太郎、松井眞琴、中地可南、 藤巻知夏、安達伶音奈、山田理沙、住吉太幹： Semantic network linked to social functioning in patients with schizophrenia. Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会・2025 年会、小平市、2025.05.17

19) 末吉一貴, 長谷川由美, 堤祐一郎, 住吉太幹, 松尾幸治 (2025). Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A) 日本語版の信頼性・妥当性の検証. BPCNPNP2025.2025.11.13-15 京都

20) 長谷川由美, 末吉一貴, 堤祐一郎, 松尾幸治, 住吉太幹 (2025). The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry（SCIP）日本語版の信頼性・妥当性の検証. BPCNPNP2025.

2025.11.13-15　京都

21) 末吉一貴, 長谷川由美, 堤祐一郎, 住吉太幹, 松尾幸治 (2025). 気分障害の認知機能への The Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders 日本語版の感受性：健常者と気分障害患者の成績比較. 第 10 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会. 小平市、2025.5.17

22) 長谷川由美, 末吉一貴, 堤祐一郎, 松尾幸治, 住吉太幹 (2025). The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry(SCIP)日本語版と主観的認知機能, 機能的転帰との関連. 第 10 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会. 小平市、2025.5.17

23) 住吉太幹、岸本祐典、徳田史恵 星野竜也：うつ病における認知機能評価尺度に関する国内調査： 認知機能評価尺度の使用者からみた尺度の特徴. 第 22 回日本うつ病学会総会、東京、2025.7.11(7.11-12)

24) 松本純弥、住吉太幹：側脳室拡大（Enlarged Ventricle: EV）と認知機能障害（Cognitive Impairment: CI）がある EVCI 患者の認知機能プロファイル：BPCNPNP2025 合同年会、京都、2025.11.14（11.13-15）

25) 伊藤颯姫、住吉太幹：統合失調症患者の労働時間に影響を与える要因の検討：認知機能と社会機能の役割：BPCNPNP2025 合同年会、京都、2025.11.14（11.13-15）

26) 山田理沙, 住吉太幹：アルコール依存症ハイリスク者に対する心理社会的介入の効果を予測する客観的指標の開発：事象関連電位に基づく検討, BPCNPNP2025 合同年会, 2025 年 11 月 13-15 日, 京都

(3) 研究報告会

1) Andrew Stickley, Aya Shirama, Risa Yamada, Tomiki Sumiyoshi: Problematic gambling and alcohol misuse among adults in Japan; 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度 研究報告会（第 37 回）小平市

2) 和田 歩, 住吉チカ, Andrew Stickley, 吉村直記, 山田悠至, 住吉太幹: 左側頭領域への経頭蓋直流刺激が 統合失調症の意味記憶に与える影響; 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度 研究報告会（第 37 回）小平市

3) 末吉一貴, 長谷川由美, 堤祐一郎, 住吉太幹, 松尾幸治 (2025). The Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders 日本語版の感受性：健常者と気分障害患者の成績比較.東京 JH リトリート 2025.2025.6.7

4) 長谷川由美, 末吉一貴, 堤祐一郎, 松尾幸治, 住吉太幹 (2025). The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry(SCIP)日本語版と主観的認知機能, 機能的転帰との関連. 東京 JH リトリート 2025. 2025.6.7

C．講演

1) 住吉太幹：経頭蓋直流刺激による精神疾患治療の展望と課題：第 55 回日本臨床神経生理学会学術大会、第 62 回日本臨床神経生理学会 教育講演：沖縄 2025.11.14

2) 住吉太幹: 統合失調症の認知機能障害の克服：グローバル政策提言書を通じて. 精神科薬物療法学術研究会. Web 配信, 2025.12.11

3) 住吉太幹: 統合失調症の認知機能障害への対応：セロトニン受容体の役割. つくばアカデミー・オブ・サイカイアトリー. Web 配信, 2025.12.12

D．学会活動

(1) 学会主催

1) 住吉太幹：第 10 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会・年会. 2025 年 5 月 17 日小平市

(2) 学会役員

1) Sumiyoshi T：World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Committee Member
2) Sumiyoshi T：EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
3) Sumiyoshi T：International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
4) 住吉太幹：日本脳科学関連学会連合 産学連携諮問委員会 分散型臨床試験タスクフォース長
5) 住吉太幹：Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会，代表理事
6) 住吉太幹：日本生物学的精神医学会　理事
7) 住吉太幹：日本臨床精神神経薬理学会　理事
8) 住吉太幹：日本神経精神薬理学会　評議員，編集委員
9) 住吉太幹：日本統合失調症学会　評議員
10) 住吉太幹：日本うつ病学会　評議員
11) 住吉太幹：日本精神保健・予防学会　評議員

(3) 座長

1) Sumiyoshi T:シンポジウム“Neurophysiology Tools in Psychiatry”, 2025 Congress of World Federation of Societies of Biological Psychiatry,2025.9.12, Berlin
2) Sumiyoshi T:シンポジウム“Decoding and Bridging Neurocognition and Social Cognition”, 2025 Congress of World Federation of Societies of Biological Psychiatry, 2025.9.10, Berlin

(4) 学会誌編集委員等

1) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Section Editor
2) Sumiyoshi T: International Journal of Neuropsychopharmacology, Associate Editor
3) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor
4) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member
5) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member

E．研修

(1) 研修企画

1) 住吉太幹:令和 7 年度第 1 回精神保健研究所　児童・予防精神医学研究会　/　病院　統合失調症早期診断・治療センター　/　気分障害センター合同研究会, 2025.5.21.(NCNP)
2) 住吉太幹:令和 7 年度第 2 回精神保健研究所　児童・予防精神医学研究会　/　病院　統合失調症早期診断・治療センター　/　気分障害センター合同研究会, 2025.10.17. (NCNP)

(2) 研修会講師

1) 東京都病院薬剤師会 精神科薬物療法学術研究会 「統合失調症の認知機能障害の克服～グローバル政策提言書を通じて～」2025.12.11(Web 配信)

F．その他

1) 住吉太幹：ナショナルセンター医療研究連携推進本部 知財・法務課長
東北大学 客員教授
東京慈恵会医科大学 連携大学院教授

7. 精神薬理研究部

Ⅰ．研究部の概要

精神薬理研究部では，最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い，研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し，当センターの事業計画における位置づけを明確化している．具体的にはわが国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て，精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い，非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている．

精神薬理研究部には，分子精神薬理研究室と向精神薬研究開発室の 2 室が所属している．令和 7 年度常勤研究員は，部長の池田和隆，分子精神薬理研究室長の三輪秀樹，向精神薬研究開発室長の西澤大輔の 3 名であった．リサーチフェローは，上條諭志，森屋由紀，名古由佳，Namareq Salah Mohamed Widatalla の 4 名であった．科研費研究補助員は村松浩美，中山京子であった．科研費事務助手は田巻舞であった．研究生は梅村二葉，石中玉であった．

Ⅱ．研究活動

1） 実験動物を利用した研究

中枢神経系の形態解析において，スパースラベリング技術は不可欠である．われわれは，Supernova 技術を利用した Cre 非依存的（Cre-orthogonal）な AAV ベースのスパースラベリング法を，雌雄マウスにおいて確立した．本手法では Flpe リコンビナーゼを用いることで，Cre に依存しない標識を実現した．PHP.eB 型 AAV を眼窩後静脈投与した場合には神経標識は得られなかったが，局所投与により小脳神経細胞を含む複数の神経細胞型において，明瞭かつスパースな標識が可能であった．標識された神経細胞は十分な蛍光強度を有し，免疫染色を行うことなく樹状突起スパインなどの微細構造の観察が可能であった．本手法は Cre 発現系統および floxed 遺伝子背景のいずれにも適用可能である．さらに，Flpe 依存性の第三のウイルスを共投与することで，標識神経細胞の機能操作が可能であることを示した．本手法は簡便かつ柔軟性に優れ，さまざまな遺伝的背景に適用可能であり，既存の実験系への導入も容易である（Kamijo et al., ENEURO.0314-25.2026).

生体内における ATP 動態をリアルタイムかつ多階層的に可視化可能な遺伝子コード型バイオセンサーマウス「AVID（ATP visualization in vivo directly)」を開発した．本マウスにより，全身レベルから臓器，さらには細胞内コンパートメントに至るまで，生体内 ATP 動態の包括的なイメージングが可能となった．AVID を用いた解析により，心筋梗塞後の肝臓中心静脈周辺において，従来のバルクメタボロミクスでは検出不可能であった局所的なATP枯渇が明らかとなった.このATP低下はキヌレン酸の蓄積と空間的に関連しており，従来法では捉えられなかった新規の代謝現象であることが示された（Ohnishi, Setoyama, Miwa et al., Cell Rep.44(9):116246,2025).

2） 鎮痛薬・疼痛感受性及び物質依存等精神疾患脆弱性の遺伝要因に関する研究

西澤大輔室長は，疼痛治療・周術期管理における個人差の要因解明と個別化医療の推進を目的に，国際共同研究および東京都医学総合研究所を中心とする国内多施設共同研究を通じて，遺伝要因と鎮痛効果・副作用の関連を多角的に検討した．国際共同研究では，ミクログリアの転写因子 RUNX1 に着目し，ヒト臨床データとげっ歯類モデルの双方から，オピオイド鎮痛効果や必要量，離脱症状の強さに関わる遺伝・分子基盤を提示し，オピオイド反応性の層別化に向けた重要な知見を報告した．国内共同研究では，順天堂大学病院の腹腔鏡下婦人科手術患者を対象に ASTN2 遺伝子 rs7858836 多型を解析し，T アレル保有者で術後 24 時間の疼痛強度が低く，追加鎮痛薬の使用が少ないことを示し，急性痛感受性に関わる候補遺伝子としての妥当性を補強した．また，東京歯科

大学水道橋病院における顎矯正手術症例では, PONV 関連遺伝子多型（CHRM3 rs2165870, TACR1 rs3755468）と 5-HT3 受容体拮抗薬オンダンセトロンの影響を解析し，遺伝子型に応じて悪心が異なる経過を示す可能性を明らかにした．さらに，PAF 分解酵素 PLA2G7 遺伝子 rs1051931 多型について，顎矯正手術後の異常感覚（dysesthesia）および腹腔鏡下婦人科手術後の疼痛重症度との関連を検討し，CC 型で神経障害性疼痛関連表現型が増悪し得ることを示した．加えて，教育達成度・認知機能に関連するポリジェニックスコアと食習慣の関連を解析し，遺伝的に教育・認知に有利な背景が果物摂取などの健康行動に結び付く可能性を示すことで，遺伝要因が“医療場面の痛み”のみならず“日常の健康行動”にも波及することを示唆した．これらの成果は，Neuron, Neuropsychopharmacology Reports, iScience, Molecular Brain, International Journal of Molecular Sciences 等に公表され，疼痛・鎮痛および周術期有害事象の予測精度向上を通じた精密医療の基盤形成に貢献した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・第三期東京都アルコール健康障害対策推進計画策定への参画．（池田）
・NPO 法人脳の世紀推進会議主催 脳の世紀シンポジウムの開催に参画．（テーマ：脳とニューロテクノロジー）（池田）

(2) 専門教育面における貢献

・研究生 2 名（梅村二葉，石中玉）の指導・育成を行った．

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・AMED　難治性疾患実用化研究事業 課題評価委員会委員（池田）
・AMED　脳神経科学統合プログラム（個別重点研究課題：革新的技術・研究基盤の整備・開発・高度化）（池田）
・AMED　脳とこころの研究推進プログラム　プログラムオフィサー（池田）
・AMED　先端国際共同研究推進プログラム（ASPIRE）　課題評価委員会委員（池田）
・厚生労働省 医薬局：薬事審議会委員（池田）
・厚生労働省 依存性薬物検討会構成員（池田）
・東京都アルコール健康障害対策推進委員会委員長（池田）
・日本学術会議　日本学術会議連携会員（池田）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Kamijo S, Ikeda K, Miwa H: AAV-based bright and sparse labeling of versatile neurons adaptable in Cre-dependent genetic backgrounds. eNeuro, ENEURO.0314-25.2026.
2) Leduc-Pessah H, McAllister B, Sinha S, Stokes-Heck S, Nishizawa D, Fan CY, St-Pierre MK, Bradaia A, Defaye M, Burma NE, Damblon J, Muñoz-Pino E, Visser F, Healy LM, Dorion M-F, Tan YM, Canet-Pons J, van den Hoogen NJ, Piscopo V, Fukuda K, Ichinohe T,

Nagashima M, Hayashida M, Johnson E, Agrawal A, Degenhardt L, Martin NG, Nelson EC, Altier C, Tremblay ME, Bousman C, Stifani S, De Koninck Y, Ikeda K, Biernaskie J, Trang T: Runx1 transcriptional regulation of microglia critically modulates opioid analgesia and withdrawal in humans and rodents. Neuron 114(5): 903-921.e13, 2026.

3) Hagihara H, Koshimizu H, Hattori S, Shoji H, Tanaka M, Ikeda K, Miyakawa T: Hypermaturity and accelerated aging in the hippocampus of mouse models of neuropsychiatric disorders with anxiety-like behavior. Neuropsychopharmacology 51: 856-867, 2026.

4) Inoue R, Nishizawa D, Okahara S, Hara A, Okada H, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Hayashida M, Ikeda K: Effect of the rs7858836 single-nucleotide polymorphisms of the ASTN2 gene on pain-related phenotypes in Japanese women who underwent laparoscopic gynecologic surgery. Neuropsychopharmacol Rep 46(1): e70083, 2026.

5) Ide S, Izuo N, Ikekubo Y, Uhl GR, Sora I, Nitta A, Ikeda K: Ifenprodil inhibits nicotine-induced addiction-like behaviors in mice. Life Sciences 384: 124116, 2026.

6) Fujikane D, Ohi K, Nishizawa D, Hasegawa J, Sato N, Tanioka F, Sugimura H, Ikeda K, Shioiri T: Influences of genetic factors for educational attainment and cognitive functions on current dietary consumption. iScience 28: 113530, 2025.

7) Ohnishi Y, Setoyama D, Miwa H, Koitabashi N, Ogasawara R, Kitada S, Matoba N, Ayano T, Hiramoto K, Yasui R, Sugiura Y, Anada T, Ino K, Matsuda H, Noma T, Nonaka S, Izumi T, Kurabayashi M, Suematsu M, Kunisaki Y, Yanagita M, Imamura H, Yamamoto M: AVID mouse: A versatile platform for real-time, multiscale ATP imaging and spatial systems metabolism analysis in living mice. Cell Rep 44(9): 116246, 2025.

8) Kang Y, Ohka S, Nishizawa D, Hasegawa J, Nakayama K, Yoshida K, Koshika K, Ichinohe T, Ikeda K: Differential effects of antiemetic serotonin receptor antagonist ondansetron on nausea associated with CHRM3 rs2165870 and TACR1 rs3755468 single-nucleotide polymorphisms. Mol Brain 18(1): 64, 2025.

9) Vinnakota C, Hudson M, Ikeda K, Ide S, Mishina M, Sundram S, Jones N, Hill R: Effects of NMDA receptor antagonists on working memory and gamma oscillations, and the mediating role of the GluN2D subunit. Neuropsychopharmacology 50(13): 1938–1948, 2025.

10) Saiga R, Shiga K, Maruta Y, Inomoto C, Kajiwara H, Nakamura N, Kakimoto Y, Yamamoto Y, Yasutake M, Uesugi M, Takeuchi A, Uesugi K, Terada Y, Suzuki Y, Nikitin V, Andrade VD, Carlo FD, Yamashita Y, Itokawa M, Ide S, Ikeda K, Mizutani R: Structural differences between human and mouse neurons and their implementation in generative AIs. 2025.

11) Hayashi M, Ohka S, Nishizawa D, Inoue R, Hayashida M, Hasegawa J, Nakayama K, Ebata Y, Kang Y, Yoshida K, Koshika K, Fukuda K, Ichinohe T, Ikeda K: rs1051931 Nonsynonymous Polymorphism of Platelet-Activating Factor Acetylhydrolase Gene PLA2G7 Is Associated with Dysesthesia and Pain Severity After Surgery. Int J Mol Sci 26(9): 3931, 2025.

(2) 総説

1) Ide S, Nishitani Y, Sumitani M, Minami M, Isa T, Iseki M, Ohkura M, Okamoto H, Kikuchi T, Sekino Y, Takahashi H, Takeuchi K, Nitta A, Honjo T, Matsumoto H, Miyakawa T, Murai T, Matsumoto T, Nakagome K, Ikeda K: Addiction-related problems in Japan: A regional perspective. Addiction 120(2): 298-310, 2025.

2) Nishizawa D, Ikeda K: Genetics of pain and analgesics – current insights and future directions. Pain Research 40(1): 113-121, 2025.

3) 三輪秀樹: 神経生理学的指標による精神疾患モデル解析. 日本薬理学雑誌 161(2): 70-74, 2026.

4) 西澤大輔, 池田和隆: 痛み：遺伝子多型のあゆみと創薬をめぐる話題－世界の情勢とわが国の状況. ペインクリニック 46(12): 1315-1327, 2025.

(3) 著書

(4) 研究報告書

1) 西澤大輔, 長谷川準子, 中山京子, 池田和隆: 喫煙行動の多遺伝子要因の網羅的解析及び他の習慣的行動等形質との関連性の解明. 公益財団法人喫煙科学研究財団 令和 7 年度喫煙科学研究財団研究年報. 2026.
2) 西澤大輔, 名古（岩下）由佳, 金田匠海, 大庭真梨, 久我弘典, 浜村俊傑, 松本俊彦, 井手聡一郎, 松下幸生, 池田和隆: 東京都における飲酒問題調査研究. 東京都福祉局 アルコール健康障害に関する調査委託 完了報告書. 2025.
3) 井手聡一郎, 藤田雅代, 池田和隆: ドパミン関連遺伝子改変マウスを用いたニコチン依存と行動嗜癖の解析. 公益財団法人喫煙科学研究財団 第 39 回令和 6 年度助成事業 研究成果報告書. 2025.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

1) 池田和隆: 国際神経精神薬理学会（CINP）の活用法. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
2) 井手聡一郎, 池田和隆: マウスのストレス誘発うつ様症状に対するケタミンの抗うつ作用機序. 第 98 回日本生化学会大会, 京都, 2025.11.04.
3) 池田和隆: アディクション薬理研究の温故知新. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2025.10.23.
4) 池田和隆: アディクションと神経伝達物質. 2025 年度生理学研究所研究会 情動研究会 2025, 北海道, 2025.09.17.
5) 池田和隆: 先端モデル動物支援プラットフォーム [講演]. 文部科学省科学研究費学術変革領域研究「学術研究支援基盤形成」生命科学 4 プラットフォーム 支援説明会・成果シンポジウム, 弥生講堂 一条ホール, 東京, 2025.04.22.
6) 池田和隆: ドーパミン欠乏マウスを用いた精神神経疾患研究 [講演]. 福島県立医科大学医学部付属生体情報伝達研究所・シンポジウム「大脳皮質ー基底核回路をモデルに」, 福島県立医科大学, 福島, 2026.02.27.

(2) 一般演題

1) Nishizawa D, Mieda T, Tsujita M, Nakagawa H, Yamaguchi S, Morino R, Yokota M, Kasai S, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Kitamura A, Hayashida M, Ikeda K: Replication of the association between the ELAVL2 rs4977887 single nucleotide polymorphism and postoperative opioid-related nausea/vomiting in patients undergoing laparoscopic-assisted colectomy (LAC). The American Society of Human Genetics 75th Annual Meeting, Boston, USA, 2025.10.15.
2) Kamijo S: Adeno-associated virus-based sparse and intense labeling of cerebellar neurons. Cerebellum Gordon Research Seminar, Les Diablerets Conference Center, Les Diablerets,

Vaud, Switzerland, 2025.07.06.

3) Kamijo S: Transient inhibition of developmental Purkinje cell activity caused male-specific ASD-like phenotypes. Cerebellum Gordon Research Seminar, Les Diablerets Conference Center, Les Diablerets, Vaud, Switzerland, 2025.07.05.

4) Ide S, Ikeda K: Impact of δ and μ Opioid Receptors on Hopeless Emotional Responses in Mice. CINP-AsCNP 2025 Joint Congress, 2025.06.15–2025.06.18.

5) Nishizawa D, Ikeda K: Genetic polymorphisms associated with opioid sensitivity in palliative care and general anesthesia. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.18.

6) Ide S, Izuo N, Ikekubo Y, Uhl GR, Sora I, Nitta A, Ikeda K: The inhibitory effect of ifenprodil on nicotine-induced addictive behaviors. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.17.

7) Kamijo S: Developmental inhibition of Purkinje cells causes male-specific ASD-like phenotypes – vulnerable male cerebellum hypothesis. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.17.

8) Hayashi M, Ohka S, Nishizawa D, Inoue R, Hayashida M, Hasegawa J, Nakayama K, Ebata Y, Kang Y, Yoshida K, Koshika K, Fukuda K, Ichinohe T, Ikeda K: rs1051931 nonsynonymous polymorphism of platelet activating factor (PAF) degrading enzyme PLA2G7 gene is associated with postoperative dysesthesia and pain. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.17.

9) Nakamoto Y, Mugishima G, Takamatsu Y, Ikeda K, Yoshii M: EL mouse as an animal model for epilepsy, anxiety and hyperactivity: involvement of Translocator Protein 18 kD (TSPO). 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.17.

10) Miwa H: Effect of GAD67 deletion in the thalamic reticular nucleus on sensory gating and sleep spindle activity. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.16.

11) Moriya Y, Ide S, Ikeda K: Sex-specific effects of repeated ketamine exposure on locomotor activity in mice: Influence of social and isolated housing conditions. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.16.

12) Nishizawa D, Mieda T, Tsujita M, Nakagawa H, Yamaguchi S, Morino R, Yokota M, Kasai S, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Kitamura A, Hayashida M, Ikeda K. Replication of the association between the ELAVL2 rs4977887 variant and postoperative opioid-related nausea/vomiting. 日本人類遺伝学会第 70 回大会，横浜，2025 年 12 月 18 日.

13) 古田島浩子，佐藤敦志，笠井慎也，萩野洋子，田中美歩，高松幸雄，西籐泰昌，内野茂夫，池田和隆：ペア飼育による遺伝型相互作用が社会性行動と DNA メチル化プロファイルに与える影響：結節性硬化症モデルマウスによる検討．第 48 回日本分子生物学会年会，横浜, 2025.12.05.

14) 西澤大輔，三枝勉，辻田美紀，中川秀之，山口茂樹，森野良蔵，横田美幸，笠井慎也，長谷川準子，江畑裕子，中山京子，北村晶，林田眞和，池田和隆：腹腔鏡補助下大腸切除術（LAC）を受けた患者における ELAVL2 rs4977887 バリアントと術後オピオイド関連悪心・嘔吐との関連の再現. BPCNPNP2025 合同年会，京都, 2025.11.14.

15) 藤田雅代, 設楽浩志, 井手聡一郎, 小林和人, 池田和隆: ドーパミン神経サブタイプの解析：ドーパミントランスポーター非発現神経の前頭前野投射と多動抑制への関与. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
16) 井手聡一郎, 泉尾直孝, 池窪結子, Uhl George R, 曽良一郎, 新田淳美, 池田和隆: イフェンプロジルによるニコチン誘発依存様行動の抑制効果. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
17) 林真由子, 大岡静衣, 西澤大輔, 長谷川準子, 中山京子, 福田謙一, 松浦信幸, 池田和隆: 血小板活性化因子生合成酵素 lysophosphatidylcholine acyltransferase 2 遺伝子の一塩基多型 rs1992116 は、術後の異常感覚・感覚鈍麻の発現と有意に関連する. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
18) 大岡静衣, 長谷川準子, 中山京子, 西澤大輔, 川路英哉, 嶋多美穂子, 山田壮一, 福井良子, 福士秀悦, 池田和隆: 慢性疼痛関連 HS3ST4 遺伝子一塩基多型領域は、疼痛関連転写因子存在下、転写プロモーター活性を有する. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
19) 古田島浩子, 佐藤敦志, 笠井慎也, 萩野洋子, 田中美歩, 高松幸雄, 西藤泰昌, 内野茂夫, 池田和隆: 自閉スペクトラム症を伴う結節性硬化症モデルマウスにおける社会性行動へのペア飼育による影響と DNA メチル化解析. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.14.
20) 河村俊平, 佐々木一益, 古田島浩子, 池田和隆, 笠井慎也: 加齢が疼痛感受性におよぼす影響の解明. BPCNPNP2025 合同年会, 京都, 2025.11.13.
21) 梅村二葉, 古田島浩子, Strickland J, Garcia-Romeu A, Johnson M, 池田和隆: 日本語版 4item-Mystical Experience Questionnaire (MEQ-4) および 7item-Challenging Experience Questionnaire (CE-7) の開発. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2025.10.25.
22) 山口保晴, 笠井慎也, 長谷川準子, 池田和隆: 発達期の食習慣が飲酒におよぼす影響の解明. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2025.10.24.
23) 井手聡一郎, 泉尾直孝, 池窪結子, Uhl GR, 曽良一郎, 新田淳美, 池田和隆: ニコチン誘発依存様行動に対するイフェンプロジルの抑制効果. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2025.10.24.
24) 井手聡一郎, 池田和隆: κ オピオイド受容体ノックアウトマウスにおける飼育環境と性差がケタミンの行動効果に及ぼす影響. 第 44 回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム, 2025.09.27–2025.09.28.
25) 水谷隆太, 雑賀里乃, 山本義郎, 井野元智恵, 梶原博, 中村直哉, 垣本由布, 佐田侑樹, 安武正展, 上椙真之, 竹内晃久, 上杉健太朗, Nikitin V, Carlo FD, 鳥居洋太, 久島周, 尾崎紀夫, 入谷修司, 山下祐一, 井手聡一郎, 池田和隆, 大島健一, 糸川昌成: 統合失調症における神経細胞の変化. 第 19 回日本統合失調症学会, 高槻, 2025.04.27.

(3) 研究報告会

1) 三輪秀樹, 池田和隆, 岡戸晴生 ：ZBTB18/RP58 ハプロ不全による知的障害モデルマウスにおける感覚過敏についての検証. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度研究報告会（第 37 回）, 2026.3.16.
2) 名古(岩下)由佳, 西澤大輔, 池田和隆 ：アルコール代謝関連遺伝子多型と飲酒行動および心理アウトカムとの関連：性差の観点からの検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度 研究報告会（第 37 回）, 2026.3.16.

(4) その他

C．講演

1) 池田和隆: アディクションの早期発見と早期治療［講演］. 2025 年度 第 1 回 都医学研都民講座 「こころの病の早期発見と早期治療」, 東京都医学総合研究所, 東京, 2025.04.26.

D．学会活動

(1) 学会主催

1) 池田和隆：国際神経精神薬理学会（CINP）メルボルン大会，メルボルン，2025.06.15-18

(2) 学会役員

1) 池田和隆：国際神経精神薬理学会 理事長，国際科学プログラム委員会委員長，ノミネート委員会委員
2) 池田和隆：アジア神経精神薬理学会 副理事長
3) 池田和隆：東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合 副理事長
4) 池田和隆：日本ペインクリニック学会 特任評議員，編集委員会査読委員
5) 池田和隆：脳の世紀推進会議 理事
6) 池田和隆：日本アルコール・アディクション医学会 学術評議員，理事，将来構想委員長
7) 池田和隆：日本神経精神薬理学会 評議員，財務委員長
8) 池田和隆：日本医療研究開発機構 AMED 課題評価委員
9) 池田和隆：日本薬理学会 学術評議員，薬理学エデュケーター
10) 池田和隆：日本脳科学関連学会連合 評議員，運営委員，産学連携諮問委員会委員長，将来構想委員
11) 池田和隆：日本学術会議 連携会員，アディクション分科会副委員長
12) 池田和隆：鎮痛薬・オピオイドペプチド研究会 理事
13) 西澤大輔：日本アルコール・アディクション医学会 学術評議員
14) 西澤大輔：日本神経精神薬理学会 評議員，企画・研究委員

(3) 座長

1) Ikeda K: "Hikikomori" (Social Withdrawal). ACONAMI 2025, Tokyo (NCNP), 2025.09.24.
2) Ikeda K: Symposium 17: Connecting the Dots in Opioid Addiction: Brain Circuits, Stress, and Clinical Trials . 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne Convention and Exhibition Centre, Melbourne, Australia, 2025.06.18.
3) Ikeda K: Symposium 14: Genetic Insights into Individual Variability in the Effects of Addictive Substances. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne Convention and Exhibition Centre, Melbourne, Australia, 2025.06.18.
4) Miwa H: Featured Communication 6: Steroids/Depression. 36th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology / 9th AsCNP Congress (CINP-AsCNP 2025), Melbourne, Australia, 2025.06.17.
5) 池田和隆: ワークショップ 1: 国際学会の活用法. BPCNPNP2025 合同年会, 国立京都国際会館, 京都, 2025.11.14.
6) 池田和隆: 柳田賞受賞講演. 第 60 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 学術総合センター 一橋講堂, 東京, 2025.10.25.
7) 池田和隆: 生理機能解析支援 テクニカルセミナー2. 2025 年度文部科学省学術変革領域研究学術研究支援基盤形成 先端モデル動物支援プラットフォーム 2025 年度若手支援技術講習会, 蓼科グランドホテル滝の湯, 蓼科, 2025.09.03.

(4) 学会誌編集委員等

1) 池田和隆：Alcoholism: Clinical & Experimental Research Field Editor
2) 池田和隆：Neuropsychopharmacology Reports Section Editor
3) 西澤大輔：Journal of Addiction Medicine & Therapy Editorial Board member

E．研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

F．その他

【受賞】

1) 森屋由紀: 女性の健康課題に挑む STEM イノベーション : 痛みのない未来を目指して. 第 8 回キャタピラーSTEM 賞（優秀賞）, ANA クラウンプラザホテル神戸, 神戸, 2026.02.28.

8. 精神疾患病態研究部

Ⅰ．研究部の概要

精神疾患病態研究部では，精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している．精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている．精神疾患の生物学的な研究は，認知社会機能，脳神経画像，神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて，統合失調症，気分症，神経発達症などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより，病態を解明し，新たな診断法・治療法の開発を行っている．この研究は，当研究部においてのみ行うものではなく，国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国57 の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORO（Cognitive Genetics Collaborative Research Organization：認知ゲノム共同研究機構）を運営しオールジャパン体制で遂行している．精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は，EGUIDE プロジェクト（Effectiveness of GUIdeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment：精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究）という全国 77 施設の全国多施設共同研究組織を牽引し，全国でガイドラインの講習を行い，その効果検証を行っている．

令和 7 年度の人員構成は次のとおりである．部長：橋本亮太，室長：松本純弥，リサーチフェロー：長谷川尚美，伊藤颯姫，科研費研究員：宮川 希，山縣眞美子，小池春菜，北川 航，五十嵐香琳，井ノ上博司，科研費研究補助員：河上優稀，林 朋花，宮岡麻友，嘉村衣莉，佐藤一始，科研費研究助手：芦原 操，併任研究員：佐藤英樹，柏木宏子，竹田康二，髙野晴成，石川夏絵，林 大祐，一戸紀孝，渡邉 惠，樋口早子，五十嵐 俊，外来研究員 5 名，客員研究員 72 名，研究生 9 名．

Ⅱ．研究活動

Ａ．精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

1） 精神疾患データベース（全員）

精神疾患の病態を解明し，その診断法・治療法を開発するためには，多くの精神疾患患者及び健常者の生体試料や検査データを収集し，それを用いて多くの研究者が研究を活発に行うことが必要とされる．本研究事業「精神疾患データベースの構築・利活用により精神疾患の病態を解明しその障害を支援するための研究」（略称：精神疾患データベース：精神 DB）においては，全国の研究者が収集している生体試料や検査データを集約し，広く研究者に利活用できる仕組みを構築することを目的としている．国立精神・神経医療研究センターは精神疾患研究を下支えする責務があり，これを果たすべく 2023 年 4 月から本研究事業を行っている．

参加研究機関は 52 研究機関であり，登録されている精神症状，認知社会機能，脳神経画像，神経生理機能，ゲノム情報などの多モダリティの試料・情報数は 34,434 例となり，個人レベルのカタログ情報が集約された．利用実績は，昨年度の 6 件から，11 件となり，順調に増えている．精神 DB の活動内容，登録している試料・情報，提供手続きなど具体的な内容は，弊部の以下のホームページに記載されているので，ご参照ください．

https://byoutai.ncnp.go.jp/database/

2） 精神疾患の脳神経画像研究（松本，髙野，伊藤，長谷川，橋本）

精神疾患の脳神経画像研究は，COCORO の主なメンバーである大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員），筑波大学（根本客員研究員），東京大学（岡田，小池，森田客員研究員），北海道大学（橋本直樹客員研究員），山口大学（中川客員研究員），

京都大学（宮田客員研究員），富山大学（高橋客員研究員），名古屋大学（池田，尾崎客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），榊原病院（鬼塚客員研究員），昭和大学（中村客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），産業医科大学（吉村客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），東京慈恵会医科大学（小高客員研究員），日本医科大学（肥田客員研究員），広島大学（岡田客員研究員）などの多施設共同研究にて行っている．統合失調症を中心に三次元脳構造画像解析，拡散テンソル画像解析，安静時機能的 MRI 解析などを実施している．また，脳病態統合イメージングセンター（IBIC）臨床脳画像研究部の高野部長と共に，Integrative Brain Imaging Support System（IBISS）による脳 MRI 画像データの品質評価及び管理システムの運用を行っている．国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMA との共同研究も引き続き行っている．

従来の診断に沿って開発されてきた治療法は一定の効果を得ているものの，従来の治療に反応しない治療抵抗性の患者群も存在するため，治療抵抗性の患者群の脳病態に基づいて層別化した病態解明研究と治療法の開発が求められている．層別化のためには大規模な症例数が必要となるため COCORO の多施設データが活用されている．4 大精神疾患（統合失調症，双極症，抑うつ症，自閉スペクトラム症）の患者 2,526 名と健常者 3,078 名の MRI を用いて大脳皮質下領域の体積が認知機能および社会機能と関連する 4 つの脳バイオタイプを見出した COCORO の大規模多施設研究成果に基づき，昨年度は側脳室拡大（Enlarged Ventricle: EV）と認知機能障害（Cognitive Impairment: CI）によって層別化された EVCI（いぶき）群が精神疾患の新たな診断分類の候補として見出された．先行研究で見出された特に重度な認知・社会機能を示す脳バイオタイプ 1 の脳構造画像上の個別の特徴は EV（健常者の 3 標準偏差以上の側脳室拡大）であり，高い感度・特異度で脳バイオタイプ 1 が抽出できることが見いだされた．EV は統合失調症で頻度が高く（7.3%），他の精神疾患の約 4%で認められるが，健常者でも 1%存在している．そこで EV に加えて CI（中等度以上の認知機能障害）を追加の層別化マーカーとしたところ健常者が含まれずに精神疾患患者のみを層別化できた．EVCI 群として層別化されたこの患者群は統合失調症の診断が多く，脳波異常も高頻度で，病的で稀なコピー数多型も高い頻度で持っていることから一つの疾患単位を構成する可能性が示された．そこで EVCI の臨床的特徴を明らかにするため，個々の EVCI 患者の臨床情報を精査したところ，MRI 検査では虚血性変化を示す T2 強調画像での大脳白質の高信号所見が多く，治療経過では抗精神病薬に対する治療抵抗性統合失調症を認め，さらにクロザピンに対する良好な治療反応性を示すといった特徴がわかり，論文として報告した（松本，伊藤，長谷川，橋本，Yasuda et al.，Neuropsychopharmacol Rep，2025）．さらに，EVCI の再現性を確認するため，EVCI 群が見出されたコホートとは異なるコホートでも EVCI 患者を探索した．その結果，他のコホートでも EVCI 患者が見つかることが明らかになり，再現性があることを論文化して報告した（松本，伊藤，長谷川，橋本，Onitsuka et al.，Neuropsychopharmacol Rep，2026）．続けて，EVCI 群の認知機能の詳細なプロフィールを検証し，記銘力障害のような特定の認知機能ドメインに偏ってはおらず全般的な認知機能の障害であることが判明し，これについても論文報告した（松本，伊藤，長谷川，橋本，Matsumoto et al.，Psychiatry Clin Neurosci，2026）．このように EVCI の研究が進むことで，今まで主観的な体験の聞き取りや行動症状・社会機能などの観察によって診断されていた精神疾患が，脳画像検査や認知機能検査といった客観的な検査所見に基づいて診断していける可能性を示している．この取り組みは従来の操作的診断基準を乗り越える試みとなる．従来の精神疾患の病態解明研究では，人の妄想や幻覚のような主観的症状を反映したモデル動物の作成やその妥当性の評価は困難であった．これに対し，EVCI 研究では脳室体積や認知機能などの客観的指標に基づく妥当性を評価可能な内因性精神疾患のモデル動物作成などにより基礎研究の発展も期待できる．精神疾患の基礎研究により病態解明がさらに進むことが期待でき，脳室体積や認知機能をサロゲートマーカーとして治療法の開発研究の進展も期待される．このようにして EVCI 研究では脳構造画像と認知機能検査に基づいた

客観的な精神疾患の研究を推進している．これらの研究により，今年度は 6 編の論文成果があった．

3） 精神疾患の眼球運動研究（松本，伊藤，長谷川，橋本）

精神疾患の眼球運動研究は，大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），名古屋大学（池田客員研究員），東京大学（森田客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），北海道大学（橋本直樹，吉田，岡田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），愛知医科大学（宮田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員），榊原病院（鬼塚客員研究員），獨協医科大学（古郡客員研究員），福岡大学（堀客員研究員）などとの多施設共同研究にて行っている．眼球運動と認知機能を用いた統合失調症の診断マーカーの社会実装化を企業と 10 医療機関の共同研究にて推進している．医療現場で実施可能なタブレット機器にて簡便に測定できる医療機器プログラム開発を進め，タブレット実装を行い，PMDA 相談を行った．iPad Pro に搭載した自由視眼球運動課題と 2 種類の認知機能評価ツールを用いて，統合失調症と健常者の鑑別に役立つ成果が得られた（松本，伊藤，長谷川，橋本，三浦客員研究員，森田客員研究員）．これらの研究により，今年度は 1 編の論文成果があった．

4） 認知社会機能プロジェクト（松本，伊藤，長谷川，橋本）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し，5,300 例程度のデータを COCORO にて集積して解析し，普及のため各地で講習会などを行っている．認知機能障害は，簡略版 WAIS で測定する推定知能と Japanese Adult Reading Test（JART）で測定する推定病前知能の差にて算出したものである．例年行っている日本統合失調症学会のワークショップは 2025 年 4 月に実施した．昨年度発表した WAIS-IV 簡略版をはじめとする簡便な認知機能評価ツールについて，臨床現場での実装を見据え，その有用性および認知機能評価の重要性の普及に引き続き取り組んでいる．さらに精神症状と認知社会機能検査データから，統合失調症患者の精神病症状，認知機能および社会機能の関連構造と，各指標が機能的アウトカムに及ぼす影響について検討した．また時間的制約のある臨床場面においては，すべての患者に対して詳細な認知機能検査を実施することは困難であり，認知機能障害の可能性を簡便に把握し，精査の必要性を判断できるスクリーニング手法が有用である．そこで多施設共同研究として，統合失調症における認知機能障害の有無を簡便にスクリーニングすることを目的とした質問票の開発を進め，全国 33 施設と協同し 600 例近いデータを収集した．解析の結果，認知機能の下位領域である学習および処理速度に関する 2 項目からなる非常に簡便な質問票においても，一定のスクリーニング性能を有することが示され，臨床現場における低負担な評価手法としての有用性が示唆された．これらの研究について，複数の学会において発表し，今年度は 1 編の論文成果があった．

5） 精神疾患のゲノム・生体試料・分子メカニズム研究（橋本，松本）

精神疾患のゲノム・生体試料研究は，国内においては大阪大学（藤本，山森，安田，橋本 均客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），東京農業大学（中澤客員研究員），新潟大学（菊地客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），東京都医学研究所（新井客員研究員），福島県立医科大学などとの共同研究，そして国外においては双極性障害におけるリチウムの治療反応性の遺伝学研究のコンソーシアムである ConLiGen や ENIGMA との共同研究を中心に行っている．統合失調症に認められる 3q29 欠失や自閉スペクトラム症で認められる POGZ 変異の iPS 細胞における機能解析を行い，徐々に成果が得られている．神経研究所微細構造研究部（一戸部長：併任）と自閉スペクトラム症に関する共同研究を引き続き行っている．これらの研究により，今年度は 1 編の論文成果があった．

B．精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1） 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（長谷川，五十嵐，佐藤，柏木，伊藤，松本，橋本）

EGUIDE プロジェクトは，精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い，ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である．EGUIDE プロジェクトの主なメンバーである杏林大学（渡邊客員研究員），北里大学（稲田客員研究員），獨協医科大学（古郡客員研究員），兵庫医科大学（山田客員研究員），福岡大学（堀客員研究員）など，31 名の客員研究員と共に共同研究を実施している．

対象とするガイドラインは，統合失調症薬物治療ガイドライン，うつ病治療ガイドライン，精神疾患を合併した，或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイドと統合失調症に合併する肥満・糖尿病の予防ガイドであり，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会，日本臨床精神神経薬理学会，日本精神神経学会のバックアップを受けて行っている．統合失調症とうつ病のそれぞれに対する標準的な治療である抗精神病薬単剤治療率と抗うつ薬単剤治療率がたった 50-60%程度であり，しかも，0～100%と病院によって大きくばらついており，均てん化（全国どこでも標準的な専門医療を受けられるよう，医療技術等の格差の是正を図ること）が必要であることを明らかにしてきた．

EGUIDE プロジェクトは 2016 年に開始され，毎年 10 回以上の講習会を全国で行い，延べ 5，500 名以上が講習を受講した．受講者は 76 大学 931 医療機関に広がっている．EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は，講習受講直後のガイドラインの理解度の向上，その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上，処方行動を診療の質（Quality Indicator: QI）やガイドライン一致率という形で測定し，講習の効果の有無についての検討を行っている．本年度は，統合失調症のガイドラインとうつ病のガイドラインの講習の対面講習をそれぞれ 9 回行い，ウェブ講習を計 5 回に加え，学会等におけるワークショップ等を行い，延べ 984 名が参加した．今年度も，講習後には講習前と比較して，ガイドラインの内容の理解度が向上し，受講者の満足度は高かった．プロジェクト開始 10 年目の節目の年となり，これまでに収集したデータを用いて長期的な講習効果の検証を行った．精神科医の自記式調査票を用いたガイドラインの推奨治療の実践度の経時的変化を検証したところ，ガイドライン講習受講前と比較し，受講 1 年後は実践度が高く，それは受講 8 年後も持続していることが明らかとなった（井手，山室，長谷川，松本，伊藤，橋本 et al.，Neuropsychopharmacol Rep，2026）．また，参加施設における患者の治療データを用いて，ガイドライン推奨治療の実施率（統合失調症 11 項目，うつ病 7 項目）の 8 年間の長期的変化を検証したところ，施設が EGUIDE に参加してからの経過年数が上がるにつれて，実施率が向上する治療項目（治療抵抗性統合失調症の検討率，他の向精神薬の併用もない抗精神病薬単剤治療率，抗コリン薬の非処方率など）があった（長谷川，村岡，松本，伊藤，橋本 et al.，Neuropsychopharmacol Rep，2025）．以上より，EGUIDE プロジェクトのガイドライン講習の効果は一過性の成果ではなく，少なくとも 8 年間は継続し，少しずつ日本の精神科医療が良くなっている可能性が示唆された．

このように，ガイドラインの普及教育検証活動を全国で行い，論文成果は上記で紹介した 2 編の他 7 編であった．

2） 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

EGUIDE プロジェクトにて精神疾患の診療ガイドラインの普及に広く努めており，その普及の過程で得られた内容を踏まえて，各種ガイドラインの作成に携わっている．日本神経精神薬理学会と日本臨床精神神経薬理学会が合同で作成している統合失調症薬物治療ガイドラインの改訂においては作成委員会の顧問を務めている．2025 年 12 月に公表された日本うつ病学会が作成したうつ病診療ガイドライン 2025 については，協力学会である日本精神神経学会の

ガイドライン検討委員会委員として作成に協力した．日本神経学会が作成しているてんかん診療ガイドラインについても，協力学会である日本精神神経学会のガイドライン検討委員会委員として作成に協力した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・ 統合失調症薬物治療ガイドライン及びうつ病ガイドラインの当事者・支援者版のガイドを用いた当事者や支援者用の講習を開始しており，各学会や家族内などで行っている（伊藤，橋本，市橋客員研究員，坪井客員研究員）．

(2) 専門教育面における貢献

・ 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトを全国展開している．EGUIDE プロジェクトにおいては，統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い，その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い，精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している．令和 7 年度は，統合失調症のガイドラインとうつ病のガイドラインの講習を全国 18 か所で行い，延べ 984 名が参加した（長谷川，久保田，柏木，橋本）．

・ 自身が委員を務める日本精神神経学会ガイドライン検討委員会主催で精神疾患の診療ガイドライン講習会を行った．そのほか，ウェブ講習，学会等での講習会やワークショップを 6 回実施することを通じて活発な教育活動に注力した（橋本）．

・ 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科，連合小児発達学研究科においては招へい教授として，精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）．

(3) 精研の研修の主催と協力

・ 2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修で第 4 回の統合失調症の標準治療研修とうつ病の標準治療研修を行った（柏木，長谷川，橋本）．

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・ EGUIDE プロジェクトにおいて統合失調症およびうつ病の入院患者の処方についての実態調査を 10 年前から行っており，その処方データは今年度約 3 万症例に達している（橋本）．

(5) センター内における臨床的活動

・ 外来診療において，連携新患，統合失調症外来をそれぞれ週に 1 回の新患枠の診察及び，再診を週に半日行っている．専門として，統合失調症及び神経発達症の診療を行い，基本的には，当院ならではの精査や加療を行った後に，地域医療機関に逆紹介を行っている．その中から，一部の患者が新規入院にもつながっている．病院内外からの紹介を受け，セカンドオピニオン対応も行っている（橋本）．

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) Omlor W, Rabe F, Fuchs S, Surbeck W, Cecere G, Huang GY, Homan S, Kallen N, Georgiadis F, Spiller T, Seifritz E, Weickert T, Bruggemann J, Weickert C, Potkin S, Hashimoto R, Sim K, Rootes-Murdy K, Quide Y, Houenou J, Banaj N, Vecchio D, Piras F, Spalletta G, Salvador R, Karuk A, Pomarol-Clotet E, Rodrigue A, Pearlson G, Glahn D, Tomecek D, Spaniel F, Skoch A, Kirschner M, Kaiser S, Kochunov P, Fan FM, Andreassen OA, Westlye LT, Berthet P, Calhoun VD, Howells F, Uhlmann A, Scheffler F, Stein D, Iasevoli F, Cairns MJ, Carr VJ, Catts SV, Di Biase MA, Jablensky A, Green MJ, Henskens FA, Klauser P, Loughland C, Michie PT, Mowry B, Pantelis C, Rasser PE, Schall U, Scott R, Zalesky A, de Bartolomeis A, Barone A, Ciccarelli M, Brunetti A, Cocozza S, Pontillo G, Tranfa M, Di Giorgio A, Thomopoulos SI, Jahanshad N, Thompson PM, van Erp T, Turner J, Homan P: Estimating Multimodal Structural Brain Variability in Schizophrenia Spectrum Disorders: A Worldwide ENIGMA Study. Am J Psychiatry 182(4): 373-388, 2025.

2) Ochi S, Kodaka F, Hasegawa N, Tsuboi T, Ohi K, Igarashi S, Fukumoto K, Iga JI, Muraoka H, Iida H, Tagata H, Kashiwagi H, Numata S, Yamagata H, Takeshima M, Ichihashi K, Hashimoto N, Nagasawa T, Nakamura T, Matsumoto J, Yamada H, Hori H, Ueno SI, Inada K, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: Associations between clozapine availability, the diagnosis of treatment-resistant schizophrenia subgroups, antipsychotic monotherapy, and concomitant psychotropics among patients with Schizophrenia: a real-world nationwide study. Int J Neuropsychopharmacol 28(4): pyaf011, 2025.

3) Wada A, Sumiyoshi C, Yoshimura N, Hashimoto R, Matsumoto J, Stickley A, Yamada Y, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Yamada R, Sumiyoshi T: Semantic memory disorganization linked to social functioning in patients with schizophrenia. Schizophrenia (Heidelb) 11(1): 61, 2025.

4) Kawamata Y, Ohi K, Ito S, Hasegawa N, Yasuda Y, Fujimoto M, Yamamori H, Fukumoto K, Kodaka F, Matsumoto J, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Relationships between clinician adherence to guideline-recommended treatment and memory function in patients with schizophrenia. J Psychiatr Res 185: 169-176, 2025.

5) Sumiyoshi C, Ito S, Matsumoto J, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting models for work outcomes in patients with schizophrenia and its clinical application. Sci Rep 15(1): 15308, 2025.

6) Sharew NT, Clark SR, Papiol S, Heilbronner U, Degenhardt F, Fullerton JM, Hou L, Shekhtman T, Adli M, Akula N, Akiyama K, Ardau R, Arias B, Hasler R, Richard-Lepouriel H, Perroud N, Backlund L, Bhattacharjee AK, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Marie-Claire C, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Del Zompo M, DePaulo JR, Étain B, Jamain S, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoroiu-Serbanescu M, Fallgatter AJ, Stegmaier S, Ethofer T, Biere S, Petrova K, Schuster C, Adorjan K, Budde M, Heilbronner M, Kalman JL, Kohshour MO, Reich-Erkelenz D, Schaupp SK, Schulte EC, Senner F, Vogl T, Anghelescu IG, Arolt V, Dannlowski U, Dietrich DE, Figge C, Jäger M, Lang FU, Juckel G, Konrad C, Reimer J, Schmauß M, Schmitt A, Spitzer C, von Hagen M, Wiltfang J, Zimmermann J, Andlauer TFM, Fischer A, Bermpohl F, Ritter P, Matura S, Gryaznova A, Falkenberg I, Yildiz C, Kircher T, Schmidt J, Koch M, Gade K, Trost S, Haussleiter IS, Lambert M, Rohenkohl AC, Kraft V, Grof P, Hashimoto R, Hauser J, Herms

S, Hoffmann P, Jiménez E, Kahn JP, Kassem L, Kuo PH, Kato T, Kelsoe J, Kittel-Schneider S, Ferensztajn-Rochowiak E, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Tortorella A, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy S, Colom F, Millischer V, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O'Donovan C, Ozaki N, Pfennig A, Pisanu C, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Maj M, Turecki G, Vieta E, Veeh J, Viswanath B, Witt SH, Wright A, Zandi PP, Mitchell PB, Bauer M, Alda M, Rietschel M, McMahon FJ, Schulze TG, Baune BT, Schubert KO, Amare AT: Pathway-Specific Polygenic Scores for Predicting Clinical Lithium Treatment Response in Patients With Bipolar Disorder. Biol Psychiatry Glob Open Sci 5(5): 100558, 2025.

7) Hashimoto N, Okada N, Fukunaga M, Nemoto K, Miura K, Matsumoto J, Ishikawa S, Narita H, Morita K, Yasuda Y, Kamishikiryo T, Harada K, Yamamoto M, Ohi K, Matsubara T, Hirano Y, Okada G, Tha KK, Abe O, Onitsuka T, Kawasaki Y, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R; COCORO: Lithium and valproate affect subcortical brain volumes in individuals with bipolar disorder: Mega-analysis of 235 individuals. J Affect Disord 381: 115-120, 2025.

8) Yamamoto T, Miura K, Matsuda K, Matsumoto J, Hashimoto R, Ono S, Sadato N, Fukunaga M: Brain-wide activation and deactivation maps during smooth and saccadic tracking in humans. Cereb Cortex 35(8): bhaf242, 2025.

9) Yasuda Y, Ito S, Matsumoto J, Onitsuka T, Yamamori H, Fujimoto M, Hasegawa N, Ikeda M, Hashimoto R: Clinical Characteristics of Patients With Enlarged Ventricles and Cognitive Impairment (EVCI): Case Series. Neuropsychopharmacol Rep 45(3): e70029, 2025.

10) Tabata K, Toriumi K, Suzuki K, Takagi H, Parida IS, Niizato K, Oshima K, Imai A, Nagase Y, Hashimoto R, Yamasaki S, Nishida A, Itokawa M, Takahashi H, Miyashita M, Arai M: Schizophrenia with hypozincemia: Clinical features and symptom severity. Schizophrenia Research 286: 9-15, 2025.

11) Igarashi S, Tsuboi T, Hasegawa N, Ochi S, Ohi K, Fukumoto K, Iga JI, Muraoka H, Iida H, Kodaka F, Numata S, Ichihashi K, Kashiwagi H, Nakamura T, Yamagata H, Takeshima M, Nagasawa T, Matsumoto J, Yamada H, Hori H, Inada K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R, Watanabe K: Maintenance pharmacotherapy after electroconvulsive therapy in inpatients with major depressive disorder: 198 prescriptions in a real-world clinical setting. BMC Psychiatry 25(1): 957, 2025.

12) Takeda K, Nomura T, Suzuki M, Akita S, Takao K, Tagami A, Yasuda S, Matsuda T, Wada H, Arakawa I, Suzuki T, Yanagi E, Ichihashi Y, Tateyama K, Matsumi K, Hanada I, Hashimoto R, Hirabayashi N: Establishment of an electronic library in forensic psychiatric wards: a survey of its actual use by forensic inpatients. BMC Psychiatry 25(1): 1181, 2025.

13) Hasegawa N, Muraoka H, Arai Y, Horinouchi T, Yamamuro K, Hashimoto N, Ochi S, Tsuboi T, Kawamata Y, Nakamura T, Yasuda Y, Matsumoto J, Ito S, Onitsuka T, Ohi K, Numata S, Hori H, Inada K, Watanabe K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Long-Term Impact of EGUIDE Training on Facility-Wide Guideline Adherence Rate in Schizophrenia and Major Depressive Disorder: A Multicenter Study. Neuropsychopharmacol Rep 45(4): e70067, 2025.

14) Yamagata H, ide k, Ochi S, Iga JI, Fukumoto K, Ichihashi K, Katsumoto E, Takeshima M, Imai K, Shimamura Y, Matsumoto J, Hasegawa N, Kawamata Y, Tsuboi T, Numata S, Ohi K, Watanabe K, Yamada H, Hori H, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: Clinical behavior

toward outpatients with major depressive disorder based on guideline education for psychiatrists. Psychiatry Clin Neurosci Rep 4: e70275, 2025.

15) Hashimoto N, Nemoto K, Fukunaga M, Matsumoto J, Okada N, Morita K, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Koeda M, Kawashima T, Aki M, Sasabayashi D, Fujikane D, Harada K, Yamamoto M, Ishikawa S, Hasegawa N, Ito S, Ohi K, Matsubara T, Hirano Y, Watanabe Y, Yamasue H, Tateno A, Miyata J, Takahashi T, Kawasaki Y, Onitsuka T, Okubo Y, Asai K, Suzuki M, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R, COCORO: Optimizing multi-site schizophrenia differentiation: MRI harmonization with 20 controls per scanner in a study of 3560 subjects across 15 MRI scanners. Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry 144: 111607, 2026.

16) Horinouchi T, Arai Y, Hasegawa N, Muraoka H, Yamamuro K, Hashimoto N, Kawamata Y, Ochi S, Ohi K, Hori H, Yasuda Y, Kodaka F, Tsuboi T, Watanabe K, Yamada H, Onitsuka T, Ichihashi K, Matsumoto J, Numata S, Inada K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Educational spillover effect within a cluster: Impact of guideline education for schizophrenia and major depressive disorder on psychiatrists' treatment behavior in a real-world multicenter study. Asian Journal of Psychiatry 118(2026): 104918, 2026.

17) Onitsuka T, Yasuda Y, Ito S, Matsumoto J, Okada N, Yamamoto M, Ohi K, Takahashi T, Kubota M, Hashimoto N, Takano H, Hasegawa N, Okada G, Yoshimura R, Nakagawa S, Yamasue H, Numata S, Hashimoto R: A Data-Driven Psychiatric Disorder Subtype Defined by Significant Enlarged Ventricles and Cognitive Impairment: A Replication Study. Neuropsychopharmacol Rep 46(1): e70078, 2026.

18) Ide K, Yamamuro K, Yamada H, Hasegawa N, Arai Y, Muraoka H, Horinouchi T, Kawamata Y, Ochi S, Tsuboi T, Matsumoto J, Hashimoto N, Ohi K, Shusuke N, Hori H, Inada K, Watanabe K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Eight-Year Progression of Clinical Practice Implementation Following Guideline Training in the EGUIDE Project. Neuropsychopharmacol Rep 46(1): e70095, 2026.

19) Matsumoto J, Ito S, Sumiyoshi C, Yasuda Y, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Cognitive profile of psychiatric patients with coexisting enlarged ventricles and cognitive impairment: A rare cross-diagnostic phenotype predominantly observed in schizophrenia. Psychiatry Clin Neurosci 80(3): 233-234, 2026.

20) Ishikawa Y, Oishi N, Kyuragi Y, Hatakoshi M, Hirano J, Noda T, Yoshihara Y, Ito Y, Miyata J, Nemoto K, Fujita Y, Igarashi H, Takahashi K, Murakami S, Kanno H, Izumi Y, Takamiya A, Matsumoto J, Kodaka F, Nakagome K, Mimura M, Murai T, Suwa T: Electroconvulsive therapy-specific volume changes in nuclei of the amygdala and their relationship to long-term anxiety improvement in depression. Mol Psychiatry 30(6):2653-2664, 2025.

21) Shinagawa K, Hirano J, Kobayashi Y, Nakagawa A, Umeda S, Kamiya K, Terasawa Y, Matsumoto J, Noda T, Kyuragi Y, Suwa T, Kodaka F, Nakagome K, Murai T, Mimura M, Uchida H, Katayama N: Hierarchical Brain Dynamics Associated With Remission From Major Depression Across Diverse Therapeutic Modalities. Biol Psychiatry Cogn Neurosci Neuroimaging 5: S2451-9022(26)00001-7, 2026.

(2) 総説

1) 橋本亮太：キーワード：均てん化．メンタルヘルスマガジン こころの元気＋ 19(6): 63, 2025.

2) 橋本亮太，安田由華，伊藤颯姫，長谷川尚美，松本純弥：病態に基づく診断基準を精神科領域に導入する戦略とは何か？．精神神経学雑誌 128 (1): 26-33, 2026.

3) 橋本亮太，中川伸，仙波純一，三村將，尾崎紀夫：日本精神神経学会は精神科領域のガイドラインにどのように関与すべきか：概要．精神神経学雑誌 128 (2): 105-109, 2026.

(3) 著書

(4) 研究報告書

1) 橋本亮太，松本純弥，安田由華：AI 技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究．2025 年度日本医療研究開発機構 医工連携・人工知能実装研究事業 2025 年度 委託研究開発成果報告書．2026.
2) 橋本亮太，松本純弥：精神疾患の層別化によるエクストリームケースの同定とそれに基づく妥当性の高いモデル動物・細胞を用いた創薬シーズの探索研究．2025 年度日本医療研究開発機構脳神経科学統合プログラム（個別重点研究課題）2025 年度 委託研究開発成果報告書. 2026.
3) 橋本亮太：横断的患者リクルート促進．2025 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「マイレジストリの縦断データを活用した新規治療法開発と薬事承認の実現（研究開発代表者：竹田和良）」2025 年度 委託研究開発成果報告書．2026.
4) 橋本亮太：解析対象 ASD/SCZ 家系の選定と臨床情報の収集．2024 年度日本医療研究開発機構ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム:B-Cure ゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究（研究開発代表者：徳永勝士）」2025 年度 委託研究開発成果報告書．2026.
5) 橋本亮太：ビッグデータ駆動型解析による精神疾患の病態に基づいた層別化研究．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 2025 年度総括研究報告書．2026.
6) 松本純弥，長谷川尚美：精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究．2025 年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究実施状況報告書．2026.
7) 松本純弥：ビックデータ解析のためのデータ整備．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「ビッグデータ駆動型解析による精神疾患の病態に基づいた層別化研究」2025 年度分担研究報告書．2026
8) 長谷川尚美：精神科領域の治療ガイドラインの普及と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効果の検証．2025 年度科学研究費助成事業 若手研究研究成果報告書．2026.
9) 伊藤颯姫：統合失調症の認知機能測定のための WAIS-IV 簡略版の開発．2026 年度科学研究費助成事業 若手研究 研究実施状況報告書．2026.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 橋本亮太：監修，便秘とうつ病の関連，脳腸相関ニュース vol6，2025.
2) 橋本亮太：監修，日常診療における Measurement-Based Care(MBC)の多様な可能性，第 28 回日本精神保健・予防学会記録集，2025.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Hashimoto R: Novel Classification of Psychiatric Disorders by Data-Driven Neuroimaging Analysis. International Webinar Series in Commemoration of the 143rd Anniversary of NCMH Marzoeki Mahdi Hospital. オンライン, 2025.7.14.
2) Hashimoto R: Proposal for a Novel Classification of Patients With Enlarged Ventricles and Cognitive Impairment Based on Data-Driven Neuroimaging Analysis. Asian Consortium of National Mental Centers（ACONAMI）9th Annual Meeting, Tokyo(NCNP), 2025.9.24.
3) 橋本亮太：向精神薬の副作用のリスク・シェアリングについての双方向性のリアルタイム合意形成．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.21.

4) 橋本亮太：精神科薬物療法の適正処方を精神科医に教育する EGUIDE ってなに？.【リモート版】みんなねっとフォーラム，オンライン，2025.9.23.
5) 橋本亮太：基礎臨床連携のギャップを乗り越えろ！精神科医の立場から． BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，11.13-15(13), 2025 招待講演
6) 根本清貴，福永雅喜，渡邉嘉之，杉原玄一，髙野晴成，松本純弥，橋本亮太：臨床応用可能な側脳室容積バイオマーカーの開発．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.
7) 松田宙也，中瀧理仁，伊賀淳一，長谷川尚美，大井一高，牧之段 学，梅原英裕，富岡有紀子，吉野祐太，松本純弥，中込和幸，橋本亮太，上野修一，沼田周助：精神疾患横断的血漿トリプトファンとキヌレニン濃度の検討．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14
8) 橋本亮太：精神神経疾患領域の症例集積力の向上のコツ：COCORO と EGUIDE の経験から．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14
9) 橋本亮太：精神疾患の克服とその障害の支援のための臨床・研究にもとめられるもの．第 38 回日本総合病院精神医学会総会，栃木，2025.11.22.
10) 橋本亮太：精神疾患の克服への挑戦：どこまで変わったか，どこまで変えられるのか．第 79 回栃木県精神医学会・第 44 回栃木気分障害研究会，栃木，2026.2.28.
11) 松本純弥：統合失調症の脳画像病態研究の動向．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.
12) 松本純弥：側脳室拡大と認知機能障害がある精神疾患患者の診断と治療法開発．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.15.

(2) 一般演題

1) Wada A, Yamada R, Yamada Y, Sumiyoshi C, Hashimoto R, Matsumoto J, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Stickley A, Yoshimura N, Sumiyoshi T: Autistic trait severity in early schizophrenia: Role in subjective quality of life and social functioning. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.4.1.
2) Hori H, Hasegawa N, Iga J, Ochi S, Ichihashi K, Kyo Y, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: Prescription of Anticholinergic Drugs in Patients with Schizophrenia: Analysis of Antipsychotic Prescription Patterns and Hospital Characteristics. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025. 4.1.
3) Takemoto T, Kitagawa K, Nagayasu K, Seiriki K, Kasai A, Ago Y, Takuma K, Mori D, Ozaki N, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: Cortical hyperactivity underlies impaired social interaction in a mouse model of 3q29 microdeletion. Neuroscience 2025 (SfN 2025), 2025.11.19.
4) Hino M, Shishido R, Nagaoka A, Matsumoto J, Akatsu H, Hashizume Y, Hamasaki H, Kakita A, Kunii Y, Tomita H: Alterations in phosphoinositide signaling-associated molecules in bipolar disorder: A Postmortem Brain Study. ISBD2025Annual Conference, Chiba, 2025.9.17.
5) 和田 歩，住吉チカ，吉村直記，橋本亮太，松本純弥，スティックリー アンドリュー，山田悠至，菊池安希子，久保田涼太郎，松井 琴，中地可南，藤巻知夏，安達伶音奈，山田理沙，住吉太幹：Semantic network linked to social functioning in patients with schizophrenia．第 19

回日本統合失調症学会，大阪，2026.4.26.

6) 和田 歩，山田理沙，山田悠至，住吉チカ，橋本亮太，松本純弥，菊池安希子，久保田涼太郎，松井眞琴，中地可南，藤巻知夏，安達伶音奈，スティックリー アンドリュー，吉村直記，住吉太幹：Autistic trait severity in early schizophrenia：Role in subjective quality of life and social functioning．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.

7) 長谷川尚美，堀 輝，山田 恒，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：EGUIDE プロジェクトによる統合失調症の real-world study～2023 年度の報告～．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.

8) 伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，松本純弥，藤本美智子，山森英長，長谷川尚美，髙野晴成，住吉太幹，橋本亮太：統合失調症と自閉スペクトラム症における労働に関連する要因の検討．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.

9) 松本純弥，伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，長谷川尚美，藤本美智子，山森英長，住吉太幹，橋本亮太：側脳室拡大と認知機能障害がある精神疾患患者の認知機能の特徴．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025,4.26.

10) 和田 歩，住吉チカ，吉村直記，橋本亮太，松本純弥，Andrew Stickley，山田悠至，菊池安希子，久保田涼太郎，松井眞琴，中地可南，藤巻知夏，安達伶音奈，山田理沙，住吉太幹：Semantic network linked to social functioning in patients with schizophrenia．第 10 回 CEPD 研究会・年会，東京，2025.5.17.

11) 松本純弥，石丸直樹，原田健一郎，松原敏郎，高橋 努，肥田道彦，吉野祐太，村岡寛之，柳 雅也，橋本直樹，杉原玄一，岡田直大，伊藤颯姫，長谷川尚美，髙野晴成，菱本明豊，根本清貴，福永雅喜，橋本亮太：脳画像と認知機能による客観的な精神疾患診断を確立するための前向きコホート研究．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.

12) 森 啓輔，松本純弥，長谷川尚美，小高文聰，稲田 健，伊藤颯姫，堀 輝，樋口英二郎，鬼頭伸輔，古郡規雄，橋本亮太：ガイドライン一致率が高い統合失調症患者の処方特性．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.

13) 竹田和良，小居秀紀，橋本亮太，吉村直記，保谷岳彦，岩田正明，鬼頭伸輔，久我弘典，中込和幸：マイレジストリ（精神疾患レジストリ）の概要と薬事承認．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.

14) 橋本直樹，堀 輝，長谷川尚美，堀之内徹，阿竹聖和，市橋香代，今村弥生，越智紳一郎，村岡寛之，山室和彦，大井一高，小高文聰，坪井貴嗣，伊賀淳一，鬼塚俊明，古郡規雄，橋本亮太：抗精神病薬の種類別にみた統合失調症患者の向精神薬併用状況 -統合失調症患者 5340 例の解析．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.20.

15) 越山太輔，福永雅喜，岡田直大，笠井清登，橋本亮太：疾患横断的観点から見た精神疾患の大脳白質微細構造研究．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.11.

16) 岡田直大，福永雅喜，松本純弥，笠井清登，橋本亮太：精神疾患横断的な大脳皮質下構造の体積の大規模解析およびデータ駆動型新規分類．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.11.

17) 松本純弥，根本清貴，福永雅喜，橋本亮太：気分障害の疾患横断的大脳皮質構造画像解析．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，7.11.

18) 堀 輝，橋本直樹，山田 恒，橋本亮太，渡邊衡一郎，稲田 健：EGUIDE 研究のこれまでとこれから．第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.12.

19) 住吉チカ，伊藤颯姫，松本純弥，橋本直樹，豊巻敦人，池澤 聰，長谷川尚美，橋本亮太：統合失調症の認知機能障害の新規スクリーニング質問票の開発 1 ：検出性能の評価．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

20) 山形弘隆，井手健太，越智紳一郎，伊賀淳一，福本健太郎，市橋香代，勝元榮一，竹島正浩，今井康太，嶋村悠実，橋本亮太，古郡規雄：EGUIDE 受講と外来うつ病患者に対する治療行

動．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

21）多田照生，坪井貴嗣，五十嵐 俊，長谷川尚美，村岡寛之，越智紳一郎，荒井勇輔，中村敏範，堀之内 徹，川俣安史，岡田 怜，市橋香代，山室和彦，福本健一郎，小高文聰，大井一高，橋本直樹，沼田周助，鬼塚俊明，堀 輝，古郡規雄，渡邊衡一郎，橋本亮太：年齢によるうつ病患者の電気けいれん療法施術率および電気けいれん療法後の薬物療法の比較-EGUIDE プロジェクト-．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

22）嶋村悠実，今井康太，清水善任，井出健太，福本健一郎，長谷川尚美，市橋香代，坪井貴嗣，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：EGUIDE 版ポリファーマシー対策の進め方，～うつ病症例への活用の一例～．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

23）長谷川尚美，村岡寛之，山室和彦，荒井勇輔，堀之内 徹，堀 輝，山田 恒，松本純弥，稲田 健，渡邊衡一郎，古郡規雄，橋本亮太：うつ病の治療に対するガイドライン講習の効果～講習参加後の経年的変化～．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

24）小高文聰，岡田 怜，長谷川尚美，村岡寛之，坪井貴嗣，越智紳一郎，荒井勇輔，中村敏範，堀之内 徹，川俣安史，市橋香代，山室和彦，福本健太郎，多田照生，五十嵐 俊，大井一高，橋本直樹，沼田周助，鬼塚俊明，堀 輝，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症およびうつ病における入院前後の Quality Indicator の変化：EGUIDE の入退院データを用いた縦断解析．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

25）村岡寛之，橋本亮太，福本健太郎，小高文聰，大井一高，稲田 健，古郡規雄：通常診療下における抗うつ病非投与うつ病患者の診断及び特徴の検討を目的とした抗うつ薬投与うつ病患者対照．多機関共同観察研究，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

26）中村敏範，門馬拓未，吉澤智也，岩切啓太，窪田真明，橋本亮太，鷲塚伸介：精神疾患を有する ICU 患者の治療成績：身体的重症度と予後に与える影響の検討．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

27）荒井勇輔，堀之内 徹，長谷川尚美，山室和彦，村岡寛之，堀 輝，古郡規雄，橋本亮太：精神科ガイドライン教育の施設内波及効果の検証：EGUIDE プロジェクト全国多施設共同研究．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

28）川俣安史，中村敏範，古郡規雄，橋本亮太：クロザピン使用患者における血液検査回数の後方視的調査．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

29）橋本直樹，森 啓輔，福本健太郎，松本純弥，堀 輝，長谷川尚美，堀之内徹，阿竹聖和，市橋香代，今村弥生，越智紳一郎，村岡寛之，山室和彦，大井一高，小高文聰，坪井貴嗣，伊賀淳一，鬼塚俊明，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症患者における抗精神病薬 2 剤併用の検討 -統合失調症患者 19609 例の解析-．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

30）安田由華，伊藤颯姫，松本純弥，鬼塚俊明，山森英長，藤本美智子，長谷川尚美，池田 学，橋本亮太：脳室拡大および認知障害を特徴とする患者（enlarged ventricles and cognitive impairment: EVCI)の臨床的特徴：ケースシリーズ．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京

都，2025.11.13.

31) 森 啓輔，松本純弥，長谷川尚美，伊藤颯姫，福本健太郎，稲田 健，小高文聰，髙野晴成，鬼頭伸輔，橋本亮太：統合失調症患者におけるガイドライン一致率と薬原性錐体外路症状との関連．PCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

32) 片山沙香，河野翔太郎，池田直人，小河真也，三浦大樹，福島穂高，橋本亮太，橋本 均，中澤敬信：自閉スペクトラム症患者 iPS 由来神経系細胞を用いた 2p16.3 領域欠失の分子病態解析．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

33) 河野翔太郎，栗生俊彦，片山沙香，池田直人，小河真也，三浦大樹，福島穂高，田熊一敞，小野富三人，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：患者 iPS 由来神経系細胞を用いた 3q29 領域欠失の分子病態解析．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

34) 堀之内 徹，荒井勇輔，長谷川尚美，村岡寛之，山室和彦，橋本直樹，大井一高，堀 輝，古郡規雄，山田 恒，松本純弥，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：うつ病の診療に対するガイドライン講習の効果–施設と医師の講習受講状況による影響–．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

35) 伊藤颯姫，住吉チカ，松本純弥，橋本直樹，豊巻敦人，池澤 聰，長谷川尚美，橋本亮太：統合失調症の認知機能障害の新規スクリーニング質問票の開発 2：検出特性の検討．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

36) 伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，松本純弥，藤本美智子，山森英長，長谷川尚美，髙野晴成，住吉太幹，橋本亮太：統合失調症患者の労働時間に影響を与える要因の検討：認知機能と社会機能の役割．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

37) 長谷川尚美，堀 輝，山田 恒，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：EGUIDE プロジェクトのこれまでとこれから～ガイドライン講習の普及拡大に向けて～．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

38) 長谷川尚美，村岡寛之，山室和彦，荒井勇輔，堀之内 徹，堀 輝，山田 恒，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症の治療に対するガイドライン講習の効果～講習参加後の経年的変化～．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

39) 福本健太郎，大井一高，長谷川尚美，伊藤颯姫，川俣安史，安田由華，山森英長，藤本美智子，小高文聰，松本純弥，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症患者における治療ガイドライン遵守度と脳皮質下構造体積との関連．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），2025.11.14.

40) 山室和彦，長谷川尚美，荒井勇輔，堀 輝，村岡寛之，堀之内 徹，橋本直樹，越智紳一郎，坪井貴嗣，山形弘隆，松本純弥，伊藤颯姫，鬼塚俊明，大井一高，山田 恒，伊賀淳一，稲田 健，渡邊衡一郎，古郡規雄，橋本亮太：精神科医の主観的診療行動評価と処方実態との関連に関する検討：EGUIDE プロジェクト全国多施設共同研究．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

41) 川俣安史，大井一高，伊藤颯姫，長谷川尚美，安田由華，藤本美智子，山森英長，福本健太郎，小高文聰，松本純弥，古郡規雄，橋本亮太：精神科医の治療ガイドラインに基づく治療と統合

失調症患者の記憶機能との関係．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），2025.11.14.

42) 森 啓輔，松本純弥，長谷川尚美，小高文聰，稲田 健，伊藤颯姫，福本健太郎，堀 輝，樋口英二郎，鬼頭伸輔，古郡規雄，橋本亮太：ガイドライン一致率が高い統合失調症患者・うつ病患者の処方特性．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

43) 鬼塚俊明，堀 輝，村岡寛之，長谷川尚美，松本純弥，橋本直樹，福本健太郎，市橋香代，大井一高，小高文聰，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症治療における持続性抗精神病薬注射剤・経口抗精神病薬の併用薬および治療ガイドライン受講による変化. BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

44) 今井康太，嶋村悠実，清水善仁，井出健太，市橋香代，長谷川尚美，福本健太郎，坪井貴嗣，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：EGUIDE 版ポリファーマシー対策の進め方の紹介とその可能性．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

45) 石丸直樹，松本純弥，根本清貴，福永雅喜，伊藤颯姫，長谷川尚美，髙野晴成，佐久間寛之，橋本亮太：さいがた医療センターにおける側脳室体積拡大に認知機能障害が伴う精神疾患（EVCI）症例の検索．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

46) 松本純弥，伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，長谷川尚美，藤本美智子，山森英長，住吉太幹，橋本亮太：側脳室拡大（Enlarged Ventricle: EV）と認知機能障害（Cognitive Impairment: CI）がある EVCI 患者の認知機能プロファイル．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

47) 堀之内 徹，荒井勇輔，長谷川尚美，村岡寛之，山室和彦，橋本直樹，大井一高，堀 輝，古郡規雄，山田 恒，松本純弥，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：統合失調症の診療に対するガイドライン講習の効果–施設と医師の講習受講状況による影響–．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

48) 小河真也，河野翔太郎，片山沙香，池田直人，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：7q11.23 領域重複を有する精神疾患患者 iPS 細胞由来細胞の神経発達解析．日本農芸化学会 2026 年度京都大会，京都，2026.3.12.

49) 遠藤 伶，秋本祐弥，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：環境エンリッチメントが精神疾患モデルマウスの神経発達に影響を与える神経基盤解析．日本農芸化学会 2026 年度京都大会，京都，2026.3.12.

50) 小河真也，河野翔太郎，片山沙香，池田 直，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：患者 iPS 細胞由来神経系細胞を用いた 7q11.23 領域重複の分子病態解析．第 99 回日本薬理学会年会，仙台，2026.3.17.

51) 遠藤 伶，秋本祐弥，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：環境エンリッチメントによる 3q29 領域欠失モデルマウスの神経発達異常の回復．第 99 回日本薬理学会年会，仙台，2026.3.17.

52) 小河真也，河野翔太郎，片山沙香，池田直人，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：7q11.23 領域重複を有する精神疾患患者 iPS 細胞由来神経細胞の表現型解析．日本薬学会第 146 年会，大阪，2026.3.27.

53) 遠藤 伶，秋本祐弥，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：3q29 領域欠失症候群モデルマウスの神経発達異常は環境エンリッチメントによって改善される．日本薬学会第

146 年会，大阪，2026.3.29.

54) 松本純弥：日本生物学的精神医学会 若手研究者育成プログラム プログレスレポート．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.14.

(3) 研究報告会

1) 橋本亮太，松本純弥：COCORO の概要．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7
2) 橋本亮太：統合失調症の認知機能障害の新規スクリーニング質問票に関する調査研究．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7.
3) 橋本亮太，精神疾患脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる患者層別化と臨床的特徴検討による側脳室拡大と認知機能障害患者群の提案．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7.
4) 橋本亮太，松本純弥：COCORO の概要．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.
5) 橋本亮太：脳 MRI 画像のデータ駆動型解析に基づく新しい精神疾患バイオタイプの発見．学際領域展開ハブ形成プログラム「多階層ストレス疾患の克服」研究発表会，東京，2026.2.2.
6) 長谷川尚美，堀 輝，山田 恒，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田 健，古郡規雄，橋本亮太：EGUIDE プロジェクト 10 年目の成果報告～全国への拡大と実臨床に与えた影響～．令和 7 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2026.3.16
7) 松本純弥，伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，長谷川尚美，藤本美智子，山森英長，住吉太幹，橋本亮太：側脳室拡大（EV）と認知機能障害（CI）がある EVCI 患者と統合失調症患者の認知機能プロファイル比較．令和 7 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2026.3.16.
8) 根本清貴，松本純弥：ABiS 脳画像解析支援: チュートリアルを起点とした研究者育成と成果創出. 2025 年度生命科学 4 プラットフォーム 支援説明会･成果シンポジウム, 東京, 2025.4.22.
9) 松本純弥：EVCI 認知機能解析．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7.
10) 松本純弥：EVCI 前向きコホート．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7.
11) 松本純弥：EVCI 前向きコホート．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.
12) 松本純弥：EVCI 認知機能解析．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.
13) 松本純弥：FreeSurfer の新特徴量の疾患横断的メガアナリシス．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.
14) 伊藤颯姫：統合失調症患者における労働転帰の階層的モデル．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.

(4) その他

1) 橋本亮太：指定発言，シンポジウム「ゲノム医療時代における精神科医の使命と革新的リテラシー」，第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.20.
2) 橋本亮太：精神疾患病態研究部の紹介，第 77 回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー，東京，2025.6.30.
3) 橋本亮太：指定発言，シンポジウム 8：統合失調症薬物治療ガイドライン 2027：進捗報告，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

C．講演

1) 橋本亮太：精神疾患における薬剤適正使用とガイドライン．不眠症と便秘症 Web セミナー，群馬，2025.9.29.
2) 田畑光一，鳥海和也，鈴木一浩，高木英俊，新里和弘，大島健一，今井淳司，長瀬幸弘，橋本亮太, 山﨑修道, 西田淳志, 糸川昌成, 高橋英彦, 宮下光弘, 新井 誠：Hypozincemia is associated with clinical severities of schizophrenia．BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，

2025.11.14.

3) 橋本亮太：統合失調症の病態解明に基づく客観的補助診断方法の開発とは. BPCNPNP2025 合同年会ランチョンセミナー，京都，2025.11.14.

4) 橋本亮太：統合失調症の世界を変える：病態解明から診断法・治療法開発そして社会実装まで. 愛知医科大学精神科神経科 橋本亮太先生講演会，愛知，2025.11.17.

5) 橋本亮太：精神疾患の克服とその障害の支援のための臨床・研究にもとめられるもの．国立精神・神経医療研究センター病院第 5 回精神科セミナー，東京，2025.11.18.

6) 橋本亮太：脳 MRI 画像のデータ駆動型解析にて見出された新しい精神疾患分類の提案．第 1 回 NCNP 交流会，東京，2025.12.9.

7) 橋本亮太：精神科臨床・研究にもとめられるもの～仲間と一緒に世界を変える！～．徳島大学病院精神科神経科 臨床検討会，徳島，2025.12.10.

8) 橋本亮太：精神疾患の克服とその障害の支援のための臨床・研究にもとめられるもの．東京慈恵会医科大学精神医学講座講演会，東京，2025.12.12.

9) 橋本亮太：我々はなぜ研究をするのか そしてどうするべきか. 北大精神科教室特別セミナー，札幌，2025.12.23.

10) 橋本亮太：世界を変える精神科臨床と研究～自身の臨床経験からの病態解明．診断法，治療法の開発から社会実装まで～，国立精神・神経医療センター・琉球大学交流会，沖縄，2026.1.14.

11) 橋本亮太：世界を変える精神科臨床と研究～自身の臨床経験からの病態解明．診断法，治療法の開発から社会実装まで～，福岡大学医学部精神医学教室 年始研究会特別講演，福岡，2026.1.30.

12) 橋本亮太：Closing Remarks. 精神科 Constipation Specialista Meeting 2026, 東京, 2026.1.31.

13) 橋本亮太：世界を変える精神疾患研究～自身の臨床経験からの病態解明，診断法，治療法の開発から社会実装まで～．奈良県立医科大学精神医学講座 特別講義 The cutting edge of psychiatry and psychiatric practice，奈良，2026.2.4.

14) 橋本亮太：60 分で理解できるうつ病診療ガイドライン 2025 ダイジェスト．Viatris Webinar, オンライン，2026.2.24.

15) 橋本亮太：60 分で理解できるうつ病診療ガイドライン 2025 ダイジェスト．CNS Academy ～うつ病のリカバリーを目指して～，オンライン，2026.3.9.

16) 橋本亮太：精神科臨床，研究にもとめられるもの：仲間と一緒に世界を変える！．第 35 回 中国四国 GHP 研究会，岡山，2026.3.14.

17) 橋本亮太：精神科医療の均霑化（きんてんか）・標準化について考える．リカバリー全国フォーラム 2025 オンライン分科会：EGUIDE 分科会，オンライン（オンデマンド配信），2026.3.24.

18) 橋本亮太：精神疾患の克服への挑戦：どこまで変わったか，どこまで変えられるのか．2025 年度都医学研セミナー，東京，2026.3.25.

19) 松本純弥：精神疾患の画像研究最前線. 福島県精神医学会主催 精神科専門医生涯教育研修会，2026.2.15.

D．学会活動

(1) 学会主催

1) 橋本亮太：2025BPCNPNP 大会（第 47 回日本生物学的精神医学会・第 35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会 合同年会）第 55 回日本神経精神薬理学会（JSNP）会長，2025.11.13-15.

(2) 学会役員

1) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会 評議員，広報委員会委員，国際学術委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会），ガイドライン検討

委員会委員長，薬事委員会委員，統合失調症薬物治療ガイドライン作成委員会顧問

2) 橋本亮太：日本精神神経学会 理事，PCN 編集委員会委員，薬事委員会委員，ガイドライン検討委員会委員， PCN を育てる PI ワーキンググループ長，精神科専門医テキスト作成委員会委員，精神医療・精神医学情報センター運営委員会委員，医療 DX に関する委員会委員，着床前遺伝学的検査に関するワーキンググループ委員，精神医学研究推進委員会委員

3) 橋本亮太：日本神経化学会 評議員

4) 橋本亮太：日本統合失調症学会 評議員

5) 橋本亮太：日本臨床精神神経薬理学会 評議員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会），ガイドライン検討委員会委員長

6) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員，ガイドライン検討委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会）

7) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会 理事，将来計画委員会委員（顧問），広報委員会委員，関連学会対応委員会副委員長，評議員

8) 橋本亮太：World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicu(国際神経精神薬理学会) International Scientific Programme Committee (ISPC) member

9) 橋本亮太：日本脳科学関連学会連合 脳科学将来構想委員会副委員長

(3) **座長**

1) 橋本亮太：一般演題 6，第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.

2) 橋本亮太：教育講演「日常診療で使用できる統合失調症の評価尺度」，第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.

3) 橋本亮太：シンポジウム「統合失調症 up to date：よりよい診断と治療を目指して」，第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6.19.

4) 橋本亮太：シンポジウム「精神科医療における教育プログラムの進化：Off-the-Job Training による臨床実践の質向上」，第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2025.6. 21.

5) 橋本亮太，松尾幸治：シンポジウム 1「気分障害の大規模疾患横断 MRI 研究」，第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7.11.

6) 橋本亮太，古郡規雄：委員会シンポジウム 8「EGUIDE プロジェクト 10 年目を迎えて-これまでとこれから-」，第 22 回日本うつ病学会総会，東京，2025.7. 12.

7) 橋本亮太：精神科慢性便秘症セミナー，オンライン，2025.9.9.

8) 橋本亮太：スイーツセミナー：日常臨床における Measurement Based Care の多様な可能性，第 28 回日本精神・保健予防学会学術集会，長崎，2025.11.1.

9) 橋本亮太：先達に聴く 1: 認知症・認知機能の研究を通じて伝えたいこと，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

10) 橋本亮太：特別講演 1: 精神疾患のゲノム医療実践と病態解明から創薬の実現へ，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

11) 橋本亮太：精神疾患患者における慢性便秘症診療のポイント，BPCNPNP2025 合同年会ランチョンセミナー，2025.11.15.

12) 根本清貴，松本純弥：シンポジウム：精神疾患の生物顎堤定量評価の臨床応用の最前線，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.13.

13) 松本純弥：シンポジウム：病態に基づく精神疾患の診断方法と治療法開発の最前線，BPCNPNP2025 合同年会（第 47 回日本生物学的精神医学会・35 回日本臨床精神神経薬理学会・第 55 回日本神経精神薬理学会），京都，2025.11.15.

(4) 学会誌編集委員等

1) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員

E．研修

(1) 研修企画

1) 橋本亮太：第 19 回日本統合失調症学会 ワークショップ：短時間で行える統合失調症の認知社会機能測定法と臨床応用．大阪，2025.4.26.
2) 橋本亮太：第 19 回日本統合失調症学会 ワークショップ：統合失調症を持つ人のための上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）．大阪，2025.4.26.
3) 橋本亮太：2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修，第 4 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2025.9.7.
4) 橋本亮太：第 9 回日本精神薬学会総会・学術集会 ワークショップ：薬剤師のための EGUIDE プロジェクトワークショップ．東京，2025.9.14.
5) 橋本亮太：第 2 回日本外来精神医学会学術総会 ワークショップ：服薬拒否の統合失調症患者にどう向き合うか？－実臨床に即した戦略を探る－．神戸，2025.9.13.
6) 橋本亮太：2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修，第 4 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2025.9.21.
7) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習 1 統合失調症のガイドライン講習．広島，2025.9.27.
8) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習 1 うつ病のガイドライン講習．広島，2025.9.28.
9) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習 統合失調症のガイドライン講習．福岡，2025.10.4.
10) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク九州地区講習 うつ病のガイドライン講習．福岡，2025.10.5.
11) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（NCNP），2025.10.18.
12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（NCNP），2025.10.19.
13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．金沢，2025.10.25.
14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．金沢，2025.10.26.
15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 統合失調症のガイドライン講習．岡山（川崎医大総医 C），2025.10.25.
16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 うつ病のガイドライン講習．岡山（川崎医大総医 C），2025.10.26.
17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道地区講習 統合失調症のガイドライン講習．札幌，2025.11.2.
18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道地区講習 うつ病のガイドライン講習．札幌，2025.11.3.
19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習．大阪，2025.11.2.
20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習．大阪，2025.11.3.
21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（東邦大），2025.11.29.
22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（東邦大），2025.11.30.
23) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習 統合失調症のガイドライン講習．仙台，

2025.12.6.

24) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク東北地区講習 うつ病のガイドライン講習．仙台，2025.12.7.

25) 橋本亮太：日本精神神経学会 ガイドライン検討委員会 第 1 回精神疾患の診療ガイドライン（統合失調症のガイドライン）講習会．オンライン，2026.1.24.

(2) 研修会講師

1) 橋本亮太：認知機能障害検査の活用例と今後．第 19 回日本統合失調症学会 ワークショップ：短時間で行える統合失調症の認知社会機能測定法と臨床応用，大阪，2025.4.26.

2) 橋本亮太：軽症．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン講習会（講義パート），オンライン，2025.5.31.

3) 橋本亮太：精神病性．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン講習会（講義パート），オンライン，2025.5.31.

4) 橋本亮太：治療抵抗性．大阪精神科診療所協会 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 講習会（講義パート），オンライン，2025.8.30.

5) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 4 回統合失調症の標準治療研修，オンライン，2025.9.7.

6) 橋本亮太：児童思春期．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修, 4 回うつ病の標準治療研修，オンライン，2025.9.21.

7) 橋本亮太：児童思春期．EGUIDE プロジェクト九州地区講習 うつ病のガイドライン講習，福岡，2025.10.5.

8) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習，東京（NCNP），2025.10.18.

9) 橋本亮太：児童思春期．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習，東京（NCNP），2025.10.19.

10) 橋本亮太：趣旨説明及び講習前テスト．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 統合失調症のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.25.

11) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 統合失調症のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.25.

12) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 統合失調症のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.25.

13) 橋本亮太：趣旨説明及び講習前テスト．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 うつ病のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.26.

14) 橋本亮太：その他の臨床的諸問題．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 うつ病のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.26.

15) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2 うつ病のガイドライン講習，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.26.

16) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．日本精神神経学会ガイドライン検討委員会 第 1 回精神疾患の診療ガイドライン（統合失調症のガイドライン）講習会，オンライン，2026.1.24.

17) 橋本亮太：認知社会機能障害検査の意義と概要．第 19 回日本統合失調症学会 ワークショップ：短時間で行える統合失調症の認知社会機能測定法と臨床応用，大阪，2025.4.26.

18) 橋本亮太：社会活動評価と病前推定 IQ の測定．第 19 回日本統合失調症学会 ワークショップ：短時間で行える統合失調症の認知社会機能測定法と臨床応用，大阪，2025.4.26.

F．その他

【受賞】

1) 長谷川尚美：第 19 回日本統合失調症学会 一般演題奨励賞．EGUIDE プロジェクトによる統

合失調症の real-world study～2023 年度の報告～，2025.4.27.

2) 森 啓輔：BPCNPNP2025 合同年会 若手優秀発表賞．ガイドライン一致率が高い統合失調症患者・うつ病患者の処方特性，2025.11.14.

【その他】

1) 橋本亮太：セミナー主宰．第 40 回精神病態特別セミナー（招待演者：野田隆政先生「ニューロモデュレーション療法への期待」），NCNP ハイブリッド開催，2025.5.23.
2) 橋本亮太：セミナー主宰．第 41 回精神病態特別セミナー（招待演者：浅見剛先生「精神疾患における不安の重要性と不安症の脳科学」），NCNP ハイブリッド開催，2025.5.30.
3) 橋本亮太：研究会主宰．第 24 回 COCORO 会議，東京，2025.6.7.
4) 橋本亮太：セミナー主宰．第 2 回 NCNP 国際セミナー/第 42 回精神病態特別セミナー（招待演者：Clara Moreau 先生「Global rs-fMRI Initiative in Psychiatry: Toward Transdiagnostic Analyses within the ENIGMA Consortium」），NCNP ハイブリッド開催，2025.6.17.
5) 橋本亮太：セミナー主宰．第 43 回精神病態特別セミナー（招待演者：高田昌彦先生「霊長類脳科学研究のための新規ウイルスベクターの開発と応用」），NCNP ハイブリッド開催，2025.8.8.
6) 橋本亮太：セミナー主宰．第 44 回精神病態特別セミナー（招待演者：岡田俊先生「児童精神医学の現状とこれから」），NCNP ハイブリッド開催，2025.8.22.
7) 橋本亮太：セミナー主宰．第 45 回精神病態特別セミナー（招待演者：岡田剛先生「うつ病の脳回路病態の解明と臨床応用について」），NCNP ハイブリッド開催，2025.8.29.
8) 橋本亮太：総合司会．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修，第 4 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2025.9.7.
9) 橋本亮太：セミナー主宰．第 46 回精神病態特別セミナー（招待演者：高江洲義和先生「医療 DX による沖縄県の精神科医療の今後の展望」），NCNP ハイブリッド開催，2025.9.12.
10) 橋本亮太：総合司会．2025 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修，第 4 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2025.9.21.
11) 橋本亮太：総合司会．統合失調症のガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.25.
12) 橋本亮太：総合司会．うつ病のガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト中国地区講習 2，岡山（川崎医大総医 C），2025.10.26.
13) 橋本亮太：研究会主宰．第 25 回 COCORO 会議，東京，2025.11.8.
14) 橋本亮太：セミナー主宰．第 47 回精神病態特別セミナー（招待演者：真田建史先生「腸から見た精神疾患」），NCNP ハイブリッド開催，2025.11.28.
15) 橋本亮太：セミナー主宰．第 48 回精神病態特別セミナー（招待演者：朴秀賢先生「アストロサイトに着目したうつ病治療の作用機序解明と臨床への展開」），NCNP ハイブリッド開催，2026.1.28.
16) 橋本亮太：セミナー主宰．第 49 回精神病態特別セミナー（招待演者：神出誠一郎先生「海馬歯状回の興奮性神経ネットワーク」），NCNP ハイブリッド開催，2026.2.13.
17) 橋本亮太，松本純弥，ほか：特許出願．特願 2026-025504「発明の名称：検精神疾患の重症度の判定を支援するための支援装置，支援方法，支援プログラムおよび支援システム」，2026.2.19.
18) 橋本亮太：セミナー主宰．第 50 回精神病態特別セミナー（招待演者：田中謙二先生「ヒト脳構造画像研究結果を起点とする基礎研究の提案」），NCNP ハイブリッド開催，2026.2.20.
19) 橋本亮太：セミナー主宰．第 51 回精神病態特別セミナー（招待演者：加藤正樹先生「うつ病診療ガイドライン 2025」），NCNP ハイブリッド開催，2026.3.6.
20) 橋本亮太，ほか：特許出願．特願 2026-052491「発明の名称：検査装置，検査方法，及び，検査プログラム」，2026.3.26.

9. 睡眠・覚醒障害研究部

Ⅰ. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では，睡眠，意識，認知，感情，意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ，その制御メカニズムを明らかにし，これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害，気分障害，不安障害，認知症性障害，神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている．このため，精神生理学，時間生物学，神経薬理学，分子生物学，神経内分泌学，脳画像解析学などの手法を用いて，学際的な研究を進めている．

部長１名，室長２名に加え，リサーチフェロー2 名，科研費研究員２名，科研費心理療法士１名，研究補助員４名，研究助手１名，国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている．

研究部の構成

部長：栗山健一．精神生理機能研究室長：吉池卓也．臨床病態生理研究室長：北村真吾．リサーチフェロー：内海智博，長尾賢太朗．併任研究員：松井健太郎（センター病院），都留あゆみ（センター病院），不破真衣（センター病院），松島舜（センター病院），高橋恵理矢（センター病院），石本良祐（センター病院），山下祐一（疾病研究第七部），山口博行（疾病研究第七部）．客員研究員：兼板佳孝（日本大学），井上雄一（医療法人社団絹和会），本多 真（晴和病院），上田泰己（東京大学），山寺 亘（東京慈恵会医科大学），福水道郎（東京家政大学），榎本みのり（東京工科大学），有竹清夏（埼玉県立大学），三島和夫（秋田大学），西村勝治（東京女子医科大学），岡島 義（東京家政大学），高橋英彦（東京科学大学），肥田昌子（ＨＫＧ合同会社），玉置應子（理化学研究所），鈴木正泰（日本大学），綾部直子（秋田大学），駒田陽子（東京科学大学），田中克俊（北里大学），志村哲祥（東京医科大学），大橋由基（洛和会音羽リハビリテーション病院），尾崎章子（東北大学），金子宜之（日本大学），橋本英樹（プロアシスト），竹島正浩（秋田大学），角谷 寛（滋賀医科大学），小曽根基裕（久留米大学），佐伯圭吾（奈良県立医科大学），井谷 修（国際医療福祉大学），羽澄恵（日本医科大学），熊野宏昭（早稲田大学），深澤佑介（上智大学），市毛弘一（横浜国立大学）．そのほか科研費研究員２名，科研費心理療法士１名，科研費研究補助員３名，科研費研究助手１名，センター研究補助員１名，研究生 12 名．

Ⅱ. 研究活動

1） 睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一，研究分担者：吉池卓也 他，研究協力者：北村真吾，内海智博，河村 葵，長尾賢太朗，松井健太郎，都留あゆみ，不破真衣，石本良祐，羽澄 恵，伏見もも 他）

本研究では主に，前研究事業「「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（19FA1009）」の成果として見出した，「睡眠の質」を反映し健康を維持するために目標となる「睡眠休養感」指標を社会実装するための準備を行う．「睡眠休養感」指標は，「睡眠時間」指標と相補的な関係を有し，国民の健康寿命延伸を測るための調査項目として組み込まれるとともに，各個人が日常生活の中で，健康維持・促進に役立てられるような指標とすべく，これに資するプラットフォームを開発する．さらに，「睡眠休養感」を向上・改善に寄与する日常生活行動・習慣を調査し，生活・睡眠習慣に組み込むべき目標として具体に提示することも目標とする．さらに，国民の睡眠健康増進に寄与しうる，睡眠健診の有用性および実装可能性を検討するとともに，ウ

ェアラブルデバイス等を用いた簡易睡眠測定の有用性も検証し，前述のプラットフォームに組み込み有用性を高める試みも検討する．本研究の成果は,「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」に反映され，これに基づく睡眠健康の社会基盤を発展させる．

2） 睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発

精神・神経疾患研究開発費研究事業「睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究（課題番号 5-1)」(主任研究者 : 栗山健一，研究協力者 : 吉池卓也，北村真吾，松井健太郎，河村 葵，伊藤ちやか，伏見もも，長尾賢太朗，内海智博，木村綾乃)

本研究事業の目的は，わが国初にして最大の睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクを構築することである．日本国内の主要な睡眠ポリグラフ実施機関と連携し，2013 年 1 月以降に睡眠ポリグラフを受検した患者の睡眠ポリグラフデータと，これに紐づいた患者背景情報・関連生体データを集約することで，睡眠障害および併存精神・神経疾患における新規バイオマーカーの探索，病態解明促進や新たな健康指標の定義を見越した生理学的検討を行う基盤とする．このために，厚生労働省や経済産業省，総務省が発行する医療情報システムに関する安全管理ガイドライン（3 省 2 ガイドライン）に準拠したセキュアなクラウドシステムを構築し，共同研究機関で個別に保管されるデータを本事業用の統一データ集計フォーマットを用いてクラウドストレージ上に集約・管理することでデータバンク化を実現した．各共同研究機関にて本データバンクを活用した個別研究課題が進行中である．

3） ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究

労災疾病臨床研究事業費補助金（代表研究者：栗山健一，研究分担者：吉池卓也)

睡眠は健康維持・向上において最も重要な休養行動であり，適切な睡眠習慣・状態をモニタリングし，睡眠習慣・状態不良の早期発見・早期介入が重要である．従来の疫学研究や臨床の現場において睡眠習慣の把握には主観評価による睡眠時間が用いられてきたが，主観評価に基づく睡眠時間と睡眠ポリグラフなどの客観評価に基づく睡眠時間はしばしば乖離する．そして，客観評価に基づく睡眠時間が生理学的な休養状態を反映し，健康転帰をより正確に予測することが示されてきており，客観的に睡眠時間をモニタリングする重要性が指摘されている．近年発展が目覚ましいウェアラブルデバイス等を用い睡眠を客観的に評価することが睡眠健康増進に寄与すると考えられ，これは健康日本 21（第三次）における国民の睡眠指針である「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の中でも言及されている．しかし，市場で展開するウェアラブルデバイスは種類が多く，計測・算出される睡眠変数等には機種やサービスごとに差があり，算出された睡眠変数の精度検証は不十分である．本事業は，ウェアラブルデバイスと睡眠ポリグラフを同時に測定し，ウェアラブルデバイスの睡眠評価精度（判別一致率）を検証し，結果を WEB 上で公開することで国民が睡眠健康の維持・向上をするための適切なデバイス選択に寄与することを目的とする．

4） 睡眠薬および抗不安薬・抗てんかん発作薬の使用実態調査に基づく $GABA_A$ 受容体作動薬の適正使用指針および看護師・薬剤師等が実践できる指導・介入法の提案

国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費（主任研究者 : 栗山健一)

欧米においては，$GABA_A$ 受容体作動薬の使用は 2－8 週間を限度とし，長期使用を強く制限している．これはこれらの薬剤使用の益と害を考慮した場合，長期使用に伴い転倒・骨折，認知機能低下，依存，乱用等の害が益を大きく上回ることに基づく．本邦においても，$GABA_A$ 受容体作動薬の使用制限の機運は高まりつつあるが，$GABA_A$ 受容体作動薬から代替薬への置換

を進め，効率的な非薬物療法の提供体制を整えることが喫緊の課題である．本研究は $GABA_A$ 受容体作動薬の適正使用を促進するため，多様な診療場面における $GABA_A$ 受容体作動薬の処方実態を調査し，現場に即した適正使用指針および，これを補助するための看護師・薬剤師等が実践可能な睡眠衛生指導法の提案を行うことを目的に行われる．

5） 睡眠休養感の精神生理学的背景と成立機序の解明

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表研究者：吉池卓也）

健康増進を目的とした睡眠指標の新規開発が国際的に求められている．睡眠の量的指標である睡眠時間に加え，睡眠の質的指標として睡眠休養感（睡眠で休養がとれた感覚）が長期的な健康転帰の予測において有用な指標として，特に公衆衛生の観点から重視されており，厚生労働省による「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」にもこれが反映されている．しかし，睡眠休養感がいかに形成・障害されるか生理的には明らかでない．本研究は睡眠分断および過覚醒が睡眠休養感の低下に重要な役割を担う可能性に着目し，恒常性－概日系，情動－覚醒系の二軸評価により，睡眠休養感の形成・障害に寄与する精神生理学的因子を同定し，睡眠休養感の生理的・医療的位置づけを明確化することを目的に行われる．

6） 高照度光療法による月経前症候群及び月経前不快気分障害のプレゼンティズム改善効果

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（代表研究者：河村葵）

月経前症候群（PMS）及び月経前不快気分障害（PMDD）がもたらす労働生産性低下に対し，生理学的知見を基にした介入法の有効性を検証した研究は乏しい．女性が社会進出する上で，労働生産性向上に貢献するエビデンスを提供することは極めて重要である．本研究では，PMS/PMDD 患者への高照度光療法が，不眠や抑うつ気分などの PMS/PMDD 症状を緩和し，プレゼンティズムを改善するという仮説をランダム化比較試験（RCT）で検証する．

7） 生理的需要を基盤とした日常生活における睡眠時間指標の開発：高齢者の新たな睡眠管理

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（代表研究者：内海智博）

国際的に高齢者に推奨される睡眠時間の根拠は主観的報告に基づくが，高齢者では客観的に測定した睡眠時間と主観的報告との間に乖離が大きく，生理的に必要な睡眠時間と推奨される睡眠時間との間には大きな差がある．さらに高齢者では睡眠時間の日差変動が大きく，これには生理的要因，生活習慣要因・環境要因が関与するが，それらの影響度は不明である．本研究は，高齢者において連日の客観的睡眠脳波測定を行い，生理的な睡眠需要量の推測および客観的睡眠時間の日差変動の原因を検証する．同時に，生理的要因，生活習慣要因，環境要因も測定することにより，各要因の影響度を加味した日常生活下における睡眠時間の生理的需要量を検証する．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は，都民・市民のための公開講座，講演会などにおいて睡眠と健康づくり，睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた．テレビ，ラジオ，オンラインサイト，新聞，雑誌等のメディアを通して，睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った．

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は，国内各地の学術集会，研究会，談話会，医師会講演会などで睡眠障害，気分障害，認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した．栗山健一は東京農工大学（客員教授），滋賀医科大学（客員教授），東京慈恵会医科大学（客員教授），早稲田大学（客員教授）など教育機関において学生教育の援助を行った．北村真吾は，京都大学（非常勤講師），神奈川大学（非常勤講師），

埼玉県立大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った．吉池卓也は武蔵野大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った．

また，研究員は日本睡眠学会，日本時間生物学会，日本生物学的精神医学会，日本公衆衛生学会，不眠研究会，睡眠学研究会，関東睡眠障害懇話会，日本生理人類学会，関東脳核医学研究会などにおける理事，評議員，世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った．

(3) 精研の研修の主催と協力

日本睡眠学会ならびに当センターCBT センターが実施する「不眠症に対する認知行動療法研修」に協力した．

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

全ての研究員は，厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発（研究代表者：栗山健一）に参画し，厚生労働省健康日本 21（第三次）による「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」に基づく新たな睡眠健康指標の普及・活用基盤開発・整備に貢献した．

栗山健一，吉池卓也，内海智博，河村葵は，労災疾病臨床研究事業費補助金ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究（研究代表者：栗山健一）に参画し，労働衛生向上に関わる環境整備促進に貢献した．

栗山健一は，厚生労働行政推進調査事業費（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）健康日本 21（第三次）の推進及び進捗評価のための研究（研究代表者：辻一郎）に参加し，健康日本 21（第三次）における国民の健康づくりのための休養（睡眠）プランの見直しに貢献した．

栗山健一は，厚生労働省 国民健康・栄養調査企画解析検討会に委員として参加した．

栗山健一は，厚生科学審議会「地域保健健康増進栄養部会」委員として審議に参加した．

栗山健一は，厚生労働省 健康日本 21（第三次）推進専門委員会に参考人として参加した．

栗山健一は，独立行政法人 医薬品医療機器総合機構専門委員として専門協議に参加した．

栗山健一は，独立行政法人 医薬品医療機器総合機構プログラム調査会に参考人として参加した．

吉池卓也，栗山健一は，厚生労働省 健康日本 21 アクション支援システムにおける健康増進担当者向けツール「睡眠」の改訂に貢献した．

吉池卓也は，厚生労働省「健康日本 21（第三次）の取組を推進させるための健康づくりに関する実態調査及び各種資材作成等を担う地域健康政策推進事業」の調達に係る技術評価委員会に委員長として参加した．

(5) センター内における臨床的活動

栗山健一，吉池卓也，長尾賢太朗，内海智博は，国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った．

栗山健一は，3 つの睡眠薬および覚醒維持薬開発治験の施設責任者を務め，吉池卓也はこれの分担医師として治験に参加した．

(6) その他

栗山健一は，精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し，同法の有機的・機能的運用に貢献した．

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Matsunaga S, Sado M, Kaneita Y, Sasaki N, Tanaka K, Kuriyama K. Association between nonrestorative sleep and increased healthcare costs: a 6-year cohort study. Sleep Biol. Rhythms (2026). https://doi.org/10.1007/s41105-026-00642-y.

2) Matsunaga S, Sado M, Kaneita Y, Arai M, Sasaki N, Tanaka K, Kuriyama K. Longitudinal association of nonrestorative sleep with subjective health and work performance: a cohort study in the Japanese construction industry. Ind Health. 2026 Feb 9. doi: 10.2486/indhealth.2025-0204.

3) Kuriyama K. Nonrestorative sleep: a potential indicator or consequence of job stress. Sleep Biol Rhythms 23(4): 353-354, 2025. doi: 10.1007/s41105-025-00606-8.

4) Yamada Y, Kishimoto N, Tagata H, Morimoto T, Tomimoto K, Sato Y, Higuchi Y, Hiejima H, Ohshima H, Kato T, Oba MS, Izumi S, Tomo Y, Kitamura S, Stickley A, Kishimoto T, Nemoto T, Mizuno M, Tomita H, Suzuki M, Ozone M, Hashimoto K, Mishima K, Ohnishi T, Nakagome K, Sumiyoshi T. Transforming Growth Factor-β Serum Levels Associated with Social Function in Subjects at Ultra-high Risk for Psychosis: A Multicenter Study. Clin Psychopharmacol Neurosci Off Sci J Korean Coll Neuropsychopharmacol. 2025;23(3):379-390.

5) Ukai M, Hida A, Kitamura S, Inoue Y, Mishima K. Circadian clock gene variants in two Japanese families with familial advanced sleep phase. Sleep. 2025;48(3):zsae309.

6) Shibata N, Yoshizawa K, Takeshima M, Kitamura S, Ogasawara M, Kudo M, Itoh Y, Miyakoshi E, Ayabe N, Mishima K. Novel hypnotics use and hip fracture risk in middle-aged and older adults: A large, population-based cohort study in Japan. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2025;4(3):e70193.

7) Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K. Common Neural Correlates for Subjective and Objective Sleepiness Indices: A Functional Connectivity Study. Nat Sci Sleep. 2025;17:1345-1359.

8) Korman M, Fleischmann C, Tkachev V, Reis C, Komada Y, Gubin D, Kumar V, Kitamura S, Roenneberg T. Relaxation of social time pressure reveals tight coupling between daily sleep and eating behavior and extends the interval between last and first meal. Sleep. 2025;48(12):zsaf247.

9) Kondo K, Komada Y, Kitamura S, Tkachev V, Roenneberg T, Korman M. Chronotype-specific changes in subjective sleep quality: Differential responses to the relaxation of social time pressure in Japan. Chronobiol Int. Published online November 2025:1-10.

10) Eto T, Nishimura Y, Ikeda H, Kunieda T, Enomoto M, Kubo T, Adan A, Kitamura S. External validation of the Japanese version of the reduced morningness-eveningness questionnaire (rMEQ) score using dim light melatonin onset and sleep-wake behavior in young adults. Chronobiol Int. 2025;42(9):1137-1144.

11) Suzuki M, Yoshiike T, Khullar A, Kogo Y, Inabe K, Koebis M, Moline M, Cheng JY, Kumar D, Pinner K, Kuriyama K. Effects of lemborexant on sleep quality and its association with morning alertness: Post hoc analysis of two phase 3 trials. Sleep Medicine: X. 2026;11: 100183.

12) Hazumi M, Kataoka M, Usuda K, Miyake M, Nakashita A, Kitamura M, Okazaki E, Yoshiike T, Matsui K, Kuriyama K, Nishi D, Kuroda N. The relationship between nonrestorative sleep and persistent post-acute sequelae of COVID-19: A longitudinal study of recovery trajectories. Sleep and Biological Rhythms. 2026:doi:10.1007/s41105-025-00629-1

13) Yoshiike T, Yajima T, Utsumi T, Tripathi S, Kawamura A, Nagao K, Matsui K, Matsuda Y, Abe M, Ito M, Nakajima S, Kuriyama K. Autonomic evidence that avoidance matters in the mourning process: A prospective observational study in Japan. Dialogues in Clinical Neuroscience. 2026;28(1):1–10.
14) Fushimi M, Kawamura A, Utsumi T, Nagao K, Matsui K, Kimura A, Aritake-Okada S, Yoshiike T, Kuriyama K. Relationship Between Insoluble Dietary Fiber Intake and Non-Restorative Sleep in Japanese Adults: A Cross-Sectional Analysis of the NHNS Japan, 2014 and 2018. Nutrients. 2025;17(23):3749.
15) Hazumi M, Matsui K, Tabuchi T, Okubo R, Yoshiike T, Kitamura S, Kawamura A, Nagao K, Utsumi T, Izuhara M, Kizuki J, Fushimi M, Nishi D, Kuriyama K. Nonrestorative sleep mediates the influence of Adverse Childhood Experiences on psychological distress, physical health, mental health, and activity limitation: A longitudinal study for the general population in Japan. Sleep Medicine. 2025;133:106658.
16) Kawamura A, Kadotani H, Suzuki M, Uchiyama M, Yamada N, Kuriyama K. Objective evaluation of major depressive disorder using sleep electroencephalography measured by an in-home portable one-channel device: a preliminary study. Sleep Breath. 2025 Apr 21;29(2):165. doi: 10.1007/s11325-025-03329-9.

(2) 総説

1) 栗山健一：Column「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」．特集「睡眠-覚醒障害」 精神科 Resident6(5)：2，2026.
2) 栗山健一：睡眠保健活動「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」. 特集 睡眠障害の診療 update 日本臨牀 83(7)：1040-1045，2025.
3) 栗山健一：企画要旨．特集 新たな睡眠健康増進を目指した我が国の政策～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 による国民健康啓発の発展～ 心と社会．日本精神衛生会 56(3)：8-10，2025.
4) 栗山健一：Q11.季節性うつ病の臨床的な特徴と治療法，予防について教えてください．精神科治療学 第 40 巻増刊号 うつ病 123 の Q&A：38-41，2025.
5) 栗山健一：特集にあたって．睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．精神医学 5 月号【増大号】67(5)：527，2025.
6) 栗山健一：Q1 人は寝ないとどうなるでしょうか？ 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．精神医学 5 月号【増大号】67(5)：530-532，2025.
7) 栗山健一：Q26 嫌なことがあった日は寝つきが悪くなりますが、睡眠薬などを使ってでも寝たほうがよいのでしょうか？ 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．精神医学 5 月号【増大号】67(5)：633-636，2025.
8) 「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の概要とゴール．特集 「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」から考える Healthy Sleep～睡眠の量と質の両立による国民の健康増進～．睡眠医療ネクサス 1(2)：49-55，2025.
9) 栗山健一：夜中に何度も目が覚めてしまいます（中途覚醒）．主訴から紐解く精神症候学．日本医師会雑誌 154(4)：424-425，2025.
10) 北村真吾：睡眠の規則性の評価：カイ二乗ペリオドグラム・NPCRA・SRI・CPD を用いて．日本生理人類学会誌 30(1)：4，2025.
11) 吉池卓也：巻頭言 慢性不眠症治療の到達点．睡眠医療ネクサス 1(3)：84，2025.
12) 吉池卓也：睡眠時間・睡眠休養感の意義と健康づくりのための睡眠ガイド 2023 の紹介，新たな睡眠健康増進を目指した我が国の政策～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 による睡眠健康啓発の発展．心と社会 56(3)：11-17，2025.

13) 吉池卓也：Column 遷延性悲嘆症の生物学的基盤，心的外傷およびストレス因関連症群．精神科 Resident6(4)：33-34，2025.
14) 吉池卓也：Q39．薬物療法以外の身体的治療法として，光療法や断眠療法について教えてください，うつ病 123 の Q&A．精神科治療学，40（増刊号）：112-113，2025.
15) 長尾賢太朗, 吉池卓也:光療法, 睡眠障害の診療 update－最新の診断と治療－. 日本臨牀 83(7): e1021-1026，2025.
16) 吉池卓也：Q7 睡眠の質が悪いとはどういうことでしょうか？ その原因の判断方法はあるのでしょうか？ 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．精神医学 67(5)：554-557，2025.
17) 吉池卓也：Q21 休日の寝だめはどのような効果があるのでしょうか？ 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．精神医学 67(5)：611-614，2025.
18) 吉池卓也：Topic 睡眠の質低下が及ぼす健康へのリスク - 睡眠休養感と睡眠研究の最前線．Mental Disorder & Strategy 1(1)：1-4，2025.
19) 内海智博，栗山健一：TOPIC　Sleep Tech．精神科 Resident，6(5)：61-64，2026.
20) 内海智博，栗山健一：Skill Up Lecture　アルツハイマー病と睡眠障害．The Curator of Neurocognitive Disorders 3(1)：48-53，2026.
21) 内海智博，栗山健一：【神経・精神科領域におけるデジタルメディスン】不眠に対する治療用アプリ．BRAIN and NERVE: 神経研究の進歩 77(9)：1009-1014，2025.
22) 内海智博，栗山健一：【新たな睡眠健康増進を目指した我が国の政策～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 による睡眠健康啓発の発展～】次世代に向け求められる睡眠健康増進のための社会基盤　客観的睡眠評価・ウェアラブルデバイスを用いた次世代評価系の構築．心と社会 56(3)：33-40，2025.
23) 内海智博，渡辺範雄：【精神科領域のガイドラインの作り方と使い方】最新の診療ガイドラインの特徴．精神科治療学 40(7)：683-689，2025.
24) 内海智博，栗山健一：【睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア】(I 章)睡眠の基礎的疑問　寝てはいるけれど熟眠感(睡眠休養感)がない場合はどうしたらよいでしょうか？精神医学 67(5)　：　558-561，2025.
25) 内海智博，栗山健一：【睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア】(I 章)睡眠の基礎的疑問　睡眠には個人差があるといいますが,なぜでしょうか？精神医学 67(5)：546-549，2025.
26) 長尾賢太朗，栗山健一：逆説性不眠（睡眠状態誤認）の患者さんへの説明方法・治療方法を教えてください．精神医学 67(5)：705-708，2025.
27) 長尾賢太朗，吉池卓也：光療法，日本臨牀 月刊誌 2025 年 7 月号「睡眠障害の診療 update」．日本臨牀 83(7)：1021-1026，2025.
28) 河村葵，栗山健一：増大号特集 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．Ⅲ章　睡眠に関連する病態　Q31 更年期不眠を治療しないことによる健康への悪影響はありますか？精神医学，67(5)：654-657，2025.
29) 河村葵，栗山健一：増大号特集 睡眠の正しい理解を促す 70 のトリビア．Ⅲ章　睡眠に関連する病態　Q30 更年期のホットフラッシュと不眠との関連を教えてください．精神医学，67(5)：658-661，2025.
30) 駒田陽子，志村哲祥，松井健太郎，河村葵，羽澄恵，栗山健一：特集「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」から考える Healthy Sleep～睡眠の量と質の両立による国民の健康増進～　3. こどもにおける睡眠ガイドのポイント．睡眠医療ネクサス Vol. 1 No.2 (9 月号)，pp61-66，2025.

(3) 著書

1) 栗山健一：12－1 最近の分類．第 12 章 睡眠障害の概要　より良い眠りのための睡眠マネジメント．朝倉書店，pp126-128，2025.11.1.

2) 栗山健一：12－2 不眠．第 12 章 睡眠障害の概要　より良い眠りのための睡眠マネジメント．朝倉書店，pp129-131，2025.11.1.
3) 栗山健一：12－3 過眠．第 12 章 睡眠障害の概要　より良い眠りのための睡眠マネジメント．朝倉書店，pp132-134，2025.11.1.
4) 栗山健一：12－1 異常運動．第 12 章 睡眠障害の概要　より良い眠りのための睡眠マネジメント．朝倉書店，pp135-137，2025.11.1.
5) 吉池卓也：睡眠休養感と不眠症状，より良い眠りのための睡眠マネジメント―ライフステージ・睡眠環境・生活習慣―．公益財団法人神経研究所睡眠健康推進機構（監修）／大川 匡子・高橋清久（編）朝倉書店，pp 14-15，2025.
6) 吉池卓也：Column 脳科学と悲嘆，Ⅲ．悲嘆の治療とケア，死別と悲嘆の精神医学．明智龍男ほか編，南山堂，pp 138-141，2025.
7) 河村葵，栗山健一：より良い眠りのための睡眠マネジメント．5-1 月経，朝倉書店，pp48-49，2025.
8) 河村葵，栗山健一：より良い眠りのための睡眠マネジメント．5-2 周産期，朝倉書店，pp50-51，2025.
9) 河村葵，栗山健一：より良い眠りのための睡眠マネジメント．5-3 更年期，朝倉書店，pp52-53，2025.

(4) 研究報告書

1) 栗山健一：睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発.令和 7 年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）（研究代表者：栗山健一）総括・分担研究報告書. pp 1-43，2026.3.
2) 栗山健一：ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究.令和 7 年度労災疾病臨床研究事業費補助金（研究代表者：栗山健一）総括・分担研究報告書. pp 1-4，2026.3.
3) 栗山健一：健康日本 21（第三次）の推進及び進捗評価のための研究．令和 7 年度厚生労働行政推進調査事業費（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）（分担研究者：栗山健一）分担研究報告書. pp 102-109，2026.3.

(5) 翻訳

(6) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Yoshiike T. Autonomic evidence that avoidance matters during mourning: A prospective observational study in Japan. NOGIN Europe! 2025, Regensburg, September 17–19, 2025.
2) 栗山健一：国民の健康指針に準じた不眠症の予防・治療戦略（ランチョンセミナー）．第 38 回総合病院精神医学会，ライトキューブ宇都宮（栃木），2025.11.21-22.
3) 栗山健一：国民の睡眠健康向上指針に準じた高齢不眠の予防と治療（ランチョンセミナー）．第 44 回日本認知症学会学術集会，朱鷺メッセ（新潟），2025.11.21-23.
4) 栗山健一：国民の睡眠健康管理指針における交替制勤務従事者の睡眠管理上の課題（シンポジウム）．第 63 回日本医療・病院管理学会学術総会，東京科学大学湯島キャンパス（東京），2025.10.4-5.
5) 栗山健一：健康づくりのための睡眠ガイド 2023 の活用と課題（教育講演）． 第 72 回日本栄

養改善学会学術総会，東京農業大学（世田谷），2025.9.12-14.

6) 栗山健一：睡眠学基礎セミナー5「第Ⅰ部　睡眠科学」．睡眠科学 「睡眠の機能」　日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

7) 栗山健一：カプセルホテルの睡眠データの活用．株式会社ナインアワーズ共催シンポジウム日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

8) 栗山健一：心身の健康増進を目指した不眠症の予防・治療のあり方（ランチョンセミナー）．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

9) 栗山健一：健康日本 21（第三次）で掲げる休養課題における労働者の位置づけ～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 を用いた睡眠障害の一次・二次予防～．第 98 回日本産業衛生学会スポンサードシンポジウム，仙台国際センター（宮城），2025.5.14-17.

10) 北村真吾：ヒト睡眠覚醒調節機能を概日リズムの視点から捉える．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

11) 吉池卓也：睡眠から見た健康増進と病態理解．東京農工大学―国立精神・神経医療研究センター第 9 回合同シンポジウム，国立精神・神経医療研究センター，2025.12.23.

12) 吉池卓也：気分障害における生体リズム異常とその治療的応用，気分障害の睡眠・覚醒障害－近年の知見と臨床での展開－．第 22 回日本うつ病学会総会，シンポジスト，浜松町コンベンションホール（東京），2025.7.11-12.

13) 吉池卓也，栗山健一：健康指標としての睡眠休養感，睡眠休養感と心身の健康－最近の知見と公衆衛生向上のための戦略－．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

14) 吉池卓也：光と感情障害，光と疾病のエビデンス・アップデート．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

15) 吉池卓也，栗山健一：主観的な睡眠の質評価の意義，睡眠の質とは何か－睡眠の質の重要性とその評価法－．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

16) 吉池卓也：睡眠・概日リズムとせん妄，せん妄の病態機序仮説 update 2025．第 121 回日本精神神経学会学術総会，シンポジスト，神戸国際会議場（兵庫），2025.6.19-21.

17) 内海智博，吉池卓也，栗山健一：精神科診療における Sleep Tech の実践的応用．第 121 回日本精神神経学会学術総会，シンポジスト，神戸国際会議場（兵庫），2025.6.19-21.

18) 内海智博，吉池卓也，栗山健一：睡眠の質の評価法．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

19) 河村 葵，栗山健一：更年期の睡眠問題とメンタルヘルス．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，シンポジスト，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

20) 金子宜之，吉池卓也，斎藤かおり，大槻怜，木附隼，栗山健一，鈴木正泰：新たな「睡眠の質」指標を精神疾患診療にどのように活かすか．第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸国際会議場（兵庫），2025.6.19-21.

(2) 一般演題

1) Nozza F, D'Orsi1 G, Melloni E, Raffaelli L, Suzuki M, Yoshiike T, Poletti S, Benedetti F. Exploring sleep brain activity and its chronotherapeutic modulation in bipolar disorder: a pilot study. 38th ECNP Congress, Amsterdam, October 11–14, 2025.

2) Yoshiike T, Nangaku M, Utsumi T, Yajima T, Nagao K, Kawamura A, Tripathi S, Takahashi E, Kitamura S, Matsui K, Nakajima S, Kuriyama K. A prospective study of light hygiene and prolonged grief. NOGIN Europe! 2025, Regensburg, September 17–19, 2025.

3) Yasumoto C, Hanaoka S, Nishigami O, Hashimoto S, Sakata Y, Kuriyama K, Yoshiike T. Effects of thermal and olfactory control of bedroom air on sleep restfulness during summer:

A randomized crossover trial. World Sleep 2025, Singapore, September 5–10, 2025.

4) Yoshiike T, Suzuki M, Koebis M, Inabe K, Kogo Y, Kumar D, Moline M, Kuriyama K. The Effects of Lemborexant on Objective Sleep Parameters in Insomnia Patients Based on Sleep State Misperception. World Sleep 2025, Singapore, September 5–10, 2025.

5) Yoshiike T, Utsumi T, Yajima T, Nagao K, Kawamura A, Tripathi S, Takahashi E, Nangaku M, Kitamura S, Matsui K, Nakajima S, Kuriyama K. Prolonged grief and related health factors modify the relationship between bedroom light exposure and sleep fragmentation. SLEEP 2025, Seattle, June 8–11, 2025.

6) Takahashi E, Yoshiike T, Utsumi T, Kawamura A, Nagao K, Hazumi M, Okamura S, Fuwa M, Matsushima S, Nangaku M, Kimura A, Matsui K, Kuriyama K. Comorbid nonrestorative sleep accelerates mortality in community adults with common chronic conditions. SLEEP 2025, Seattle, June 8–11, 2025.

7) Nakano W, Tuturea LE, Endo K, Shimazu Y, Hori H, Yoshiike T, Utsumi T, Oba M, Kuriyama K, Narita ZC. Effectiveness of interventions to reduce sedentary behavior on mental health: A systematic review. AIHA CONNECT 2025, Kansas, May 19-21, 2025.

8) Khullar A, Yoshiike T, Suzuki M, Koebisu M, Inabe K, Kogo Y, Taninaga T, Moline M, Cheng JY, Kumar D, Pinner K, Kuriyama K. Correlations between sleep quality and sleep parameters in adults with insomnia treated with Lemborexant. 12th CSS Congress, Montreal, March 19-21, 2025.

9) Utsumi T, Yoshiike T, Matsui K, Kawamura A, Okamura S, Nagao K, Hazumi M, Kuriyama K. Concurrent dysfunctional cognitions about sleep and excessive daytime sleepiness as a hallmark of comorbid insomnia and sleep apnea: Analysis of a Japanese polysomnography databank. SLEEP 2025, Seattle, June 8–11, 2025.

10) Utsumi T, Yoshiike T, Kawamura A, Nagao K, Okamura S, Fushimi M, Matsui K, Kuriyama K. Concurrent co-occurrence of dysfunctional cognitions about sleep and excessive daytime sleepiness as a psycho-behavioral characteristic of comorbid insomnia and sleep apnea. World Sleep 2025, Singapore, September 5–10, 2025.

11) Nagao K, Yoshiike T, Matsui K, Kawamura A, Utsumi T, Kimura A, Takahashi E, Matsushima S, Nangaku M, Hazumi M, Kuriyama K. Association between restorative sleep and sleep fragmentation in obstructive sleep apnea. World Sleep 2025, Singapore, September 5–10, 2025.

12) 矢嶌智貴，内海智博，河村葵，長尾賢太朗，髙橋恵理矢，南學正仁，松井健太郎，北村真吾，伊藤正哉，中島聡美，栗山健一，吉池卓也：睡眠の主観－客観乖離と遷延性悲嘆の関連．第 8 回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会，東北大学（仙台），2026.3.14-15.

13) 吉池卓也，南學正仁，髙橋恵理矢，矢嶌智貴，内海智博，長尾賢太朗，河村葵，栗山健一：オキシトシンと共感性の社会的調節および死別後悲嘆との関連．第 35 回 バソプレシン・オキシトシン研究会学術集会，東京大学，2026.1.10.

14) 不破真衣，松井健太郎，松島舜，高橋恵理矢，南學正仁，伊豆原宗人，都留あゆみ，羽澄恵，長尾賢太朗，河村葵，住友典子，内海智博，北村真吾，吉池卓也，栗山健一：非 24 時間睡眠・覚醒リズム障害に対するアリピプラゾールの治療効果：後方視的ケースシリーズ ．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

15) 伏見もも，河村葵，内海智博，吉池卓也，松井健太郎，長尾賢太朗，有竹清夏，栗山健一：日本人における不溶性食物繊維摂取量と睡眠休養感の関連に及ぼす習慣飲酒、睡眠時間の影響．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

16) 松島舜，松井健太郎，吉池卓也，不破真衣，都留あゆみ，木村綾乃，伊豆原宗人，内海智博，北村真吾，羽澄恵，南學正仁，髙橋恵理矢，五十嵐俊，長尾健太朗，林大祐，久保田智香，野

田隆政，栗山健一：睡眠薬の作用機序による離脱症状とアドヒアランスへの影響の検討．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

17）羽澄恵，吉池卓也，松井健太郎，長尾賢太朗，内海智博，河村葵，松島舜，不破真衣，住友典子，都留あゆみ，伊豆原宗人，栗山健一：慢性不眠障害における身体症状症および病気不安症傾向．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

18）髙橋恵理矢，吉池卓也，内海智博，河村葵，長尾賢太朗，羽澄恵，岡邨しのぶ，不破真衣，松島舜，南學正仁，木村綾乃，北村真吾，松井健太郎，栗山健一：睡眠休養感の欠如が慢性疾患の健康転帰に及ぼす影響の検討．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

19）内海智博，吉池卓也，河村葵，岡邨しのぶ，羽澄恵，長尾賢太朗，松井健太郎，松島舜，不破真衣，栗山健一：Comorbid Insomnia and Sleep Apnea を予測する睡眠に関する非機能的な信念および日中の眠気指標．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

20）内海智博，吉池卓也，長尾賢太朗，栗山健一：不眠症状を有する地域高齢男性における睡眠時間の主観－客観乖離と総死亡リスクとの関連．第 84 回日本公衆衛生学会総会，静岡県コンベンションアーツセンター（静岡），2025.10.29-31.

21）長尾賢太朗，吉池卓也，林大祐，髙橋恵理矢，南學正仁，五十嵐俊，河村葵，内海智博，松井健太郎，松島舜，沖田恭治，野田隆政，鬼頭伸輔，栗山健一：朝の時間認知はうつ病に対する反復経頭蓋磁気刺激療法の早期治療転帰を予測する．日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28-29.

(3) 研究報告会

1） 吉池卓也，矢嶌智貴，内海智博，Srishti Tripathi ，河村葵，長尾賢太朗，阿部十成，伊藤正哉，中島聡美，栗山健一：死別後悲嘆における回避の生理的意義：前向き観察研究．令和 7 年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究報告会，国立精神・神経医療研究センター，2026.3.16.

2） 長尾賢太朗，吉池卓也，河村葵，内海智博，髙橋恵理矢，南學正仁，北村真吾，栗山健一：東日本大震災被災者における免疫・炎症プロファイルとうつ症状の関連：不眠と災害ストレスによる二重調整分析．令和 7 年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究報告会，国立精神・神経医療研究センター，2026.3.16.

(4) その他

C．講演

1） 栗山健一：「良質な睡眠をとるコツを伝授します！　～睡眠衛生指導のポイントを中心に～」．2026 年春のすいみんの日市民公開講座 日本睡眠学会主催・日本精神神経学会，日本神経学会，日本呼吸器学会，日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会，日本循環器学会，エーザイ株式会社共催・日本睡眠健康推進機構後援，ベルサール神保町，2026.3.15.

2） 栗山健一：心と体を整える睡眠．令和 7 年度 上水南公民館事業企画委員会企画 健康づくり講座，小平市上水南公民館，2026.2.25.

3） 栗山健一：特別講演 国民の睡眠健康目標に準じた睡眠障害治療の考え方．第 17 回九州睡眠研究会，九州睡眠研究会・エーザイ株式会社共催，エーザイ株式会社 福岡オフィス，2026.2.17.

4） 栗山健一：国民の睡眠健康目標に準じた睡眠障害治療の考え方．Meiji Insomnia Conference in Gifu，Meiji Seika ファルマ主催，岐阜じゅうろくプラザ，2025.12.5.

5） 栗山健一： 国民の睡眠健康目標に準じた睡眠障害治療の考え方．『ボルズィ®錠』新発売記念講演会，Meiji Seika ファルマ主催，京王プラザホテル，2025.12.3.

6） 栗山健一: うつ病に併存する睡眠障害の治療. 急性期うつ病治療 Update, 武田薬品工業主催,

me:rise 立川，2025.11.11.

7) 栗山健一：国民の睡眠健康向上指針に準じた不眠症の理解と治療．不眠症 Expert Seminar，第一三共株式会社主催，ホテルルートイン Grand 旭川駅前，2025.11.7.

8) 栗山健一：国民の健康指針に準じた不眠症の予防・治療．不眠症診療セミナー in 宮城，塩野義製薬主催，TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台，2025.10.24.

9) 栗山健一：より良い眠りのためにあなたも睡眠力アップ！ 令和 7 年度「きよせ健幸大学」清瀬市しあわせ未来センター，2025.10.23.

10) 栗山健一：働く人のための新しい睡眠習慣．2025 年度衛生週間 特別講演会，JFE スチール千葉 見学センター，2025.10.27.

11) 栗山健一：働く人と職場のための『睡眠学』～エンゲージメントとパフォーマンスを高める睡眠習慣～．2025 年度「健康講演」，マツダ株式会社本社，2025.10.6.

12) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」に準じた労働者の睡眠対策．睡眠改善研修 令和 7 年度セルフケア向上のためのメンタルヘルス研修，川崎市役所本庁舎，2025.10.2.

13) 栗山健一：健康づくりのための睡眠ガイド 2023 に込められたメッセージ．デエビゴ錠発売 5 周年記念講演会，エーザイ株式会社主催，TAKANAWA GATEWAY Convention Center，2025.9.27.

14) 栗山健一：国民の健康指針に準じた不眠症の予防・治療．不眠症診療 Up to Date in 八王子，塩野義製薬主催，八王子エルシィ，2025.9.19.

15) 栗山健一：国民の睡眠健康向上指針に準じた不眠症の理解と治療．Insomnia Seminar 2025，第一三共株式会社主催，秋田キャッスルホテル，2025.9.12.

16) 栗山健一：国民の健康指針に準じた不眠症の予防・治療．埼玉精神神経科診療所協会イブニングセミナー，埼玉精神神経科診療所協会・塩野義製薬共催，大宮ソニックシティ，2025.7.26.

17) 栗山健一：国民の睡眠健康向上指針に準じた不眠症の理解と治療．高知県精神科医会第 192 回学術講演会，第一三共株式会社共催・高知県医師会後援，高知パレスホテル，2025.7.16.

18) 栗山健一：国民の睡眠健康向上指針に準じた不眠症の理解と治療．東村山市医師会学術講演会，東村山市医師会 ・ 北多摩医師会 ・ 第一三共株式会社共催，東村山医師会館，2025.4.24.

19) 栗山健一：国内臨床試験の日本人データから読み解く臨床効果．不眠症 National Symposium，塩野義製薬，2025.4.6.

20) 北村真吾：睡眠の大切さについて．2025 年度 学校訪問型睡眠講座，2025.12.3.

21) 吉池卓也：睡眠の質と病．地域医療を支える医師・医療従事者のための睡眠障害治療の最前線，一般社団法人 臨牀と研究主催，オンライン，2026.2.4.

22) 吉池卓也：不眠症の病態理解と治療のポイント．小平市薬剤師連携の会，小平市薬剤師連携の会・小平市薬剤師会・エーザイ株式会社共済，国立精神・神経医療研究センター，2025.12.17.

23) 吉池卓也：不眠症について知る～誤解の解消と目標の見直し～多摩不眠症 Web セミナー，第一三共株式会社主催，オンライン，2025.11.19.

24) 吉池卓也：眠りの量と質を整える～こころとからだの健康のために～．第 155 回 ホリスティックフォーラム大阪（日本ホリスティック医学協会関西支部主催），大阪，2025.11.14.

25) 吉池卓也：睡眠の量と質と心身の健康～睡眠ガイド 2023 を踏まえて～．日本睡眠学会第 20 回生涯教育セミナー，オンライン，2025.11.11-12.8.

26) 吉池卓也：ぐっすり眠ってこころとからだを健康に．令和 7 年度メンタルヘルス市民講座，相模原市主催・かながわ自殺対策会議後援，相模原，2025.8.25.

27) 吉池卓也：医療における睡眠の量と質．第 30 回城北睡眠障害研究会，城北睡眠研究会・第一三共株式会社・株式会社フィリップス共催，オンライン，2025.8.1.

28) 吉池卓也：不眠症治療のゴールと出口を考える．不眠症診療 Web セミナー，エーザイ株式会社主催，オンライン，2025.7.30.

29) 吉池卓也：こどもの睡眠と心身の健康．2025 年度学校訪問型睡眠講座，公益財団法人神経研究

所主催，中津川市立阿木小学校，オンライン，2025.6.27.

30) 吉池卓也：不眠診療アップデート～「良い睡眠」の理解を踏まえて．～睡眠診療セミナー in 多摩，立川市医師会・国立市医師会・昭島市医師会・国分寺市医師会・エーザイ株式会社共催，災害医療センター，東京，2025.4.25.

31) 内海智博：睡眠の質と測り方．地域医療を支える医師・医療従事者のための睡眠障害治療の最前線，一般社団法人 臨牀と研究主催，オンライン，2026.2.4.

32) 河村葵：睡眠の大切さ、望ましい睡眠のとり方．2025 年度 学校訪問型睡眠講座，2025.9.2.

D．学会活動

(1) 学会主催

なし

(2) 学会役員

1) 栗山健一：日本睡眠学会　理事・評議員
2) 栗山健一：日本時間生物学会　評議員
3) 栗山健一：日本生物学的精神医学会：評議員
4) 吉池卓也：日本時間生物学会　評議員
5) 吉池卓也：日本睡眠学会　評議員
6) 北村真吾：日本時間生物学会　評議員
7) 北村真吾：日本生理人類学会　理事
8) 北村真吾：日本睡眠学会　評議員
9) 河村　葵：日本睡眠学会　評議員
10) 内海智博：日本睡眠学会　評議員
11) 肥田昌子：日本時間生物学会　評議員
12) 肥田昌子：日本睡眠学会　評議員

(3) 座長

1) 栗山健一：ランチョンセミナー9「カプセルホテルの睡眠データの活用」株式会社ナインアワーズ共催 日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.29.
2) 栗山健一，小曽根基弘：シンポジウム 1「睡眠の質とは何か　-睡眠の質の重要性とその評価法-」 日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.28.
3) 栗山健一，鈴木正泰：シンポジウム 40「睡眠休養感と心身の健康ー最近の知見と公衆衛生向上のための戦略ー」 日本睡眠学会第 49 回定期学術集会，広島大学霞キャンパス（広島），2025.6.29.
4) 栗山健一，鈴木正泰：シンポジウム 6「近年の睡眠学の進歩と精神医学・医療での展開」 第 121 回日本精神神経学会学術総会，神戸国際会議場（兵庫），2025.6.19.

(4) 学会誌編集委員等

1) 栗山健一：日本睡眠学会　倫理委員会　委員長
2) 栗山健一：日本睡眠学会　利益相反委員会　副委員長
3) 栗山健一：日本睡眠学会　用語委員会　副委員長
4) 栗山健一：日本睡眠学会　睡眠研究支援委員
5) 栗山健一：日本睡眠学会　将来構想委員
6) 栗山健一：日本睡眠学会　機関誌編集委員
7) 栗山健一：日本睡眠学会　SBR　Associate Editor

8) 栗山健一：日本睡眠学会　災害対策ワーキンググループ 副委員長
9) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会誌　編集委員
10) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会　治療戦略検討委員
11) 吉池卓也：日本睡眠学会　認定試験委員会試験問題作成委員
12) 北村真吾：日本生理人類学会誌　副編集委員長
13) 北村真吾：Journal of Physiological Anthropology　Editorial Board
14) 北村真吾：Biology　Editorial Board

E．研修

(1) 研修企画

なし

(2) 研修会講師

1) 栗山健一：不眠症の概要．不眠症に対する認知行動療法研修，厚生労働省，NCNP，2026.1.15.

F．その他

1) 内海智博，吉池卓也，栗山健一：会社における睡眠対策 BOOK．協会けんぽリーフレット，2025 年 10 月．
2) 内海智博，吉池卓也，栗山健一：知っておきたい睡眠の役割と良い睡眠のコツ．協会けんぽリーフレット，2025 年 10 月．
3) 栗山健一：睡眠の悩み．NHK きょうの健康，2026 年 3 月 30 日～4 月 2 日放送（第 1・2・4 回）．
4) 栗山健一：教えてなぜ？なに？睡眠先生！ FM 西東京，2026 年 3 月 7 日～4 月 25 日放送（全 8 回）．
5) 栗山健一：睡眠力をアップしてイキイキ生活～「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」より～講演会報告，東京都在宅保健師の会 会報，2026 年 3 月 1 日 第 24 号．
6) 栗山健一：最新データで導く快適睡眠への道！ Smile Life 西武健康保険組合，株式会社法研，2025 Autumn pp.22-23.
7) 栗山健一：【監修】「快眠スタート BOOK」・「不眠症患者さんのためのぐっすりサポートガイド」・「説明用睡眠ガイド・あなたの眠りのお悩みはどのタイプ？」．大正製薬株式会社・Meiji Seika ファルマ株式会社，2026 年 1 月作成．
8) 栗山健一：睡眠改善で健康づくり 6．社会が取り組むべき睡眠健康向上対策，地方公務員安全と健康フォーラム vol.131，　pp.28-29，2025 年 8 月号．
9) 栗山健一：　睡眠の質の高め方．あんしん Life　日経 BP，2025 年 7 月 1 日．
10) 栗山健一：変わる睡眠シニアの新常識．聖教新聞（12 面），2025 年 6 月 25 日　日刊．
11) 栗山健一：睡眠力をアップしてイキイキ生活～「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」より～．東京の国保 No.680，2025 年 5 月春号．
12) 栗山健一：睡眠改善で健康づくり 5．知らずに潜む睡眠の質を低下させる疾患，地方公務員安全と健康フォーラム vol.130，pp.28-29, 2025 年 4 月号．
13) 栗山健一：快適睡眠のための生活習慣．すこやかファミリー 4 月号（第 850 号），株式会社法研，pp.6-11.
14) 吉池卓也：健康づくりのための睡眠ガイド 2023，睡眠にまつわるエトセトラ．Medical View Point 47(3)，2026 年 2 月．
15) 吉池卓也：家族の健康：不眠④ 治療が必要な不眠もある．月刊すこ～れ 4 月号 No.541，公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会，pp.50-51.

16) 吉池卓也：家族の健康：不眠③ よい眠りを確保するための生活習慣とは．月刊すこ～れ 3 月号 No.540，公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会，pp.50-51.
17) 吉池卓也：家族の健康：不眠② 睡眠は量と質が大切．月刊すこ～れ 2 月号 No.539，公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会，pp.50-51.
18) 吉池卓也：家族の健康：不眠① 眠ることが大切な理由．月刊すこ～れ 1 月号 No.538，公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会，pp.52-53.
19) 吉池卓也：死別の悲しみ 手紙で向き合うグリーフケア「天国とつながるポスト」．産経新聞，2025 年 4 月 27 日.
20) 内海智博（日本うつ病学会　うつ病診療ガイドライン作成ワーキンググループ）：うつ病診療ガイドライン 2025 第 8 章 不眠症状を伴ううつ病 CQ8-4 不眠症状を伴ううつ病に鎮静作用を有する向精神薬（抗うつ薬、抗精神病薬など）は有用か．日本うつ病学会，東京, pp207-209 (https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/iinkai/katsudou/data/guideline2025.pdf) , 2025.

10. 知的・発達障害研究部

Ⅰ. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は，知的障害研究室，発達機能研究室の二室体制で構成され，知的能力障害，自閉スペクトラム症，注意欠如・多動症，限局性学習症，トゥレット症などの神経発達症の病態解明，治療・支援に関する研究を幅広く実施している．研究においては，部局内だけではなく，国立精神・神経医療研究センター内，ならびに，国立国際医療研究センター国府台病院とのナショナルセンター間の連携，東京大学，筑波大学，京都大学，名古屋大学，名古屋市立大学などの中核的研究機関との連携を幅広く構築している．加えて研究者のキャリア・パス形成を基本方針の一つに掲げており，競争的研究資金の確保，研究計画の立案と遂行，論文執筆まで，共同性と相互研鑽を通して研究者としての成長を図り，知的・発達障害ならびに関連領域における次世代のリーダーシップを国内外で発揮できる人材育成を強く意識している．また，厚生労働省から委託された国研修として発達障害者支援研修を実施し，各地でかかりつけ医対応力向上研修を実施する高度な知識と技能を有する医師の育成を行っているほか，発達障害者支援センターの人材育成など，知的・発達障害の支援を拡充するための人材育成の拠点として機能できるよう努めている．

部長の髙橋長秀（児童精神医学）は，自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症をはじめとするとその精神医学的併存症に関して，浜松医科大学子どものこころの発達研究センターとの共同研究で，ADHD の遺伝的リスクが亜鉛代謝と関連すること，さらにその亜鉛の低下が周産期の母親のうつ病と関連することを見出した．また，脂質代謝に関連するアディポネクチンと ADHD の遺伝的な関連，夜型クロノタイプと ADHD の遺伝的関連などについても学会報告を行い，現在論文が査読中である．また，国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターの発達障害情報分析会議の委員，国立特別支援教育総合研究所の運営委員として，知的・発達障害に関連する国の施策に寄与してきた．さらに，小平市特別支援教育推進委員会委員として，小平市の施策の策定に寄与し，今後小平市と知的発達障害研究部の連携を推進していく足がかりを作った．

江頭優佳室長（神経生理学，実験心理学）は，定型発達ならびに神経発達症当事者のデータサンプリングを精力的に進めてきた．江頭は，神経発達症における多様な時間知覚に着目し，その神経基盤の同定と神経発達症における障害の解明に取り組んでいる．江頭は，精神・神経疾患研究開発費を得て，効果的な支援法提案のための自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の認知機能のばらつきと症状との関連の解明に取り組んでいる．また，加賀佳美山梨大学准教授，竹市博臣理化学研究所上級技師とともに，脳統合イメージングセンター（IBIC）との連携をはかり，臨床表現型や神経心理学的機能の脳磁図を用いたバイオマーカーの探索を行っている．本年は学習障害児における漢字認識の違いについて脳磁図を用いて明らかにし，原著論文として発表した．

古家宏樹室長(分子生物学，動物行動実験学)は 2025 年 9 月に着任し，精神・神経疾患研究開発費「神経発達症のリスクとなる周産期ストレスの同定と効果的な介入方法の確立」をリードし，本年はそのスタートとなる倫理申請，動物実験室の整備，分子生物学的研究室の整備などを行い，また，これまでの ADHD モデルの限界と今後の方向性を示した総説を筆頭著者として Frontiers in Psychiatry に発表した．

池田悠稀リサーチフェローは他者の動作観察時の脳活動を事象関連脱同期を用いた検討を行い，第 43 回日本生理心理学会大会にて発表，現在論文執筆中である．またこの知見を元にした新たな実験系を立ち上げ中である．

畠山太一リサーチフェローは動物実験室の整備，分子生物学的研究室の整備などと共に，実際に ADHD モデルマウスとその対象群の繁殖を進めている．

上述のように，髙橋部長，古家室長，江頭室長に加え，科研費研究補助員の益田来実，日下部公美が研究を支えた．また，併任研究員の中川栄二，客員研究員として，會田千重，稲垣真澄，岩垂喜貴，宇佐美政英，魚野翔太，小川しおり，小沢 浩，加我牧子，加賀佳美，金生由紀子，久島 周，

黒田美保，軍司敦子，小平雅基，崎原ことえ，鈴木 太，高野裕治，竹市博臣，辻井農亜，波多野文，堀内史枝，林小百合，安村 明，山内 彩，吉川 徹，義村さや香が研究に参加している．また，秋月由紀子，日下部公美，髙橋知子が，研究，研修活動を支えた．

令和８年度からは新たに日下部公美を科研費研究員，渡邊友を科研費研究補助員として迎え，さらにリサーチフェローを選考中である．

Ⅱ．研究活動

1） 認知神経科学的手法を用いた神経発達症と併存精神疾患の病態研究

注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の臨床表現型（神経発達症特性，適応行動，不安・抑うつなどの精神病理学的評価）と神経心理学的機能（表情認知，視線認知，実行機能，報酬系，時間知覚）との関係についてデータを蓄積している．科学研究費（江頭）ならびに精神・神経疾患研究開発費（江頭）に基づいて研究を遂行している．

本年度は，学習障害児における漢字認識の違いについて脳磁図を用いて明らかにし，原著論文として発表した(Egashira, Brain and Development. 2025)．また，池田悠稀リサーチフェローは日本生理人類学会第 86 回大会にて，「足部動作観察時における μ 波抑制と観察視点の相違に関する検討」について発表し，優秀発表賞を受賞している．

2） ゲノムコホートを用いた神経発達症の病態研究

浜松医科大学，ニューヨーク市立大学などと共同で，コホート研究に，ポリジェニックリスクスコアなどのゲノム情報を加えた解析により，注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の早期兆候の同定，発症や経過に影響する因子の同定などを目指した研究が進行中である．さらに，ゲノム解析を発展させて，神経発達症と併存することの多い精神疾患，身体疾患に共通する遺伝子の同定や介入ターゲットの探索なども行っている．本年は，髙橋部長が ADHD の遺伝的リスクと亜鉛代謝には遺伝的関連が強く，さらに新生児期の亜鉛の血中濃度は周産期のうつ病と強く関連し，周産期うつ病の管理及び適切な亜鉛の補助が ADHD 発症リスクの軽減につながる可能性があることを明らかにし，プレスリリースを行った (Takahashi, npj Mental Health Res. 2025).

3） 養育困難を抱える児童のペアレンティング・スキル向上を目指した介入の有効性検証

神経発達症の児童は，親の養育困難と結びつきがちであり，親の不安や抑うつ，虐待リスクとも関連する．ペアレンティング・スキル向上と子どもの行動上の問題の減少に PCIT の有効性が示されているが，その一方で，中断率が高く，十分に効果が出るまで治療が継続できない，などの課題も存在する．益田来実科研費補助員は高田美希科研員，髙橋部長と共同して，システマティックレビューを実施し，中断に関与する要因を特定し第 17 回日本 ADHD 学会にて発表，優秀ポスター賞を受賞した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

当研究部では，NCNP および部のホームページに神経発達症に関する支援情報を含めた医学的情報を掲示した．髙橋部長は，ADHD と亜鉛の低下について静岡新聞からの取材を受けた．NHKBS「ヒューマニエンス」にも出演し，ADHD の啓発と正確な理解についての情報を伝えた．また，国立障害者リハビリセンターの運営する発達障害ナビへの寄稿など，社会的な啓発に励んでいる．

(2) 専門教育面における貢献

髙橋部長は，浜松医科大学にて知的・発達障害と児童精神医学における講義を担当した．また千葉大学連携大学院客員教授として院生 1 名の指導に当たっている．

また，江頭室長は九州大学，立教大学，東海大学，畠山リサーチフェローは東京成徳大学応用心理学部の大学教育に関与していた．

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため，全国で開始された，かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として，発達障害支援者研修パート 1（2025 年 6 月 25 日～26 日），パート 2（2025 年 9 月 24 日～25 日），パート 3（2025 年 11 月 19 日～20 日），および，行政実務研修（2026 年 1 月 28 日～29 日）をオンラインで実施した（課程主任：髙橋，課程副主任：江頭，古家）．

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

髙橋部長が，国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員に携わるなど，国あるいは関連機関の施策への協力を行った．また，小平市特別支援教育推進委員会委員，静岡県教育委員会相談業務などを通して，知的・発達障害の支援情報の発信，特別支援教育の研究・実践，貢献活動を行っている．

(5) センター内における臨床的活動

髙橋部長が NCNP 病院児童精神科外来において新患（うちコンサルテーション，セカンドオピニオンを含む），これらの患者に対する再診診療を提供した．

(6) その他

髙橋部長は日本 ADHD 学会代議員，日本児童青年精神医学会国際委員，日本小児精神神経学会評議員として学術活動に貢献した．また，江頭は日本生理人類学会代議員，総務幹事，若手の会顧問，日本生理人類学会誌編集委員，ヒューマンインタフェース学会誌編集委員として学術活動に貢献している．

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1） Takahashi N, Kato H, Nawa Y, Ogawa S, Tsuchiya KJ, Okada T. The role of inflammation in the development of tic symptoms in subjects with ADHD. Brain, Behavior, & Immunity – Health, 45:100981, 2025.5.28. DOI: 10.1016/j.bbih.2025.100981

2） Takahashi N, Okumura A, Kubota C, Tsuchiya K J: Re-evaluating the link between internet use during pregnancy and low birth weight in light of maternal mental health. Environmental Health and Preventive Medicine 30: 62, 2025.8.6. DOI: 10.1265/ehpm.25-00191

3） Egashira Y, Kaga Y, Gunji A, Kita Y, Kimura M, Hironaga N, Takeichi H, Hayashi S, Kaneko Y, Takahashi H, Hanakawa T, Okada T, Inagaki M: Recognition of Japanese kanji words in children with specific learning disorders: a preliminary study using magnetoencephalography. Brain and Development 47(4): 104400, 2025.7.19. DOI: 10.1016/j.braindev.2025.104400

4） Takahashi N, Nishimura T, Okumura A, Iwabuchi T, Harada T, Rahman M S, Nomura Y, Newcorn J H, Tsuchiya K J: Maternal stress, cord blood zinc and attention deficit hyperactivity disorder. Npj mental health research 4(1): 36, 2025.8.7. DOI: 10.1038/s44184-025-00149-3

5） Tsuchiya K J, Takahashi N, Nomura Y, Newcorn J H, Toda S, Ishikawa-Omori Y, Okumura

A, Rahman M S, Iwabuchi T, Harada T, Hirata I, Nakayasu C, Amma Y, Suzuki H, Nishimura T: Neurodevelopmental variations cascading from age 10 months to 3 years leading to attention-deficit hyperactivity disorder/autism traits at age 9 in a general population. JCPP Advances, 2025.10.12. DOI: 10.1002/jcv2.70053

6) Terao M, Furuie H, Yamada M, Sawa K: Behavioral investigation of the sense of agency in rats by manipulating temporal delays between response and outcome: Insights from a causal reasoning task. Behavioural Brain Research 496(2026)115814, 2025.9.9. DOI: 10.1016/j.bbr.2025.115814

7) Gunji A, Takeichi H, Suzuki K, Kobayashi T, Kokubo N, Yasumura A, Yamamoto H, Inoue Y, Kaga M, Inagaki M: Post-stimulus rebound of EEG power in response to vocal and non-vocal sounds in children with and without autism spectrum disorder: An exploratory study. Brain and Development 48(3): 104522, 2026.3.14. DOI: 10.1016/j.braindev.2026.104522

8) Furuie H, Hatakeyama T, Harigai W, Katayama T, Tsuchiya K J, Takahashi N: Animal models for the study of ADHD: the need for next-generation models. Frontiers in Psychiatry, 17: 2026, 2026.3.25. DOI: 10.3389/fpsyt.2026.1773090

9) Yamasue H, Kuwabara H, Kojima M, Benner S, Otowa T, Watanabe T, Kuroda M, Owada K, Yassin W, Hamada J, Kano Y, Uno Y, Kushima I, Mori D, Arioka Y, Munesue T, Kasai K, Higashida H, Abe O, Takao H, Wakuda T, Kameno Y, Inoue J, Harada T, Yamauchi A, Ogawa N, Honda N, Kikuchi S, Seto M, Tomita H, Miyoshi N, Matsumoto M, Kawaguchi Y, Kanai K, Ikeda M, Nakamura I, Isomura S, Hirano Y, Onitsuka T, Takahashi N, Nakashima M, Saitsu H, Kondo K, Ikeda M, Iwata N, Shimada M, Sasaki T, Takei N, Ozaki N, Kosaka H, Okada T. A key gene modulating oxytocin efficacy in autism: Genome-wide discovery and verification in randomized controlled trials datasets. Molecular Psychiatry, 2026.3.28. DOI: 10.1038/s41380-026-03562-y

(2) 総説

1) 髙橋長秀：子どもの睡眠習慣と睡眠障害．日本臨牀社　83(7): 899-904, 2025.7.1.

2) 髙橋長秀：特集　睡眠—覚醒障害～治療の基本　神経発達症でみられる睡眠・覚醒障害．精神科 Resident 6(5): 49-52, 2026.2.20.

(3) 著書

1) 髙橋長秀，加賀佳美：明日からできる！子どもの ADHD 診療　小児科・一般精神科外来での実践ガイド．診断と治療社，東京，pp8,15-22,37,40, 90-139, 174-197, 2025.6.10.

2) 髙橋長秀：こころの治療薬ハンドブック「リスデキサンフェタミン」．星和書店，東京，pp202-203. 2026.1.24.

(4) 研究報告書

(5) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 池田悠稀：『第 10 回日本生理心理学会若手の集い』 他者の動作観察時の脳活動：事象関連脱同期を用いた検討．第 43 回日本生理心理学会大会，福井，2025.5.23.

2) 髙橋長秀：シンポジウム 6 神経発達症研究の新展開：ゲノムコホートを用いた神経発達症の理

解．第 67 回日本小児神経学会学術集会，鳥取，2025. 6. 5.

3） 髙橋長秀：共催シンポジウム 2 ADHD 診療上の課題へのアプローチ．中枢神経刺激薬をどう活かすか．第 67 回日本小児精神神経学会学術集会，鳥取，2025. 6. 6.

4） 髙橋長秀：シンポジウム 6　近年の睡眠学の進歩と精神医学・医療での展開　神経発達症と睡眠障害～遺伝的リスクスコア解析を用いたコホート研究によって明らかになったこと～．第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025. 6. 19.

5） 髙橋長秀：シンポジウム 56　神経発達症と神経多様性　自閉スペクトラム症と注意欠如多動症の類似性と相違性，第 121 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2025. 6. 19.

6） 髙橋長秀：シンポジウム 26　神経発達症と環境要因　幼児期の生活習慣が神経発達症に与える影響～睡眠・スクリーンタイム・ゲームの影響～，第 66 回日本児童青年精神医学会総会，福井，2025. 11. 15.

7） 髙橋長秀：FM-S2 気候変動と神経発達多様性の関係から現代人の環境への適応を考える　周産期ストレスと神経発達症の発症リスク　～暑熱・寒冷曝露が関与する可能性～，2025 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング（秋期），東京，2025.12.6.

8） 髙橋長秀：レクチャー2．ゲノムコホート研究から紐解く神経発達症の遺伝学的背景．第 28 回東海小児遺伝カンファレンス，名古屋，2026.2.7.

9） 髙橋長秀：教育講演 1　ADHD の発症・病態に関連する遺伝的要因とその臨床的意義．第 17 回日本 ADHD 学会総会，東京，2026.2.28.

10） 江頭優佳：シンポジウム 2　ADHD における神経心理学的障害．第 17 回日本 ADHD 学会総会，東京，2026.2.28.

(2) 一般演題

1） Takahashi N: Involvement of adiponectin in the biology of ADHD: A genomic cohort study in Japanese population. 10th World Congress on ADHD, Prague, 2025.5.9.

2） Egashira Y, Hayashi S, Uono S, Takada M, Ukezono M, Ikeda Y, Takahashi N, Okada T: Time perception in adults with ADHD: A comparative study with ASD and comorbid groups. The 17th International Congress of Physiological Anthropology, Enschede, 2025.9.12.

3） Ikeda Y, Hanafusa K, Hoshino S, Egashira Y, Takahashi N, Atomi T: Neural activity during FootPerception varies with visual perspective: An EEG study. The 17th International Congress of Physiological Anthropology, Enschede, 2025.9.12.

4） 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田 俊：成人期の注意欠如多動症と自閉スペクトラム症の時間知覚機能不全の比較．日本生理人類学会第 86 回大会，大阪，2025. 5. 11.

5） 池田悠稀，花房京佑，星野真之介，跡見友章：足部動作観察時における μ 波抑制と観察視点の相違に関する検討．日本生理人類学会第 86 回大会，大阪，2025. 5. 11.

6） 池田悠稀，花房京佑，星野真之介，跡見友章：足部観察時の視点の違いが P300 振幅に与える影響．第 43 回日本生理心理学会大会，福井，2025.5.25.

7） 波多野 文，北神神司，岡田 俊：人は長い待ち時間でも思考を楽しめるか．日本認知心理学会第 23 回，京都，2025. 5. 31.

8） 江頭優佳：注意欠如多動症児の時間知覚機能に関する予備的検討．2025 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング（秋期），東京，2025.12.6.

9） 池田悠稀，花房京佑，星野真之介，江頭優佳，髙橋長秀，跡見友章：観察視点の違いが足部への注意に及ぼす影響：事象関連電位を用いた検討．2025 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング（秋期），東京，2025.12.6.

10） 益田来実，高田美希，髙橋長秀，江頭優佳，木原望美，細金奈奈，小平雅基，岡田　俊：シス

テマティックレビューによる親子相互交流療法の離脱要因の検討．日本 ADHD 学会第 17 回総会，東京，2026.2.28-3.1.

11）古家宏樹，中武優子，山田光彦：幼少期の代理的社会的敗北ストレスは成体マウスのストレス脆弱性を高める．第 99 回日本薬理学会年会，宮城，2026.3.16-18.

(3) 研究報告会

1） 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，益田来実，箱島有輝，宇佐美政英，岡田 俊：神経発達症（発達障害）の神経心理・心理社会的病態モデルの構築―疾患コホートと地域コホートの両面からの検証　第二報. JH リトリート 2025～ゲノム解析が切り拓く新たな医療の展開～，東京，2025.6.7.

2） 江頭優佳，加賀佳美，軍司敦子，北 洋輔，木村元洋，廣永成人，竹市博臣，林 小百合，金子裕，高橋秀俊，花川 隆，岡田 俊，稲垣真澄：発達性読み書き障害を有する児の漢字熟語認知時の脳磁図活動．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 7 年度研究報告会，東京，2026.3.16.

3） 古家宏樹，領家梨恵，釣木澤朋和：新生仔期グルタミン酸 NMDA 受容体遮断がラットの行動と脳領域間の構造的結合性に及ぼす影響．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 7 年度研究報告会，東京，2026.3.16.

(4) その他

1） 髙橋長秀: 発達障害とスクリーンタイム：因果関係に関する検討と実際の対応. 令和 7 年度 第 4 回 北海道児童思春期精神医学セミナー，札幌，2025.7.16.

2） 髙橋長秀: ゲノムコホート研究を用いて神経発達症の病態を理解する．第 1 回 北大精神科 脳とこころを考えるセミナー，札幌，2025.7.17.

D. 学会活動

（1）学会役員

1） Egashira Y: The 17th International Congress of Physiological Anthropology, Scientific Committee

2） 髙橋長秀: 日本 ADHD 学会　代議員

3） 髙橋長秀: 日本小児精神神経学会　代議員

4） 江頭優佳：一般社団法人日本生理人類学会　代議員，総務幹事

5） 古家宏樹：日本神経精神薬理学会　評議員

6） 池田悠稀: 一般社団法人日本生理人類学会　代議員，研究担当幹事

7） 池田悠稀: 日本生理心理学会 若手会幹事

（2）学会誌編集員等

1） Takahashi N: Frontiers in Psychiatry, Associate Editor

2） Takahashi N: PCN report, Field Editor

3） Egashira Y: Journal of Physiological Anthropology, Editor

4） 髙橋長秀：小児の精神と神経，編集委員

5） 池田悠稀: 日本生理人類学会誌，編集委員

（3）座長

1） Egashira Y: Topical Session 5: Neural and Brain Function. The 17th International Congress of Physiological Anthropology, Enschede, 2025. 9. 11.

2） 江頭優佳：一般シンポジウム（S7）：環境適応とその多様性Ⅲ　～感覚と大規模データがもた

らすヒトの過去・現在・未来．第 79 回日本人類学会大会，山口，2025.10.12.

3） 髙橋長秀：シンポジウム 26　神経発達症と環境要因．第 66 回日本児童青年精神医学会総会，福井，2025. 11. 15.

4） 髙橋長秀：国際委員会セミナー　デジタル社会での子どものメンタルヘルスへの影響．第 66 回日本児童青年精神医学会総会，福井，2025. 11. 15.

5） 江頭優佳：FM-S2「気候変動と神経発達多様性の関係から現代人の環境への適応を考える」．2025 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング（秋期），東京，2025.12.6.

6） 髙橋長秀：共催セミナー　ADHD と発達環境　-逆境体験・心的外傷後ストレス症の視点から-．第 17 回日本 ADHD 学会総会，東京，2026.3.1.

E. 教育

1） 髙橋長秀 ： 大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学 客員教授

2） 髙橋長秀 ： 千葉大学大学院医学薬学府 客員教授

3） 江頭優佳：立教大学現代心理学部　兼任講師（神経心理学（神経・生理心理学））

4） 江頭優佳：九州大学大学院統合新領域学府　非常勤講師（感性人類学）

5） 畠山太一：東京成徳大学応用心理学部　非常勤講師（心理学実験 I）

F. 研修

（1）研修企画

1） 髙橋長秀：令和 7 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ．オンライン，2025.6.25-26.

2） 髙橋長秀：令和 7 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡ．オンライン，2025.9.24-25.

3） 髙橋長秀：令和 7 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢ．オンライン，2025.11.19-20.

4） 髙橋長秀：令和 7 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 6 回発達障害者支援研修：行政実務研修．オンライン，2026.1.28-29.

（2）研修会講師

1） 髙橋長秀：静岡県教育委員会　特別支援教育コーディネーター研修会，高校生のメンタルヘルス．静岡，2025.5.29

2） 髙橋長秀：日本精神神経学会 「第 26 回記者勉強会，発達障害とゲームやスマートフォンの使用との関係．東京，2025.7.2

3） 髙橋長秀：国立障害者リハビリテーションセンター 令和 7 年度発達障害者地域支援マネジャー（基礎）研修会，発達障害と精神疾患の合併．東京，2025.7.18.

4） 髙橋長秀:NCNP メディア塾, スクリーンタイムと発達障害の関係を科学する. 東京, 2025.9.11.

5） 髙橋長秀：浜松市医師会学校医研修会，児童思春期のゲーム・スマホ依存と発達障害．浜松，2026.1.30.

G. 取材・報道

1） 髙橋長秀:妊婦の心理ストレス　子に ADHD リスク. 中日新聞 web，中日新聞紙面 2025.9.14. https://www.chunichi.co.jp/article/1132541

2） 髙橋長秀：妊娠時の発熱，服薬と自閉スペクトラム症の複雑な関係　国立精神・神経医療研究センター髙橋長秀部長インタビュー．黒坂真由子の「発達障害」情報・体験アーカイブ，

2025.11.04. https://mkurosaka.theletter.jp/posts/86a07120-a41b-11f0-8f98-3f9879b4b893

3） 髙橋長秀:ヒューマニエンス 40 億年のたくらみ ADHD　その特性は障害か多様性か. NHKBS 2025.11.29.

H. その他

1） 髙橋長秀：発達障害の子どもとスクリーンタイム～その 1「卵が先か，ニワトリが先か」～. 発達障害ナビポータル，2025. 10. 24. https://hattatsu.go.jp/topics/topic-screentime01/

2） 髙橋長秀：発達障害の子どもとスクリーンタイム～その 2「睡眠との関係」～. 発達障害ナビポータル，2025. 10. 27. https://hattatsu.go.jp/topics/topic-screentime02/

3） 髙橋長秀：スクリーンタイムの長さと神経発達症の関連～相関関係と因果関係の違い. MEDICAL TRIBUNE, 2026.1.30. https://medical-tribune.co.jp/rensai/articles/?blogid=11&entryid=570685

I.受賞

1） 池田悠稀：日本生理人類学会第 86 回大会　優秀発表賞　対象課題：池田悠稀，花房京佑，星野真之介，跡見友章　足部動作観察時における μ 波抑制と観察視点の相違に関する検討. 日本生理人類学会第 86 回大会，大阪，2025.5.11.

2） 益田来実：日本 ADHD 学会　第 17 回総会　ポスター発表優秀賞　対象課題：益田来実：髙田美希，髙橋長秀，江頭優佳，木原望美，細金奈奈，小平雅基，岡田 俊　システマティックレビューによる親子相互交流療法の離脱要因の検討. 日本 ADHD 学会第 17 回総会，東京，2026.2.28-3.1.

11. 地域精神保健・法制度研究部

Ⅰ. 研究部の概要

当研究部は，生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え，地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発，その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている．また，精神保健福祉法，障害者総合支援法等の精神科保健医療福祉に関連する法律に基づく保健医療福祉体制のあり方についての検討，医療観察法に基づく医療の検証や一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである．研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し，専門職や自治体職員，市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより，研究成果の社会への還元を行っている．

研究の実施にあたっては，以下の人員構成で活動を行うとともに，NCNP 病院訪問看護ステーション PORT，司法精神診療部との協働，研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している．

令和 7 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：藤井千代，精神保健サービス評価研究室長：山口創生，臨床援助技術研究室長：佐藤さやか，司法精神保健研究室長：小池純子，制度運用研究室長：松長麻美（R7.9.1～），常勤研究員：小塩靖崇（～R7.6.30），川口敬之，特任研究員：名雪和美，リサーチフェロー：臼井 香，河野稔明，奈良麻結，科研費テクニカルフェロー：久永文恵，菅原 梓，科研費研究員：岡野茉莉子，五十嵐百花，羽田彩子，高嶋里枝，小峰 結（R7.9.1～，永田みさ子（R8.2.9～）併任研究員：平林直次，竹田康二，柏木宏子，客員研究員：伊藤順一郎，瀬戸屋雄太郎，吉田光爾，杉山直也，柑本美和，稲垣 中，北村俊則，野口正行，菊池安希子，下平美智代，安間尚徳，佐竹直子，吉浜文洋，関 英一，田中裕記，杉浦寛奈，馬場俊明，松長麻美（～R7.8.31），研究生：山田裕貴，小川 亮，上嶋大樹，塩澤拓亮，小林 慧，岩永麻衣，一木崇弘，所沢市アウトリーチ支援チームについては，総括管理責任者：中西清晃，看護師：榎本美智子，医療社会事業専門員：西内絵里沙，作業療法士：柴田 興，科研費テクニカルフェロー：山崎さおり，科研費研究員：糸繰朝美（～R7.4.30），桐井博子（R7.11.1～12.31）

Ⅱ. 研究活動

1) 包括的な精神保健医療福祉施策の推進に関する研究（藤井，杉山，小池，松長，羽田，高嶋，名雪，久永，菅原，河野）

本研究は，精神保健医療福祉上のニーズを有する方等が地域で安心して暮らせる包括的な精神保健医療福祉体制を実現するため，実態調査や好事例調査，エキスパートコンセンサスの形成を通じて研究成果に基づく政策提言を行うとともに，施策を実装するための具体的方法を提示することを目的としている．自治体における改正法の施行状況に関するインタビュー調査，保健所等における措置入院運営ガイドライン及び退院後支援ガイドラインに関するインタビュー調査，入院者訪問支援事業及び精神医療審査会の好事例調査の実施．身体拘束に関する調査内容の検討を行い，適切かつ実施可能な全国調査のための準備を行う．精神障害にも対応する地域包括ケアシステムに資する精神科医療機関の機能に関連する病院調査，精神科救急医療体制整備事業のモニタリング，精神科救急医療の対象者像の検討を実施する．精神科病院における虐待に関する調査，都道府県の通報対応に関するインタビュー調査を実施している．研究結果を踏まえ，包括ケアシステム構築のための政策提言を行う．本研究は，以下の分担班で実施している．

A. 自治体における精神保健相談支援体制の推進に関する研究
B. 地域における精神科医療体制のあり方に関する研究
C. 措置入院の適正化に関する研究

D. 行動制限最小化に関する研究
E. 入院中の精神障害者の虐待防止に関する研究
F. 権利擁護に関する研究

2) 当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価と関連システムの構築（藤井，山口，小池，川口，岡野，五十嵐，安間，塩澤）

本研究では，当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価を行うため，これまでの主任研究者らの研究によって「地域精神保健領域におけるコアアウトカム領域」として決定された 12 項目の具体的な評価方法を決定するとともに，精神科診療所における精神医療サービスについて，当事者視点に基づいた評価基準（Patient-reported Measures ; PRMs)を開発する．PRMs の開発は研究者だけでは実施できず，当事者と共同する必要がある．

本研究では，研究課題を明らかにするため，以下 3 つの分担班により研究を実施している．

A. PPI ネットワークの構築
B. 地域精神保健領域における COS に基づく評価方法の開発
C. 当事者視点に基づいた精神医療サービス評価基準の開発

3) 精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に関する研究（山口，佐藤，小池，名雪，五十嵐，菅原，河野，藤井）

包括的支援マネジメントや多職種・多機関連携支援に関する関連診療報酬・加算に関する実態調査，並びにガイド作成を実施した．

A. 療養生活継続支援加算に関する横断調査
B. 療養生活継続支援加算に関するヒアリング調査包括的支援マネジメントの効果検証
C. 包括的支援マネジメントや多職種・多機関連携支援に関するガイド作成
D. 包括的支援マネジメントに関するレビューの実施

4) 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制における入院医療による支援のための研究（藤井，松長，臼井，高嶋，奈良）

精神科医療機関を対象とした法改正後の医療保護入院の実施状況の調査，海外の同意能力評価と意思決定支援の実態把握児童を専門とする精神科医，認知症を専門とする精神科医，日常的に身体合併症の診療に従事している精神科医を対象とした調査，医療同意と代理意思決定に関する法学的課題の整理を実施し，国際的な知見や当事者の意見も含めた多角的な検討を行う．

5) 精神保健医療福祉を取り巻く環境に係る中長期的な変化等を見据えた精神保健医療福祉提供体制の構築を推進するための研究（藤井）

本研究では，精神保健医療福祉の現状や将来推計も踏まえた上で，精神病床の機能や提供されるべき医療の性質等について，疫学的なデータの収集・分析を含めた検討を行い，より良質な精神保健医療福祉の提供のための施策立案に必要な基礎資料のとりまとめを行うことを目的としている．本研究では，精神科病院，精神科診療所，総合病院精神科，都道府県，保健所，市町村などへのインタビュー等の調査や参与観察を行っている．

6) 精神科デイケアに関する研究（藤井，山口，佐藤，河野）

精神科デイケアに関するレビューを実施し，その対象・内容・効果に関する国内外のエビデンスの収集および統合を図っている．現在の国際的なデイケアな位置づけの把握に貢献できると予想される．

7) 個別援助付き雇用に関する研究（山口，佐藤，小池，小塩，川口，五十嵐，臼井，岩永，塩澤）

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる individual placement and support (IPS)に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化と質の評価に関する調査に取り組んだ．また，個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証し，論文として発表した．

8) 地域精神保健研究における患者・市民参画の推進（山口，川口，臼井，五十嵐，山田，小峰，菅原，久永）

PPI の普及を図る共創プラットフォームの構築に向けた研究に着手している．具体的には，10 名の当事者と共に，ミーティングを重ねている．また，東京大学との連携のもと PPI や当事者参画に関する学習コンテンツも開発中である．さらに，外来の満足度評価やコアアウトカムセットの開発研究に従事した．

9) 多職種アウトリーチに関する研究（山口，佐藤，川口，臼井，岩永，羽田）

当事者・家族・支援者と協働し，多職種アウトリーチに関する縦断調査に取り組んだ．本研究には国内 23 のアウトリーチ機関が参加しており，2023 年 10 月から 2025 年 9 月までにこれらの機関を新規で利用した当事者と家族を 10 年間継続的に追跡する調査を実施中である．また，国内のアウトリーチ実践のレビューも行っている．

10) PPI プロセスを含む地域における若者支援に関する研究（佐藤，臼井）

12 歳から 24 歳ごろまでの年代がメンタルヘルスに関する困りごとについて地域や学校でどのような援助希求行動をとっているかを明らかにし，アクセシビリティの高い心理社会的プログラムを開発，効果検証，実装することを目的に同年代に対するグループインタビュー，Web 調査，プログラム施行の準備を行った．準備に際しては同年代からの意見を収集し，研究計画に反映させている．

11) 共同意思決定の基盤となる関係構築プロセスに関する研究（川口）

地域精神保健福祉サービスにおける共同意思決定（shared decision making: SDM）の普及のために，円滑な SDM の基盤となる当事者と専門職の間の関係構築プロセスに焦点をあてた研究を実施している．2025 年度は，関係構築をはかるために必要な関わりやコミュニケーションのプロセスに関するフォーカスグループディスカッションを当事者および専門職を対象に実施し，関係構築を基盤とした SDM ステップの素案を生成した．本ステップの有用性を検討するためのさらなる調査を実施する予定である．

12) 自治体アウトリーチ支援等における利用者からみたサービスに対する認識，満足度を測定する尺度開発（山口，岩永，臼井，佐藤）

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の推進にあたり，今後一層ニーズが高まると予想される各自治体によるアウトリーチ支援をはじめとする地域におけるメンタルヘルスケア支援について，その効果のアウトカムとして使用することを目的に米国およびオーストラリアで開発された「Treatment Perceptions Survey（TPS)」「Treatment Perceptions Survey (Youth)」「Headspace youth (mental health) service satisfaction scale (YSSS)」の日本語版作成について研究計画を立案し，データ収集を開始した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した．（藤井）

・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した．（藤井）

・一般社団法人ルンアルン　理事（山口）
・V-CAT 研究会理事（佐藤）
・所沢市自立支援協議会こころ部会委員（中西，西内）

(2) 専門教育面における貢献

・愛媛大学　医学部　非常勤講師（藤井）
・愛媛大学大学院　医農融合公衆衛生学環　非常勤講師（藤井）
・文教大学　人間科学部　非常勤講師（山口）
・法政大学　現代社会学部　非常勤講師（山口）
・東洋大学　福祉社会システム専攻　非常勤講師（山口）
・京都大学大学院　保健学研究科　非常勤講師（山口）
・大正大学　社会共生学部　非常勤講師（山口）
・武蔵野大学 人間科学部 非常勤講師（山口）
・東京大学大学院 精神看護学特論Ⅰ 連携大学院講義（山口）
・早稲田大学　人間科学部　非常勤講師（佐藤）
・立教大学　現代心理学部　非常勤講師（佐藤）
・目白大学　心理学部　非常勤講師（佐藤）
・東京大学大学院　医学系研究科　精神保健学分野　非常勤講師（松長）
・日本社会事業大学　社会福祉学部　非常勤講師（松長）
・東京科学大学　医学部保健衛生学科　看護学専攻　非常勤講師（松長）

(3) 精研の研修の主催と協力

・第 3 回入院者訪問支援事業実務者研修の主任（藤井）
・第 4 回入院者訪問支援事業実務者研修の主任（藤井）
・第 5 回精神科救急医療体制整備研修の主任（藤井）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・厚生労働省　社会保障審議会障害者部会委員（藤井）
・厚生労働省　精神保健医療福祉の今後の施策推進に関する検討会構成員（藤井）
・厚生労働省　匿名障害福祉及び障害児福祉情報等の提供に関する専門委員（藤井）
・厚生労働省　児童・生徒を対象とした心のサポーター養成プログラムの開発に関する検討委員（藤井）
・子ども家庭庁　こども家庭審議会臨時委員（藤井）
・国際協力機構　国内支援委員（藤井）
・厚生労働省　地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会構成員（藤井）
・厚生労働省　精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業副委員長（藤井）
・東京都措置入院者退院後支援体制整備推進会議委員長（藤井）
・東京都精神科救急医療体制整備検討委員会　委員長（藤井）
・東京都立松沢病院臨床倫理検討会委員（藤井）
・埼玉県精神医療審査会予備委員（藤井）
・医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療センター国際協力局）「フィリピン国を対象とした地域精神保健支援の普及と実装」実施担当責任者，実施担当者（藤井，佐藤）
・令和 7 年度障害者総合福祉推進事業包括的支援マネジメントにおける多職種連携促進のための調査検討委員会委員（佐藤，山口）
・令和 7 年度障害者総合福祉推進事業包括的支援マネジメントにおける多職種連携促進のための

調査ワーキンググループ委員（佐藤）
・国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部（JH）共同研究課専門職（佐藤）
・法務省矯正局：矯正施設運営の在り方研究会委員（小池）
・厚生労働省　精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（名雪）
・川崎市措置入院制度運用等に関する懇談会委員（河野）

(5) センター内における臨床的活動
・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 程度，訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した．（佐藤）

(6) その他

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Yamaguchi S, Koike J, Igarashi M, Kawaguchi T, Shiozawa T, Usui K, Iwanaga M, Matsunaga A, Yoshida K, Sato S, Fujii C: Comparative analysis of independent reviewer-rated and self-rated fidelity scores in individual placement and support programs: Repeated cross-sectional surveys. Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Services Research 52(2): 379–389, 2025. https://doi.org/10.1007/s10488-024-01413-y

2) Shiozawa T, Yamaguchi S, Igarashi M, Ogawa M, Abe M, Yasuma N, Kawaguchi T, Fujii C: Development of priority outcome domains for community mental health research via consensus among multiple stakeholders: Online Delphi study in Japan. International Journal of Mental Health Nursing 34(3): e70049, 2025. https://doi.org/10.1111/inm.70049

3) Yamaguchi S, Kawaguchi T, Iwanaga M, Usui K, Igarashi M, Shiozawa T, Koike J, Sato S, Fujii C: Long-term vocational outcomes in low- and high-fidelity supported employment programs: A multi-site study with 6 years of follow-up. Asian Journal of Psychiatry 110:104572, 2025. https://doi.org/10.1016/j.ajp.2025. 104572

4) Satake N, Yamaguchi S, Sato S, Fujii C: Long-term outcomes of assertive community treatment in Japan: 7-year follow-up of a randomized controlled trial. BMC Psychiatry 25(1): 870, 2025. https://doi.org/10.1186/s12888-025-07311-3

5) Usui K, Iwanaga M, Itokuri A, Nakanishi K, Nishiuchi E, Shimodaira M, So Y, Sato S, Yamaguchi S, Fujii C: Prevalence, type,and related factors of adverse childhood experiences among community mental health outreach users: A four-year retrospective cohort study. PCN Rep 19;4(3): e70203, 2025 . https://doi.org/10.1002/pcn5.70203.

6) Shiina A, Sudo Y, Suzuki Y, Kamata Y, Niitsu T, Fujii C: Developing a training program of knowledge and skills in the context of administrative involuntary hospitalization: a pilot trial. Front Psychiatry 10;16:1644958, 2025. https://doi: 10.3389/fpsyt.2025.1644958

7) Watanabe A, Kawaguchi T, Nobematsu A, Sasada S, Kanari N, Maru T, Kobayashi T: Bayesian Structural Equation Modeling of Quality of Life Mediated by Difficulty in Daily

Life in Perioperative Breast Cancer Patients. International Journal of Women's Health and Reproduction Sciences 13(3): 127-135, 2025. https://doi.org/10.15296/ijwhr.2025.8716

8) Nakamura M, Kawaguchi T, Okazaki T, Nishimura Y, Katsuyama M: Examination of Effects of Illness Management and Recovery Combining Occupational Dysfunction-Focused Interviewing for an Inpatient with Avoidant Personality Disorder. Asian Journal of Occupational Therapy 21(1): 138-143, 2025. https://doi.org/10.11596/asiajot.21.138

9) https://doi.org/10.1016/j.ijlp. 2025.102169Nara M, Matsunaga A, Yamada Y, Fujii C, & Taniguchi M: Validity and reliability of the Japanese version of the admission experience survey in individuals with mental illness. International Journal of Law and Psychiatry, 105(102169). 2025.

10) Igarashi M, Kuroda N, Okada T, Moriyama Y, Abe M, Nara M, Yamaguchi S, Usuda K, Koike J, Yamamoto K, Kumagai N, Noguchi M, Fujii C: Analysis of Local Authorities Providing Mental Health Consultation: Towards Establishing a Community-Based Integrated Mental Health Care System. The International Journal of Health Planning and Management 41(1): 17-26, 2026. https://doi.org/10.1002/hpm.70018

11) Kitamura T, Hada A, Usui Y & Ohashi Y: Clusters and case vignettes of impaired maternal–fetal bonding in pregnancy: A mixed method approach. Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports 4(2), e70127. 2025, https://doi.org/10.1002/pcn5.70127

12) Kitamura T, Hada A, Usui Y, Takegata M, Minatani M, Wakamatsu M, & Takeda S. Is emesis a part of antenatal depression? A proposal of emesis-depression complex during pregnancy. New Ideas in Psychology 81, 101235. 2025.

13) 長谷川直実，小池純子，山口創生，川副泰成，藤井千代：サービス提供量の多いケースマネジメント対象者の特性とサービス内容－精神科外来医療における調査から．精神科治療学 40(6)：651-660，2025.

14) 小池純子，阿部真貴子，久保彩子，島田明裕，松田太郎，高尾 碧，岡野茉莉子，五十嵐百花，中西清晃，竹田康二，平林直次，藤井千代：医療観察法通院処遇における支援課題の地域間共通点と相違点の分析－テキストマイニングを用いた検討. 精神医学 67(10) :1390-1405, 2025.

15) 瀬戸秀文，稲垣 中，島田達洋，太田順一郎，小池純子，藤井千代，中西清晃，中村 仁，小口芳世：措置診察を担当する精神保健指定医の招聘システムの各自治体における現状について．精神科救急 28：143-154，2025.

16) 野村照幸，竹田康二，小池純子，宮崎真理子，本間(照井)稔宏，藤井千代：指定通院医療機関の管理職の抱える困難感と支援ニーズ：医療観察法通院処遇の現状から．司法精神医学 (印刷中)2026.

17) 浅黄真紀子，土屋芙美子，川口敬之，矢吹友子，田原智昭，馬場順子：就労移行支援において精神障害のある利用者のリカバリーに焦点を当てた面接が職員の支援意識に及ぼす影響：2 年間の実践に基づく質的研究．精神障害とリハビリテーション 29(1)：60-67，2025.

18) 間宮美春，渡邊愛記，川口敬之，松岡耕史：認知症高齢者に対する意思決定を促すための実践プロトコルに基づいた作業療法介入の効果―単一事例研究―. 作業療法 45(1)：100-106, 2026. https://doi.org/10.32178/jotr.45.1_100

(2) 総説

1) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築　法改正を踏まえた自治体の役割と課題．精神医療 20：29-36，2026.
2) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける入院者訪問支援事業．日本精神科病院協会雑誌 44(9)：894-899，2025.
3) 藤井千代：地域精神保健における精神保健福祉相談員の役割．心と社会 56(3)：57-63，2025.
4) 藤井千代：法が求める精神科病院における人権擁護．日本精神科病院協会雑誌 44(6)：534-539，2025.
5) 内野 敬，藤井千代，根本隆洋：精神保健相談における都道府県・保健所・市区町村の重層的連携体制の構築に向けて　若年者早期相談・支援窓口の設置を通じて考える地域の重層的な精神保健相談体制．日社精医誌 34(1)：61-67，2025.
6) 藤井千代：「入院から地域へ」――精神保健医療福祉の政策史．都市問題 117：91-98，2026.
7) 山口創生：学術・学会活動における当事者・家族参画の課題と未来．精神障害とリハビリテーション 29(1)：36-38，2025.
8) 山口創生：就労継続支援 B 型（非雇用型）. Journal of Clinical Rehabilitation 34(6)：623-627, 2025.
9) 山口創生：統合失調症に対するアンチスティグマの再戦略化に向けたエビデンスの整理．日本社会精神医学会雑誌 34(2)：200-206，2025.
10) 山口創生：精神疾患のリカバリー概念の変遷、現状、課題．日本精神科病院協会雑誌，44(7)：658-663，2025.
11) 山口創生：生きがいについてともに考える．精神科 Resident 6(1)：59-60，2025.
12) 山口創生：これだけは知っておきたい 地域精神保健の歴史と今後の方向性. 臨床心理学 25(3)：295-300，2025.
13) 許 善溶，冨田真幸，山口創生，文 鐘玉，新井さゆり，竹内啓善：統合失調症：症状とそれに対応した治療のポイントを理解しておこう．HospitaIist 12(4)：781-788，2025.
14) 山口創生，川口敬之：Patient and Public Involvement（PPI）の歴史的背景と今日の課題．臨床精神薬理 28(11)：1135-1145，2025.
15) 山口創生：合理的配慮とは何か？基本のキ．こころの元気＋ 19(9)：4-5，2025.
16) 許 善溶，冨田真幸，山口創生，文 鐘玉，新井さゆり，竹内啓善：統合失調症：症状とそれに対応した治療のポイントを理解しておこう．HospitaIist 12(4)：781-788，2025.
17) 山口創生：なぜ今リカバリー概念が重要なのか．福岡行動医学雑誌 31(1)：3-8，2025.
18) 山口創生，塩澤拓亮，小池純子：医療者がおさえておきたいメンタルヘルスリテラシーの落とし穴．精神科治療学 41(2)：183-189，2026.
19) 山口創生：社会構造に潜む精神障害へのスティグマに向き合う．都市問題 117：91-98，2026.

20) 西内絵里沙：動けて走れるセラピスト-アウトリーチ支援の現場から．臨床心理学 25(3)：311-315，2025.

21) 山田悠平，相良真央，川口敬之，木下愛未：イタリア視察研修の報告から～今後のあるべき支援を考えよう～．第 7 回日本こころの安全とケア学会学術集会・総会（オンライン）特集パネルディスカッション，日本こころの安全とケア学会誌 7(1)：37-42，2025.

22) 川口敬之：暮らしに溶け込む“からだケア”「特集 ごきげんセルフケア」. メンタルヘルスマガジン こころの元気＋ 20(1)：14-15，2026.

23) 名雪和美：訪問支援員養成研修―経緯と概要・受講者の変化について―．日本精神科病院協会雑誌 44(9)：909-915，2025.

24) 臼井 香，切原 賢治，笠井 清登：ミスマッチ陰性電位と思春期のメンタルヘルス，感性工学 23(2)：55-58，2025.

25) 臼井 香：医師とつながる．特集 統合失調症～レジデントに役立つ臨床の最前線での診断や治療の極意！～精神科 Resident 6(1)：8-80，2025.

26) 久永文恵：海外の事情：フィリピンにおける地域に根ざした精神保健の取り組み．精神障害とリハビリテーション 29(1)：94-98，2025.

27) 羽田彩子，齋藤知見，臼井由利子，大橋優紀子，北村俊則：ボンディングと親神話．臨床助産ケア 17(3)：73-78，2025.

28) 安間尚徳，山口創生：精神保健医療福祉における家族支援．精神障害とリハビリテーション 29(2)：117-127，2025.

29) 塩澤拓亮：誰のためのアウトカムかー地域精神保健における共に考える研究のかたち. 特集：精神医療は何を目指すのかーアウトカムとエンドポイント，精神医学 67(7)，1010-1016，2025.

30) 塩澤拓亮：「統合失調症患者を看る」のではなく「その人の人生をみつめる」ということー若くして統合失調症を発症した方とのかかわりからー．特別企画：みんなで考えた統合失調症の未来，統合失調症は、どういう体験ですか？，こころの科学 240，13-17，2025.

(3) 著書

1) Kikuchi A, Koike J, Hirano M, Fujii C: Global Perspectives in Forensic Psychiatry: International Approaches to Practice, Policies, and the Law (International Perspectives on Forensic Mental Health）.（24. Japan），Routledge 2025. (ISBN: 1032452773)

2) 山口創生：障害別の基礎的理解と特性に応じた支援Ⅱ：精神障害．介護福祉士養成講座編集委員会（編）：介護福祉士養成講座 14：障害の理解 第 3 版，中央法規出版，東京，pp182-193，2026.

3) 松長麻美：第 6 章 心理的側面のアセスメント 3ー自殺リスクのアセスメントの方法ー．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践，北村メンタルヘルス学術振興財団，東京，pp63-71，2025.

4) 松長麻美：第 11 章 周産期の心理支援にかかわる法律．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践，北村メンタルヘルス学術振興財団，東京，pp 114-122，2025.

5) 松長麻美，北村俊則：第 13 章 心理支援における倫理．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践，北村メンタルヘルス学術振興財団，東京，pp 132-139，2025.

6) 佐々木理恵，川口敬之，山口創生：共同のための実践ガイド．コ・プロダクション実践ガイド：当事者とともに創る研究とは，笠井清登，熊谷晋一郎（eds)，東京大学出版会，東京，pp185-202，2025.

7) 篠原枝里子，羽田彩子：第 2 章 傾聴と共感のテクニック 1．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践, 北村メンタルヘルス学術振興財団, 東京, pp21-28，2025.

8) 篠原枝里子，羽田彩子：第 3 章 傾聴と共感のテクニック 2．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践, 北村メンタルヘルス学術振興財団, 東京, pp29-39，2025.

9) 羽田彩子：第 4 章 心理側面のアセスメント 1：～スクリーニングツールの使い方～．北村俊則（監修）誰も教えてくれなかった 周産期メンタルヘルスケアの理論と実践，北村メンタルヘルス学術振興財団，東京，pp43-54，2025.

10) 大橋優紀子，羽田彩子：周産期ボンディング障害．鈴木利人，佐藤昌司（eds)：産婦人科医とスタッフのための精神疾患合併妊娠の診かた，金芳堂，京都，pp 65-77，2025.

(4) 研究報告書

1) 竹田康二，河野稔明，小池純子，本村啓介，野村照幸，久保彩子，八木 深，仲谷佳高，橘高 一，安田 新，村田昌彦，津久江亮大郎，東健太郎，蕪木雅士，近藤忠之，新田斉久，久保田涼太郎，小居秀紀，津野良子，保谷岳彦：通院処遇モニタリングシステムの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）医療観察法における退院後支援に資する研究（23GC1015）令和 5～6 年度総合研究報告書，pp11-25，2025.

2) 竹田康二，河野稔明，小池純子，本村啓介，野村照幸，久保彩子，八木 深，仲谷佳高，橘高 一，安田 新，村田昌彦，津久江亮大郎，東健太郎，蕪木雅士，近藤忠之，新田斉久，久保田涼太郎，小居秀紀，津野良子，保谷岳彦：通院処遇モニタリングシステムの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）医療観察法における退院後支援に資する研究（23GC1015）令和 6 年度総括・分担研究報告書，pp11-23，2025.

3) 西 大輔，黒田直明，立森久照，福田正人，髙瀬顕功，吉田光爾，瀬戸秀文，朝倉為豪，安西信雄，稲垣 中，岩永英之，牛島一成，臼田謙太郎，太田順一郎，大塚達以，大村重成，小口芳世，奥野栄太，奥村泰之，萱間真美，木﨑英介，吉川隆博，北村真紀子，来住由樹，久我弘典，熊倉陽介，小池純子，河野稔明，椎名明大，島田達洋，鈴木 亮，酢野 貢，瀬戸屋希，田口真源，竹澤 翔，竹島 正，田崎仁美，戸高 聰，冨田真幸，中西清晃，中濱裕二，中村 仁，平林直次，藤井千代，古野考志，牧野秀鏡，松尾寛子，満留朱里，宮崎大輔，宮田量治，村田昌彦，山田直哉，杠 岳文，横島孝至，吉川 輝，吉住 昭，芳野昭文，渡辺純一：良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究．厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（22GC2004）令和 4～6 年度総合研究報告書，pp1-28，2025.

4) 立森久照，臼田謙太郎，瀬戸屋希，河野稔明，竹島 正，萱間真美，古野考志，北村真紀子，黒

田直明：精神保健医療福祉の提供のモニタリングに関する研究．厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（22GC2004）令和 6 年度総括・分担研究報告書，pp40-50，2025.

(5) 翻訳

(6) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 藤井千代，岡本秀行：【総論】支援を要する人々に届くアウトリーチ支援を行うために～我が国の包括的な支援に関する状況～「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム（にも包括）から見えてくること」．第 3 回全国アウトリーチネット 世田谷大会，東京，2025.5.17.

2) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステム．日本精神科医学会　学術教育研修会「心理部門」．日本精神科病院協会【シンポジスト】，東京，2025.5.25.

3) 藤井千代：シンポジウム 29「多様化する支援ニーズに応える地域ケアの未来像」．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19.

4) 藤井千代：シンポジウム 30【指定発言者】（地域ケアにおける自立支援のあり方検討委員会）地域精神医療の未来を語る．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19.

5) 藤井千代，嶽北佳輝：シンポジウム 116【司会】和文誌の意義と展望：わが国の精神医学のさらなる発展に向けて．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6. 21.

6) 藤井千代：シンポジウム 116「日本社会精神医学会雑誌の歩みとその意義」．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6. 21.

7) 藤井千代，野口正行：シンポジウム 125【サブコーディネーター】精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム」を支える精神科病院の役割．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6. 21.

8) 藤井千代：シンポジウム 10「患者の人権」【演者】医療保護入院における人権擁護．第 33 回日本精神科救急学会，群馬，2025.10.17.

9) 藤井千代：東京都における措置入院の現状，第 37 回東京精神科病院協会学会【シンポジスト】，東京，2025.10.28.

10) 藤井千代，辻野尚久，内藤信吾：シンポジウム 11「あらたな地域医療構想と総合病院精神科」【演者】第 38 回日本総合病院精神医学会総会，栃木，2025.11.21.

11) 藤井千代：特別講演「リカバリーを支える精神科医療」，第 65 回中国・四国精神・神経学会／第 48 回中国・四国精神保健学会，山口，2025.11.28.

12) 山口創生：精神障害雇用の就労支援の現状と課題．第 19 回日本統合失調症学，大阪，2025.4.26.

13) 山口創生：精神科急性期・亜急性期における意思決定支援．第 19 回日本統合失調症学，大阪，2025.4.26.

14) 山口創生：医療での多職種アウトリーチをどこでも当たり前に実現させたいアウトリーチが必要な人は誰か？．第 3 回全国アウトリーチネット 世田谷大会，東京，2025.5.17.

15) 山口創生：シンポジウム 42「日本における Individual Placement and Support の現状：若者に対する効果と実装の課題」. 第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会, 兵庫, 2025.6.19.
16) 山口創生：シンポジウム 65「当事者中心の実践に学ぶ多職種支援の在り方」. 第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.20.
17) 山口創生：社会的インパクトの測定における現状と課題．第 22 回日本うつ病学会総会，東京大会, 2025.7.12.
18) 山口創生：当事者・支援者の共同創造を通して考えるリカバリー：専門職の視点から．令和 7 年度中国・四国精神保健福祉センター所長及び同主管課担当者合同会議 高知大会，高知，2025.8.28.
19) 山口創生：私たちの目指すところは、予防？大丈夫な社会？．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25.
20) 山口創生：10 年後に「思い」をつなぐために：編集委員・研究員として？．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.26.
21) 山口創生：精神疾患の予防戦略の再考：社会決定要因・環境要因への焦点化．第 28 回 日本精神保健・予防学会学術集会 長崎大会，長崎，2025.11.2.
22) 小池純子：シンポジウム「中山間等の人口減少地域の保健医療が遭遇するメンタルヘルスニーズとその対応」．第 63 回全国自治体病院学会，群馬，2025.10.31.
23) 西内絵里沙，中西清晃，榎本美智子：自主プログラム 事例からみえてくる医療×地域連携「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム」「重層的支援体制整備事業」を考える．日本精神障害者リハビリテーション学会第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25.
24) 玉木敦子，蒲池あずさ，高橋秋絵，八田篤郎，松岡裕美，松長麻美，山田顕子：精神障害を持つ妊産婦と家族への看護ケアと多職種・多機関連携による支援．日本精神保健看護学会第 35 回学術集会・総会，北海道，2025.6.1.
25) 松長麻美：看護領域における「研究」の位置付けとキャリア形成．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.26.
26) 川口敬之：教育講演Ⅳ「作業療法研究における共創の可能性－立場を越えて“同じ景色”を見るとき－」．第 20 回神奈川県作業療法学会，神奈川，2025.9.21.
27) 川口敬之，加藤伸輔：教育講演「精神科領域のサイエンス」作業療法研究における共創の可能性～立場を越えて”同じ景色”をみるとき～．第 20 回神奈川県作業療法学会，神奈川，2025.9.21.
28) 名雪和美：これからの精神保健医療福祉―求められるアウトリーチ支援とは―．第 38 回総合病院精神医学会総会，栃木，2025.11.22.
29) 臼井 香：学会賞受賞者講演「一般地域住民の思春期におけるこころの不調と脳波の研究」．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26.
30) 臼井 香，髙橋 徹：シンポジウム 6「 Mindful Awareness Task を用いたマインドフルネスの行動測定：WASEDA'S Health Study」．不安症とマインドフルネス，第 17 回日本不安症学会学術大会，東京，2025.5.25.

31) 久永文恵，木本達男，斎藤由美，菅原明美，尾形多佳士：自主プログラム「入院者訪問支援事業」を考える ―第三者によるかかわりがもたらす可能性とその未来」．日本精神障害者リハビリテーション学会第 32 回札幌大会，北海道，2025.10.25.

32) 高嶋里枝：ワークショップ①「外国の遺伝子差別禁止法制の動向」．「ゲノム情報に基づく不当な差別禁止―法制度のこれからを考える～」，第 55 回日本医事法学会，愛知，2025.11.29.

(2) 一般演題

1) Matsuoka K, Watanabe A, Kawaguchi T: Prediction of changes in Fugl-Meyer Assessment of stroke patients at convalescent rehabilitation wards using logarithmic and linear regression modelling. 19th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Bangkok, 2026.2.9-12.

2) Komine Y, Mizunuma K, Maeda C, Katsuragawa T: What is Recovery in Recovery Colleges? —The impact of Recovery Colleges practice on the people, professionals and communities involved— Refocus on Recovery 2025，2025.9.4（ポスター発表）

3) Komine Y, Katsuragawa T: Exploring the “Fidelity” of Recovery Colleges in Japan: Gaps Between Core Values and Practice. 21st Pacific Rim College of Psychiatrists and 7th World Association of Cultural Psychiatry Joint Congress, Tokyo, 2025.9.25-28.（ポスター発表）

4) 瀬戸秀文，藤井千代，稲垣 中，島田達洋，太田順一郎，大塚達以，小口芳世，椎名明大，中西清晃，小池純子，中村 仁：精神保健福祉法第 23 条に基づく警察官通報の現状把握に関する研究（その 1）通報・事前調査について．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19-21.

5) 瀬戸秀文，藤井千代，稲垣 中，島田達洋，太田順一郎，大塚達以，小口芳世，椎名明大，中西清晃，小池純子，中村 仁：精神保健福祉法第 23 条に基づく警察官通報の現状把握に関する研究（その 2）指定医診察例について．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19-21

6) 田中裕記，藤井千代：精神身体合併症-精神疾患を有する方の腎代替療法,主に血液透析に関する現状と課題　精神疾患と透析医療　提供体制の全国調査から見える課題と提言．第 38 回日本総合病院精神医学会総会，栃木，2025.11.21-22.

7) 山口創生，佐藤さやか，藤井千代：アウトリーチ型就労支援 IPS のフィデリティと長期就労アウトカムとの比較：6 年間の追跡調査．第 3 回全国アウトリーチネット 世田谷大会，東京，2025.5.17-18.

8) 建石幸子，山口創生，八重田淳：働く精神障害者のウェルビーイングと地域参加日数との関連：IPS 型就労支援における横断研究．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

9) 佐々木理恵，金原明子，里村嘉弘，川村有紀，西村聡彦，宮本有紀，山口創生，熊谷晋一朗，笠井清登：東京大学における精神保健領域ピアサポートワーカー研修の実践報告．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

10) 一木崇弘，小笠原啓人，彼谷哲志，桐原尚之，栄セツコ，中田健士，矢部滋也，山口創生，三宅美智，宮本有紀，岩崎 香：障害者ピアサポート研修の実施状況と制度的課題の全国調査．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

11) 羽澄 恵，三宅美智，山口創生，岡田隆志，森山葉子，神川ちあき，臼田謙太郎，片岡真由美，奈良麻結，中下綾子，黒田直明：障がいを抱える者のスティグマ体験を測定する尺度の翻訳と開発．第 84 回日本公衆衛生学会総会，静岡，2025.10.29-31.

12) 小池純子，中西清晃，竹澤 翔，西 宏隆，遠田大輔，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，稲垣 中，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，瀬戸秀文：公的医療機関による多職種アウトリーチの役割と機能 グループインタビュー調査の結果から．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19-21.

13) 竹澤 翔，小池純子，中西清晃，西 宏隆，遠田大輔，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，稲垣 中，瀬戸秀文：多職種アウトリーチを実践する公立精神病院の特徴 登録理由のクラスタリング分析．第 121 回日本精神神経学会学術総会 神戸大会，兵庫，2025.6.19-21.

14) 野村照幸，小池純子，宮崎真理子，和田舞美，島田隆生，本間（照井）稔宏，藤井千代，竹田康二：医療観察法通院処遇の現状から医療観察法通院処遇における指定通院医療機関・管理者の抱える困難感とニーズに関するアンケート調査．第 21 回日本司法精神医学会大会，岡山，2025.9.26-27

15) 小池純子，松長麻美，菊池安希子，五十嵐百花，小塩靖崇，小川 亮，木村 大，渡邉博幸，山口創生，藤井千代：急性期病棟に入院した精神障害者における精神科訪問看護の利用実態と 1 年後効果．第 21 回日本司法精神医学会大会，岡山，2025.9.26-27.

16) 小池純子，松長麻美，佐藤裕大，菅谷 涼，竹澤 翔，岡野茉莉子，井上和子，小倉佳子，杉田義博，藤井千代：中山間地域の身体科外来再診者における精神的健康の関連要因と支援ニーズの検討．第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.5-6.

17) 中西清晃，西 宏隆，竹澤 翔，遠田大輔，小池純子，岡野茉莉子，島田達洋，椎名明大，臼田謙太郎，黒田直明，藤井千代，稲垣 中，瀬戸秀文：公的精神科病院における多職種アウトリーチの利用者特性に基づくサブタイプと機能～グループインタビュー調査と機関特性調査結果の分析～．第 33 回日本精神科救急学会学術総会，群馬，2025.10.16-17.（ポスター発表）

18) 佐藤裕大，松長麻美，小倉佳子，小池純子：中山間等の人口減少地域の一般診療外来におけるメンタルヘルスニーズ．第 63 回日本医療・病院管理学会学術総会，東京，2025.10.4-5.

19) 西内絵里沙，中西清晃，榎本美智子：自治体における家族支援－家族にも対応した包括的ケースマネジメント実践－．日本精神障害者リハビリテーション学会第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

20) 川口敬之：重度・持続性精神疾患のある個人におけるリカバリーと生活の困難さおよび作業機能障害の縦断的要因構造の検討. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第32回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.（ポスター発表）

21) 島森諒太朗，松岡耕史，渡邊愛記，川口敬之：SDM を重視した目標設定が脳卒中患者の上肢機能改善および心理的変化に与える影響：e-ASUHS を用いた予備的検証．第 55 回北海道作業療法学会学術大会，北海道，2025.6.21-22.

22) 川口敬之，渡辺愛記，﨑本麻衣，及川裕也，古屋慶一郎，松岡太一，山口創生：重度・持続性精神疾患のある個人におけるリカバリーと生活の困難さおよび作業機能障害の縦断的要因構造の検討，日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回 札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

23) 川口敬之，渡邊愛記，及川裕也，古屋慶一郎，松岡太一：精神科入院患者における生活の困難さおよび作業機能障害に基づくリカバリープロセスの要因構造の検討．第 59 回日本作業療法学会，香川，2025.11.7-9.

24) 渡邊愛記，川口敬之，佐野邦典，金子美鈴：乳がん患者の術後 6 ヶ月における不安・抑うつに関する因果関係の検討．第 59 回日本作業療法学会，香川，2025.11.7-9.

25) 松岡耕史，渡邊愛記，川口敬之：回復期脳卒中患者に対する目標設定支援システム（e-ASUHS）を用いた介入効果．第 59 回日本作業療法学会，香川，2025.11.7-9.

26) 古屋慶一郎，松岡太一，井村優香，川口敬之，渡邊愛記：認知症治療病棟における A-QOA を用いた作業療法実践が行動・心理症状（BPSD）に及ぼす影響―シングルシステムデザイン―．第 59 回日本作業療法学会，香川，2025.11.7-9.

27) 園田真子，氏井直樹，松岡太一，川口敬之，渡邊愛記：生活技能獲得に向けた個人作業療法が自己効力感の向上に繋がった統合失調症患者の一事例．第 59 回日本作業療法学会，香川，2025.11.7-9.

28) 名雪和美：入院者訪問支援事業の未来―精神保健福祉士として何ができるのか、何をすべきなのかを共に考える―．第 60 回日本精神保健福祉士協会全国大会・第 24 回精神保健福祉士学会学術集会，福岡，2025.8.22-23.

29) 臼井 香，高橋 徹，佐々岡叶夢，澤登日菜，相澤雄紀，吉川 輝，佐々星時，岡本悠子，合屋拓巳，岡浩一朗，大須理英子，谷澤薫平，熊野宏昭：瞑想経験者・非経験者の Mindful Awareness Task 行動指標の比較：WASEDA'S Health Study．日本マインドフルネス学会第 12 回大会，愛知．2026.3.7-8.（ポスター発表）

30) 河野稔明，小池純子，竹田康二，岡野茉莉子，藤井千代，平林直次：基本的因子に基づいて類型化した主診断 F3 の医療観察法入院対象者の法的・医学的因子の追加による再類型化．第 21 回日本司法精神医学会大会，岡山，2025.9.26-27.（ポスター発表）

31) 山崎さおり，染田英磨：訪問場面でも役立つ感情調節困難な人を支援するための DBT．第 3 回全国アウトリーチネット 世田谷大会，東京，2025.5.17-18.

32) 三宅美智，奈良麻結，吉川隆博：行動制限最小化プラットフォームを活用しませんか？．第 50 回日本精神科看護学術集会，兵庫，2025.6.6.

33) 奈良麻結，山口創生，臼田謙太郎，川口敬之，岩永麻衣，臼井 香，羽田彩子，佐藤さやか，黒田直明，藤井千代：地域サービスを利用する精神障害者における日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性・信頼性の検証．JH リトリート，東京，2025.6.7.

34) 奈良麻結，松長麻美，山田裕貴，藤井千代，谷口麻希：精神科入院体験の認識尺度（Admission Experience Survey: AES）の翻訳と妥当性・信頼性の検証．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回札幌大会，北海道，2025.10.25-26.

35) 神川ちあき，片岡真由美，臼田謙太郎，羽澄 恵，岡田隆志，森山葉子，奈良麻結，山口創生，黒田直明：障害福祉サービス利用者へのインタビュー調査．第 84 回日本公衆衛生学会総会，静岡，2025.10.29-31.

36) 五十嵐百花，岩永麻衣，小林 慧，小池純子，松長麻美，小塩靖崇，小川 亮，木村 大，渡邉博幸，山口創生，藤井千代：精神科入院治療における多職種チーム会議の開催と再入院との関連．JH リトリート，東京，2025.6.7.

37) 羽田彩子，齋藤知見，山本真実，丹家 歩，臼井由利子，石田弘子，北村俊則：妊娠中の希死念慮と妊娠期心理症候群：DAMBO Q33 の潜在プロファイル分析．第 21 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集，東京，2025.10.26-27.

38) 高嶋里枝，臼井 香，奈良麻結，小林 慧，松長麻美，藤井千代：身体合併症を伴う精神科患者の非自発的入院の課題―専門職全国アンケート調査による混合研究―. 第 37 回生命倫理学会，岩手，2025.11.22-23.

39) 高嶋里枝：精神保健福祉法に関する裁判例の総合的考察 ―入院医療における強制性に関連して―．第 55 回日本医事法学会，愛知，2025.11.29-30.

40) 高嶋里枝：精神保健福祉法における入院者訪問支援事業とアドボカシーの概念．日本法社会学会，沖縄，2025.5.17-18.

41) 小峰 結，水沼佳乃，前田千晴，桂川泰典：リカバリーカレッジにおけるリカバリーとはなにか―リカバリーカレッジの実践が当事者・専門家・コミュニティに与える影響とその要因の文献調査―．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26-27.（ポスター発表）

42) 小峰 結，桂川泰典：日本におけるリカバリーカレッジ（RC）の運営実態－理念への「忠実性（fidelity）」を手がかりにした検討―．日本コミュニティ心理学会 第 28 回大会，福岡，2025.9.19-21.（ポスター発表）

43) 塩澤拓亮，川口敬之，小池純子，阿部真貴子，五十嵐百花，岩永麻衣，臼井 香，奈良麻結，安間尚徳，小林 慧，山田裕貴，名雪和美，佐藤さやか，山口創生，藤井千代：日本の地域精神保健研究におけるコアアウトカム領域の決定：多様なステークホルダーとのコンセンサス会議．第 19 回日本統合失調症学会，大阪，2025.4.26-27.

(3) 研究報告会

1) 河野稔明，小池純子，竹田康二，壁屋康洋，曽雌崇弘，岡野茉莉子，松長麻美，藤井千代，平林直次：医療観察法ガイドライン改訂に向けた入院対象者の類型化．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度 研究報告会（第 37 回），2026.3.16.

2) 松長麻美，羽田彩子，小池純子：身体接触への反応に焦点を当てた授乳時の否定的感情とボンディング感情の関係の検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 7 年度 研究報告会（第 37 回），2026.3.16.

3) 臼井 香，髙橋 徹，佐々岡叶夢，佐々星時，相澤雄紀，吉川 輝，中村宣博，中川剣人，筒井俊春，初雁晶子，大須理英子，正木宏明，岡浩一朗，谷澤薫平，熊野宏昭：マインドフルネス行動指標と脳体積との関連：WASEDA'S Health Study．応用脳科学研究所カンファレンス，2026.2.16.

(4) その他

1) 山口創生：ストレングスモデル入門．西川病院職員研修会，オンライン，2025.4.2.
2) 山口創生：ストレングスモデルとスーパービジョン．西川病院職員研修会，オンライン，2025.4.16.
3) 山口創生：精神疾患当事者に対する就労支援の課題と解決策としての IPS．ホワイトストーン職員研修，オンライン，2025.9.18.
4) 山口創生：システマティックレビューの概要・論文の書き方．大正大学大学院ゲスト講師，東京，2025.10.22.
5) 小池純子：「虐待通報とその課題」．第 33 回看護管理研究会，福岡，2026.2.27.

C．講演

1) Yamaguchi S: Employment policy and research on individual placement and support in Japan. Orygen, Melbourne, 2025.11.19.
2) 藤井千代：「多職種で取り組むパーソナル・リカバリー支援」．パーソナルリカバリーを目指す精神医療．大塚製薬株式会社，東京，2025.6.10.
3) 藤井千代：「人権擁護の理想と現実～医療保護入院は廃止できるのか～」．精神医学講座担当者会議 2025 年度総会，東京大学大学院医学系研究科精神医学，東京，2025.8.23.
4) 藤井千代：良質な精神科医療の提供にむけて　次のステージに進もう！．チイクラフォーラム 10, 大塚製薬株式会社 共催）一般社団法人全国地域で暮らそうネットワーク, 埼玉, 2025.9.19.
5) 藤井千代：精神医療をめぐる政策動向～精神病床の今後の位置づけや病床機能分化の方向性～，鳥取県西部圏域における精神科医療を考える会，鳥取，2025.11.10.
6) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアの実践について．地域包括ケアに関する講演会，愛知，2025.12.6.
7) 藤井千代：ケースから学ぶ保健型アウトリーチの倫理と実践．精神科アウトリーチフォーラム，宮城，2025.12.12.
8) 藤井千代：これからの地域精神科医療－精神保健福祉法・医療法改正を踏まえて．南九州スキルアップセミナー～医療・保健・福祉連携の会～，Web，2026.2.4.
9) 山口創生：研究における共同創造：上手くいったこと・いかなかったこと．東京大学 2025 年度課題解決型高度医療人材養成プログラム「職域・地域架橋型－価値に基づく支援者育成」，東京，2025.6.15.
10) 山口創生：リカバリーについて．令和 7 年度ピア交流会（りぐらっぷ高知），高知，2025.8.29.
11) 山口創生：精神疾患当事者に対する就労支援の課題と IPS の可能性．岡山県精神保健福祉士協会，岡山，2025.11.30.
12) 山口創生：IPS とは？．第 9 回 IPS 全国研修会プレ企画，オンライン，2026.1.29.

13) 山口創生：精神障害に関するスティグマと予防：効果的な介入方法．日本精神神経医学会アンチスティグマ委員会，オンライン，2025.2.16.
14) 山口創生：社会参加の多様な形：当事者の一歩を応援する支援の鍵．第 29 回新潟県精神医療・保健・福祉関係者合同実践セミナー，オンライン，2026.2.20.
15) 山口創生：調査論文の基本執筆スキル．2025 年度 大学院社会福祉学専攻課程協議会第 1 回研究大会，東京，2026.3.1.
16) 中西清晃：「～アウトリーチの視点から学ぶ～誰もが暮らしやすいまちづくりのために私たちができること」．江戸川区精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築推進事業令和 7 年度第 2 回ワーキンググループ全体会，東京，2026.2.20.
17) 中西清晃，西内絵里沙：「令和 7 年度川口市精神障害者訪問支援強化事業評価会議」ゲスト講師，埼玉，2026.2.24.
18) 山本真実，松長麻美，大橋優紀子，羽田彩子：周産期ボンディングとボンディング障害．第 10 回周産期メンタルヘルスセミナー 妊娠期心理症候群への道のり，東京，2025.11.9.
19) 西内絵里沙：「所沢市におけるにも包括構築推進およびアウトリーチ支援のとりくみ」．北区で共生社会をつくる～誰もがサポートのまちづくり～令和 7 年度北区精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築推進のための協議の場，東京，2025.12.15.
20) 西内絵里沙：「事例から考える、精神疾患を持つご利用者やご家族を支えるための地域連携」．令和 7 年第 2 回新所沢ブロック医療介護連携会議，埼玉，2026.1.15.
21) 塩澤拓亮：「精神保健研究における PPI の現在地とこれから ― TOGETHER プロジェクトに学ぶ共創のかたち ―」．第 136 回 HGPI セミナー，オンライン，2025.7.28.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) 藤井千代：日本精神神経学会　特任理事
2) 藤井千代：日本精神神経学会　代議員
3) 藤井千代：日本精神神経学会　専門医試験筆記試験作問班委員
4) 藤井千代：日本精神神経学会　統合失調症診療ガイドライン作成統括委員
5) 藤井千代：日本精神神経学会　利益相反委員
6) 藤井千代：日本精神神経学会　精神保健福祉法委員
7) 藤井千代：日本精神神経学会　医療倫理委員会委員長
8) 藤井千代：日本精神神経学会　着床前遺伝学的検査に関するワーキンググループ委員長
9) 藤井千代：日本精神神経学会　滝山病院に関する特別委員会委員長
10) 藤井千代：日本社会精神医学会　監事
11) 藤井千代：日本社会精神医学会　編集委員会副委員長
12) 藤井千代：日本社会精神医学会　加藤賞選考委員会委員長
13) 藤井千代：日本精神科救急学会　理事
14) 藤井千代：日本精神科救急学会　代議員
15) 藤井千代：日本司法精神医学会　評議員

16) 藤井千代：日本精神保健・予防学会　評議員
17) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会　理事
18) 山口創生：日本社会精神医学会 監事
19) 山口創生：日本統合失調症学会　評議員・理事
20) 山口創生：こころのバリアフリー研究会　評議員
21) 山口創生：日本精神保健・予防学会　評議員
22) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会　理事
23) 佐藤さやか：公認心理師の会　医療部会委員
24) 佐藤さやか：VCAT-J 研究会　理事
25) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
26) 佐藤さやか：日本認知・行動療法学会　倫理委員会副委員長
27) 小池純子：日本犯罪学会　評議員
28) 小池純子：日本司法精神医学会　評議員
29) 西内絵里沙：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
30) 西内絵里沙：一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会 研修委員
31) 松長麻美：日本社会精神医学会　評議員
32) 松長麻美：こころのバリアフリー研究会　評議員
33) 小塩靖崇：日本スポーツ精神医学会 研究推進委員
34) 川口敬之：日本統合失調症学会　評議員
35) 川口敬之：日本作業療法士協会　精神科の作業療法あり方委員会　委員長
36) 名雪和美：日本総合病院精神医学会地域連携委員会委員
37) 臼井 香：日本統合失調症学会　評議員
38) 河野稔明：日本司法精神医学会　評議員

(3) 座長

1) 藤井千代，来住由樹：シンポジウム 1「精神科救急医療の未来図に備える～身体科救急と在宅医療との接合面を大きくするために～」．第 33 回日本精神科救急学会学術総会，群馬，2025.10.16.
2) 塚本哲司，藤井千代：シンポジウム 6「警察官通報をめぐる課題」．第 33 回日本精神科救急学会学術総会，群馬，2025.10.17.
3) 大塚耕太郎，藤井千代：シンポジウム 3「うつ病の多角的な予防戦略」．第 28 回日本精神保健・予防学会学術集会，長崎，2025.11.1.
4) 藤井千代：【司会】統合失調症への理解を深める～社会とのつながりを持つために～．第 12 回精神障がい者と家族のための市民公開講座，大塚製薬株式会社，東京，2025.11.29.
5) 藤井千代：特別講演 1「重複障害と分断化された支援構造の間の見えにくいディスアビリティに気づくケア：22q11.2 欠失症候群の本人・家族支援の経験から」第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.5.
6) 藤井千代：ランチョンセミナー5「統合失調症における MBC（Measurement-Based Care）の活用について」．第 44 回日本社会精神医学会，栃木，2026.3.6.

7) 岡山達志，山口創生：シンポジウム 5「共同創造における言葉の大切さ」．第 19 回日本統合失調症学，大阪，2025.4.27.
8) 安西信雄，佐藤さやか：研修セミナー4「精神科リハビリテーション領域における研究活動への取り組方を考える」．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 32 回札幌大会，北海道，2025.10.26.
9) 名雪和美：入院者訪問支援事業 どうですか!? .チイクラフォーラム 10，大塚製薬株式会社 共催）一般社団法人全国地域で暮らそうネットワーク，埼玉，2025.9.20.

(4) 学会誌編集委員等

1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌　編集委員会副委員長
2) 藤井千代：日本精神神経学会雑誌　編集委員
3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会　英文監修者
5) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会　学会誌編集委員長
6) 山口創生：日本精神保健福祉士協会 査読小委員会
7) 山口創生：Journal of Epidemiology, Associated editor
8) 山口創生：International Journal of Mental Health Systems, Associated editor
9) 山口創生：Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Services Research, Editorial board member
10) 山口創生：BMC Psychiatry, Editorial board member
11) 松長麻美：日本社会精神医学会雑誌　査読委員
12) 松長麻美：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
13) 松長麻美：お茶の水看護学研究会　編集委員
14) 松長麻美：日本看護科学学会　和文誌専任査読委員
15) 松長麻美：日本精神保健看護学会　査読委員
16) 川口敬之：日本臨床作業療法研究　査読委員
17) 川口敬之：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
18) 川口敬之：日本社会精神医学会雑誌　編集委員
19) 河野稔明：司法精神医学　編集委員
20) 久永文恵：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
21) 久永文恵：日本職業リハビリテーション学会　英文監修委員

E．研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

1) 藤井千代：「改正精神保健福祉法をふまえた精神障がい者支援と関係機関の役割」．令和 7 年度措置入院制度の運用に関する合同研修会，岐阜県庁健康福祉部保健医療課【講演】，岐阜，2025.6.16.

2) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について～今自分ができていること、これからできること～」．令和 7 年度地域精神保健福研修会，長野県松本市保健福祉事務所【講演】，長野，2025.7.1.

3) 藤井千代：精神科病院における虐待防止について，2025（令和 7）年度医療安全管理者養成研修会【講演】，東京，2025.10.23.

4) 藤井千代：精神科医療への期待と可能性－「にも包括」おける展望，第 53 回多摩精神科臨床研究会【講演】，東京，2025.11.26.

5) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアと権利擁護．東京大学覆修証明プログラム「職域・地域架橋型-価値に基づく支援者育成」C コース，東京大学医学部付属病院精神神経科，東京，2026.2.15.

6) 三宅美智，小池純子，名雪和美：精神科病院における虐待防止の取り組みについて．虐待防止に関する研修会，新潟，オンライン，2026.3.18.

7) 中西清晃：「ひきこもりの支援の実践～所沢アウトリーチ支援の実践から～」．令和 7 年度ひいきこもり支援者研修，広島市精神保健福祉センター，オンライン，2025.8.27.

8) 中西清晃：「精神保健福祉政策と診療報酬の動向から読み解く精神科認定看護師の役割とケースマネジメント」．埼玉県支部精神科認定看護師研修会，埼玉，2026.2.1.

9) 名雪和美：「医療領域で働く際に必要な制度・法律のいろは」．公認心理師の会 2025 年度年次総会・研修会，東京，2025.5.25.

10) 名雪和美：「入院者訪問支援事業の実際と展望」. 令和 7 年度東京都精神障害者地域移行推進事業地域移行関係職員に対する研修，東京都福祉局【講演】，東京，2025.12.8.

11) 山崎さおり：「支援者が脅迫的に代理行動を迫られていると感じる場面についての理解と対応」. 特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS 職員研修，オンライン，2025.11.27.

Ｆ．その他

1) 佐藤さやか：金剛出版「臨床心理学」誌編集委員

12. ストレス・災害時こころの情報支援センター

Ⅰ. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応，及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として，災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され，平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された．災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援，情報発信・連携に取り組んでいる．令和 7 年度は，能登半島地震後，石川県からの協力要請を受け，石川こころのケアセンターの運営に協力した．また，みやぎこころのケアセンターの運営と閉所作業に協力した．

令和 7 年度の当センターの構成は以下の通りである．センター長（併任）：張 賢徳，併任研究員：小川眞太朗，大沼麻実，成田 瑞，客員研究員：宮本有紀，種市康太郎，前田正治，高橋 晶，秋山 剛，富田博秋，堤 敦朗，金 吉晴．

Ⅱ. 研究活動

1) WHO 版の心理的応急処置（PFA）の普及活動と e-learning 普及研究
2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

1) 下記(2)，(3)の研修会を通じて研究成果の社会還元を行った．

(2) 専門教育面における貢献

1) PFA の e-learning を作成し，自治体保健師・IHEAT 要員向け 677 回，日本看護系大学協議会 JV-Campus での学士向け 882 回，歯科医師・歯科衛生士向け 2,212 回の視聴数であった．
2) WHO 版 PFA を日本に導入し，WHO との契約の下で，一般研修および講演を継続し，1,464 名が参加した．
3) 東京都令和 7 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）
   災害時に被災した患者等の受入れを行う東京都の災害拠点精神科病院及び災害拠点精神科連携病院が，発災直後から中長期までの患者等へのこころのケアを適切に行うことができるよう，必要な知識と技術を有する人材の養成を図ることを目的として，実施した（52 名受講）．2026.2.20, 2.27.
4) 各種学術団体で，心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った．
5) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った．
6) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った．

(3) 精研の研修の主催と協力

1) 令和 7 年度精神保健に関する技術研修．第 15 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した．2025.10.8, 10.16（66 名受講）．（大沼）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

1) 公的委員会
   - 国際協力機構 ヨルダン国内支援委員（張）
   - みやぎ心のケアセンター 顧問（金）

2) 研究成果の行政貢献

- JICA ウクライナ国メンタルヘルスケア・がん治療における情報収集・確認調査本邦招へい業務に協力し，来日したウクライナの国立医科大学の精神科医等の来訪を受け入れ，PTSD 治療に関する治療法の最新の知見を提供し，意見交換を行った．また，NCNP 病院の協力により，rTMS の治療を紹介した．本取り組みは，国際的な連携を通じて市民社会の知見を共有し，戦争や災害など厳しい状況下にある地域への支援の一環となった．（張，金）
- 厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「災害時における地域保健活動を推進する体制整備に資する研究」事業において，自治体の災害時保健活動マニュアルの策定・改訂に従事する関係者を対象とした「災害時保健活動マニュアルの改訂に向けた手引き」の作成にて，被災者と支援者のメンタルヘルスを担当し，提言を行った．（大沼）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Tuturea LE, Narita Z, Shimomura K, Nakano W, Newnham EA, Kim Y: Long-term mental health trajectories after the Great East Japan Earthquake: A systematic review. Eur J Psychotraumatol 16(1): 2592408, 2025.

(2) 総説

1) 大沼麻実：災害時サイコロジカル・ファーストエイド． 特集 心的外傷およびストレス因関連症群～レジデントに役立つ臨床の最前線での診断や治療の極意！～，精神科 Resident，先端医学社，vo.6(4)，55-57，2025.11.20.

(3) 著書

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

1) 大沼麻実：VI-1 被災地域住民のメンタルヘルス対策，VI-2 支援従事職員のメンタルヘルス対策．災害時保健活動マニュアルの改訂に向けた手引き，奥田博子編著，令和 7 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「災害時における地域保健活動を推進する体制整備に資する研究」，15-16，2026.3.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 松尾沢子，大沼麻実ほか：スフィア基準や関連する国際基準の展示（JQAN 出展）．ぼうさいこくたい 2025 in 新潟，防災推進国民大会 2025 実行委員会（内閣府・防災推進協議会・防災推進国民会議）主催，新潟県・新潟市協力，新潟，2025.9.6-7.

(2) 一般演題

1) Tuturea LE, Narita Z, Shimomura K, Newnham EA, Kim Y: Long-term mental health trajectories after the Great East Japan Earthquake: A systematic review. World Association for Disaster and Emergency Medicine 23rd Congress, Tokyo Japan, May 2025.5.2-6.
2) Okuda H, Igarashi K, Hatakeyama N, Osawa E, Aso Y, Ohnuma A, Tomio J: A Study on Revision of Public Health Response Manuals Based on the Characteristics of Community Health Issues in the event of an Earthquake Disasters in Japan. 7th Global Network for Public Health Nursing, Canada, 2025.7.28-30.（優秀ポスター賞受賞）
3) 大沼麻実，堀拔文香，藤岡 泉，是永匡紹，木村晶子，杉山雄大，中塚清将，西村邦宏，後藤美賀子，八巻知香子，田沼順子，井花庸子：公的医療情報発信の課題探索【1】オンライン健康情報評価スキルと学習経験に係る調査．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.
4) 藤岡 泉，大沼麻実，堀拔文香，是永匡紹，木村晶子，杉山雄大，中塚清将，西村邦宏，後藤美賀子，八巻知香子，田沼順子，井花庸子：公的医療情報発信の課題探索【2】オンライン健康情報収集の媒体・信頼度に係る調査．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.
5) 堀拔文香，大沼麻実，藤岡 泉，是永匡紹，木村晶子，杉山雄大，中塚清将，西村邦宏，後藤美賀子，八巻知香子，田沼順子，井花庸子：公的医療情報発信の課題探索【3】公的機関の市民向けウェブサイトに対する認知と期待．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.
6) 井花庸子，堀拔文香，大沼麻実，小林崇希，山岡巧弥，是永匡紹，木村晶子，杉山雄大，中塚清将，西村邦宏，後藤美賀子，八巻知香子，田沼順子，藤岡 泉：公的医療情報発信の課題探索【4】関係者へのインタビューに基づく課題と改善策の検討．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.
7) 麻生保子，奥田博子，大澤絵里，畠山典子，五十嵐久美子，大沼麻実，佐藤一美，山形香織，小宮山恵美，冨尾淳：感染症蔓延下の自然災害（複合災害）時における統括保健師の役割 - インタビュー調査．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.
8) 奥田博子，大澤絵里，冨尾淳，畠山典子，麻生保子，大沼麻実，五十嵐久美子，佐藤一美，山形香織：令和 6 年能登半島地震における保健師等広域応援派遣に関する実態調査．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.29.
9) 畠山典子，奥田博子，五十嵐久美子，大澤絵里，麻生保子，大沼麻実，佐藤一美，山形香織，冨尾淳：過疎地域を含む自治体における平時からの災害への備えと体制づくり．日本公衆衛生学会，静岡，2025.10.31.

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

1) 張 賢徳：メンタルヘルスと自殺予防．JICA ウクライナ国メンタルヘルスケア・がん治療における情報収集・確認調査本邦招へい業務．国立精神・神経医療研究センター．東京，2025.10.22.
2) 大沼麻実：災害時の心理的応急処置（Psychological First Aid: PFA）について．令和 7 年度専門課程 I 保健福祉行政管理分野及び専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科，国立保健医療科学院，埼玉（オンライン），2025.5.29.
3) 大沼麻実：災害時等の危機的状況下における心理社会的支援～サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)について～．令和 7 年度災害・事故時のこころのケア対策事業関係職員研修，北九州市保健福祉局精神保健福祉センター，福岡（オンライン），2025.9.2.
4) 大沼麻実：NCNP メディア塾ショートセミナー「メディア関係者のための PFA（心理的応急

処置）～被災者に寄り添う取材のために～」. 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2025.9.11.

5) 大沼麻実：サイコロジカルファーストエイド（心理的応急処置：PFA）講演会．社会福祉法人舟伏（地域活動支援センターふなぶせ・ふなぶせ南），岐阜，2025.9.18.

6) 大沼麻実：Psychological First Aid. 医学教養 「至誠と愛」の実践学修．東京女子医科大学，東京，2025.11.21.

7) 大沼麻実：ＰＦＡ研修会～心理的応急処置（Psychological First Aid：PFA）を活用した被災者支援とは～．栃木県市町保健師業務研究会，栃木，2025.11.27.

8) 大沼麻実：健康危機事象のメンタルヘルス～サイコロジカルファーストエイドを学ぶ～．一般社団法人 佐賀県公認心理師協会，災害支援委員会・被害者支援委員会共催，佐賀（オンライン），2025.11.30

9) 大沼麻実：災害時支援に取り入れたいサイコロジカル・ファーストエイド．令和７年度 歯科専門職研修会，一般社団法人富山県歯科医師会，2026.3.1.

10) 大沼麻実：災害時のこころのケア～PFA：心理的応急処置～．愛知県刈谷市健康推進課，2026.2.24.

11) 大沼麻実：WHO 版『サイコロジカルファーストエイド（PFA)』を学ぶ．令和７年度健康危機事象メンタルケア研修会，佐賀県精神保健福祉センター，佐賀，2025.9.10.

12) 金 吉晴：地域における健康危機管理～災害時の心のケア～．令和 7 年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野分割前期及び専門過程Ⅱ地域保健福祉専門科，国立保健医療科学院，埼玉（オンライン），2025.5.29.

13) 金 吉晴：PTSD 総論（診断，治療）．JICA ウクライナ国メンタルヘルスケア・がん治療における情報収集・確認調査本邦招へい業務，国立精神・神経医療研究センター．東京，2025.10.23.

Ｄ．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) Narita Z：American Psychiatric Association，International Fellow
2) Kim Y：World Psychiatric Association, Ethics & Review Committee, Co-opted member
3) Kim Y：World Psychiatric Association, Advisory Committee on Response to Emergencies Committee (ACRE), Member
4) 張 賢徳：日本自殺予防学会 理事長
5) 張 賢徳：日本臨床死生学会 常任理事
6) 張 賢徳：日本うつ病学会　理事
7) 張 賢徳：日本うつ病学会 自殺対策委員会 委員長
8) 張 賢徳：日本うつ病学会　学会奨励賞選考委員会 委員
9) 張 賢徳：日本精神神経学会　自殺予防に関する委員会 委員長
10) 張 賢徳：第 31 回日本臨床死生学会総会 大会長
11) 張 賢徳：第 49 回自殺予防学会総会 プログラム委員
12) 張 賢徳：第 23 回日本うつ病学会・第 50 回日本自殺予防学会総会合同総会 プログラム委員
13) 張 賢徳：第 122 回日本精神神経学会学術総会 プログラム委員
14) 成田 瑞：日本精神神経学会 ICD-11 委員
15) 成田 瑞：日本疫学会 学術委員会 疫学教育推進ワーキンググループ 委員
16) 成田 瑞：日本統合失調症学会 大会委員
17) 金 吉晴：日本自殺予防学会 理事
18) 金 吉晴：日本精神神経学会 ICD-11 委員会委員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

1) Narita Z: Asian Journal of Psychiatry，editorial board member

E．研修

(1) 研修企画

1) 堀 弘明，大沼麻実：令和 7 年度精神保健に関する技術研修．第 15 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2025.10.8，オンライン，2025.10.16.
2) 大沼麻実：東京都令和 7 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）．東京，2026.2.20，オンライン，2026.2.27.

(2) 研修会講師

1) 大沼麻実，江部克也，久保千晶，伊藤義徳，庄司弥生：災害時の PFA．東京都令和 7 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）． 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2026.2.20.
2) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．外務省領事中堅研修，外務省，東京，2025.11.13.
3) 大沼麻実，川原正人，久保千晶，山﨑千鶴子，庄司弥生，松岡拓也，酒井裕美：サイコロジカル・ファーストエイド研修，令和 7 年度精神保健に関する技術研修 第 15 回災害時 PFA と心理対応研修．国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所，東京，2025.10.8.
4) 大沼麻実，江部克也：令和 7 年度 WHO 版 PFA 研修会．新潟大学医学部災害医療教育センター，新潟大学災害・復興科学研究所共催，新潟，2025.8.30.
5) 大沼麻実，庄司弥生：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）．一般社団法人日本産業カウンセラー協会，東京，2025.5.10.
6) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論．2025 年度精神保健に関する技術研修　第 15 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2025.10.16.
7) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論．東京都令和 7 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修），国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，オンライン，2026.2.27.

F．その他

1) Kim Y：Psychiatry and Clinical Neuroscience 誌 編集委員
2) Kim Y：European Journal of Psychotraumatology 誌 編集委員
3) 張 賢徳：川崎いのちの電話 理事長
4) 張 賢徳：日本精神衛生会 心と社会 編集委員長
5) 張 賢徳：日本精神科看護協会 精神科認定看護師認定審査会委員
6) 大沼麻実：東日本大震災 15 年 震災とこころのケア(上) PFA（心理的応急処置）．朝日新聞，2026.3.2.
7) 金 吉晴：トカラ列島地震を受けた島民の心のケア．NHK 鹿児島 電話取材，2025.

Ⅲ. 研　修　実　績

令和 7 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は,国,地方公共団体精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師,保健師,看護師,作業療法士,臨床心理業務に従事する者,精神科ソーシャルワーカー等を対象に,精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである.令和 7 年度は, 摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療（2 回）,摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～（2 回）,発達障害者支援研修（4 回）, 入院者訪問支援事業実務者研修（2 回）,摂食障害小児治療研修（2 回）,摂食障害専門研修,薬物依存臨床医師研修,薬物依存臨床看護等研修, 統合失調症の標準治療研修,うつ病の標準治療研修, 災害時 PFA と心理対応研修, 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修,精神保健医療福祉データ行政活用研修, 精神科救急医療体制整備研修,PTSD 対策専門研修（5 回）の計 26 回の研修を合計 2,319 名に対して実施した.

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和 7 年 5 月 1 日から 5 月 31 日まで,第 10 回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し,「摂食障害患者への初期対応,外来診療,医療連携」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等 108 名に対して研修を行った．5 月 1 日（木）～5 月 31 日（土）はオンデマンド配信,5 月 24 日（土）はライブ配信を実施した.

課程主任　　井野　敬子

5 月 1 日（木）~5 月 31 日（土）

摂食障害の今	安藤　哲也
一般医でもできる初期治療	髙倉　修
摂食障害の理解 患者，家族にどう伝えるか	佐藤　康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内　一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	原田　朋子
摂食障害の外来治療　初心者の心得・経験者へのヒント	永田　利彦
小児領域の摂食障害　小児の特徴と外来	作田　亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川　真里子

5 月 24 日（土）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村　奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	明星大学心理学部心理学科客員教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内　一浩	東京大学医学部附属病院心療内科病院教授
原田　朋子	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
永田　利彦	なんば・ながたメンタルクリニック院長
作田　亮一	獨協医科大学医学部特任教授
小川　真里子	福島県立医科大学 ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授
田村　奈穂	国立国府台医療センター心療内科医師

《摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～》

令和 7 年 6 月 17 日から 7 月 21 日まで,第 5 回摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～を実施し,「摂食障害患者への入院プログラムの解説、多職種の関わり方、地域医療連携」を主題に,摂食障害入院治療を実施している施設の医療関係者（原則有資格者とする）等 93 名に対して研修を行った．6 月 17 日～7 月 21 日はオンデマンド配信，7 月 12 日はライブ配信を実施した.

課程主任　　井野　敬子

6 月 17 日（火）～7 月 21 日（月）

摂食障害診療総論	竹林　淳和
入院治療プログラムの解説	竹林　淳和
看護師の関わり方	野林　美裕・鈴木麻友子
心理士の関わり方	望月　洋介
栄養士の関わり方	位田　文香
地域医療連携の構築	竹林　淳和

7 月 12 日（土）

質疑応答	竹林　淳和・鈴木　麻友子
	吉山　真央・磯部　智代
	位田　文香

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
竹林　淳和	浜松医科大学精神科神経科講師
野林　美裕	浜松医科大学付属病院看護師
鈴木　麻友子	浜松医科大学付属病院看護師
吉山　真央	浜松医科大学付属病院看護師
望月　洋介	浜松医科大学付属病院臨床心理士
磯部　智代	浜松医科大学付属病院臨床心理士
位田　文香	浜松医科大学付属病院管理栄養士

《発達障害者支援研修》

令和 7 年 6 月 25 日から 6 月 26 日まで,第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パート I を実施し,「かかりつけ医講習講師として絶対に必要な知識のアップデート」を主題に,病院,保健所,発達障害支援センター等に勤務し，発達障害の臨床・支援に 5 年以上関わった経験を有する医師あるいは医療関係者（特に指導について責任的立場にある者）,自治体（都道府県，政令指定都市）において,行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員 50 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　髙橋　長秀　　課程副主任　江頭　優佳・古家　宏樹

6 月 25 日（水）

かかりつけ医が知っておくべき発達障害児・者の行政施策	西尾　大輔
かかりつけ医が知っておくべき発達障害支援における地域連携	堀内　史枝
かかりつけ医が知っておくべき発達障害に対する療育	吉川　徹
かかりつけ医研修に求められること	岡田　俊

6 月 26 日（木）

かかりつけ医が知っておくべき発達障害の医学的理解	髙橋　長秀
かかりつけ医が知っておくべき発達障害の疫学	土屋　賢治
かかりつけ医が知っておくべき発達障害の診断	小坂　浩隆
かかりつけ医が知っておくべき発達障害に対する薬物療法	齊藤　卓弥

講師名簿

髙橋　長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭　優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
西尾　大輔	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室発達障害対策専門官
堀内　史枝	愛媛大学大学院医学系研究科児童精神医学講座教授
吉川　徹	愛知県西三河福祉相談センター児童専門監
岡田　俊	奈良県立医科大学精神医学講座教授
土屋　賢治	浜松医科大学子どものこころの発達研究センター特任教授
小坂　浩隆	福井大学医学系部門病態制御医学講座精神医学　教授
齊藤　卓弥	北海道大学病院子どものこころと発達センター特任教授

《入院者訪問支援事業実務者研修》

令和７年８月７日,第３回入院者訪問支援事業実務者研修を実施し,「入院者訪問支援事業の意義と目的を理解したうえで,事業の実施体制の構築,各種会議の運営や事務局の役割や訪問支援員のバックアップのあり方等につき,講義とグループワークを通じて習得する」を主題に,入院者訪問支援事業の実施を検討しているまたは事業を実施中の都道府県, 政令市, 中核市, 特別区における事業担当者（行政職員）および入院者訪問支援事業の実務を担当する方（事業委託先等）など 27 名に対して対面研修を行った.

課程主任　　藤井　千代

8 月 7 日（木）

事業の意義と実施体制の構築	藤井　千代・角野　太一・上坂　紗絵子 彼谷　哲志・増田　喜信・上田　京華 安達　万里子
事業開始に向けての準備	名雪　和美
不測の事態への対応 支援員のバックアップとスキルアップ	藤井　千代・角野　太一・上坂　紗絵子 彼谷　哲志・増田　喜信・上田　京華 安達　万里子

講師名簿

藤井　千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部部長
名雪　和美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部研究員
角野　太一	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター理事
上坂　紗絵子	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター運営会員
彼谷　哲志	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター運営会員
増田　喜信	静岡県健康福祉部障害者支援局障害福祉課精神保健福祉班主査
上田　京華	静岡市保健福祉長寿局保健衛生医療部保健所精神保健福祉課副主幹
安達　万里子	一般社団法人静岡県精神保健福祉士協会理事

《摂食障害小児治療研修》

令和7年7月28日から8月31日まで,第2回摂食障害小児治療研修を実施し,「小児科医療スタッフ向けの摂食障害概論、摂食障害小児例の外来治療,入院治療,日々の看護」を主題に，摂食障害小児の外来および入院治療を行っている施設の小児科の医療スタッフ（原則有資格者とする）等51名に対して研修を行った．7月28日～8月31日はオンデマンド配信，8月24日はライブ配信を実施した．

課程主任　　井野　敬子

7月28日（月）～8月31日（日）

小児科領域で対応する拒食症：概論	作田　亮一
摂食障害の小児科外来診療：治療契約から入院の同意まで	井上　建
小児病棟における入院治療の実際	大谷　良子
児童精神科における治療－小児科からの紹介後－	宇佐美　政英
日々の看護	山田　理江

8月24日（日）

質疑応答	作田　亮一・井上　建
	大谷　良子・宇佐美　政英
	山田　理江・森野　百合子

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
作田　亮一	獨協医科大学医学部特任教授
井上　建	獨協医科大学医学部准教授
	埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
大谷　良子	公益社団法人発達協会王子クリニック院長
宇佐美　政英	国立国府台医療センター児童精神科診療科長
	子どものこころ総合診療センター長
山田　理江	東京都立松沢病院看護師
森野　百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院なります子どものこころケアセンター長

《摂食障害専門研修》

令和 7 年 9 月 3 日から 9 月 5 日まで,第 22 回摂食障害専門研修を実施し,「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に,病院,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,摂食障害に関心を有する医療従事者（精神科,心療内科,一般内科,小児科で臨床に従事している医師,臨床心理業務等に従事する者,看護師および保健師,作業療法士,精神保健福祉士,栄養士等）56 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　井野　敬子

9 月 3 日（水）

疫学・病態・治療概論	安藤　哲也
初期対応と外来診療	髙倉　修
入院治療	原田　朋子
精神障害・パーソナリティー障害を合併する摂食障害	西園　マーハ文

9 月 4 日（木）

小児例の初期対応と診療	宇佐美　政英
身体合併症・身体的管理	鈴木　眞理
摂食障害患者の家族支援：児童・思春期摂食障害患者さんへの家族療法的アプローチ	森野 百合子
過食症に対するガイデッド・セルフヘルプ	中里　道子

9 月 5 日（金）

心理教育	小原　千郷
当事者の話を聞く	武田　綾
症例検討	佐藤　康弘

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	明星大学心理学部心理学科客員教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
原田　朋子	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
西園　マーハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授
宇佐美　政英	国立国府台医療センター児童精神科診療科長 子どものこころ総合診療センター長
鈴木　眞理	一般社団法人日本摂食障害協会理事長
森野 百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院なります子どものこころケアセンター長

中里　道子	国際医療福祉大学医学部精神医学教授（代表）
小原　千郷	帝京大学文学部心理学科准教授
武田　綾	NPO 法人のびの会心理療法士
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師

《薬物依存臨床医師研修》　《薬物依存臨床看護等研修》

令和 7 年 9 月 3 日から 9 月 5 日まで,第 38 回薬物依存臨床医師研修ならびに第 26 回薬物依存臨床看護等研修を実施し,「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に,精神科病院,精神保健福祉センター等に勤務する医師 13 名,看護師等 27 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　松本　俊彦　課程副主任　嶋根　卓也・富山　健一

9 月 3 日（水）

薬物依存症臨床総論	松本　俊彦
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	船田　正彦
大麻成分の医療用途と海外の状況	富山　健一
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田　健

9 月 4 日（木）

薬物乱用・依存の疫学：一般住民および青少年	嶋根　卓也
精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	藤城　聡
民間回復支援施設の活動と課題	嶋根　卓也・栗坪　千明
大麻によって発現する動物の異常行動	三島　健一

9 月 5 日（金）

薬物依存症女性の理解と支援	大嶋　栄子
薬物依存症者家族の支援について	吉田　精次
当事者の語り～私にとっての自助活動	当事者・家族
ドパミンモデルで捉える薬物依存症：生物学的理解のために	沖田　恭治

講師名簿

松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根　卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
富山　健一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
沖田　恭治	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第一精神科医長
船田　正彦	湘南医療大学薬学部教授
稲田　健	北里大学医学部精神科学教授
藤城　聡	愛知県精神保健福祉センター所長
栗坪　千明	栃木ダルク代表
三島　健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
大嶋　栄子	NPO 法人リカバリー理事長
吉田　精次	藍里病院副院長／あいざと依存症研究所所長

《統合失調症の標準治療研修》

令和 7 年 9 月 7 日,第 4 回統合失調症の標準治療研修を実施し,「統合失調症の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,統合失調症に関心を有する医療従事者(医師,看護師,保健師,薬剤師,公認心理師,臨床心理士,作業療法士,精神保健福祉士などの,原則医療系の有資格者)など 50 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　橋本　亮太

9 月 7 日（日）

統合失調症の標準治療研修とは	根本　清貴
治療計画の策定	飯田　仁志
急性期・安定・維持期	根本　清貴
薬剤性錐体外路系副作用	中村　敏範
その他の副作用	柏木　宏子
治療抵抗性統合失調症	橋本　亮太
その他の臨床的諸問題 1	根本　清貴
その他の臨床的諸問題 2	飯田　仁志

症例①グループディスカッション
症例②グループディスカッション　　橋本　亮太・柏木　宏子・中村　敏範
飯田　仁志・根本　清貴

まとめ・質疑応答　　中村　敏範

講師名簿

橋本　亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木　宏子	国立精神・神経医療研究センター病院司法精神診療部第三司法精神科医長
根本　清貴	筑波大学医学医療系精神医学准教授
飯田　仁志	福岡大学医学部精神医学教室講師
中村　敏範	信州大学医学部附属病院精神科講師

《うつ病の標準治療研修》

令和 7 年 9 月 21 日,第 4 回うつ病の標準治療研修を実施し,「うつ病の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,うつ病に関心を有する医療従事者(医師,看護師,保健師,薬剤師,公認心理師,臨床心理士,作業療法士,精神保健福祉士などの原則医療系の有資格者)など 62 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　橋本　亮太

9 月 15 日（日）

うつ病の標準治療研修とは	飯田　仁志
治療計画の策定	根本　清貴
軽症	飯田　仁志
中等症・重症	中村　敏範
精神病性	柏木　宏子
児童思春期	橋本　亮太
睡眠障害とその対応	飯田　仁志
その他の臨床的諸問題	根本　清貴

症例①グループディスカッション	
症例②グループディスカッション	橋本　亮太・柏木　宏子・中村　敏範 飯田　仁志・根本　清貴

まとめ・質疑応答	橋本　亮太

講師名簿

橋本　亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木　宏子	国立精神・神経医療研究病院司法精神診療部第三司法精神科医長
飯田　仁志	福岡大学医学部精神医学教室講師
根本　清貴	筑波大学医学医療系精神医学准教授
中村　敏範	信州大学医学部附属病院精神科講師

《発達障害者支援研修》

令和 7 年 9 月 24 日から 9 月 25 日まで,第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡを実施し,「かかりつけ医講習講師として、一歩進んだ知識のアップデート」を主題に,病院,保健所,発達障害支援センター等に勤務し,発達障害に関心を有する医師（特に指導につて責任的立場にある者）,自治体（都道府県，政令指定都市）において,行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員 57 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　高橋　長秀　課程副主任　江頭　優佳・古家　宏樹

9 月 24 日（水）

移行期医療〔トランジション〕におけるかかりつけ医の役割	岡田　あゆみ
かかりつけ医が理解しておくべき成人期の日常生活、就労への支援	太田　晴久
かかりつけ医が身につけておくべき発達障害と併存する精神疾患への対応	辻井　農亜
発達障害診療を成立させるための診療システム	原田　剛志

9 月 25 日（木）

かかりつけ医が認識しておくべき学校における合理的配慮の現状と課題	笹森　洋樹
かかりつけ医が理解しておくべき非薬物療法(ペアトレを中心に)	香月　大輔
かかりつけ医が理解しておくべき学童期・思春期の課題とその支援	小野　和哉
かかりつけ医が理解しておくべき高齢期の生活実態と支援	日詰　正文

講師名簿

高橋　長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭　優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
古家　宏樹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
岡田　あゆみ	岡山大学学術研究院医歯薬学域小児医科学准教授
太田　晴久	昭和医科大学発達障害医療研究所所長
辻井　農亜	富山大学附属病院こどものこころと発達診療学講座客員教授
原田　剛志	パークサイドこころの発達クリニック理事長
笹森　洋樹	常葉大学教育学部特任教授
香月　大輔	九州大学病院子どものこころの診療部特任助教
小野　和哉	聖マリアンナ医科大学神経精神科教授
日詰　正文	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園総務企画局研究・人材養成部部長

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 7 年 10 月 8 日及び 10 月 16 日,第 15 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し,「「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置 : PFA)」に関する基本技能を習得する．またトラウマ,悲嘆,子どもの反応を含む,災害時の心理的反応を理解し,基本的な対応スキルを習得する.」を主題に,自然災害,甚大事故,犯罪,テロ等のトラウマ的出来事に際して,実際に被災者,被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある, 精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師, 保健師, 精神保健福祉士,臨床心理技術者,行政職員,教育関係者等 65 名に対して 10 月 8 日は対面研修，10 月 16 日はオンライン研修を開催した.

課程主任　　堀　弘明　　課程副主任　　大沼　麻実

10 月 8 日（水）

PFA の定義と枠組み	大沼 麻実・川原 正人・久保 千晶
PFA の活動原則(1)	山﨑 千鶴子・庄司 弥生・松岡 拓也
PFA の活動原則(2)	酒井 裕美
PFA ロールプレイ	
セルフケアとチームのケア	

10 月 16 日（木）

災害時のこころのケア-総論	金　吉晴
心理的リカバリー	福地 成
災害時の子どものトラウマと反応	小平　雅基

講師名簿

大沼　麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
川原　正人	東京未来大学准教授
久保　千晶	聖マリアンナ会東横惠愛病院公認心理師・臨床心理士
山﨑　千鶴子	介護老人保健施設さくらの杜看護師
庄司　弥生	横浜市立大学非常勤講師・共同研究員
松岡　拓也	ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業第 1 部人道・開発支援第 1 課課長
酒井　裕美	千葉県健康福祉部障害者福祉推進課精神保健福祉推進班副主幹
福地　成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和 7 年 10 月 17 日から 11 月 20 日まで,第 11 回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し,「 摂食障害患者への初期対応,外来診療,医療連携」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等 83 名に対して研修を行った．10 月 17 日（金）～11 月 20 日（木）はオンデマンド配信,11 月 9 日（日）はライブ配信を実施した.

課程主任　　井野　敬子

10 月 17 日（金）~11 月 20 日（木）

摂食障害の今	安藤　哲也
一般医でもできる初期治療	髙倉　修
摂食障害の理解　患者，家族にどう伝えるか	佐藤　康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内　一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	原田　朋子
摂食障害の外来治療、初心者の方へ・経験者へのヒント	永田　利彦
小児領域の摂食障害　小児の特徴と外来	作田　亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川　真里子

11 月 9 日（日）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村　奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	明星大学心理学部心理学科客員教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内　一浩	東京大学医学部附属病院心療内科病院教授
原田　朋子	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
永田　利彦	なんば・ながたメンタルクリニック院長
作田　亮一	獨協医科大学医学部特任教授
小川　真里子	公立大学法人福島県立医科大学 ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授
田村　奈穂	国立国府台医療センター心療内科医師

《令和 7 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 7 年 10 月 24 日,令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 1（臨床コース）を実施し,「災害被災者,犯罪・事故被害者,災害遺族,被虐待児童等,トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため,精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する．受講者名簿を自治体に送付し,今後の災害,犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,社会福祉士,作業療法士,公認心理師,臨床心理士の資格を有する方,または公的機関や教育機関に勤務し,精神保健医療福祉業務に従事する方 378 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　堀　弘明

10 月 24 日（金）

トラウマの基本対応	西　大輔
トラウマの概念と PTSD 診断	金　吉晴
PTSD 治療	金　吉晴
子どものトラウマ	小平　雅基

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
西　大輔	東京大学大学院医学系研究科教授
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

令和 7 年 11 月 3 日から 11 月 5 日まで，第 17 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し，「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し,直面化を避けた動機付け面接の重要性を理解し,薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに,家族支援への理解を深める」を主題に，医療機関，行政機関，司法機関，民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 95 名に対して対面研修を行った.

課程主任　松本　俊彦　　課程副主任　今村　扶美

11 月 3 日（月）

薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本　俊彦
SMARPP の理念と意義	松本　俊彦
SMARPP の実際	松本　俊彦
SMARPP ビデオ学習	松本　俊彦
グループワーク（1）	今村　扶美
薬物依存症患者への対応の基本	成瀬　暢也

11 月 4 日（火）

薬物乱用・依存の疫学	嶋根　卓也
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	山田　俊隆
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤　隆
入院病棟における薬物依存症治療	沖田　恭司
デモセッション	今村　扶美
グループワーク（2）	今村　扶美
まとめとディスカッション	松本　俊彦

11 月 5 日（水）

動機づけ面接の基礎	澤山　透
依存症に対する作業療法支援	小砂　哲太郎
個別 SMARPP の実践	出村　綾子
ディスカッション	松本　俊彦

講師名簿

松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根　卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村　扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室室長
沖田　恭司	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第一精神科医長

小砂　哲太郎　　国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部主任
出村　綾子　　国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室主任

成瀬　暢也　　埼玉県立精神医療センター副病院長
山田　俊隆　　東京都立多摩総合精神保健福祉センター統括課長代理
加藤　隆　　NPO 法人八王子ダルク代表理事
澤山　透　　相模ヶ丘病院院長

《精神保健医療福祉データ行政活用研修》

令和 7 年 11 月 13 日，第 3 回精神保健医療福祉データ活用研修を実施し，「医療計画（精神疾患）や障害福祉計画等の現状と課題、地域課題について理解したうえで、精神保健医療福祉関係の公的データ（患者調査、NDB データ、630 調査等）の見方、またそのマップデータベースである地域精神保健医療福祉資源分析データベース（ReMHRAD）の見方と使い方等を学び、各自治体の実態把握とモニタリングをするためのスキルを習得する」を主題に，各都道府県，政令指定都市，市区町村の精神保健福祉主管課担当者、医療政策主管課担当者 25 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　黒田　直明　　課程副主任　臼田　謙太郎

11 月 13 日（木）

精神保健医療福祉に関する動向：医療計画,障害福祉計画等	厚生労働省
各計画のモニタリングとロジックモデルの活用	黒田 直明
NDB データとその活用	奥村 泰之
630 調査とその活用，NDB 以外のデータソース	立森 久照・臼田 謙太郎
ReMHRAD とその活用	吉田 光爾
自治体の事例紹介	柴崎　聡子

講師名簿

黒田　直明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
臼田　謙太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部室長
立森　久照	国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第七部特任研究室員
奥村　泰之	一般社団法人臨床疫学研究推進機構代表理事
吉田　光爾	東洋大学福祉社会デザイン学部教授
柴崎　聡子	川崎市総合リハビリテーション推進センターこころの健康課担当課長

《発達障害者支援研修》

令和 7 年 11 月 19 日から 11 月 20 日まで，第 6 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢを実施し，「かかりつけ医講習講師として,話題となっているトピックについての知識のアップデート」を主題に，病院，保健所，発達障害支援センター等に勤務し，発達障害の臨床・支援に 5 年以上関わった経験を有する医師,あるいは医療関係者（保健師看護師,公認心理師,臨床心理士,臨床発達心理士,精神保健福祉士,作業療法士,社会福祉士,言語聴覚士,薬剤師等）の中で特に指導について責任的立場にある者.なお,自治体（都道府県、政令指定都市）において,行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員 48 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　髙橋　長秀　　課程副主任　江頭　優佳・古家　広樹

11 月 19 日（水）

発達障害と摂食障害	中土井　芳弘
強度行動障害への対応	會田　千重
発達障害とジェンダー	館農　勝
発達障害と虐待・トラウマ	細金　奈奈

11 月 20 日（木）

発達障害の当事者会の役割	田中　尚樹
女性の発達障害	今村　明
外国にルーツを持つ児童の支援	柿元 真知
発達障害とゲームやインターネットの世界	関　正樹

講師名簿

髙橋　長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭　優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
古家　宏樹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
中土井　芳弘	四国こどもとおとなの医療センター成育こころの診療部長
會田　千重	国立病院機構肥前精神医療センター統括診療部長
館農　勝	特定医療法人さっぽろ悠心の郷・ときわ病院理事長
細金　奈奈	総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科副部長
田中　尚樹	青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科准教授
今村　明	長崎大学生命医科学域保健学系作業療法学分野教授
柿元　真知	三重県立子ども心身発達医療センター児童精神科医長
関　正樹	大湫病院児童精神科医

《令和 7 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 7 年 11 月 20 日，令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 2（行政・支援者コース）を実施し，「災害被災者,犯罪・事故被害者,災害遺族,被虐待児童等,トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため,精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する．受講者名簿を自治体に送付し,今後の災害,犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,社会福祉士,作業療法士,公認心理師,臨床心理士の資格を有する方,または公的機関や教育機関に勤務し,精神保健医療福祉業務に従事する 342 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　堀　弘明

11 月 20 日（木）

行政的なトラウマ・ケースワーク	大岡　由佳
にも包括と犯罪被害者支援	辻本　哲士
トラウマの概念と PTSD 診断	金　吉晴
トラウマへの行政対策ニーズ	佐藤　まみ
初期対応としての PFA とトラウマインフォームドケア	西　大輔

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
大岡　由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授
辻本　哲士	滋賀県立精神保健福祉センター所長
佐藤　まみ	株式会社グラファー
西　大輔	東京大学大学院医学系研究科教授

《摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～》

令和 7 年 11 月 20 日から 12 月 24 日まで,第 6 回摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～を実施し,「摂食障害患者への入院プログラムの解説,多職種の関わり方,地域医療連携」を主題に,摂食障害入院治療を実施している施設の医療関係者（原則有資格者とする）等 40 名に対して研修を実施した.11 月 20 日～12 月 24 日はオンデマンド配信，12 月 14 日はライブ配信を実施した.

課程主任　　井野　敬子

11 月 20 日（木）～12 月 24 日（水）

摂食障害診療総論	竹林　淳和
入院治療プログラムの解説	竹林　淳和
看護師の関わり方	野林　美裕・鈴木　智美
心理士の関わり方	望月　洋介
栄養士の関わり方	位田　文香
地域医療連携の構築	竹林　淳和

12 月 14 日（日）

質疑応答	竹林　淳和・鈴木　智美
	吉山　真央・磯部　智代
	位田　文香

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
竹林　淳和	浜松医科大学精神科神経科講師
野林　美裕	浜松医科大学付属病院看護師
鈴木　智美	浜松医科大学附属病院看護師
吉山　真央	浜松医科大学付属病院看護師
望月　洋介	浜松医科大学付属病院臨床心理士
磯部　智代	浜松医科大学付属病院臨床心理士
位田　文香	浜松医科大学付属病院管理栄養士

《令和 7 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 7 年 12 月 10 日から 12 月 11 日，令和 7 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 1 を実施し，「精神保健福祉センター，病院,保健所等において，PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ，精神保健医療従事者等に対し，最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ，有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に，症例呈示のため，職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士），過去に PTSD 研修 A.通常コースを受講している方 208 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　堀　弘明

12 月 10 日（水）

PTSD の診断と評価	大江　美佐里
遷延性悲嘆症の心理療法	中島　聡美
PTSD の心理療法各論 1	伊藤　正哉
PTSD の心理療法各論 2	井野　敬子

12 月 11 日（木）

トラウマ後の急性期対応と長期対応	塩入　俊樹
～新潟県中越地震と東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	
PTSD のソーシャルワーク	大岡　由佳
複雑性 PTSD	丹羽　まどか・金　吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀　弘明

講師名簿

堀　弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
伊藤　正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江　美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
中島　聡美	武蔵野大学人間科学部教授
塩入　俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授
大岡　由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授

《摂食障害小児治療研修》

令和 8 年 1 月 8 日から 2 月 11 日まで,第 3 回摂食障害小児治療研修を実施し,「小児科医療スタッフ向けの摂食障害概論、摂食障害小児例の外来治療,入院治療,日々の看護」を主題に，摂食障害小児の外来および入院治療を行っている施設の小児科の医療スタッフ（原則有資格者とする）等 37 名に対して研修を行った．1 月 8 日～2 月 11 日はオンデマンド配信，1 月 31 日はライブ配信を実施した.

課程主任　　井野　敬子

1 月 8 日（木）～2 月 11 日（水）

小児科領域で対応する拒食症：概論	作田　亮一
摂食障害の小児科外来診療：治療契約から入院の同意まで	井上　建
小児病棟における入院治療の実際	大谷　良子
児童精神科における治療－小児科からの紹介後－	宇佐美　政英
日々の看護	山田　理江

1 月 31 日（土）

質疑応答	作田　亮一・井上　建
	大谷　良子・宇佐美　政英
	山田　理江・森野　百合子

講師名簿

井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
作田　亮一	獨協医科大学医学部特任教授
井上　建	獨協医科大学医学部准教授
	埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
大谷　良子	公益社団法人発達協会王子クリニック院長
宇佐美　政英	国立国府台医療センター児童精神科診療科長
	子どものこころ総合診療センター長
山田　理江	東京都立松沢病院看護師
森野　百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院なります子どものこころケアセンター長

《発達障害者支援研修》

令和８年１月 28 日から１月 29 日まで，第６回発達障害者支援研修：行政実務研修を実施し，「かかりつけ医講習を行う行政の方への実務研修」を主題に，行政的な立場で各自治体の「かかりつけ医等発達障害対応力向上研修」の企画・実施に携わる者，もしくは発達障害者支援センター職員，かかりつけ医研修にかかわることが期待される医師あるいは医療関係者 23 名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　髙橋　長秀　　課程副主任　江頭　優佳・古家　宏樹

1 月 28 日（水）

自治体における発達障害児者とその家族への支援体制整備	今出　大輔
発達障害者支援の施策について（行政説明）	山根　和史
発達障害と権利擁護	安保　千秋
発達障害と就労支援の実際	西村　浩二

1 月 29 日（木）

発達障害支援における家庭・教育・福祉の連携	笹森　洋樹
医療における課題－初診待機解消，初期診療医の育成，医療連携	本田　秀夫
発達障害と児童福祉	上野　千穂
発達障害に関する支援情報の活用	山脇　かおり 与那城　郁子

講師名簿

髙橋　長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭　優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
古家　宏樹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
今出　大輔	こども家庭庁支援局障害児支援課発達障害児支援専門官
山根　和史	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害施策調整官
安保　千秋	都大路法律事務所弁護士
西村　浩二	静岡県東部発達障害者支援センターアスタ発達障害者支援コーディネーター
笹森　洋樹	常葉大学教育学部特任教授
本田　秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授
上野　千穂	京都市児童福祉センター診療所所長
山脇　かおり	国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターセンター長
与那城　郁子	国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター 発達障害情報分析専門官

《令和 7 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 8 年 1 月 20 日から 1 月 21 日，令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2 を実施し，「精神保健福祉センター，病院，保健所等において，PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ，精神保健医療従事者等に対し，最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ，有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に，症例呈示のため，職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士），過去に PTSD 研修 A.通常コースを受講している方 31 名に対して対面研修を行った.

課程主任　　堀　弘明

1 月 20 日（火）

PTSD の診断と評価	大江　美佐里
PTSD の心理療法各論 1	伊藤　正哉
PTSD の心理療法各論 2	井野　敬子
複雑性 PTSD	丹羽　まどか・金　吉晴

1 月 21 日（水）

トラウマ後の急性期対応と長期対応 ～新潟県中越地震と東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	塩入　俊樹
PTSD のソーシャルワーク	大岡　由佳
遷延性悲嘆症の心理療法	中島　聡美
PTSD の神経科学と薬物療法	堀　弘明

講師名簿

堀　弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
伊藤　正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江　美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
塩入　俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授
大岡　由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授
中島　聡美	武蔵野大学人間科学部教授

《入院者訪問支援事業実務者研修》

令和８年１月 30 日，第４回入院者訪問支援事業実務者研修を実施し,「入院者訪問支援事業の意義と目的を理解したうえで,事業の実施体制の構築,各種会議の運営や事務局の役割や訪問支援員のバックアップのあり方等につき,講義とグループワークを通じて習得する」を主題に,入院者訪問支援事業の実施を検討しているまたは事業を実施中の都道府県, 政令市, 中核市, 特別区における事業担当者（行政職員）および入院者訪問支援事業の実務を担当する方（事業委託先等）など 21 名に対して対面研修を行った.

課程主任　　藤井　千代

1 月 30 日（金）

事業の意義と実施体制の構築	藤井　千代・角野　太一 上坂　紗絵子・彼谷　哲志 西田　由美・武石　彩緒衣
事業開始に向けての準備	名雪　和美
不測の事態への対応 支援員のバックアップとスキルアップ	藤井　千代・角野　太一 上坂　紗絵子・彼谷　哲志 西田　由美・武石　彩緒衣

講師名簿

藤井　千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部部長
名雪　和美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部研究員
角野　太一	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター理事
上坂　紗絵子	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター運営会員
彼谷　哲志	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター運営会員
西田　由美	滋賀県健康医療福祉部障害福祉課主査
武石　彩緒衣	滋賀県健康医療福祉部障害福祉課

《精神科救急医療体制整備研修》

令和 8 年 2 月 14 日,第 5 回精神科救急医療体制整備研修を実施し,「精神科救急医療体制整備事業の現状と課題について理解したうえで，精神科救急医療体制整備に関連する課題やデータの見方，ReMHRAD の見方と使い方等を学び，各自治体の精神科救急体制整備に係る施策の立案やモニタリングのためのスキルを習得する」を主題に，都道府県精神科救急医療体制整備事業担当者および精神医療相談窓口相談担当者 32 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　藤井　千代

2 月 14 日（土）

精神科救急医療体制整備事業について	厚生労働省
精神科救急医療体制の現状と課題	平田　豊明・花岡　晋平
措置入院運用に関する現状と課題	藤井　千代
各自治体の危機介入及び措置入院運用の現状と課題等に関する グループワーク①	塚本　哲司
各自治体の危機介入及び措置入院運用の現状と課題等に関する グループワーク②	塚本　哲司

講師名簿

藤井　千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部 部長
平田　豊明	千葉県精神科医療センター名誉病院長
花岡　晋平	千葉県総合救急災害医療センター医長
塚本　哲司	特定非営利活動法人メンタルケア協議会特任相談員

《令和 7 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 8 年 2 月 9 日から 2 月 10 日まで,令和 7 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コースを実施し,「犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する.」を主題に,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,社会福祉士,作業療法士,公認心理師,臨床心理士の資格を有する方,または公的機関や教育機関に勤務し,精神保健医療福祉業務に従事する方 297 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　堀　弘明

2 月 9 日（月）

犯罪被害者支援	大岡　由佳
犯罪被害者に係る司法制度	柑本　美和
トラウマを抱えた遺族の悲嘆の理解とその支援	瀬藤　乃理子
被害を受けた子どもへの事実の調査：司法面接	仲　真紀子

2 月 10 日（火）

虐待を受けた子どもの治療	小平　雅基
犯罪被害者の PTSD と治療	小西　聖子
性被害を受けた子どもの理解と支援	野坂　祐子
性被害を受けた成人の理解と支援	齋藤　梓

講師名簿

堀　弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
大岡　由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授
柑本　美和	東海大学法学部法律学科教授
瀬藤　乃理子	兵庫県こころのケアセンター上席研究主幹
仲　真紀子	理化学研究所理事長特別補佐
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
小西　聖子	武蔵野大学学長
野坂　祐子	大阪大学大学院人間科学研究科教授
齋藤　梓	上智大学総合人間科学部心理学科准教授

研修の推移

	国立精神衛生研究所			
	昭和36年6月～		54年度～	61年度
研修課程	・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修

	国立精神・神経センター精神保健研究所					
研	61年度		62年度～	平成18年度～	20年度	21年度
修課程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	→ →	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

	独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	22年度	23年度	24年度
修課程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

	独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
研	25年度	26年度	27年度
修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ（福祉型）研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー	・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ（福祉型）研修 ・医療における包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・心理職自殺予防研修 ・ﾒﾝﾀﾙﾍﾙｽ問題への初期対応指導者研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・精神科急性期医療の質を考える研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修
課			
程			

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	28年度	29年度	30年度
修	・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・地域自殺対策推進企画研修 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・摂食障害看護研修	・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・発達障害支援医学研修 ・摂食障害治療研修 ・地域精神科モデル医療研修プレセミナー ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・摂食障害治療研修 ・精神障害者地域包括支援研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
課			
程			

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研修課程	31・令和1年度	2年度	3年度
	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修： 精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	・摂食障害治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和3年度PTSD対策専門研修

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研修課程	4年度	5年度	6年度
	・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・災害時PFAと心理対応研修 ・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・うつ病の標準治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・摂食障害治療研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和4年度PTSD対策専門研修 ・STAIR Narrative Therapyワークショップ ・強迫症対策医療研修認知行動療法コース	・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・摂食障害治療研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・うつ病の標準治療研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和5年度PTSD対策専門研修	・摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～ ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・強迫症対策医療研修基本コース ・入院者訪問支援事業研修 ・統合失調症の標準治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・うつ病の標準治療研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和6年度PTSD対策専門研修

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	7年度		
修 課 程	・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～ ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・入院者訪問支援事業実務者研修 ・摂食障害小児治療研修 ・摂食障害専門研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・統合失調症の標準治療研修 ・うつ病の標準治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・令和7年度PTSD対策専門研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修		

令和7年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申込み方法 WEB	申込み方法 自治体推薦	申込み期間（センター書類必着日）	受講料	定員	主任 副主任
令和7年 オンデマンド配信 5月1日（木）～5月31日（土） ライブ配信：5月24日（土）	＜オンライン開催＞ （第10回）摂食障害外来治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～	○		3月3日（月）～3月31日（月）	¥5,000	300	井野　敬子
オンデマンド配信 6月17日(火)～7月21日(月) ライブ配信：7月12日(土)	＜オンライン開催＞ (第5回）摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～	○		4月7日（月）～5月9日(金)	¥4,000 団体料金 ¥12,000	300	井野　敬子
6月25日（水）～6月26日（木）	＜オンライン開催＞ （第6回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅠ		○	4月7日（月）～4月30日（火） （5月16日（金））	無料	50	高橋　長秀 江頭　優佳
8月7日（木）	＜対面開催＞ （第3回）入院者訪問支援事業実務者研修	○		5月7日（水）～6月13日（金）	¥8,000	50	藤井　千代
オンデマンド配信 7月28日（月）～8月31日（日） ライブ配信　：8月24日（日）	＜オンライン開催＞ (第2回）摂食障害小児治療研修	○		5月26日（月）～6月16日（月）	¥4,000 団体料金 ¥12,000	300	井野　敬子
9月3日（水）～9月5日(金)	＜オンライン開催＞ (第22回）摂食障害専門研修 （後援：日本摂食障害学会）	○※		6月9日(月)～6月30日(月)	¥24,000	100	井野　敬子
9月3日（水）～9月5日(金)	＜オンライン開催＞ (第38回）薬物依存臨床医師研修	○		6月16日（月）～7月7日（月）	¥24,000	50	松本　俊彦 嶋根　卓也
	(第26回）薬物依存臨床看護等研修					50	
9月7日（日）	＜オンライン開催＞ (第4回）統合失調症の標準治療研修	○		6月9日（月）～7月22日（火）	¥8,000	80	橋本　亮太
9月21日（日）	＜オンライン開催＞ (第4回）うつ病の標準治療研修	○		6月23日（月）～8月4日（月）	¥8,000	80	橋本　亮太
9月24日（水）～9月25日（木）	＜オンライン開催＞ （第6回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅡ		○	7月1日（火）～7月22日（火） （8月8日（金））	無料	50	高橋　長秀 江頭　優佳 古家　宏樹
対面：10月8日(水) ｵﾝﾗｲﾝ：10月16日(木)	＜対面／オンライン開催＞ （第15回）災害時PFAと心理対応研修	○※		7月14日(月)～7月31日(木)	¥16,000	50	堀　弘明 大沼　麻実
オンデマンド配信 10月17日（金）～11月20日（木） ライブ配信 11月9日（日）	＜オンライン開催＞ (第11回）摂食障害外来治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～	○		8月8日（金）～9月8日（月）	¥5,000	300	井野　敬子
10月24日（金）	＜オンライン開催＞ 令和7年度PTSD対策専門研修 A. 通常コース１（臨床コース）	○※		9月8日(月)～9月30日(火)	無料	200	堀　弘明

研　修　日　程	課　程　名	申込み方法		申込み期間 （センター書類必着日）	受講料	定員	主　任 副主任
		WEB	自治体推薦				
11月3日（祝・月）～ 11月5日（水）	＜対面開催＞ （第17回）認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		8月25日（月）～9月16日（火）	¥24,000	60	松本　俊彦 今村　扶美
11月13日（木）	＜オンライン開催＞ （第3回）精神保健医療福祉データ行政活用研修	○		9月1日（月）～9月30日（火）	¥4,000	100	黒田　直明 臼田　謙太郎
11月19日（水）～11月20日（木）	＜オンライン開催＞ （第6回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅢ		○	8月25日(月）～9月12日（金） （9月30日（火））	無料	50	高橋　長秀 江頭　優佳 古家　宏樹
11月20日（木）	＜オンライン開催＞ 令和7年度PTSD対策専門研修 A. 通常コース２(行政・支援者コース)	○※		9月8日(月)～10月6日(月)	無料	200	堀　弘明
オンデマンド配信 11月20日（木）～12月24日（水） ライブ配信 12月14日（日）	＜オンライン開催＞ （第6回）摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～	○		9月8日（月）～10月9日（木）	¥4,000 団体料金 ¥12,000	300	井野　敬子
12月10日（水）～ 12月11日(木)	＜オンライン開催＞ 令和7年度PTSD対策専門研修 B.　専門コース1	○※		9月8日(月)～11月16日（日）	無料	150	堀　弘明
オンデマンド配信 1月8日（木）～2月11日（祝・水） ライブ配信 令和8年1月31日（土）	＜オンライン開催＞ （第3回）摂食障害小児治療研修	○		10月20日（月）～11月21日（金）	¥4,000 団体料金 ¥12,000	300	井野　敬子
1月20日(火）～1月21日(水)	＜対面開催＞ 令和7年度PTSD対策専門研修 B.　専門コース2	○※		9月8日(月)～11月30日（日）	無料	60	堀　弘明
1月28日（水）～1月29日（木）	＜オンライン開催＞ （第6回）発達障害者支援研修： 行政実務研修		○	10月20日（月）～11月11日（火） （11月28日（金））	無料	50	高橋　長秀 江頭　優佳 古家　宏樹
1月30日（金）	＜対面開催＞ （第4回）入院者訪問支援事業実務者研修	○		11月4日（火）～11月28日（金）	¥8,000	50	藤井　千代
2月9日（月）～ 2月10日（火）	＜オンライン開催＞ 令和7年度PTSD対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース	○※		9月8日（月）～1月4日（日）	無料	300	堀　弘明
2月14日（土）	＜オンライン開催＞ （第5回）精神科救急医療体制整備研修	○		11月17日（月）～12月22日（月）	無料	60	藤井　千代

※
推薦状
が必要
な研修

Ⅳ．ランチョンセミナー開催実績

1．令和７年度　精神保健研究所　ランチョンセミナー

（7 月以降毎月第 3 水曜日、12：00～13：00）

日付	回次	演題	発表研究部	演者	参加人数
2025 年 5 月 19 日	第76回	部長による各研究部の紹介	所長室 睡眠・覚醒障害研究部 公共精神健康医療研究部 精神薬理研究部 薬物依存研究部	張 賢徳 栗山健一 黒田直明 池田和隆 松本俊彦	58名
2025 年 6 月 30 日	第77回	部長による各研究部の紹介	地域精神保健・法制度研究部 行動医学研究部 知的・発達障害研究部 精神疾患病態研究部 児童・予防精神医学研究部	藤井千代 堀 弘明 髙橋長秀 橋本亮太 住吉太幹	62名
2025 年 7 月 16 日	第78回	脳画像と認知機能検査のバイオマーカーに基づいた新たな精神疾患診断分類～客観的なバイオマーカーに基づく診断･病態解明･治療法開発の未来～	精神疾患病態研究部	室長 松本純弥	34名
2025 年 8 月 20 日	第79回	間違った論文を世に出さないために：Lancet Psychiatry と JAMA Psychiatry で私が伝えたかったこと	行動医学研究部	室長 成田　瑞	43名
2025 年 9 月 17 日	第80回	依存性物質感受性及び物質依存脆弱性・重症度等個人差に寄与する遺伝要因の探索研究	精神薬理研究部	室長 西澤大輔	23名
2025 年 10 月 15 日	第81回	精神科医療における隔離・身体的拘束の現状と最小化のための方法について	公共精神健康医療研究部	リサーチフェロー 三宅美智	42名

2025年11月19日	第82回	臨床から社会へ：日本における規制薬物使用の“特徴”と“規模”をつなぐエビデンス	薬物依存研究部	リサーチフェロー 水野聡美	41名
2025年12月17日	第83回	睡眠・生体リズムにみられる個人差	睡眠・覚醒障害研究部	室長 北村真吾	46名
2026年1月21日	第84回	『精神障害にも対応する地域包括ケアシステム』にむけたアウトリーチ支援	地域精神保健・法制度研究部	室長 佐藤さやか	33名
2026年2月18日	第85回	気分障害における自閉的特性の臨床的意義—健康状態・QOLとの関連—	児童・予防精神医学研究部	室長 山田理沙	29名
2026年3月18日	第86回	ADHDの時間知覚機能について	知的・発達障害研究部	室長 江頭優佳	35名

令和7年度　精神保健研究所リサーチ委員会

堀 弘明、北村真吾、小池純子、大沼麻実、川口敬之

Ⅴ．精神保健研究所　研究報告会　プログラム・抄録集

令和６年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所　研究報告会

会　期：令和 8 年 3 月 16 日 （月）
会　場：教育研修棟 ユニバーサルホール（対面）

9:15	開場
9:30	開会の辞（理事長　中込和幸）　ご挨拶（所長　張　賢徳）
9:40	地域精神保健・法制度研究部（座長　藤井千代） 演者　河野稔明 演者　松長麻美
10:10	知的・発達障害研究部（座長　髙橋長秀） 演者　江頭優佳 演者　古家宏樹
10:40	休憩
10:50	薬物依存研究部（座長　松本俊彦） 演者　富山健一 演者　水野聡美
11:20	公共精神健康医療研究部（座長　黒田直明） 演者　黒田直明 演者　堀口寿広
11:50	昼食
12:50	精神疾患病態研究部（座長　橋本亮太） 演者　松本純弥 演者　長谷川尚美
13:20	精神薬理研究部（座長　池田和隆） 演者　三輪秀樹 演者　名古(岩下)由佳
13:50	休憩
14:00	児童・予防精神医学研究部（座長　住吉太幹） 演者　Andrew Stickley 演者　和田　歩
14:30	睡眠・覚醒障害研究部（座長　栗山健一） 演者　吉池卓也 演者　長尾賢太朗
15:00	行動医学研究部（座長　堀　弘明） 演者　勝沼るり 演者　小川眞太朗
15:30	閉会の辞（所長　張　賢徳）
15:40	

令和７年度 精神保健研究所リサーチ委員会
堀 弘明 北村真吾 小池純子 大沼麻実 川口敬之

お知らせとお願い

〈発表者の皆様へのお願い〉

1. 発表時間について
   発表時間は、1 演題につき 14 分（発表 10 分、質疑応答 4 分）です。発表者の交替を含め 1 演題 15 分の時間内でおさめてください。
2. 発表形式および発表用ファイルの仕様
   発表は、Power Point で作成したファイルを投影して発表してください。発表スライドは当日に USB で持参し、開始前や休憩時間に発表用 PC(Windows)のデスクトップにコピーしてください。発表後のファイルは事務局が責任を持って削除します。持ち込み PC の利用も可能ですが、ご自身で接続して下さい（Macintosh の場合、コネクターをご持参ください）。
3. お願い
   当日は、少なくともひとつ前の回に行われている発表までには待機してください。発表時間の経過時間に合わせて、卓上ベルを鳴らして合図いたします。発表時間終了時（10 分）にベルを 1 回、質疑応答の終了時（4 分）に 2 回ならします。時間の遵守をお願いします。

〈座長の方へのお願い〉

1. 座長について
   座長は、各部長にお願いします。
   タイトなスケジュールですので、発表時間の厳守にご協力をお願いいたします。
2. お願い
   座長と発表者は、ひとつ前の発表までには待機をお願いいたします。

<すべての参加者の皆様へ>

1. 対面開催で、オンラインあるいはハイブリッドでの配信はありません。
2. すべてのセッションにご参加いただいた先生には、若手発表奨励賞の投票をいただきます。
   投票方法は当日にご案内を申し上げます。
3. 各部長は、若手奨励賞とともに青申賞の投票をお願い申し上げます。投票方法につきましては当日にご案内を差し上げます。
4. 研究報告会終了後に参加者全員で集合写真を撮影する予定です。

プログラム

【開会】 9:30 ～ 9:40

開会の辞 国立精神・神経医療研究センター 理事長 中込和幸

ご挨拶 精神保健研究所 所長 張 賢徳

【報告1】 9:40 ～ 10:10 地域精神保健・法制度研究部 座長 藤井千代

＊医療観察法ガイドライン改訂に向けた入院対象者の類型化
○河野稔明，小池純子，竹田康二，壁屋康洋，曽雌崇弘，岡野茉莉子，松長麻美，藤井千代，平林直次

身体接触への反応に焦点を当てた授乳時の否定的感情とボンディング感情の関係の検討
○松長麻美，羽田彩子，小池純子

【報告2】 10:10 ～ 10:40 知的・発達障害研究部 座長 髙橋長秀

発達性読み書き障害を有する児の漢字熟語認知時の脳磁図活動
○江頭優佳，加賀佳美，軍司敦子，北洋輔，木村元洋，廣永成人，竹市博臣，林小百合，金子裕，高橋秀俊，花川隆，岡田俊，稲垣真澄

新生仔期グルタミン酸NMDA受容体遮断がラットの行動と脳領域間の構造的結合性に及ぼす影響
○古家宏樹，領家梨恵，釣木澤朋和

（休憩）

【報告3】 10:50 ～ 11:20 薬物依存研究部 座長 松本俊彦

わが国で乱用される未規制物質の薬理学的特性の解析
○富山健一，石井香織，三輪秀樹，加藤孝一，辻厳一郎，舩田正彦，嶋根卓也，松本俊彦

＊日本の中高生の薬物乱用経験が増え始める時期と介入のヒント ―全国中高生調査の結果より―
○水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦

【報告4】　11:20 ～ 11:50　公共精神健康医療研究部　座長 黒田直明

研究者は政策に何ができたか ―障害福祉計画の成果目標見直しに関わった3年間
○黒田直明，岡田隆志，森山葉子

行動制限と医療安全に着目した精神科医療の質の研究
○堀口寿広，黒田直明，瓶田貴和，吉村直記，野田隆政，張賢徳

（昼食）

【報告5】　12:50 ～ 13:20　精神疾患病態研究部　座長 橋本亮太

側脳室拡大（EV）と認知機能障害（CI）があるEVCI患者と統合失調症患者の認知機能プロファイル比較
○松本純弥，伊藤颯姫，住吉チカ，安田由華，長谷川尚美，藤本美智子，山森英長，住吉太幹，橋本亮太

＊EGUIDEプロジェクト10年目の成果報告 ～全国への拡大と実臨床に与えた影響～
○長谷川尚美，堀輝，山田恒，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田健，古郡規雄，橋本亮太

【報告6】　13:20 ～ 13:50　精神薬理研究部　座長 池田和隆

ZBTB18/RP58ハプロ不全による知的障害モデルマウスにおける感覚過敏についての検証
○三輪秀樹，池田和隆，岡戸晴生

＊アルコール代謝関連遺伝子多型と飲酒行動および心理的アウトカムとの関連：性差の観点からの検討
○名古(岩下)由佳，西澤大輔，池田和隆

（休憩）

【報告7】　14:00 ～ 14:30　児童・予防精神医学研究部　座長 住吉太幹

Problematic gambling and alcohol misuse among adults in Japan
○Andrew Stickley, Aya Shirama, Risa Yamada, Tomiki Sumiyoshi

＊左側頭領域への経頭蓋直流刺激が統合失調症の意味記憶に与える影響
○和田歩，住吉チカ，Andrew Stickley，吉村直記，山田悠至，住吉太幹

【報告8】 14:30 ～ 15:00 睡眠・覚醒障害研究部 座長 栗山健一

死別後悲嘆における回避の生理的意義：前向き観察研究
〇吉池卓也，矢嶌智貴，内海智博，Srishti Tripathi，河村葵，長尾賢太朗，阿部十成，伊藤正哉，中島聡美，栗山健一

＊東日本大震災被災者における免疫・炎症プロファイルとうつ症状の関連：不眠と災害ストレスによる二重調整分析
〇長尾賢太朗，吉池卓也，河村葵，内海智博，髙橋恵理矢，南學正仁，北村真吾，栗山健一

【報告9】 15:00 ～ 15:30 行動医学研究部 座長 堀 弘明

＊神経性やせ症に特異的な脳構造変化の検討 ― 低体重健常群との比較検証 ―
〇勝沼るり，髙村恒人，濱本裕美，佐藤康弘，須藤佑輔，平野好幸，野原伸展，吉内一浩，戸瀬景茉，磯部昌憲，兒玉直樹，権藤元治，髙倉修，吉原一文，守口善也，関口敦

エタノールアミンとうつ病：新規バイオマーカーおよび新たな治療標的としての可能性
〇小川眞太朗，服部功太郎，秀瀬真輔，篠山大明，太田深秀，宮川友子，辰巳めぐみ，松村亮，吉田寿美子，野田隆政，竹林実，大盛航，板垣圭，梶谷直人，岡田-土岡麻美，菱本明豊，朴秀賢，蓬莱政，門司晃，溝口義人，立石洋，村川-平地徹，吉村玲児，井形亮平，金吉晴，堀弘明，功刀浩

【閉会】 15:30 ～ 15:40

閉会の辞 精神保健研究所 所長 張 賢徳

＜凡例＞ ＊ 若手奨励賞選考対象演題 〇 発表者

抄　　録

地域精神保健・法制度研究部

医療観察法ガイドライン改訂に向けた入院対象者の類型化

○河野稔明[1)]，小池純子[1)]，竹田康二[2)]，壁屋康洋[3)]，曽雌崇弘[4)]，
岡野茉莉子[1)]，松長麻美[1)]，藤井千代[1)]，平林直次[2)]

1）地域精神保健・法制度研究部，2）病院 司法精神診療部，
3）国立病院機構 榊原病院，4）目白大学

【緒言】医療観察法の処遇ガイドラインは，重複障害がなく，治療抵抗性でない統合失調症の対象者を想定しているが，実際の対象者は多様で，個別性への配慮が必要である。本研究では，対象者特性および治療経過を多変量的にとらえた場合にどのようなパターンが存在するかを把握するため，対象者を類型化することを目的とした。

【方法】重度精神疾患標準的治療法確立事業の入院データベースの研究利活用として，2021年6月までに入院した3,743人のデータの提供を受けた。主診断（ICD-10コードF＋数字1桁，F4～6・9は「F4569」に一括）ごとに，入院時年齢（以下，年齢），性別，重複障害，対象行為で構成される静的因子に，退院時処遇，在院期間，共通評価項目を追加し，投入変数を変えてTwoStepクラスター分析を行った。分析結果に対し，クラスター（以下，Cl）間の各変数の値の分布などを検討し，統計学的・臨床的観点に基づく研究班内の議論を踏まえて最善の変数投入パターンを選別した。さらに，抽出されたClをグループ化し，ガイドライン改訂の際に定義する対象集団の原型とする12の基本類型を得た。本研究は，当センター倫理委員会および重度精神疾患標準的治療法確立事業研究利活用委員会の承認を得た。

【結果】主診断F2では，年齢，性別，重複障害を投入した場合に，9個のClが生成された。うち5個は年齢と性別の組み合わせで（男性・若年，男性・中年，男性・高齢，女性・若年，女性・中年～高齢），残る4個は重複障害で（重複F1，重複F7・男性，重複F7・女性，重複F8）で規定された（括弧内はClのラベル）。Cl「重複F8」は，5年以上の超長期入院が25.0%と非常に多く，重複障害の中でもF8は転帰（退院時処遇と在院期間から変数化）に特異な寄与を示した。一方，前5個のClにおいて年齢と性別は転帰に強く関連したが，類型というより程度の違いとして捉えられた。このため9個のClを「F8重複」「F1/F7重複」「重複障害なし」の3つの基本類型にグループ化した。主診断F3では，年齢，性別，対象行為で6個のClが生成された。Cl「女性・殺人」は子が被害者の割合が63.4%と有意に高かった。Cl「傷害」「強盗・性暴力」はそれぞれ，双極性障害（F30～31）が91.5%，93.3%で，成人刑法犯の被起訴歴が26.1%，33.3%と有意に高かった。このため6個のClを「嬰児殺害の女性」「双極性障害の粗暴行為」「それ以外」の3つの基本類型にグループ化した。このほか，F0（Cl 3個）から「高齢者・認知症」「比較的若年・器質性精神障害」の2つ，F1（Cl 2個），F7（Cl 2個），F8（Cl 2個）およびF4569（Cl 4個）から各1つ（単一）の基本類型を得た。

【結論】入院対象者の特性および治療経過に基づき，計12個の基本類型を得た。ガイドライン改訂に向けて治療・処遇の内容を検討する基礎として活用されることが期待される。

地域精神保健・法制度研究部

身体接触への反応に焦点を当てた
授乳時の否定的感情とボンディング感情の関係の検討

○松長麻美[1)]，羽田彩子[1) 2)]，小池純子[1)]

1）地域精神保健・法制度研究部 2）東京科学大学大学院保健衛生学研究科

【背景および目的】近年、授乳時の母親の否定的感情や、不快性射乳反射（dysphoric milk ejection reflex: D-MER）と呼ばれる現象が報告されている（Cox, 2010; Heise & Wiessinger, 2011; Morns et al., 2022; Pettersson & Packalén, 2018; Stacey, 2020; Ureno et al., 2019; Ureno et al., 2018; Uvnas-Moberg & Kendall-Tackett, 2018)。D-MER は、産後うつとは区別される概念である（Cox, 2010）ものの、両者はしばしば併存する（Ureno et al., 2019)。しかし、D-MER の概念規定は未だ不明瞭であり、研究間で相違がある。加えて、D-MER には有効な治療法として児との skin-to-skin contact、児へのマッサージが挙げられている（Uvnas-Moberg, 2018）が、これらは児への情緒的絆の問題であるボンディング障害の行動上の特徴や支援とも類似している。実際にボンディング障害においても、児への直接授乳や接触への忌避感がみとめられることがあり、支援には児とのカンガルーケアの有効性が示唆されている（Takubo et al., 2019)。これより、D-MER を含む授乳時の否定的感情は、親密な関係性における身体接触に関するネガティブな感情的反応として、ボンディングの問題と関連する可能性が考えられる。本研究では、授乳時の否定的感情の背景に親密な関係性における身体接触へのネガティブな反応があることを想定し、授乳時の否定的感情とボンディング障害の関連を検証することを目的とした。

【方法】縦断研究デザインで妊産婦向けサービス利用者を対象として、産前と産後の 2 時点で質問紙調査を実施した。対象者は初回調査時点で妊娠 37 週以降の 20 歳以上の妊婦とし、産後の調査は産後 1 か月時に実施した。調査期間は 2024 年 10 月から 2025 年 1 月であった。分析には構造方程式モデリングを用いた。産前の変数として身体接触に対する抵抗感、性交後憂鬱、胎児ボンディング、産前の抑うつを、産後の変数として新生児ボンディング、産後の抑うつ、授乳時の感情を含め、これらの関連を検証した。本研究は東京科学大学医学部倫理審査委員会および国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た。

【結果】産後 1 か月時点での授乳時の感情と新生児へのボンディング感情、抑うつの間には有意な関連が見られた。また、胎児へのボンディング感情は授乳時の感情と産後の抑うつに関連し、性交後憂鬱は授乳時の感情、産前の抑うつ、胎児へのボンディング感情に関連した。また、身体接触への抵抗感は性交後憂鬱、産前の抑うつおよびボンディング感情に関連した。モデル適合度は CMIN/df = 2.165、CFI = .913、RMSEA = 0.057 であった。

【結論】授乳時の否定的感情とボンディング感情の問題が関連しており、さらにこれらの背景要因として身体接触への抵抗感が関連する可能性が示唆された。今後、身体接触への抵抗感に焦点を当てた現象の解明により、有効な支援策の開発につながる可能性が考えられる。

知的・発達障害研究部

発達性読み書き障害を有する児の漢字熟語認知時の脳磁図活動

○江頭優佳[1)]，加賀佳美[1) 2)]，軍司敦子[1) 3)]，北 洋輔[4) 5)]，木村元洋[6)]，廣永成人[7)]，竹市博臣[1) 8)]，林小百合[1) 9)]，金子 裕[1)]，高橋秀俊[1) 10)]，花川 隆[1) 11)]，岡田 俊[1) 12)]，稲垣真澄[1) 13)]

1）知的・発達障害研究部，2）山梨大学，3）横浜国立大学，4）University of Helsinki，5）慶應義塾大学，6）産業技術総合研究所，7）九州大学，8）理化学研究所，9）筑波大学， 10）高知大学， 11）京都大学， 12）奈良県立医科大学，13）鳥取県立鳥取療育園

【背景と目的】欧米諸国では、読字障害は音韻処理の問題に起因すると考えられている。一方、日本語における発達性読み書き障害を有する児は漢字の習得に困難を抱えることが多く、病態背景の一部に視覚情報処理障害を含む可能性が示されている。しかしながら、当事者の漢字読字時の視覚認知処理の特徴については不明点が多い。そこで本研究では、脳磁図を用いて日本語を母語とする発達性読み書き障害における漢字熟語認識の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】7名の読み書き障害を有する右利きの男児（13.5±1.6歳）と、定型発達児14名（12.3±1.5歳、男児5名）から脳磁図と脳構造画像を取得した。刺激として20%の逸脱刺激を含む文字刺激の系列を被験者の右視野1.5~3.6度に、同時にdistractorとして無音動画を中心視野に呈示した。刺激系列の条件は（1)フォントが異なる同一熟語、(2)正誤熟語、(3)(2)から作成した2文字の非文字とした。脳磁図の解析には最小ノルム法を用い、解析部位は後頭極および側副溝後横領域（posterior transverse region of the collateral sulcus：ptCoS）とした。ptCoSは先行研究において学習済みの熟語の判別に関わる可能性が示唆されている。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受け、承認事項に則って実施した（承認番号A2018-031)。

【結果と考察】疾患群において、非文字呈示時のptCoS活動が定型発達群よりも低く、漢字呈示時よりも非文字呈示時に低かった。加えて疾患群では漢字呈示時のptCoS活動が、注意欠陥・多動性障害（ADHD）症状スコアとは独立して、書字能力と正の相関を示した。これらの結果は、日本語の発達性読み書き障害を有する児において漢字呈示時のptCoS活動が書字能力を反映していることを示唆する。ptCoSの機能的偏倚は日本語の発達性読み書き障害における漢字書字機能の神経基盤に関連している可能性がある。

利益相反の開示：本発表に関して、開示すべき利益相反はない。

知的・発達障害研究部

新生仔期グルタミン酸NMDA受容体遮断がラットの行動と脳領域間の構造的結合性に及ぼす影響

○古家宏樹[1)]，領家梨恵[2)]，釣木澤朋和[3)]

1)知的・発達障害研究部，2)新潟医療福祉大学，3)産業技術総合研究所

【序論】中枢神経系における主要な興奮性神経伝達物質であるグルタミン酸とその受容体の一つであるN-methyl-D-aspartate（NMDA）受容体は、周産期の脳発達において重要な役割を果たしている。新生仔期にNMDA受容体拮抗薬を反復投与されたラットは、後に活動性の亢進や、感覚ゲーティング、社会的行動、学習・記憶の障害といった多様な行動異常を示す。しかしながら、これらの行動異常の背景にある神経学的メカニズムは明らかとなっていない。NMDA受容体は、脳発達期の神経軸索の伸長や分岐に関わっていることが示唆されている。そのため、新生仔期のNMDA受容体遮断は脳領域間のネットワーク形成に影響を及ぼす可能性が考えられる。神経発達症の動物モデルとして広く用いられている母体免疫活性化（maternal immune activation: MIA）モデルにおいても、発達期におけるNMDA受容体機能低下や興奮／抑制バランスの攪乱を介した神経回路形成異常が報告されており、発達期NMDA受容体機能の障害は、遺伝要因および環境要因が収斂する共通の神経発達基盤である可能性が示唆されている。本研究では、新生仔期NMDA受容体遮断ラットの示す行動異常と関連する脳の構造的結合性の変化を探索することを目的とした。そのため、新生仔期にNMDA受容体拮抗薬MK-801を反復投与したラットを用いて複数の行動試験を行い、その後、脳拡散テンソル画像を取得し脳領域間の構造的結合性を評価した。

【方法】生後7-20日のWistar系雄ラットに1日2回、8時間の間隔をあけてMK-801 0.4 mg/kgあるいは生理食塩水を投与し、成体期にオープンフィールド試験、プレパルス抑制試験、Y字型迷路試験、社会的再認試験を行った。行動試験終了後、造影剤を含むパラホルムアルデヒドで脳を灌流固定し、ex vivo標本を作製した。脳構造および領域間結合性の解析には小動物用7テスラMRI装置を用い、拡散テンソル画像を取得した。ラット脳標準アトラスを用いて、得られた画像の前処理および位置合わせを行った。拡散画像データに基づきトラクトグラフィー解析を行い、脳領域間の構造的結合性を評価し、群間で有意に異なる結合ネットワークを同定した。

【結果と考察】新生仔期にMK-801を投与されたラットは、対照群と比較して移動活動量の亢進、自発的交替反応の減少、プレパルス抑制の低下を示した。脳構造的結合性解析の結果、MK-801群では小脳、聴覚系を含む感覚入力・感覚運動統合に関わる脳領域間において結合性の低下が認められた。またMK-801投与群では、海馬、視床、黒質、腹側淡蒼球などを含む複数の脳領域間において構造的結合性の増加も認められた。結果から、生後早期のNMDA受容体遮断は、広範囲にわたる脳領域間の結合性を変化させることで、活動性や感覚ゲーティング、記憶機能の異常を引き起こす可能性が示唆された。

薬物依存研究部

わが国で乱用される未規制物質の薬理学的特性の解析

○富山健一[1)]，石井香織[2)]，三輪秀樹[3)]，加藤孝一[4)]，辻厳一郎[5)]，
舩田正彦[6)]，嶋根卓也[1)]，松本俊彦[1)]

1)薬物依存研究部，2)NCNP 病院薬剤部，3)精神薬理研究部，4)神経研究所 RI 管理室，5)国立医薬品食品衛生研究所有機化学部，6)湘南医療大学薬学部

【背景】麻薬や覚醒剤と類似の作用を有する未規制物質（危険ドラッグ）や、医薬品の誤用・乱用が深刻な社会問題となっている。大麻成分の一つであるカンナビジオール（CBD）には法的規制がなく、CBD を原料として多様な危険ドラッグが合成・流通している現状がある。また、薬物摂取後に体内で代謝を受けて生成される活性代謝物が精神作用の主体となる、いわゆるプロドラッグ型物質も増加している。一方、医薬品の逸脱使用も顕在化しており、鎮咳成分であるデキストロメトルファン（DXM）の幻覚作用を目的とした過剰摂取に加え、国内未承認の麻酔薬エトミデートが「ゾンビたばこ」と称して乱用される事例も報告されている。本発表では、これらの危険ドラッグおよび医薬品乱用物質について、その薬理学的特性や作用機序を明らかにするための我々の取り組みを紹介する。

【方法】評価対象は、危険ドラッグとして合成カンナビノイド THC-O-acetate と THC-O-propionate、合成オピオイド（nitazene 系化合物）、医薬成分として DXM（代謝物デキストロファン・3-メトキシモルヒナン・3-ヒドロキシモルヒナン含む）とした。薬理作用を調べるために、カンナビノイド（CB_1）、μ-オピオイド、NMDA 受容体などを発現する細胞を作成し、Ca^{2+}蛍光指示薬 Fluo-4 やモノアミン類似蛍光物質 Neurotransmitter imitating Fluorophore (Molecular Devices)による細胞機能解析を行った。一般行動試験に加え、薬物依存形成の評価には、conditioned place preference（CPP）法などを用いた行動薬理学的解析も行った。

【結果】THC-O-acetate と THC-O-propionate の未変化体では、CB_1受容体アゴニスト作用を発現しなかったが、マウス投与後に体温下降や無動状態が発現したことから、カンナビノイド様作用が確認された。マウス血液サンプルを LC-MS/MS で分析したところ、acetate 体や propionate 体は消失し THC が検出された。Nitazene 系化合物においても、未変化体およびその代謝物で強いオピオイド作用が認められた。マウスを使用した CPP 法による薬物依存性の評価では、THC-O-acetate と THC-O-propionate や nitazene 系化合物において、有意な CPP の発現、すなわち報酬効果の発現が認められた。DXM は強いセロトニン取込み阻害作用を有する一方で、代謝物デキストロファンには NMDA 受容体拮抗作用が認められた。その他の DXM 代謝物も高濃度条件下では非選択的に複数の受容体等へ作用する傾向が確認された。

【考察】本研究で評価した化合物はいずれも、未変化体のみならず、体内で生成される活性代謝物においても精神作用に寄与する特徴を有していた。近年、側鎖修飾により一時的に薬理活性を低下させ、体内代謝を介して麻薬成分へ変換される物質が増加しており、薬物評価において特に注意を要する状況となっている。フェンタニルが代謝により薬理活性をほぼ失うのに対し、nitazene 系化合物は活性代謝物を生じることから乱用時の危険性が極めて高く、北米では重篤な健康被害も報告されている。DXM においても、幻覚作用に加え、セロトニン症候群などの健康被害が生じる背景には、高濃度条件下で想定外の神経機能調節が生じている可能性が高い。従来、医薬品開発の過程では、過剰摂取など逸脱した使用を前提として評価されてこなかった側面があり、今後の薬物評価においては、代謝物を含めたより慎重かつ包括的な解析が必要であると考えられる。

薬物依存研究部

日本の中高生の薬物乱用経験が増え始める時期と介入のヒント
―全国中高生調査の結果より―

○水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦

【背景】

中学生・高校生における違法薬物や市販薬を含む薬物乱用への対応を検討するうえでは、薬物使用状況が学年の進行とともにどのように異なっているのかを把握することが参考になると考えられる。本研究では、日本の中学生・高校生を対象に、全体及び学年別の薬物乱用経験の割合を推定し、特に学年が一つ上がる移行期における違いや、飲酒・喫煙などの関連行動、薬物に対する認識との関連に着目した。

【方法】

2024 年に実施された 2 つの全国規模の学校調査データを統合した横断研究を行った。分析対象は約 8 万 8 千人の中学生・高校生であった。過去 1 年間における違法薬物使用経験および市販薬の乱用経験を指標とし、学年別の割合を統計的に推定した。さらに、違法薬物使用と、飲酒・喫煙、市販薬乱用、薬物へのアクセス認知、薬物使用に対する態度、薬物使用を誘われた際に断れる自信といった要因との関連について分析した。

【結果】

全国的にみると、違法薬物使用の割合は低く、過去 1 年の使用は約 0.4%であった。一方、市販薬の乱用経験は約 1.5%と、違法薬物使用よりも高い割合を示した。違法薬物使用経験は学年が上がるにつれて高くなる傾向がみられ、中学 1～3 年では低水準であったのに対し、高校 1 年以降で高くなる傾向が認められた。とくに、中学 3 年から高校 1 年への進学期において、使用割合の差が大きかった。一方、市販薬の乱用経験については、学年の進行に伴う明確な増加傾向は認められなかった。また、飲酒や喫煙をしている生徒、薬物を身近に感じている生徒、薬物使用に対する抵抗感が比較的弱い生徒、使用を断る自信が低い生徒では、学年による違法薬物使用の差が大きい傾向が認められた。

【結論】

学年による違いは同一個人の経時的変化を示すものではないものの、本横断研究から、日本の中高生における違法薬物使用は全体として低水準にある一方、学年の進行に伴って増加する傾向がみられ、とくに中学から高校への進学期が一つの節目となっている可能性が示唆された。本研究は因果関係を示すものではないが、薬物乱用予防の時期を検討する際の基礎的な資料となりうる。

公共精神健康医療研究部

研究者は政策に何ができたか
―障害福祉計画の成果目標見直しに関わった3年間

○黒田直明[1)]，岡田隆志[2)]，森山葉子[3)]

1)公共精神健康医療研究部，2)福井県立大学，3)国立保健医療科学院

【背景】演者は市町村職員として研究者と行政の間のみぞを埋める仕事を経験した後、2023年に精神保健研究所に就職し、2023-2025年に厚生労働科学研究（以下、厚労科研）の代表を初めて経験した（第8期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究)。本発表では3年間の研究活動を振り返り、行政色の強い研究資金である厚労科研における研究者の役割を考えたい。

【方法】外部の分担研究者2名と研究所内の多数の研究協力者を得た。当該計画分野の従来の成果目標・活動指標が精神科病院からの地域移行に偏り、「にも包括」理念を十分に反映していない、市町村の活動実態と乖離しているという仮説から開始した。自治体の実態調査、文献研究、患者報告型アウトカム（支援を受ける立場にある人のQOL、当事者のスティグマ体験）研究、自治体職員や当事者インタビューを踏まえた「にも包括」全体のロジックモデルの作成を行い、後半は基本指針や指標の見直しについて厚労省と協議を重ねた。

【結果】実態把握調査から仮説の妥当さが確認できた。自治体職員や当事者インタビューから、生活の質を中心とする当事者の体験の変化が「にも包括」の最終アウトカムであることを確認し、市町村を行動主体、地域の支援環境の変化を中間アウトカムとするロジックモデルを作成した。作成したロジックモデルをもとに、障害福祉計画の守備範囲、市町村が着手しやすい事業の範囲を厚労省と一緒に整理した。患者報告型アウトカムを自治体が計画策定時のニーズ把握調査や自治体が主催する協議の場で活用することの重要性を伝えるとともに、具体的な方法論としてAdult Social Care Outcomes Toolkit日本語版の精神疾患をもつ人における妥当性・信頼性、生活場面ごとのスティグマ体験を測定するDiscrimination and Stigma Scale Ultra Shortの日本語化と妥当性・信頼性の検証を行った。また、自治体が主催する協議の場の目指すゴール（中間アウトカム）が浸透していないことを指摘し、協議の場の運営チェックリストの作成を提案した。研究班の提案は部分的ないし間接的に反映され、協議の場の質の向上、一般住民を含めた普及啓発事業の推進、地域生活の支援体制に関する指標が追加された。研究班が提案した患者報告型アウトカムスケールの推奨には至らなかったが、先行事例のあるK6スケールを当該分野でも採用することを後押しした。

【考察】新たな政策の展開には多段階の検証と準備を要する。厚労科研が果たしうる役割のひとつは、より大きなコンテキストの中での当該施策の位置付けを提示し、次の次を見据えたうえで、現在の制約条件の中から取りうる具体策を共に考えることであった。

公共精神健康医療研究部

行動制限と医療安全に着目した精神科医療の質の研究

○堀口寿広[1)]，黒田直明[1)]，瓶田貴和[2)]，吉村直記[3)]，野田隆政[3)]，張 賢徳[4)]

1)公共精神健康医療研究部，2)病院 医療安全管理室，3)病院 精神診療部，4)所長室

精神科医療の質を表す指標（quality indicator: QI）には、指標としての適格性や有用性だけでなく通常業務から大きく逸脱しない範囲の作業でデータを容易に入手できることも求められる。これにより、国や地域による医療制度の違いなどを超え、自施設のサービスの確認にとどまらず国内外の他施設との比較にも活用できる指標となる。これまで国内外で、行動制限（隔離・身体拘束）の施行量を指標に用いた試みが複数報告されてきた。

国立精神・神経医療研究センター病院は、令和５年受審の医療機能評価機構の評価項目において医療安全管理および隔離拘束に関してすべて A 評価（適切に行われている）を得ており、一定の質の高い医療を提供している施設と言える。また、インシデントレポートについて、年間の報告数は令和５年度で 3a（軽微な治療や処置が必要となった場合）以下が 3,898 件､3a が 421 件と病床数の５倍という基準を満たしており､透明性の高い施設とされている。しかし、精神科の平均在院日数をみると、精神保健研究所が eCODO（行動制限等最適化データベース）を研究開発した平成 23（2011）年度の 51.5 日に比べて令和５（2023）年度は 39.9 日と大きく変わっており、当院の現在の質が海外の施設を比較対象に含めたときどの位置にあるのか改めて確認する必要がある。そこで、かねてより ACONAMI（Asian Consortium of National Mental Health Institutes）の関係者間で QI を共有することが関心事項となっていたことから､他施設と協議しながら QI を見出すことを目的として新たに研究を行うこととした。

今回、一連の研究の過程として、行動制限と医療安全の２つの領域を対象として指標の候補となる項目を探索する。２つの病棟（4 北病棟および５北病棟）の病床に令和６（2024）年中に新規に入院し治療を受けた患者 690 人を対象とし、電子カルテおよび医事システムから隔離・身体拘束の実施データと、院内インシデントレポートのデータをそれぞれ変数として抽出することとした。

個々の受療者の入院から退院までの流れをとらえたとき、インシデント（自傷、暴力等）を機に行動制限が実施されたり行動制限の解除後にインシデント（転倒等）が発生したりすることが想定される。ここでインシデントの発生を防ぐことは医療安全の事項であるが行動制限の施行量にも関係する可能性がある。つまり、行動制限とインシデントと 2 種類のイベントとみなし双方のデータを得て、どのような患者が多いのか、そして、イベント間の関連性を見ていくことは施設の提供する医療の質を表す指標の候補となると考えられる。

精神疾患病態研究部

側脳室拡大（EV）と認知機能障害（CI）がある EVCI 患者と統合失調症患者の認知機能プロファイル比較

○松本 純弥[1)]，伊藤颯姫[1)]，住吉チカ[1)2)3)]，安田由華[1)4)]，
長谷川尚美[1)]，藤本美智子[1)5)]，山森英長[1)6)7)]，住吉太幹[3)8)]，橋本亮太[1)]

1)精神疾患病態研究部， 2)福島大学人間発達文化学類， 3)児童・予防精神医学研究部， 4)医療法人フォスター生きる育む輝くメンタルクリニック， 5)大阪大学キャンパスライフ健康支援・相談センター保健管理部門， 6)大阪大学大学院 医学系研究科 情報統合医学講座 精神医学教室， 7)独立行政法人地域医療機能推進機構大阪病院神経精神科， 8)ナショナルセンター医療研究連携推進本部

精神疾患の診断は統合失調症（SZ）を含め、患者の主観的体験や行動症状を、問診や観察で評価して行われているが、新たな治療法開発のためにも、客観的な検査所見に基づく診断が求められている。そこで、先行研究では 3 標準偏差以上の側脳室拡大（Enlarged Ventricle: EV）と、中等度以上の認知機能障害（Cognitive Impairment: CI）を組み合わせた新たな精神疾患診断である EVCI が定義された。EVCI 群の多くは従来診断では SZ となり、脳波異常、稀な病的コピー数変異、頭部 MRI 検査で T2 強調画像での大脳白質の高信号所見が多く、治療経過では抗精神病薬に対する治療抵抗性、クロザピンに対する良好な治療反応性を示すといった特徴が報告されている。このような EVCI 症例は当初報告されたコホートとは独立した別コホートでも症例が見つかり再現性についても報告されている。このような EVCI の診断に用いられる CI は知能指数を用いた大まかな認知機能を測定している。EVCI の認知機能の各ドメインの詳細は、EV の有無、CI の有無に着目した先行研究で項目別に突出した特徴は見出されず、認知機能全般の障害が示唆された。本研究では EVCI の認知機能の詳細を EVCI ではない SZ 群と比較することでその特徴を検討した。

症例は EVCI 群 9 例、EVCI ではない SZ 群 267 例、健常対照(HC)群 1168 例を対象にした。認知機能の項目は、EVCI の分類に用いる CI、病前推定 IQ、現在の IQ の他に、ウェクスラー式知能検査（WAIS-III）の下位項目、ウェクスラー式記憶検査（WMS-R）の下位項目、語流暢性や注意機能・遂行機能の課題から 18 項目を用いた。本研究は、国立精神・神経医療研究センターの倫理委員会の承認を得て実施した。

EVCI 群は 18 の認知機能項目中 10 項目で HC 群より有意な障害を示した。SZ 群では 18 項目全体で HC 群より有意な障害を示した。EVCI 群と SZ 群の比較では、CI、現在 IQ、知覚統合で、SZ 群より EVCI 群の方が有意な障害を示した。全ての認知機能項目で、EVCI 群の方が SZ 群よりも効果サイズが大きく、認知機能障害の程度が高い可能性が示唆された。認知機能障害の効果サイズのグラフパターンは SZ 群と EVCI 群で類似していた。

今回調べた 18 の認知機能項目は、処理速度を始めとして、様々な先行研究により SZ では健常者よりも低下していると繰り返し報告されてきた。今回の EVCI 症例 9 例中 8 例は従来診断では SZ と診断されていたが、逆に SZ の中では EVCI の基準を満たす症例はごく少数に限られている。従来から SZ では CI がある群、CI がない群、病前から元々 IQ が低い群に分かれることが知られている。EV がなくて CI がある群は EVCI の診断になるには脳構造が大きく変化する必要があるが、EV があるものの CI がない群が症状増悪によって CI が出現した場合には EVCI と診断され得る。SZ 群では認知機能項目の障害のパターンが EVCI 群と似ていたことから、EVCI 群でも治療で CI が改善した場合は EVCI 群から SZ 群に移行する可能性が考えられた。

精神疾患病態研究部

EGUIDE プロジェクト 10 年目の成果報告
～全国への拡大と実臨床に与えた影響～

○長谷川尚美[1)]，堀 輝[2)]，山田 恒[3)]，松本純弥[1)]，渡邊衡一郎[4)]，
稲田 健[5)]，古郡規雄[6)]，橋本亮太[1)]

1）精神疾患病態研究部、2）福岡大学医学部精神医学教室、3）兵庫医科大学精神科神経科学講座、4）杏林大学医学部精神神経科学教室、5）北里大学医学部精神科学、6）獨協医科大学　精神神経医学講座

診療ガイドラインは、エビデンスに基づいて作成され、患者と医療者の意思決定に用いられる。しかし、臨床現場において必ずしも採用されておらず、エビデンス・プラクティス・ギャップの存在が指摘されている。このギャップを解消し、診療ガイドラインを社会実装するために、「精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究（EGUIDE プロジェクト）」が 2016 年に開始された。EGUIDE プロジェクトでは、ガイドライン講習会を毎年実施し、精神科医のガイドラインに対する理解度と実践度を測定している。現在 50 大学 845 病院が参加し、2025 年度までにガイドライン講習会は統合失調症講習・うつ病講習合わせて 218 回実施した。受講者数は累計約 5,500 人となった。

また、参加施設より入院患者の治療データ約 33,000 例を収集しており、これらのデータを用いて、リアルワールドおける実態調査や、ガイドライン講習の効果検証も行っている。統合失調症について「ガイドライン推奨治療」を 11 項目設定し、これらに対する「施設のガイドライン講習参加後経過年数」の影響を解析したところ、経過年数が進むにつれ、治療抵抗性統合失調症の検討率、向精神薬の併用がない抗精神病薬単剤治療率、抗不安薬・睡眠薬の非処方率、抗コリン薬の非処方率、持効性注射剤治療率、クロザピン治療率、修正型電気けいれん療法治療率は有意に増加していた。一方で、抗精神病薬単剤治療率、抗うつ薬の非処方率、気分安定薬・抗てんかん薬の非処方率は有意な変化がなく、向精神薬の頓服薬の非処方率は有意に減少していた。この結果より、１年ごとの変化は小さいが、継続して活動を続けることで多くのガイドラインの推奨治療が徐々に広まっていくことが明らかとなった。

EGUIDE プロジェクトは 10 年目を迎え、現在もその規模を拡大させながら活動を続けている。ガイドライン講習を受講した精神科医は日本の精神科医の約 15％に相当するまでになった。全国にある精神科を有する病院のうち約 20％の病院に受講者が所属したことがあり、その病院は全国に広く分布している。このように、EGUIDE プロジェクトの活動の成果は着実に日本の精神科治療を変えており、ガイドラインの推奨治療が実臨床においても広まりつつあることを我々は明らかにしてきた。今後も、精神科医療の発展において EGUIDE プロジェクトの活動が大きく貢献することが期待されている。

精神薬理研究部

ZBTB18/RP58 ハプロ不全による知的障害モデルマウスにおける感覚過敏についての検証

○三輪秀樹[1)2)]，池田和隆[1)]，岡戸晴生[2)]

1）精神薬理研究部，2）東京都医学総合研究所 脳代謝制御グループ

【背景】 ZBTB18/RP58（OMIM *608433）は、1q43q44 微小欠失症候群（OMIM #612337）の原因遺伝子の一つであり、そのハプロ不全は知的障害を引き起こすとされている。既報（Miwa et al., *Mol Psychiatry*, 2023)にて、ZBTB18/RP58 ヘテロ接合体マウスを作製し、生化学的解析・組織形態学的解析・行動学的解析・電気生理学的解析を用いた包括的な表現型解析により、RP58 の遺伝子異常が引き起こす病態メカニズムについて報告している。今回は、更なるモデル動物を用いた病態解析として、神経発達症で報告される感覚過敏およびてんかん素因について検証を行った。

【方法】*ZBTB18/RP58* ヘテロ接合体マウスについて、感覚過敏（聴覚驚愕反応、ホットプレート試験、von frey 試験)、ペンチレンテトラゾール（PTZ）誘発性発作、聴性脳幹反応（ABR)、脳波測定による睡眠/覚醒リズムによる検証を行った。

【結果】*ZBTB18/RP58* ヘテロ接合体マウスについて、感覚過敏（聴覚驚愕反応、ホットプレート試験、von frey 試験）に関する行動実験を行い、聴覚驚愕反応、ホットプレート試験、von frey 試験のいずれにおいても統計的有意な異常を観察した。プレパルス抑制試験には異常は観察されなかった。また、聴性脳幹反応においても異常は観察されなかった。

【考察】*ZBTB18/RP58* ヘテロ接合体マウスは、既報において興奮性シナプスの成熟が損なわれ、その結果、シナプス可塑性特性の異常が生じ、それを基盤とした認知機能障害が引き起こされることを示唆している。今回はさらに、神経発達症で報告される感覚過敏およびてんかん素因について検証し、マルチモーダルな感覚過敏を観察した。本研究により、*ZBTB18/RP58* ハプロ不全病態解明に有用となることを示した。

精神薬理研究部

アルコール代謝関連遺伝子多型と飲酒行動および心理的アウトカムとの関連：性差の観点からの検討

○名古(岩下)由佳，西澤大輔，池田和隆

【背景】*ADH1B* rs1229984 および *ALDH2* rs671 は東アジア集団で高頻度にみられる機能的遺伝子多型であり、飲酒量や問題飲酒のリスクを規定することが知られている。一方、問題飲酒が自殺念慮などの心理的アウトカムと関連することが報告されているが、遺伝的背景・性別・飲酒行動を統合的に検討した研究は限られている。本研究では、日本人一般住民を対象に、これら多型と性別、問題飲酒、ならびに心理的アウトカム（自殺念慮・自殺未遂・抑うつ症状［PHQ-9：Patient Health Questionnaire-9］）との関連を検討した。

【方法】東京都在住住民を対象に質問紙調査と qPCR による遺伝子型解析を実施した。飲酒行動は AUDIT で評価し、8 点以上を問題飲酒と定義した。*ADH1B* および *ALDH2* は 3 群に分類し、群間比較には χ^2 検定または Fisher の正確確率検定を用いた。

【結果】*ALDH2* 多型は AUDIT≧8 の割合と有意に関連し、全体および男女別のいずれでも差が認められた（$p < 0.001$）。一方、いずれの遺伝子多型も自殺念慮・自殺未遂とは直接的な関連を示さなかった。飲酒行動と心理的アウトカムの関連をみると、女性においてのみ AUDIT≧8 群で自殺念慮（$p < 0.01$）および自殺未遂（$p < 0.05$）が有意に高かった。PHQ-9 スコアは多型・AUDIT いずれとも関連しなかった。

【考察】本研究は、*ALDH2* 多型と問題飲酒の既知の関連を再現するとともに、遺伝子多型と心理的アウトカムの間に直接の関連は認められないことを示した。一方、問題飲酒と自殺関連アウトカムの関連が女性でのみ顕在化する可能性が示唆された。
本研究は一般住民集団において、飲酒行動と心理的アウトカムの関連に性差が影響し得ることを遺伝的背景を踏まえて検討した点に特徴がある。今後、より詳細な解析により、性差を含む多因子的メカニズムの解明が期待される。

児童・予防精神医学研究部

Problematic gambling and alcohol misuse among adults in Japan

○Andrew Stickley[1)], Aya Shirama[1)], Risa Yamada[1)], Tomiki Sumiyoshi[1)]

1)児童・予防精神医学研究部

Background: There is a substantial body of research evidence linking problematic gambling to alcohol misuse. However, most research on this association has been undertaken in Western countries. To address this gap, the current study examined the association between problematic gambling and alcohol misuse in Japan, where gambling is common, and where some evidence suggests that the prevalence of problematic gambling may be higher than in several other countries, but where comparatively little research has been conducted on problematic gambling and its effects.

Methods: Data were analyzed from 3,551 adults (aged 18 to 89, 51.7% female) who participated in an online survey in 2023. Problematic gambling was assessed using the Japanese short version of the South Oaks Gambling Screen-Revised (SOGS-R), while alcohol misuse was measured with the CAGE questionnaire. Additional information was collected on sociodemographic and mental health variables. Logistic regression was used to examine associations.

Results: One in ten adults (n = 354) were categorized as problematic gamblers. In a fully adjusted analysis, problematic gambling was associated with significantly higher odds of alcohol misuse in the total sample (OR: 4.50, 95 % CI: 3.46, 5.86). When the analysis was stratified by sex, problematic gambling was associated with over 4.5 times higher odds of alcohol misuse in both men and women. In an age-stratified analysis, problematic gambling was linked to alcohol misuse across all age groups with the highest odds being observed in adults aged 18-34 (OR: 10.27, 95 % CI: 5.60, 18.83) and the lowest in those aged ≥ 60 (OR: 2.02, 95 % CI: 1.14, 3.55).

Conclusion: Problematic gambling is associated with alcohol misuse among Japanese adults, and this association is observed across all sex- and age-specific population subgroups. Efforts to inform the general public about the potentially detrimental effects of problematic gambling in relation to alcohol misuse may have important public health benefits.

児童・予防精神医学研究部

左側頭領域への経頭蓋直流刺激が統合失調症の意味記憶に与える影響

○和田 歩[1)], 住吉チカ[1)], Andrew Stickley[1)], 吉村直記[2)], 山田悠至[3)], 住吉太幹[1)]

1)児童・予防精神医学研究部, 2)病院 精神リハビリテーション部, 3)病院 司法精神診療部

【背景】統合失調症では意味記憶（事実や概念に関する知識を蓄えた記憶）が障害され、社会機能的転帰に影響する。経頭蓋電気刺激（transcranial Direct Current Stimulation, tDCS）は、頭皮上から頭蓋内へ微弱な直流電流（1~2mA 程度）を流す低侵襲性脳刺激法である。われわれはこれまで、左前頭前野領域への tDCS 陽極刺激が統合失調症患者における意味記憶を改善することを報告した。一方、tDCS 陽極の設置部位（前頭前野領域あるいは側頭領域）により、日常生活技能や社会認知機能への効果が異なる可能性がある。特に、左側頭領域に陽極刺激行った場合に統合失調症患者の社会認知が改善することを報告した (Yamada et al. 2022)。そこで今回、左側頭領域へ陽極刺激が統合失調症患者の意味記憶へ与える影響を探索的に検討した。

【方法】NCNP 病院に通院中の統合失調症患者 15 名から、動物名を用いたカテゴリー流暢性課題（Category Fluency Test, CFT）のデータを得て、解析対象とした。tDCS 陽極刺激は左上側頭溝に対応する部位に、陰極を右前頭部に設置し、2 mA x 20 分、一日 2 回、5 日連続のスケジュールで刺激を行った。tDCS 実施前（ベースライン）および刺激から 1 か月後（フォローアップ, FU）の CFT データを取得し、特異値分解を用いて各動物名の共起パターンを抽出した。そして、健常者データとの意味記憶の類似度の変化を、Meng の検定を用いて検討した。なお、本研究は NCNP 倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】階層的クラスタリング分析の結果、ベースラインでは明確でなかった意味的なまとまりが FU 時に出現した。一方、健常者データとの意味記憶の類似度の変化は、統計的有意差に至らなかった。

【考察】本研究の結果から、統合失調症患者の意味記憶組織化に対する左側側頭領域への陽極刺激の影響は限定的であることが示唆され、左側前頭前野領域を刺激した場合と異なった。意味記憶の想起は意味表象を担う側頭葉系と、その活性化を文脈に応じて制御する前頭葉系からなり、実行機能の改善にも関与する前頭葉への刺激が意味記憶改善につながる可能性が考えられた。以上より、患者ごとの認知機能障害の特徴に沿った tDCS 陽極刺激部位の選択が、機能的転帰の向上に重要であることが示唆され、さらなる研究が望まれる。

睡眠・覚醒障害研究部

死別後悲嘆における回避の生理的意義：前向き観察研究

○吉池卓也[1)]，矢嶌智貴[1)]，内海智博[1)]，Srishti Tripathi[1)]，河村葵[1)]，長尾賢太朗[1)]，阿部十成[2)]，伊藤正哉[3)]，中島聡美[4)]，栗山健一[1)]

1）睡眠・覚醒障害研究部，2）脳病態統合イメージングセンター 先進脳画像研究部，
3）認知行動療法センター 研究開発部，4）武蔵野大学人間学部人間科学科

【背景】近親者との死別後に悲嘆が持続し生活機能が低下した状態は、遷延性悲嘆症（prolonged grief disorder: PGD）と呼ばれ、近年国際疾病分類に加えられたが、その病態生理は明らかでない。悲嘆は著しい苦痛を伴うため、死別の急性期に死の現実を回避することは適応的となりうるが、回避が慢性的に用いられると悲嘆の処理が遅延し、PGD リスクが高まると考えられている。しかし、回避が悲嘆の遷延に関わる生理的機序は明らかにされていない。

【方法】近親者との死別から 1 年以上経過した成人 35 名（女性 30 名、平均 39.2 歳）が参加する縦断調査を実施した。初回評価時（T1）および 3～6 か月後の追跡評価時（T2）に、安静覚醒時心電図を測定し、心拍変動の高周波成分（high-frequency heart rate variability: HF-HRV）を抽出した。Complicated Grief Questionnaire を用いて悲嘆症状を評価し、主成分分析を用いて回避成分を抽出した。横断的に回避と HF-HRV が関連するか、縦断的に HF-HRV の増加が悲嘆の軽減と関連するか、多変量モデルを用いて検討した。

【結果】死別からの経過年数は中央値で 2.8 年であった。T1 において、回避は HF-HRV と非線形の関連を示し（coefficient = 0.29, p = .003）、低回避群において回避が弱い者ほど HF-HRV が小さかったが、高回避群では回避は HF-HRV と関連しなかった。T1 から T2 にかけて、低回避群では悲嘆が軽減されたが、高回避群では軽減されなかった（$F_{1,24}$ = 7.12, $_p\eta^2$ = .229, p = .013）。さらに、HF-HRV の増加度が悲嘆の減少度と相関し（estimate −0.42, 95% CI −0.74, −0.10, p = .011）、この関連は低回避群で有意であったが（estimate −0.53, 95% CI −0.86, −0.21, p = .001）、高回避群では有意でなかった（estimate 0.44, 95% CI −0.32, 1.20, p = .26）。

【結論】本結果は、ストレス感受性の高い遺族では、死別の急性期を過ぎても生体防御を目的とした回避の必要性が持続する結果、悲嘆の処理が遅延することを示唆する。故人の死への直面化に伴う生理的負荷を軽減し、レジリエンスを促す方略を見出すことで、遺族が故人の死に向き合い、悲嘆に対処することが容易になると考えられる。死別後の健康維持や PGD の予防・治療に関して、さらなる検討が期待される。

睡眠・覚醒障害研究部

東日本大震災被災者における免疫・炎症プロファイルとうつ症状の関連：不眠と災害ストレスによる二重調整分析

○長尾賢太朗，吉池卓也，河村葵，内海智博，髙橋恵理矢，
南學正仁，北村真吾，栗山健一

【背景・目的】災害後うつ病は有病率が高く、死亡リスクの増加と関連する。うつ病の病態生理にストレスによる免疫異常の関与が推測されている。睡眠は免疫系の制御に密接に関わるが、免疫とうつ病の関連に不眠がどのように寄与するか明らかにされていない。

【方法】2011 年の東日本大震災の被災住民の健康状態を調査した東北メディカル・メガバンクの参加者 66,874 名のうち、免疫・炎症指標である Systemic Immune-Inflammation Index （SII：血小板数×好中球数/リンパ球数）の算出に必要な血液検査を受け、アテネ不眠尺度、うつ病自己評価尺度（CES-D）、震災に関連するストレス要因（心的外傷・死別を含む）質問紙に回答し、免疫機能に影響する疾患や薬剤使用のない 43,684 名を対象とした。

【結果】震災からの経過年数は平均 3.6 年であった。震災関連の心的外傷と死別はそれぞれ 14,055 名（32%）、16,127 名（37%）に認められた。SII と不眠は交互作用を示し、不眠症状が強いほど SII 増加に関連したうつ症状の増加度が大きかった。さらに、心的外傷は不眠および SII と交互作用を示し（B = 0.105, 95% CI 0.030, 0.179）、SII とうつ症状の正の相関に対する不眠症状の影響を促進した。他方で、死別は不眠および SII と交互作用を示さなかった（B = -0.002, 95% CI -0.076, 0.072）。臨床的意義を持つうつ（CES-D > 15）においては、SII と不眠は交互作用を示さず、不眠が単独でうつと関連した。心的外傷を有する者を除いた感度分析において、死別は不眠および SII と交互作用を示し、SII とうつの正の相関に対する不眠症状の影響を減弱させた。

【考察】被災住民において免疫系が不眠と関連してうつ症状の形成・維持に寄与する可能性を示唆する。これらの関係性はストレスの種類（心的外傷と死別）によって異なり、心的外傷は不眠とともに炎症反応を増強することでうつ症状に寄与するのに対し、死別は必ずしも不眠と関連せず、炎症反応の増強ではなく免疫機能の低下と関連してうつに寄与することが示唆される。被災住民のうつ病予防において、免疫系のみならず不眠へのアプローチが重要であるが、災害関連ストレスの種類により適切な介入法が異なるかさらなる検討が必要である。

行動医学研究部

神経性やせ症に特異的な脳構造変化の検討
－ 低体重健常群との比較検証 －

○勝沼るり[1)]，髙村恒人[1)]，濱本裕美[2)]，佐藤康弘[3)]，須藤佑輔[4)]，平野好幸[5)]，野原伸展[6)]，吉内一浩[6)]，戸瀬景茉[7)]，磯部昌憲[7)]，兒玉直樹[8)]，権藤元治[9)]，髙倉 修[9)]，吉原一文[10)]，守口善也[1)]，関口 敦[1)9)]

1)行動医学研究部，2)東北大学 学際科学フロンティア研究所，3)東北大学病院 心療内科，4)千葉大学社会精神保健教育研究センター，5)千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター，6)東京大学医学部附属病院 心療内科，7)京都大学医学部附属病院 精神科神経科，8)産業医科大学 脳神経内科・心療内科，9)九州大学病院 心療内科，10)九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター

【背景】神経性やせ症（Anorexia nervosa：AN）は、著しい体重減少、身体像の歪み、体重増加への恐怖を特徴とし、脳構造変化を伴うことが報告されている。これまでANでは健常者と比較した灰白質体積（gray matter volume：GMV）の減少が一貫して示されてきたが、多くの研究は正常体重の健常者との比較に留まっていた。一方、日本では20代女性の約2割がBMI 18.5 kg/m²未満であり、その多くは摂食障害症状を伴わない体質的低体重者である。この集団は、ANに特有の神経生物学的変化と、病理を伴わない低体重の影響を区別する上で重要な比較対象となる。そこで本研究では、AN患者と低体重健常者（BMI <17.5 kg/m²）、および低体重健常者と正常体重健常者（BMI ≥18.5 kg/m²）の灰白質体積を比較することで、AN特有の神経学的病変を特定することを目的とした。

【方法】女性AN患者19名（平均年齢27.5±10.8歳，BMI 14.6±2.7 kg/m²）、低体重健常女性30名（31.1±7.9歳，BMI 16.8±0.5 kg/m²）、正常体重の健常女性18名（26.4±9.3歳，BMI 20.3±1.4 kg/m²）を対象とした。低体重健常者および正常体重健常者は、精神疾患および摂食障害の既往を有さなかった。全参加者にT1強調MRIを撮像し、Voxel-based morphometryを用いて群間の局所GMVを比較した。解析では年齢、BMI、頭蓋内容積を共変量として統制し、統計閾値はボクセルレベル $p<0.001$、クラスターレベル補正 $p<0.05$ とした。

【結果】AN患者は低体重健常者と比較して、両側前部島皮質から外側眼窩前頭皮質、小脳、背内側前頭前野において有意なGMV低下を示した。一方、低体重健常者は正常体重健常者と比較して左紡錘状回において有意にGMVが大きかった。ANと低体重健常者の間では同部位に有意差は認められなかった。

【考察】ANにおけるGMV低下は、内受容感覚、情動調整、摂食行動制御に関与する脳領域に認められ、低体重そのものの影響を超えたAN特異的病態を反映する可能性が示唆された。また、低体重健常者で認められた紡錘状回のGMV増大は、AN患者との共通性を有し、身体像知覚や視覚処理に関連する神経解剖学的脆弱性因子である可能性が考えられる。本研究は、AN患者と精神症状を伴わない低体重健常者を直接比較した初の研究であり、病的および非病的低体重を分ける神経基盤の理解に重要な知見を提供する。

行動医学研究部

エタノールアミンとうつ病：新規バイオマーカーおよび新たな治療標的としての可能性

○小川眞太朗[1)2)]，服部功太郎[2)3)]，秀瀬真輔[2)4)]，篠山大明[2)5)]，太田深秀[6)7)]，宮川友子[3)]，辰巳めぐみ[3)]，松村 亮[3)]，吉田寿美子[8)]，野田隆政[8)]，竹林 実[9)10)]，大盛 航[11)]，板垣 圭[9)12)]，梶谷直人[9)10)]，岡田-土岡麻美[9)]，菱本明豊[13)]，朴 秀賢[10)14)]，蓬莱 政[13)]，門司 晃[15)]，溝口義人[15)]，立石 洋[15)]，村川-平地 徹[15)]，吉村玲児[16)]，井形亮平[16)]，金 吉晴[1)]，堀 弘明[1)]，功刀 浩[2)4)]

1)行動医学研究部，2)NCNP 神経研究所精神疾患研究部，3)NCNP メディカル・ゲノムセンター・バイオリソース部，4)帝京大学医学部精神神経科学講座，5)信州大学医学部精神医学教室，6)NCNP 病院放射線診療部，7)筑波大学医学医療系臨床医学域精神医学，8)NCNP 病院精神科，9)国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター臨床研究部精神・神経科学研究部門，10)熊本大学大学院生命科学研究部健康長寿代謝制御研究センター精神病態医学講座，11)国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター精神科，12)広島大学大学院医系科学研究科精神神経医科学，13)神戸大学大学院医学研究科精神医学分野，14)新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野，15)佐賀大学医学部精神医学講座，16)産業医科大学精神医学講座

本研究では、我々が世界で初めて見出したうつ病患者における脳脊髄液 (cerebrospinal fluid, CSF) 中の「エタノールアミン」(ethanolamine, EA) という分子の減少について、その疾患特異性や再現性、生物学的観点における病態との関連を検討した。ヒトでのサンプルセット A (n = 380) では、CSF 中 EA は他の精神疾患に対して大うつ病患者群においてのみ、健常群と比べて濃度が低下していた。特に、うつ病の症状が中等度～重症の患者では、向精神薬の服用の有無に関わらずその濃度の低下が認められた。また、CSF 中 EA の濃度は、同 CSF 中のホモバニリン酸（ドーパミン代謝物）および 5-ヒドロキシインドール酢酸（セロトニン代謝物）の濃度とそれぞれ有意な正の相関を示した。サンプルセット B (n = 13) においては、治療による影響を検討するため、電気痙攣療法 (elevtroconvulsive therapy, ECT) を受けた大うつ病患者において解析したところ、ECT 治療後は治療前と比べて有意に CSF 中 EA の濃度が上昇していた。サンプルセット C (n = 66) では、NCNP 以外の複数の国内施設で採取された新規のサンプルにおいても、うつ病患者における CSF 中 EA 濃度の低下が再現された。セット A のサブサンプルにて実施した CSF のプロテオーム解析の結果では、細胞接着関連分子など 40 種のタンパク濃度と CSF 中 EA 濃度とが有意に相関し、さらに Metascape での ontology 解析においては、CSF 中 EA 濃度は axon guidance（神経細胞の軸索誘導）パスウェイと強い有意性を伴う関連を示した。動物（ラット）においては、うつ病様行動モデルとしてリポポリサッカリド (lipopolysaccharide, LPS) を用いた検討から、LPS 投与個体での不安様／うつ様行動の誘導が確認され、LPS の用量依存的にラット CSF 中の EA 濃度が低下する結果が示された。発展的検討として、naïve ラットに通常の飲水または 0.1% (v/v) EA を含有した飲水を４週間にわたり投与したところ、EA 含有水を投与した群においては有意なうつ様行動の改善が認められた。本研究から、EA のうつ病特異的かつトランスレータブルに活用できる新規バイオマーカーおよび、治療標的としての可能性が示唆された。

Ⅳ．令和7年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
所長室	張　賢徳	研究代表者	Quality Indicatorを用いた医療の質向上プログラムの開発と効果研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	張　賢徳	研究代表者	性嗜好障害等の治療等に係る基礎資料の作成及び環境整備のための研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	張　賢徳	研究代表者	Quality Indicatorを用いた精神科医療の質向上プログラムの開発と効果研究	ヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	張　賢徳	研究分担者	自殺未遂者の実態解明と自殺未遂者登録システム構築のための研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(B)(一般)	日本学術振興会
	金　吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究(A)(一般)	日本学術振興会
公共精神健康医療研究部	黒田直明	研究代表者	効率的かつ効果的な精神保健医療福祉システム構築とそのモニタリングのための研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	黒田直明	研究代表者	第8期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	黒田直明	研究代表者	精神保健医療福祉を取り巻く環境に係る中長期的な変化等を見据えた精神保健医療福祉提供体制の構築を推進するための研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	黒田直明	主任研究者	エビデンスを活かした「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（にも包括）」構築のためのデータ利用の探索	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	黒田直明	研究分担者	将来の人口動態等を踏まえ、外来医療、在宅医療等の医療資源の多寡の地域性に着目し、地域単位の医療資源の最適化を通じた地域づくりに資する研究	厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）	厚生労働省
	黒田直明	研究分担者	地域の実情を踏まえた在宅医療提供体制の整備を推進するための政策研究	厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）	厚生労働省
	黒田直明	研究分担者	社会的ケア関連QOL測定尺度(代理記入式)の開発と地域包括ケアシステムの評価への応用	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究B））	日本学術振興会
	黒田直明	研究分担者	レセプト情報等から対象を同定し患者の声を聞く手法（CBES）の社会実装に向けた課題解決	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究B））	日本学術振興会
	臼田謙太郎	研究分担者	「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究 」内「精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	三宅美智	研究代表者	行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅美智	分担研究者	「エビデンスを活かした「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築のためのデータ利用の探索」内 「「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築にエビデンスを活かすための研究者-自治体協働モデルの提案」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

公共精神健康医療研究部	羽澄 恵	分担研究者	「エビデンスを活かした「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築のためのデータ利用の探索」内「精神保健医療福祉領域における患者報告型アウトカムモニタリングの実装を目指したオンライン調査手法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	深澤舞子	分担研究者	「エビデンスを活かした「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築のためのデータ利用の探索」内「医療レセプトデータベースを用いた精神医療サービスの新たな評価指標の探索」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
薬物依存研究部	松本俊彦	研究代表者	処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究」	厚生労働行科学研究費費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「アルコール・薬物使用者の行動変容促進アプリと適切なフィードバックAIモデルの開発」内「RCTリクルート、アプリ有用性評価」	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	松本俊彦	共同代表	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」内「薬物使用に関する全国住民調査（2025年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」内「全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「青少年および学校関係者を対象とする薬物依存に関する全国調査と薬物問題への対応に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	富山健一	研究代表者	危険ドラッグの依存性等に関する評価	厚生労働省危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「危険ドラッグ等の乱用薬物に関する最新の分析情報の収集及び危害影響予測のための研究」内「活性未知危険ドラッグ成分の薬理学的解析」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省

薬物依存研究部	富山健一	分担研究者	「精神活性物質の化学構造に基づく乱用危険性予測に関する研究」内「ヒトiPS細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」内「濫用等のおそれのある医薬品の追加候補となる薬剤に関する文献的調査」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「新規オピオイド化合物の薬理学的特性並びに薬物依存性の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究」内「大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	高野 歩	研究代表者	飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	高野 歩	研究分担者	「日本版Moral Injury尺度の作成と信頼性・妥当性の検証」	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	高野 歩	分担研究者	「日本におけるハームリダクションの導入・普及に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	高野 歩	分担研究者	「ゲームに関連した生活障害等の問題、併存疾患、対応法などの実態把握に資する研究」内「ゲーム行動症当事者家族へのインタビュー調査」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	高野 歩	分担研究者	「アディクション病態の包括的解明とアディクション障害予防・治療・回復戦略の確立」内「薬物・アルコール使用問題に対するAI動機づけ面接プログラムの開発と効果検証」「日本におけるハームリダクションの理念に基づく治療法の導入・普及」「ウェアラブルデバイスを用いた物質使用関連データの機械学習に基づく即時介入モデルの開発」	依存症・研究推進事業（R6補正予算）	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	喜多村真紀	分担研究者	「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」内「ソーシャル・ネットワーキング・サービスを情報源とするテキストマイニングおよび予防啓発に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	喜多村真紀	分担研究者	「青少年および学校関係者を対象とする薬物依存に関する全国調査と薬物問題への対応に関する研究」 「大学内支援機関における大学生の医薬品の不適正使用に関連する問題への援助と課題に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
行動医学研究部	堀 弘明	研究代表者	幼少期トラウマがもたらす生化学的・生理学的変化：概日リズムに着目した検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	情動記憶における文脈情報喪失の発生機序の解明とこれを防止する心理介入法の開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	堀 弘明	事業協力者	学際領域展開ハブ形成プログラム「多階層ストレス疾患の克服」	共同利用・共同研究システム形成事業	文部科学省

行動医学研究部	堀 弘明	実務担当者	令和7年度こころの健康づくり対策事業PTSD対策専門研修事業	国庫補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中冨健康科学振興財団研究助成金	中冨健康科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・普及活動～	三菱財団社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	精神疾患の新規治療法開発に向けた経皮的耳介迷走神経刺激の作用メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	感情認識に内受容感覚の諸側面が及ぼす影響-内受容感覚の多角的測定と介入による検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	家族ピアサポーターと協働した心理教育プログラムの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	神経性やせ症における脳機能画像解析による病態解明と至適治療の確立	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業　（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスポージャー療法の効果検証と普及　コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究開発代表者	心的外傷後ストレス障害に対するオンライン持続エクスポージャー療法の有用性検証：多施設ランダム化比較試験	日本医療研究開発機構　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	井野敬子	研究代表者	音による環世界マニピュレーション A02班 バーチャルリアリティ・エクスポージャーを使ったPTSD治療の新展開	文部科学省科学研究費補助金　学術変革領域（B）	日本学術振興会
	井野敬子	研究分担者	睡眠中の音刺激によるPTSDの新規治療法の開発	日本医療研究開発機構　橋渡し研究プログラムpreF	日本医療研究開発機構
	井野敬子	研究分担者	性暴力被害者への地域連携型オンラインPE・CPTの有効性の検証	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（B）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難民・移民支援におけるトラウマ・インフォームドケア研修の実践研究 -支援者のメンタルヘルス実態調査と二次的トラウマからの回復過程-	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団研究助成金	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団
	成田 瑞	研究代表者	医療の最適化とウェルビーイング：電子化医療情報を用いた多層的データ解析	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	参画機関　研究開発責任者	「「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「文化的処方のエビデンス構築と実践知の蓄積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型（共創分野）	国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)
	成田 瑞	研究代表者	暴力・性被害による心的外傷後ストレス障害患者への早期診断と支援のためのAI大規模言語モデルを用いた基盤構築	公益財団法人日工組社会安全研究財団研究助成	公益財団法人　日工組社会安全研究財団

行動医学研究部	成田 瑞	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの効果と脳MRIの関連についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	成田 瑞	研究分担者	「ICD-11の適用を通じて我が国の死因・疾病統計の向上を目指すための研究」内「ゲーム障害（主にオンラインによる）の罹患率に関する探索的研究」	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	成田 瑞	研究分担者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療」内「PTSD治療の脳画像研究」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	成田 瑞	研究分担者	電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業	ナショナルセンター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費	ナショナルセンター
	大沼麻実	研究分担者	災害時における地域保健活動を推進する体制整備に資する研究	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	大沼麻実	研究分担者	「避難所生活を過ごされる方々の健康管理に関するガイドライン」改定のための研究	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	大沼麻実	研究分担者	ナショナルセンターによる医療情報発信の基盤整備事業	ナショナルセンター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費	ナショナルセンター
	大沼麻実	事業担当者	東京都令和７年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）事業	補助金	東京都
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する診断評価尺度の整備と治療法の検証	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「複雑性PTSDに対するSTAIR Narrative Therapyの無作為化比較試験」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤(丹羽)まどか	研究分担者	トラウマに配慮したうつと不安に対するコンパッション・フォーカスト・セラピーの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性心的外傷後ストレス症に対する心理療法（STAIR Narrative Therapy）の無作為化比較試験	メンタルヘルス岡本記念財団　研究助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	伊藤(丹羽)まどか	研究分担者	暴力・性被害による心的外傷後ストレス障害患者への早期診断と支援のためのAI大規模言語モデルを用いた基盤構築	公益財団法人日工組社会安全研究財団研究助成	公益財団法人　日工組社会安全研究財団
	勝沼るり	研究代表者	ニューロモジュレーションを用いた内受容訓練による利他行動の変容とその神経機序	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	主任研究者	精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	分担研究者	「認知機能、身体機能に対する機能再建に着目したニューロモジュレーションの機序解明と臨床応用に向けての基盤整備」内「経頭蓋直流刺激の精神疾患治療における有用性に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	生体モニタリング情報に基づく疾患横断的精神機能評価	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)（基盤研究（C））	日本学術振興会

児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	研究分担者	神経伝達系と神経ネットワークの異常に着目した統合失調症の個別化治療システムの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)（基盤研究（C））	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果検証	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)（基盤研究（C））	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の光生物調節療法の反応性を予測する生体指標の検討	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)（基盤研究（C））	日本学術振興会
	住吉太幹	主任研究者	気分障害センター	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究開発代表者	うつ症状評価のバリアンス軽減を目的とした遠隔評価法の研究開発	日本医療研究開発機構　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	住吉太幹	研究代表者	統合失調症の認知機能障害の神経生理学的評価研究	共同研究	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
	住吉太幹	研究分担者	瞳孔径から子供のADHDの推定を可能にする解析アルゴリズム	共同研究	学校法人千葉工業大学、SMK株式会社
	山田理沙	研究代表者	アルコール依存症における飲酒量低減薬の反応性の客観的計測：前頭葉機能に基づく検討	科学研究費助成事業　研究活動スタート支援	日本学術振興会
	山田理沙	研究代表者	統合失調症の光生物調節療法の反応性を予測する生体指標の検討	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	山田理沙	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究」内「統合失調症の認知機能障害に対するフォトバイオモジュレーションの応用」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
精神薬理研究部	池田和隆	分担研究者	先端モデル動物支援プラットフォーム	学術変革領域研究（学術研究支援基盤形成）	日本学術振興会
	池田和隆	研究代表者	依存症病態の包括的解明と依存症の診断・治療 支援方法の確立に関する研究推進事業	令和6年度補正予算	厚生労働省
	三輪秀樹	研究代表者	アルツハイマー病発症機構におけるGABA神経機能不全	武田科学振興財団　ビジョナリーリサーチ研究（スタート）	(株)武田科学
	三輪秀樹	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究」内「トランスレータブル脳指標を元にした精神疾患発症リスク因子の探索および介入効果の検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「てんかん原性腫瘍と正常神経細胞間における微小増幅回路のメカニズム解明」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「細胞周期離脱遅延を用いた大脳皮質の人為的進化」	挑戦的研究(萌芽)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「脳老化を抑制する転写抑制因子RP58とそのメカニズムの解析」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「手術検体を用いた脳腫瘍細胞と正常神経細胞間のてんかん原性回路の解明」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	西澤大輔	研究代表者	アルコール健康障害に関する調査	委託研究費	東京都福祉局

精神薬理研究部	西澤大輔	研究代表者	喫煙行動の多遺伝子要因の網羅的解析及び他の習慣的行動等形質との関連性の解明	研究助成プログラム　一般研究	公益財団法人 喫煙科学研究財団
	上條諭志	研究代表者	患者由来変異型SHARPINの機能解析によるアルツハイマー病の新規創薬標的探索	横断的研究推進費　若手研究助成	国立国際医療研究センター
	森屋由紀	研究代表者	女性特有のうつ病に効果的な新規抗うつ薬の開発	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	森屋由紀	研究代表者	オピオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の母体と胎児への影響	民間財団等助成 資生堂 女性研究者サイエンスグラント	株式会社　資生堂
	森屋由紀	研究代表者	FLT3阻害剤を応用した神経障害性疼痛に対する新規鎮痛薬の開発	第40回研究交流助成金	公益財団法人金原一郎医学医療振興財団
	森屋由紀	研究代表者	オピオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の母体と胎児への影響	特別研究員奨励費	日本学術振興会
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究開発代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究開発代表者	精神疾患の層別化によるエクストリームケースの同定とそれに基づく妥当性の高いモデル動物・細胞を用いた創薬シーズの探索研究	脳神経科学統合プログラム（個別重点研究課題）	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究開発分担者	「マイレジストリの縦断データを活用した新規治療法開発と薬事承認の実現」内「横断的患者リクルート促進」	障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究開発分担者	「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究」内「解析対象ASD/SCZ家系の選定と臨床情報の収集」	ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム:B-Cureゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	ヒト精神疾患のバイオタイプにアプローチする疾患モデル脳の構造・機能解析と創薬	科学研究費助成事業　基盤研究（A）	日本学術振興会
	橋本亮太	主任研究者	ビッグデータ駆動型解析による精神疾患の病態に基づいた層別化研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	橋本亮太	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究」内「精神疾患のバイオタイプに基づく発症及び再発予防のための病態解明研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	橋本亮太	分担研究者	「睡眠薬および抗不安薬・抗てんかん発作薬の使用実態調査に基づくGABAA受容体作動薬の適正使用指針および看護師・薬剤師等が実践できる指導・介入法の提案」内「抗不安薬の使用実態調査および適正使用指針および指導・介入法の検討」	JH横断的研究開発費横断的研究推進費	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部
	橋本亮太	研究代表者	統合失調症の認知機能障害の新規スクリーニング質問票に関する調査研究	受託研究	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
	橋本亮太	研究代表者	抑うつ症状重症度評価アルゴリズム開発	共同研究	大塚製薬株式会社
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	知的財産プロデューサー派遣事業	独立行政法人工業所有権情報・研修館
	松本純弥	研究代表者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会

精神疾患病態研究部	松本純弥	研究開発分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究開発分担者	「精神疾患の層別化によるエクストリームケースの同定とそれに基づく妥当性の高いモデル動物・細胞を用いた創薬シーズの探索研究」内「大規模な脳画像データのデータ駆動型分類に基づく層別化によるエクストリームケースの同定」	脳神経科学統合プログラム（個別重点研究課題）	日本医療研究開発機構
	松本純弥	分担研究者	「ビッグデータ駆動型解析による精神疾患の病態に基づいた層別化研究」内「ビックデータ解析のためのデータ整備」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本純弥	研究代表者	側脳室拡大と認知機能障害を伴う統合失調症を中心とした重度精神疾患の病態解明	精神薬療分野 一般研究助成	公益財団法人 先進医薬研究振興財団
	長谷川尚美	研究代表者	精神科領域の治療ガイドラインの普及と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効果の検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	伊藤颯姫	研究代表者	統合失調症の認知機能測定のためのWAIS-IV簡略版の開発	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	安田由華	研究開発分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	主任研究者	睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	研究代表者	睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究	労災疾病臨床研究事業費補助金	厚生労働省
	栗山健一	主任研究者	睡眠薬および抗不安薬・抗てんかん発作薬の使用実態調査に基づく$GABA_A$受容体作動薬の適正使用指針および看護師・薬剤師等が実践できる指導・介入法の提案	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費	国立高度専門医療研究センター
	栗山健一	研究開発分担者	「オンライン診療を介したリアルワールドデータを活用した「睡眠脳波と問診デジタルデータによるうつ病の検査-問診-診断支援システム」の開発・事業化」内「調査研究・臨床研究・治験の実施、開発した「不眠・うつ病の検査-問診-診療支援プラットフォーム」の評価、学会シンポジウム開催及びガイドライン策定」	日本医療研究開発機構研究開発費	日本医療研究開発機構
	栗山健一	研究分担者	「健康日本21（第三次）の推進及び進捗評価のための研究」内「休養・睡眠対策の推進及び進捗評価に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省

睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	分担研究者	「臨床・基礎ビッグデータと脳計算理論による統合的次世代脳病態研究」内「大規模睡眠ポリグラフデータを活用したデータサイエンスおよびAIによる睡眠障害病態の研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	スマートフォンアプリケーション“SAS’Eye”を利用した睡眠中の呼吸イベント検出の有用性検証: 終夜睡眠ポリグラフ検査との精度比較	受託・共同研究	株式会社 D’isum
	北村真吾	研究代表者	個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	睡眠の自然免疫機能への寄与解明のための実態調査および発展的介入試験	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	子どもの健康睡眠習慣を考慮したスクリーンタイム／グリーンタイムガイドラインの開発	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	木材を用いた空間が睡眠に与える影響について 木材を用いた空間が睡眠に与える影響について	受託・共同研究	国立大学法人東京大学／三井不動産株式会社
	北村真吾	研究代表者	日本のオフィスワーカーにおける等価メラノピック照度のリアルワールド評価と睡眠影響の検討	受託・共同研究	株式会社ジンズホールディングス
	吉池卓也	研究代表者	睡眠休養感の精神生理学的背景と成立機序の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	吉池卓也	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究」内「睡眠・概日関連指標を用いたストレス脆弱性・抵抗性の統合的理解」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	吉池卓也	研究分担者	遷延性悲嘆症の生物学的基礎に関する研究の統括・実施	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	吉池卓也	研究分担者	睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発	厚生労働科学研究費補助金 （循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	吉池卓也	研究分担者	ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究	労災疾病臨床研究事業費補助金	厚生労働省
	吉池卓也	研究代表者	高い睡眠休養感を与える環境に関する研究	受託・共同研究	ダイキン工業株式会社
	吉池卓也	研究代表者	香りの感じ方を考慮した睡眠前後の香り制御に関する研究	受託・共同研究	ダイキン工業株式会社
	河村　葵	研究代表者	月経前症候群・月経前不快気分障害の症状再燃と患者家族の感情表出の関連	ロート女性健康科学研究助成	ロート株式会社
	河村　葵	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	河村　葵	研究代表者	高照度光療法による月経前症候群及び月経前不快気分障害のプレゼンティズム改善効果	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	内海智博	研究代表者	生理的需要を基盤とした日常生活における睡眠時間指標の開発：高齢者の新たな睡眠管理	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会

知的・発達障害研究部	髙橋長秀	研究代表者	神経発達症のリスクとなる周産期ストレスの同定と効果的な介入方法の確立	精神・神経疾患研究開発費（7-4）	国立精神・神経医療研究センター
	髙橋長秀	研究分担者	「ビックデータ駆動型解析による精神疾患の病態に基づいた層別化研究」内「神経生理指標を用いた精神疾患の病態に基づいた層別化研究」	精神・神経疾患研究開発費（7-5）	国立精神・神経医療研究センター
	髙橋長秀	研究代表者	依存症病態の包括的解明と依存症の診断・治療・支援方法の確立に関する研究推進事業	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	髙橋長秀	研究分担者	出生に始まるうつ・不安の発生モデルの確立～発達的視点に基づく介入戦略の提示と実装	文部科学省科学研究費 基盤研究（B）	文部科学省
	髙橋長秀	研究代表者	ゲノム解析による注意欠如多動症の実行機能障害の病態解明	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	髙橋長秀	研究分担者	児童青年期における入眠時刻の後退と適応行動との関連―出生コホートの追跡による検討	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	髙橋長秀	研究分担者	多階層ｽﾄﾚｽ疾患の克服	文部科学省　共同利用・共同研究ｼｽﾃﾑ形成事業　学術領域展開ﾊﾌﾞ形成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	効果的な支援法提案のための自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の認知機能のばらつきと症状との関連の解明	精神・神経疾患研究開発費（7-3）	国立精神・神経医療研究センター
	江頭優佳	分担研究者	脳磁図データを用いた機械学習による夢内容の推定	文部科学省科学研究費 基盤研究（B）	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	感覚知覚の特異性が神経発達症の認知パフォーマンスに及ぼす影響の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	注意欠如多動症の時間知覚機能不全を構成する認知神経基盤の解明	小児医学研究助成金	母子健康協会
	古家宏樹	研究代表者	新生仔期グルタミン酸NMDA受容体遮断が脳内ネットワーク形成に及ぼす影響の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	池田悠稀	分担研究者	高齢者における歩行予備能が健康関連アウトカムに及ぼす影響の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	畠山太一	研究代表者	時間順序記憶障害に着目した早期認知症モデルラットの作成	文部科学省科学研究費 若手研究	文部科学省
	稲垣真澄	分担研究者	自治体3歳児健診における統一発達スクリーニングの開発及び社会実装	文部科学省科学研究費 基盤研究（B）	文部科学省
	稲垣真澄	分担研究者	適応的歩行障害における歩行調節機能の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田俊	研究分担者	免疫介在性疾患の血中プロテオーム解析を通じた新たなエンドタイプ解析と発症メカニズムの探索	横断的研究推進費	国立高度専門医療研究センター

地域精神保健・法制度研究部	藤井千代	研究代表者	包括的な精神保健医療福祉施策の推進に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に関する実態把握、及び精神保健医療福祉の効果的な連携方策の検討に資する研究」内「包括的支援マネジメントの実践ガイド作成」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神保健医療福祉を取り巻く環境に係る中長期的な変化等を見据えた精神保健医療福祉提供体制の構築を推進するための研究」内「精神病棟等の機能や提供されるべき医療の性質等についての整理」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「地域で安心して暮らせる精神保健福祉医療体制における入院医療の検討に資する研究」内「非自発的入院に関する実態調査、国際比較」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「良質かつ適切な精神科医療の推進に向けて精神科リハビリテーションの現況と有効性を調査しその機能分化について検討する研究」内「システマティックレビュー」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	藤井千代	主任研究者	当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価と関連システムの構築	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター
	藤井千代	研究分担者	行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究代表者	所沢市精神障害者アウトリーチ支援	所沢市精神障害者アウトリーチ支援業務委託	所沢市
	藤井千代	研究代表者	フィリピン国を対象とした地域精神保健支援の普及と実装	医療技術等国際展開推進事業	国立健康危機管理研究機構
	藤井千代	研究代表者	東京都入院者訪問支援事業費	入院者訪問支援事業業務委託	東京都
	山口創生	研究代表者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に関する実態把握、及び精神保健医療福祉の効果的な連携方策の検討に資する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「障害者ピアサポート研修の実施内容の検証及び更なる効果的な実施方法の確立に向けた研究」内「研修の効果測定」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	精神疾患領域の研究における共創プラットフォームの開発研究	AMED研究倫理・社会共創推進プログラムA-2：社会共創分野	日本医療研究開発機構
	山口創生	研究代表者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	スクールソーシャルワーカーの専門性と質の保証のためのアウトカム指標のパッケージ化	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	社会ネットワーク分析を用いた精神障がい者の孤独感と居場所、生きがいの関係解明	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	分担研究者	「当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価と関連システムの構築」内「PPIネットワークの構築」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

地域精神保健・法制度研究部	佐藤さやか	研究分担者	「精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に関する実態把握、及び精神保健医療福祉の効果的な連携方策の検討に資する研究」内「ケースマネジメントの対象者に関するレビューと研究知見の普及」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	佐藤さやか	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	思春期から青年期前期を対象とした心理支援へのアクセシビリティに関する実態調査	三菱財団助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	小池純子	研究分担者	「包括的な精神保健医療福祉施策の推進に関する研究」内「入院中の精神障害者の虐待防止に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	小池純子	研究分担者	認知機能を軸とした急性期の気分障害における評価と包括的支援の開発及び効果の検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	松長麻美	研究分担者	オンラインピアコミュニティとメタバースピアサポートによる周産期うつ病予防	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）　基盤研究（A）	日本学術振興会
	松長麻美	研究分担者	対人支援場面における攻撃性の制御：トラウマ理論に基づく経験学習プログラムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（A）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートのメンタルヘルスケアのあり方ー社会文化的背景の影響に関する日豪比較研究	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートの、アスリートによる、みんなのための、メンタルヘルス教育プログラム開発	イニシアティブプログラム助成金	トヨタ財団
	小塩靖崇	研究分担者	トップアスリートの睡眠のスクリーニングに関する研究および疫学調査	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神保健福祉領域における当事者主導研究のELSI対処方策に向けたガイダンスの作成	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	川口敬之	研究分担者	「精神疾患領域の研究における共創プラットフォームの開発研究」内「共創プラットフォーム構築」	AMED研究倫理・社会共創推進プログラムA-2：社会共創分野	日本医療研究開発機構
	川口敬之	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	川口敬之	研究分担者	脳卒中後麻痺側上肢で行う生活動作の目標設定・介入を支援するDecision aidの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害当事者と支援者との共創に基づくリカバリーに向けた共同意思決定実施ガイダンスの開発	三菱財団助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	臼井 香	研究代表者	アクセシビリティ促進戦略を備えた高校生へのマインドフルネストレーニングの効果検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	臼井 香	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	臼井 香	研究代表者	AYA世代への多職種アウトリーチ支援における支援実態の把握と支援評価の可視化ツールの開発	2023年度（後期）在宅医療推進のための研究	公益財団法 在宅医療助成 勇美記念財団

地域精神保健・法制度研究部	高嶋里枝	研究代表者	入院者訪問支援事業の開始時期に医療従事者が法制度に対して感じることの調査	個人研究（一般研究）	(公財)民事紛争処理研究基金
	杉山 直也	研究分担者	「包括的な精神保健医療福祉施策の推進に関する研究」内「行動制限最小化に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	安間 尚徳	分担研究者	「当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価と関連システムの構築」内「精神科診療所における当事者視点に基づく精神医療サービスの評価と関連システムの構築」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター
	塩澤 拓亮	分担研究者	「当事者視点に基づく精神医療福祉サービスの評価と関連システムの構築」内「地域精神保健領域の研究におけるコアアウトカム領域の評価指標の制定と開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター
ストレス・災害時こころの情報支援センター	大沼麻実	研究分担者	災害時における地域保健活動を推進する体制整備に資する研究	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	大沼麻実	研究分担者	「避難所生活を過ごされる方々の健康管理に関するガイドライン」改定のための研究	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	大沼麻実	研究分担者	ナショナルセンターによる医療情報発信の基盤整備事業	ナショナルセンター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費	ナショナルセンター
	大沼麻実	事業担当者	東京都令和７年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）事業	補助金	東京都

精神保健研究所年報No.39（通号No.72）2026

令和8年9月10日発行

編集責任者　張　賢徳

発行所　国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所
〒187-8553
東京都小平市小川東町4-1-1

（非売品）　電話 042（341）2711

印刷：株式会社　アトミ

©2026, All rights reserved, Printed in Japan